

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

訓点資料における「句切りの点」分類考

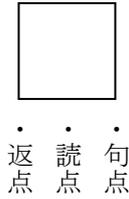
平成二〇年 三月

越智裕二

◇要旨

先行研究においては、訓点資料における句切りの点を取り上げられる際、多くの場合、「句読」という視点から検討され、文末・文中、或いは、文末と文中とを区別しないという形で分類されている。しかし、訓点資料においては、星点の返点（以下、返点と略す）も、

〈図1〉



というように句点や読点などと並べられた形で用いられ、句切りの点として機能しているのである。従って、訓点資料における句切りの点を見ていく際には、この返点も句切りの点として位置づけ、その「句読」という視点に加え、「返読の有無」という視点をもって検討する必要がある。

平安時代から鎌倉時代までの訓点資料を対象として、訓点が施されて訓み方の明らかな箇所―文末・文中などが明らかな箇所―の句切りの点を全て抜き出し、それを「文末・文中」「返読アリ・返読ナシ」という四つの点に着目して分類を行なってみると、確かに、右図1のように、句切りの点を「句読」（文末・文中）によって書き分ける資料は存している。しかし、

〈図2〉



というように、漢字中下の点を読点には用いず、返読のない箇所を用いた（文末・文中は問わない）資料も存しているのである。このような資料においては、右図2のように、漢字中下の点と返点とによって「返読の有無」を書き分けていると見るべきであろう。筆者は、右図2の中下の点のような句切りの点は、返読のないことを示す句切りの点と見て、仮に不返点と呼ぶことにした。訓点資料には、「句読」ということながら意識して句切りの点を書き分ける資料だけでなく、「返読の有無」ということさらに強い関心をもって句切りの点を書き分ける資料も見られるのである。右図2のように不返点を用いるものもその一例であるが、他にも、その不返点を用いないまでも、返読のある箇所の句切りの点（返点）を中心として句切りの点を用いる資料が存している。

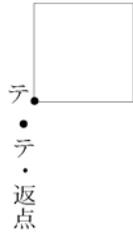
古来、日本においては句切りの点是用いられず、訓点資料に用いられた例が早い例であり、また、その訓点資料の初期において、句切りの点は、「句」（文末）と「読」（文中）とを区別していなかったということであるから、その句切りの点を用いられはじめた初期の段階においては、そもそもその句切りの点が「句読」を書き分けるものであるとの認識も希薄であった可能性が考えられよう。そのように見ると、訓点資料の中

で用いられはじめた句切りの点が、「句読」を書き分ける以外に、「返読の有無」を書き分けるのに用いられたとしても不自然ではあるまい。

小稿で取り上げた資料においては、第一群点と第三群点に、「返読の有無」に重きが置かれた形で用いられる句切りの点（右図2の形など）が見られ、第五群点に、「句読」に重きが置かれた形で用いられる句切りの点（右図1の形など）が見られた。小稿で取り上げた資料は多くはないので、この偏りが有意なものであるのかは断ずることはできないが、もしこのような偏りが見られるものであるならば、やはり、句切りの点を分類する際には、「句読」という視点だけでなく、「返読の有無」などの他の視点も持ちながら検討していく必要があるだろう。

また、博士家点において、

〈図3〉



のように「テ・返点」とされる星点が存するが、これを「返読を示すもの」ではなく、「句切りを示すもの」（筆者は、仮に「テ・切点」とした）と見るべき資料が存する。

テ・返点を検討する際には、このテ・返点と漢字の壺に加点されるテのヲコト点との判別が問題となるが（右図3参照）、筆者の調査による

と、神田本『白氏文集』は、これらテ・返点とテのヲコト点とをその加点位置によってかなり正確に書き分けた資料と考えられ、これを資料としてテ・返点を調査してみると、テ・返点は、必ずしも返読のある箇所のみ用いられるものではなく、返読の有無にかかわらず句切りとなる箇所にも用いられている。

岩崎本『日本書紀』巻第二十二推古紀においても、助字「之」が不読であるにもかかわらずこの「之」字の左下にテのヲコト点が施されており、このことを矛盾なく解釈するためには、テのヲコト点を句切りを示すものと見た方が合理的である。

博士家各家の訓法においては、文が終止するか中止するか、或いは「くて」となるかということに関わる訓法の相違が見られるようであり、筆者は、博士家点における句切りの点は、それに対応する形で、



となっているものと考ええる。このテ・切点は、「テの有無」を考慮した句切りの点と見るべきであろう。

訓点資料における句切りの点は、必ずしも「句読」という視点のみから施されるものではなく、これを見ていく際には、「返読の有無」「テの有無」などの他の視点も必要である。

〔用例〕 ※句切りの点は、漢字の右下・中下・左下に打たれている。訓読文に用いた記号などについては、後に掲げた「訓読文凡例」を参照のこと。

〔1〕 聖天[・]之位[・]。(六〇二)

〔訓読文〕 聖天の「之」位なり。

〔2〕 善男子諦聽[・]内心漫茶羅[・]。(三ウ七)

〔訓読文〕 善男子諦聽(シ)て「内心の漫茶羅あり」

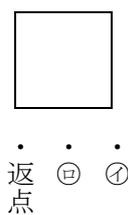
〔3〕 阿字至娑賀[・]。(二オ六)

〔訓読文〕 阿字より娑賀に至せ▲

小稿で改めてこのような問題を取り上げたのは、これまでの訓点資料における句切りの点の研究を見てみると、句切りの点を分類する際には、ほとんどの場合、「句読」——つまり、文末であるか文中であるか——という視点からのみ行われており、最初からそのように「句切りの点」が「句読を示すもの」であるとの前提を定めて検討を行なうことに不安を覚えたからである。

例えば、筆者が調査を行なってみると、左の図1のように、三つの句切りの点がいられる場合に、

〔図1〕



※「□」は漢字を示す。

ⓐの位置に施される句切りの点が「返読のない箇所」(文末・文中を問わない)にしか用いられない資料が存するのである(第四章 第三節 参

照)。この㊸は、少なくとも返点によって何らかの影響を受けていると見るべきであろう。もしそうであるとすれば、この㊸と影響関係にあると見られる返点もまた、句切りの点として見てみる必要性が出てくるのではないだろうか。つまり、句切りの点を句読を示すもののみ限定するのではなく、もっと広く返点なども含めて捉えなおしてみる必要性があるのではないかということである。

今でこそ句切りの点で句読を示すことが普通となっているが、句読を書き分けること―即ち「句（文末）」と「読（文中）」とを書き分けること―が行なわれていない資料が存する訓点資料においても、果たして現在のように「句切りの点」を「句読を示すもの」とするような認識が定着していたのであろうか。

例えば、右に述べたように、図1の形で、㊸の句切りの点を「返読のない箇所」に用いる資料については、

〈図2〉



というように、「句読」を示すのではなく、㊸と返点という二つの句切りの点によって「返読の有無」を示している可能性もあるのではないだろうか。

日本において句切りの点の早い例が見られるのは、訓点資料においてであるということであるから（『国語学大辞典』（一九八〇））、その点において、句切りの点を、句読を示すことのみ用いるのではなく、返読することを示すなどの訓点資料を訓む際の便利に用いた可能性も考えられよう。

このように見ると、訓点資料における句切りの点を見る際に、「句読」という視点のみから検討を行なったのでは何か見落とす点が出てくる可能性があるのではないだろうか。

小稿では、句切りの点を見る際に、「句読」という視点に加え、「返読の有無」、「テの有無」という視点ももって調査を行なっている。筆者は、この調査によって、訓点資料における句切りの点と「句読」に限らず、「返読の有無」などとも関わって施されていること、そしてそのような視点をもって調査する必要性のあることを示したいと考えている。

ただし、小稿のような調査は未だ始めたばかりで、このような調査を行なうことで、今後どのようなことが明らかになってくるのか筆者には明言することはできないし、また、小稿で述べるような視点のみでよいのかどうかという点についても、筆者には断言することはできない。問題は未だ多く残されている。

小稿は、訓点資料における句切りの点のほんの一端を示すものであるけれども、小稿が、訓点資料における句切りの点を見ていく際の一助となれば幸いである。

なお、小稿の構成としては、以下のようになっている。

第一章 句切りの点の呼称、及び、返点を句切りの点とすること

どのような句切りの点をどのような名称で呼ぶのかということを明確にするために本章を設けた。また、「星点の返点」（以下、「返点」と略す）も句切りの点と見るべきであり、小稿においてこれを句切りの点として扱うことを述べた。

第二章 訓点資料における「句切りの点」概略および小稿の意義

先行研究においては句切りの点が多くの場合、「句読」に関わるものとして検討され、返点が別に扱われていることを示し、その点において、小稿のように、返点を句切りの点として扱い、その返点を含む句切りの点を「返読の有無」などの「句読」以外の視点ももって検討することには意義があるであろうことを述べた。

第三章 訓点資料における「句切りの点」の調査方法

訓点資料においては句切りの点が多角的に併記されないなどの傾向が見られ、そのような加減状況から考えるに、句切りの点を見る際には、「句読」「返読の有無」「テの有無」などによって分類することが有用であろうことを述べた。また、小稿において、それを踏まえ、ど

のような方法で調査を行なったのかについて述べた。

第四章 仏家点における「句切りの点」

第三章で述べたような調査を、実際に仏家点とされる資料を対象として行なうことによつて、「返読の有無」を示すことに重きを置く資料と、「句読」を示すことに重きを置く資料とが見られることなどを示し、小稿で述べるような調査が句切りの点を見る際に有用であると述べた。

第五章 博士家点における「テのヲコト点」

博士家点において「返点を兼ねる」とされるテのヲコト点が存在するが、神田本『白氏文集』や岩崎本『日本書紀』巻第二十一「推古紀」などの資料においては、そのテのヲコト点を「返読を示すもの（返点）」と見るよりも、「句切りを示すもの（句切りの点）」と見た方がその加点状況にうまく合致することを述べ、そのテのヲコト点を句切りの点として見て行く必要性のあることを述べた。

第六章 博士家点における「句切りの点」

博士家点とされる資料においては、仏家点に見られるような返点は用いられておらず、それに関連してか、句切りの点が「句読」に重きを置く形で用いられていると見られることを述べた。

終章 訓点資料における「句切りの点」――まとめと見直し――

小稿で調査を行なった資料をもとに、古く「返読の有無」を示すことに重きを置く形で句切りの点を用いられ、比較的時代が下った第五群点などに「句読」を示すことに重きを置く形で句切りの点を用いられるようになった可能性のあることを述べた。

また、博士家点（第五群点）に見られる句切りの点の形式が、仏家点の第五群点に見られるような「句読」を示すことに重きを置く形式と関わりがある可能性のあることを述べた。

◇訓読文 凡例

- ・ 原本に施されたヲコト点は平仮名、仮名点は片仮名で示し、私に補読したものは片仮名に括弧（）を施して示した。
- ・ 助字など、不読の漢字には括弧「」を施した。
- ・ 音合符・訓合符は、原本と同様に示した。
- ・ 音読符・訓読符は、当該漢字の右下に「音（訓）」のように示した。
- ・ 声点は、当該漢字の右下に「平（上 去 入）」のように示した。
- ・ 句切りの点は、句点を「。」、読点を「、」、切点を「|」で示した（句点・読点・切点の別については、第一章二、三を参照）。なお、どのような句切りを示すのか明らかではない句切りの点については、「;」で示した
- ・ 小稿で句切りの点として扱っている返点（星点「・」）で示される返点のこと ↓ 第一章 四 参照）も、他の句切りの点と同様に、句切りとなる箇所「▲」を施すことによって示した。

〔例〕 抽^{スゲ}茎^{ヒラ}・敷^{ヒラ}薬^{ヒラ}・綵^{イロト}絢^{アヤ}・端^{ヒラ}妙^{ヒラ} ↓ 茎^{ヒラ}ヲ抽^{スゲ}ケテ ▲ 敷^{ヒラ}ケタリ薬^{ヒラ}綵^{イロト}レル「綵^{イロト}レル」絢^{アヤ}ありて端^{ヒラ}妙^{ヒラ}なり、（高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真

言蔵成就瑜伽』院政初期点・四才四） ※漢字左下の離れた位置に施された星点が返点。

- また、この返点に対するとおりの不返点（返読のない箇所に加点される句切りの点のこと ↓ 第一章 四 参照）は「|」で示した。
- ・ 「句切りを示すテのヲコト点」（「壺から離れた位置に加点されるテのヲコト点」のこと ↓ 第五章 参照）も小稿では「句切りの点」として
 - いるが、これについては、「壺に加点されるテのヲコト点」との判別が難しい場合もあり、完全な形で書き分けることは困難である。この「句切りを示すテのヲコト点」は、判別が可能であった場合のみ、ゴシック体の「て、」で示すことにした。
 - ・ 原本に複数の訓が併記されている場合、別訓には括弧「」を施して示した。
 - ・ 漢字の字体については、可能な限り原本に近いものを選んで用いたが、印刷の便なども考えて、字体を変えた箇所もあり、必ずしも原本に正確なものではない。

◇ 訓点資料 略称

- 『甘露』 … 高野山西南院蔵『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』康和点
- 『三蔵』 … 興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点
- 『釈摩』 … 東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点
- 『十二』 … 高山寺蔵『十二天法』平安後期点
- 『将門』 … 真福寺本『将門記』
- 『推古』 … 岩崎本『日本書紀』卷第二十二 推古紀
- 『聖燄』 … 高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神驗念誦法』承暦点
- 『大毘』 … 高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点
- 『白氏』 … 神田本『白氏文集』
- 『秘蔵』 … 西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）
- 『不動』 … 東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点
- 『北斗』 … 高野山西南院蔵『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点
- 『呂后』 … 毛利博物館蔵『史記』第九 呂后本紀

◇目次

序	
訓読文 凡例・訓点資料略称	
目次	
第一章 句切りの点の呼称、及び、返点を句切りの点とすること	14
一、はじめに	14
二、「句読」に関わる句切りの点	15
三、「句読」を問わない句切りの点	21
四、「返読の有無」に関わる句切りの点―返点を句切りの点とすること―	22
五、「テの有無」に関わる句切りの点	36
六、どのような句切りの点であるのか不明な場合	37
七、句切りの点の補足説明	38
第二章 訓点資料における「句切りの点」概略および小稿の意義	40
第一節 先行研究	40
一、はじめに	40
二、訓点資料における「句読点」についての先行研究	45
三、訓点資料における「返点」についての先行研究	50
第二節 小稿の意義	57
第三章 訓点資料における「句切りの点」の調査方法	60

第一節	小稿において調査の対象とした資料	60
一、	資料について	60
二、	資料の分類について	63
三、	小稿で取り上げた資料	64
第二節	訓点資料における「句切りの点」の加点状況	65
第三節	訓点資料における「句切りの点」の調査方法	68
一、	調査方法	68
二、「テの有無」についての調査方法	71	
三、	本文部の句切りの点と別に分けて調査を行なった句切りの点	72
第四章	仏家点における「句切りの点」	74
序節		74
第一節	興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』古点における句切りの点	75
一、	句切りの点はどのように用いられているのか	75
二、	はじめに	75
三、	資料について	76
四、	句切りの点の使用状況	79
五、	切点・返点の用いられ方について―切点の偏りに着目して―	87
六、	まとめ	93
第二節	東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点における句切りの点	97
一、	資料の一部で句切りの点の用いられ方に相違が見られる例	97
二、	はじめに	97
三、	資料について	97

三、句切りの点の使用状況	100
四、東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点の前部（二〇二九行目）と後部（三〇〇〇〜三〇七行目）における句切りの点の加 点状況の相違について	119
五、まとめ	124
第三節 高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点、東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点にお ける句切りの点	125
―「返読アリ」と「返読ナシ」とを書き分ける資料―	125
第一項 高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点における句切りの点	125
一、はじめに	125
二、資料について	126
三、句切りの点の使用状況	128
四、まとめ	142
第二項 東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点における句切りの点	142
一、はじめに	142
二、資料について	143
三、句切りの点の使用状況	145
四、まとめ	149
第四節 西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）、高野山西南院蔵『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点における句切りの点 ―句点・読点の用いられる資料として―	149
第一項 西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）における句切りの点	149
一、はじめに	149
二、資料について	150
三、句切りの点の使用状況	152

第二項	高野山西南院藏『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点における句切りの点	163
一、はじめに	163
二、資料について	163
三、句切りの点の使用状況	165
四、まとめ	170
第五節	高野山西南院藏『聖懿漫徳迦威怒王立成大神懸念誦法』承暦点、高山寺藏『十二天法』平安後期点における句切りの点 ——文末を示すことに重きのある資料——	170
第一項	高野山西南院藏『聖懿漫徳迦威怒王立成大神懸念誦法』承暦点における句切りの点	170
一、はじめに	170
二、資料について	171
三、句切りの点の使用状況	173
四、まとめ	187
第二項	高山寺藏『十二天法』平安後期点における句切りの点	187
一、はじめに	187
二、資料について	188
三、句切りの点の使用状況	189
四、まとめ	192
第六節	仏家点における「句切りの点」——まとめ——	193
第五章	博士家点における「テのヲコト点」	197
序節	197
第一節	神田本『白氏文集』における「テのヲコト点」	200

第六章	博士家点における「句切りの点」	250
序節		250
第一節	岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における句切りの点	251
第二節	岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における「テのヲコト点」	227
一、はじめに		227
二、資料について		228
三、岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における助字「之」		230
四、岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における「之」字に加点された「テのヲコト点」		234
五、「離れたテ」を「句切りの点」と見た場合の助字の訓読		244
六、まとめ		247
第三節	博士家点における「テのヲコト点」——まとめ——	248
第二節	岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における「テのヲコト点」	225
一、はじめに		227
二、資料について		228
三、岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における助字「之」		230
四、岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における「之」字に加点された「テのヲコト点」		234
五、「離れたテ」を「句切りの点」と見た場合の助字の訓読		244
六、まとめ		247
七、「離れたテ」の例外		219
八、「離れたテ」と「句点」「読点」との関係について		221
九、「離れたテ」「句点」「読点」の併記例		223
十、まとめ		225
一、はじめに		200
二、資料について		201
三、「壺のテ」と「離れたテ」との判別方法		203
四、「壺のテ」と「離れたテ」の調査結果		209
五、「壺のテ」と「離れたテ」の用いられ方について		213
六、「壺のテ」の例外		218

一、はじめに	251
二、資料について	251
三、句切りの点の使用状況	252
四、まとめ	258
第二節 毛利博物館蔵『史記』第九 呂后本紀における句切りの点	259
一、はじめに	259
二、資料について	259
三、句切りの点の使用状況	261
四、まとめ	265
第三節 神田本『白氏文集』卷三における句切りの点	266
一、はじめに	266
二、資料について	266
三、句切りの点の使用状況	267
四、「割注」「序」(二〜四〇行目)における中下点の加點傾向	276
五、まとめ	279
第四節 博士家点における「句切りの点」——まとめ——	280
終章 訓点資料における「句切りの点」——まとめと見通し——	284
一、小稿で取り上げた資料における偏り	284
二、まとめと見通し——仏家点——	286
三、まとめと見通し——博士家点——	288

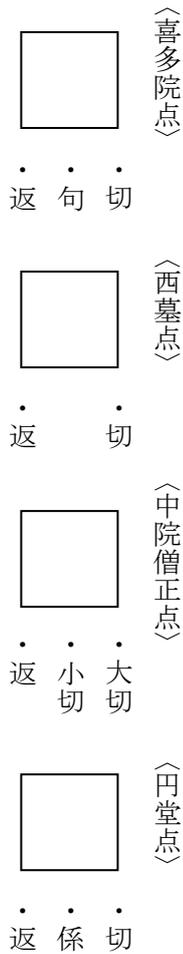
参考文献

第一章 句切りの点の呼称、及び、返点を句切りの点とすること

一、はじめに

古来、句切りの点を言う時、どのような呼称を用いてきたのか、その詳細を述べる準備は筆者にはない。ただし、築島裕氏（一九八六）の紹介される「点図集所載ヲコト点図」によると、

〈図3〉



など、必ずしも統一的な名称が用いられていたわけではなさそうである（右は一部の例である）。

この点図集に示された右の「句」「切」「大切」「小切」「係」などについては、その点図集の中に、それらの点がどのような「句切り」を示すのかというような詳細な解説がないため、その名称以外はほとんど分からない。

この点図集はその体裁として、実際の訓点資料とともに存するものではなく、あくまで点図を集めたものであるため、それに示された句切りの点在实际にどのように用いられているのかということを知ろうとすると、結局、それと同様の点図を用いていると見られる資料を探し出し、それらと照らし合わせながら調査するということになる。

確かに、「句」「切」などのように、調査するまでもなくその用法が推測できるものもあるかもしれないが、正確にその句切りの点の機能や用法を知ろうとすれば、やはり、調査を行ない、その確認作業をすることが必要であろう。

筆者が見るに、先行論文等を見ると、訓点資料における句切りの点を言う際には、あるものは右のような点図集の名称をそのまま用い、

また、あるものは現在用いられている「句点」「読点」などの名称に変え、その句切りの点がどのようなものであるのかという点について、必ずしも明確ではない場合があるようである。

小稿は、句切りの点を扱うものであるので、その点、明確にする必要がある。しかし、小稿で述べるような調査は、いまだ調査を始めたばかりで、訓点資料においてどのような句切りの点が存し、どのように定義してよいのかどうかということなどは、今後の調査によるもので、現在の状況では、明示することはできない。

そこで、ここでは、句切りの点の定義などについて述べるのではなく、句切りの点の呼称について、ある程度の目安を作っておこうと思う。勿論、今後の調査結果によっては訂正を加えつつ、明確なものとしていくつもりである。

二、「句読」に関わる句切りの点

【句点】【読点】

句切りの点についての先行研究(第二章 参照)を見てみると、句切りの点は「句読」という視点から検討されることが多く、多くの場合、「句点」「読点」そして「句点と読点を区別しない句切りの点」という分け方がなされているようである。

そこで、ここでは、まず句点・読点と言われた場合に、これらが現在、どのような句切りの点を差すものであるのか確認しておこうと思う。

◎『日本国語大辞典 第二版』(一九七二) 小学館

く・てん【句読点】〔名〕書かれた文章につき、また、文章を書くについて、意味の切れ続きを明らかにするために用いる補助符号。

句点と読点。近代の文章での感嘆符、疑問符、また、「・」（なかてん、中黒）、かつこの類、横書きでのピリオド、コンマなどを含める（※以下、用例等、略）

く・てん【句点】〔名〕漢文を読むとき、句の切れ目などにつける符号。また、文章を書くとき、文の切れ目につける符号。特に、現在で

は、文の最後の字の右下に小さく添える中白の点。「。」↓句読点（くとうてん）。（※以下、用例等、略）

とう・てん【読点】〔名〕①文章の切れ・続きを明らかにするために、文の中の意味の切れめにつける符号。普通「、」を用いる。②①の点を打つこと。句読を切ること。（以下、用例等、略）

とう【読】〔名〕文章を読みやすくするため、文中にほどこす段落。また、その符号。読点。（以下、用例等、略）

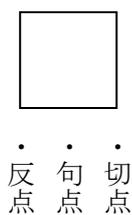
【読||讀】④文章の読解上、「文」の中にみとめる意味の切れ目。息つぎをするところ。「逗」に同じ。／句読／（以下、略）

【逗】④①とどまる。滞在する。／逗留／②文章の読解上、「文」の中にみとめる意味のつ切れ目。「読」に同じ。／句逗／

『日本国語大辞典 第二版』によると、現在の認識としては、句点は「文末の句切り」を示し、読点は「文中の句切り」を示すものであると見てよいのではないかと思う。

しかし、筆者が先行研究等で、「句点」「読点」「句」「読」などの語がどのように用いられているか見てみるに、例えば、曾田文雄・岸岡民子両氏（一九七〇a）は、西教寺本『秘蔵宝鑰』朱点（院政末期加點か・第五群点・円堂点）の句切りの点を

〈図4〉



とされており、一見、漢字の中央下の点が「文末を示す句切りの点（句点）」であるように思われるが、実際に筆者が調査してみると、「文末」

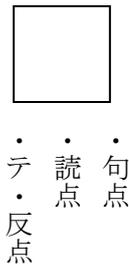
に偏る傾向を見せるのは、右の図4で「切点」とされた点であり、右で「句点」とされた点は「文中」に偏る傾向を見せるようである。恐らく右の図4の「切点」が「句点(文末の句切り)」であり、「句点」は「読点(文中の句切り)」であろうと思う(第四章 第四節 第一項 参照)。築島裕氏(一九八六)の「点図集所載ヲコト点図」では、右の「円堂点」は、右から順に「切」「係」「返」となっている(前掲の図3 参照)。このように、句切りの点を見ていく場合、ヲコト点図などに「句」とあっても、必ずしもそれが「句点」というわけではなく、その句切りの点がどのような「句切り」を示すものであるのかを知ろうとすると、実際に資料を調査する必要がある。

また、右の図4に示した「切点」という句切りの点は、右の例では、現在の句点に当たるものであると見てよいと思うが、次のような例も見られる。

〈図5〉岩崎本『日本書紀』



〈図6〉神田本『白氏文集』



岩崎本『日本書紀』も神田本『白氏文集』も「博士家点」とされるものであるが、築島裕氏(一九七八)は岩崎本『日本書紀』における漢字中央下の点を「切」とされ(図5)、小林芳規氏(一九八二)は神田本『白氏文集』におけるその漢字中央下の点を「読」とされている(図6)。

筆者は、岩崎本『日本書紀』巻第二十二 推古紀における句切りの点の調査を行なったのであるが、その調査結果によれば、右で「切」と

されている句切りの点は「文中」に偏る傾向が見られるもので、現在の言い方では読点というのに近いのではないかと思う（第六章第一節参照）。

つまり、先の西教寺本『秘蔵宝鑰』朱点（図4）で「切点」とされる点は「句点（文末の句切り）」であり、この岩崎本『日本書紀』（図5）で「切」とされる点は「読点（文中の句切り）」ということになる。

このような場合、句切りの点の呼称を統一するなどして、ある程度明確にしておかないと誤解を生ずるおそれがある。

句切りの点の呼称を考える時、点図集などに見られる呼称に従うのも一つの方法であるが、現在、その句切りの点の用法を調査した上で命名した呼称に従うのもまた一つの方法であろう。前者は「句」「切」「大切」「小切」「係」「返」などであり、後者は「句点」「読点」「中点」「返点」などである。

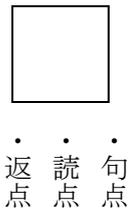
小稿では、点図集などにおける呼称が、一体どのような句切りの点に対する名称であるのか明確でない部分が残っている以上、句切りの点の呼称としては、現在の呼称に従った方が誤解が少ないのではないかと考え、基本的には、現在の呼称を用いることにした。

ここで、改めて句点・読点という句切りの点について考えてみたいが、これら句点・読点については、左のように考えることにした。

句点 …… 文末の句切り。「文末」であることを示すために施される句切りの点。
読点 …… 文中の句切り。「文中」であることを示すために施される句切りの点。

先の図4を例に取ると、小稿では、

〈図7〉



となる。

定義などと比べると、やや大雑把で簡略にすぎないかもしれないが、今後、調査を行なっていく上で明らかになってくることもあるであろうし、また、訂正すべき箇所が出てくる可能性もあるであろうから、細かな点については、敢えて加えることはしなかった。詳細は、今後の課題としたい。

小稿では、右に示したように、句点・読点を「句読」―文末であるか文中であるか―を示すものと見ることにしたが、このうち読点について、これを返点とする見方がある。確かに、句点・読点などの句切りの点は、「返読のある箇所」に施されるものなので（勿論、「返読のない箇所」に施される場合もある）、句切りの点と「返読」との関わりについて、先に考えておく必要があるだろう。

この句切りの点と「返読」の問題に関連して、大坪併治氏（一九六一）は、「星点の返点」を「句読点」を利用したものとされ、訓点資料において専ら「読点」が「返点」として利用されると述べておられる。これは、つまり、「読点」の中には「返点」として認められるものがあるということであろう。

この「読点」を「返点」とする見方に対して、小林芳規氏（一九七四）は、「読点はそこから上に返読する漢字に施される場合もあるから返点の働きを兼ねたとも考えられるが、読点は返読しない箇所にもあるので、姑く返点から除くことにした」とされている。

この点について、筆者が調査した資料によると、確かに、小林氏の言われるように、句点・読点と認められる句切りの点で、「返読のある箇所」と「返読のない箇所」とに用いられた例が見られる（左の用例4、5、6、7）。

◎高野山西南院藏『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点（院政期頃書写・加点か・第五群点・浄光房点と円堂点の混用か）

【句点】

前掲の図7のように、「・」の形の返点のことを言う。

〔4〕於^シ靜室中・作^{ツク}一水壇^ニ（二オ五）（文末・返読アリ）

（訓読文） 靜室中に於^シテ一水壇を作^{ツク}レ。

〔5〕食^ツ謂^フ・飯^ニ・腦菓^{ナリ}・餅蘘蜜等^{ナリ}（一ウニ）（文末・返読ナシ）

（訓読文） 食は謂^フハク、飯・腦菓・餅蘘蜜等ナリ。

【読点】

〔6〕降臨^テ此處^ニ・納受^テ護摩^ヲ・擁護^テ（二オニ）（文中・返読アリ）

（訓読文） 此^ノ處ニ降臨^シテ、護摩ヲ納受^シテ、擁護^シテ

〔7〕次誦^ニ一字頂輪王真言^ヲ・并召^セ北斗七星真言^ヲ（二オ七）（文中・返読ナシ）

（訓読文） 次^ニ一字頂輪王真言、并^セテ召^セテ北斗七星真言を誦せよ。

用例4、5は、句点（漢字右下の点）の例で、用例4が返読のある例、用例5が返読のない例である。用例6、7は、読点（漢字中央下の点）の例で、用例6が返読のある例、用例7が返読のない例である。

このように、句点・読点が、「返読のある箇所」に用いられる一方で、「返読のない箇所」にも用いられた例が見られることは、返点の「返読することを示す」という機能から考えると、やはり、小林氏の言われるように、このような句点・読点については、返点としないとする見方の方がよいのではないかと思う。

ただし、資料によっては、高野山西南院蔵『聖徳漫徳迦威怒王立成大神驗念誦法』承暦点のように、「返読のある箇所」に用いられる句切りの点、「文中」に偏るといふ傾向を見せる場合がある。このような場合、大坪氏の言われるように、読点によって返読することが示されているという見方も不可能ではない。

今後、調査を行なっていく上で、大坪氏の述べるような「返読を示す読点」というものを認めるべきであるかどうかということも当然考慮していくべきであろうと思うが、思うに、句点・読点がそれぞれ「文末の句切り」「文中の句切り」を示すものであるとするならば、やはり、用例4、6のような「返読のある箇所」の文末・文中」だけでなく、用例5、7のような「返読のない箇所」の文末・文中」を示すことができるのが自然であろうから、「返読がある箇所・返読のない箇所」それぞれの「文末・文中」を示すことができる形が本来のものであると見てよいのではないかと思う。

つまり、敢えてその点について明記するならば、

句点 …… 文末の句切り。返読の有無を問わない。

読点 …… 文中の句切り。返読の有無を問わない。

ということになる。このような観点から見ると、大坪氏の言われるように、返読のある箇所に偏る読点があった場合には、なぜ「読点（文中の句切り）」が「返読のある箇所」に偏って用いられているのか、或いは、反対に、なぜ「返点（返読のある句切り）」が「文中」に偏って用いられているのかというような考察がなされることになる。

三、「句読」を問わない句切りの点

【切点】

8 返点を句切りの点と見ること、本章 四で述べる。

先行研究によれば、右に述べた句点・読点に加え、「文末・文中を問わずに用いられる句切りの点」が存するということであるが、現在、そのような句切りの点を言う呼称はないようなので、小稿では、仮に、それを「切点」という呼称で呼ぶことにしたいと思う。右に見たように、「切」という句切りの点は、点図集などにも見られるものであり、やや紛らわしいところもあるかもしれないが、小稿では右に述べたように句切りの点を基本的に現在の呼称に従って呼ぶので、紛れることはないであろうと思う。筆者としては、文を「切る点」というような意味合いで用いたい。

この切点は、文末・文中に用いられるということで、句点と読点とを兼ねた句切りの点とも言えるが、これは視点を転ずれば、句読を書き分けていないということでもあるから、つまり、この切点は、句読に関わるものではないとも言えることもできるかもしれない。

この点において、小稿においては、この切点を、右の句点・読点とは別に分類することにした。

この切点は、「句読」を書き分けるものでもなく、また、次に述べるような「返読の有無」や「テの有無」を書き分けるものでもなく、つまりは、ただ文を句切るだけのものである。小稿においては、切点をそのように見て、次のようにしておきたいと思う。

切点 …… (純粹な意味での) 句切り。

訓点資料において、もし句切りの点の発達や変遷というようなものが見られるものであるならば、この切点のように、「句読」や「返読の有無」などを問わない、純粹に句切るだけの句切りの点というものも設定しておいた方がよいであろう。

四、「返読の有無」に関わる句切りの点——返点を句切りの点とする——

【返点】

返点は、小林芳規氏(一九七四)が、

- A. 星点の返点
- B. 漢数字の返点
- C. 文字の返点
- D. 記号の返点
- E. 雁点

と分類されているように、訓点資料においては、数種類の返点が用いられている。小稿で取り上げる資料においても、勿論、複数の返点を用いられている。

これまでの返点についての先行研究等（第二章 第一節 三 参照）を見てみると、返点を見る場合、右のように別に分類された返点どうしの関係を見て、互いにどのように用いられているかというような視点から検討されることが多かったのではないかと思うが、小稿でこの返点を取り上げたのは、そのような返点どうしの関係について述べるのではなく、小林氏の言われる「星点の返点」が、訓点資料の中で句切りの点として機能している可能性があり、句切りの点を論ずる際には、この星点の返点をも加えて見てみる必要があるのではないかと考えたからである。

ここでは、その星点の返点が、訓点資料において、句切りの点として機能している可能性があることを述べてみたいと思う。

なお、右に述べたように、小稿で特に取り上げるのは、星点の返点であるので、小稿では、便宜上、特に断らない限りは「返点」と言えば「星点の返点」を指す。星点の返点以外の返点の場合には、「二二点」「雁点（レ点）」のように言うようにした。

小稿で取り上げるこの返点は、確かに返読することを示すものであるが、返読する箇所であればどのような箇所にも用いられているわけではない。大坪氏（一九六一）は、この返点を、句読点を利用したものとされたが、この返点は、基本的に句切りとなる箇所に用いられて

↑ 「星点の返点」は「・」などの返点。「漢数字の返点」は「一、二」などの返点。「文字の返点」は「上、下」などの返点。「記号の返点」は「、」などの返点。「雁点」は「レ」の返点で、今日の「レ点」。

↓ この大坪氏の返点についての言は、本節二で述べたように、読点を返点とするなど、問題がないわけではない。しかし、返点と句切りの点とを関わりあるものとして見る見方は注目すべきではないかと思う。

いるのである。

例えば、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点では、返点は、次のように用いられている。

〔8〕 歸向キウキョウ之徒ノテ並シタカフ遵シタカフ其シ義ギ（二七）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕 歸キ向キョウ（平）（ノ）〔之〕 徒テ並シタカフに其シの義ギ（ま）に遵シタカフフ▲

〔9〕 故コ召メシ諸シヨ聖メイ衆ジュウ集シツ結ケツ微マイ言ゴン（二四）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕 故コに諸シヨの聖メイ衆ジュウを召メシシテ▲ 微マイ言ゴン（平）ヲ集シツシテ結ケツス▲

右の用例8は、返点が文末に用いられた例で、「義」字の下が「句切り」となり、そこに返点が打たれている。用例9は、返点が文中に用いられた例で、「衆」字の下が「句切り」となり、そこに返点が打たれている。

この返点は、左のような場合、

〔図8〕

知其必成名チカヒニキナミナ（其の必ず名を名さむことを知りぬ）

②

①のように、最初に返読される箇所のみ用いられ、②のように、返読されたところから更に返読されるような箇所には用いられないのである。

この①のように、最初に返読される箇所というのは、つまり、基本的にその下が「句切り」となるところである。

筆者は、右に見たように、返点が、最初に返読される箇所のみ用いられることは、やはり、この返点が、句切りと関わるものであるからではないかと思う。或いは、もともと句切りに関わるものであったからということなのかもしれない。この返点が、どのような変遷を経て成立したものであるのか、筆者には述べる準備はないが、この返点は、その用いられ方から考えるに、大坪氏が、返点を句切りの点を利用したものとされたように、何らかの形で「句切りの点」と関わっているのではないだろうか。

この返点に右のような使用傾向がありながら、ここで、返点が句切りに関わるものであると断言できないのは、右に見たように、返点が句切りに用いられた例が見られる一方で、返点が、厳密には句切りとは言えない箇所に見られるからである。それは、「助字」がある場合である。先に、返点が、基本的に句切りに用いられるとしたのはこのためである。

助字がある場合、返点は、次のように施される。

〔10〕 豈可守而死也。 (興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』古点・八九)

〔訓読文〕 豈(ニ)守(リ)て〔而〕死(シ)す可(ク)むや〔也〕。

〔11〕 欲^{フセム}驗^{ハドム}法^{フキラム}成^{セムト}者^ハ能^{ケン}摧^キ折^{エタ}樹^キ枝^{エタ}能^{ケン}墮^{セム}落^ヒ飛^{テウ}鳥^ラ (東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点・二三〇)

9 小林氏(一九七四)は、返点を『・』点を返読すべき最初の漢字に施すもの」とされている。

〔訓読文〕 驗下ム「驗アキラメ」法成セムト欲ハ▲者ハ能く樹ノ枝エタを摧折セツ(セム)「摧クダキ折ヲリ」▲能く飛鳥ヒテウヲ墮落セム「墮オトシ落ヲトサム」▲

このような場合、「句切り」と考えられるのは、用例10は「也」字の下、用例11は「者」字の下であろうから、それぞれその助字の上に施された返点は、「句切り」に加点されていないと見ざるを得ない。特に、用例11の「者」字の場合に、「驗下ム「驗アキラメ」法成セムト欲ハ▲者ハ」のように、訓読した場合に接続助詞「ば」の前に返点が施されることは、これを「句切り」とすると、付属語の前に「句切りの点」が付されていることになり、大いに問題となる。

しかし、このように助字がある場合、確かに返点は、厳密には句切りに打たれてはいないが、右の図8に見たように、返読されたところから更に返読されるような箇所②と比較してみると、この助字がある箇所が、やはり句切りに関わる箇所であることは間違いない。

このように助字がある場合、確かにそこは―助字の下は―句切りとなっているのである。しかし、その句切りに返点を打とうとすると、その返点は返読があることを示すものであるから、助字の前の返読される箇所―句切りとならない箇所―に施さざるを得ない。この助字のある箇所の、句切りとならない箇所に施された返点は、そのようなジレンマのひとつの解決策として、ある意味、妥協的に用いられたものではないだろうか。このような問題は、中国語において独立した漢字で表される助字を日本語に訳する場合に、日本語においてその訳の上で対応する語がなかったり、或いは、基本的に独立して用いられることのない助詞や助動詞が対応してしまったりしたことなどによって生じたものではないかと思う。

このように助字のある箇所の、句切りとならない箇所に打たれた返点は、確かに厳密には句切りとなっていない箇所用いられていると言わざるを得ないが、筆者は、右に述べたように、このような例は日本語と中国語との文法的な違いによって生じたものと見て、句切りであることを示そうとしたもの―つまり、句切りに関わるもの―として許容してもよいのではないかと思うのである。

このように、筆者が、返点を句切りに施されるもの―句切りの点―として見ようとするのは、以下に示すように、訓点資料において、この返点が、「句切りの点」としての位置づけをもって機能していると目される傾向が見られるからである。

その傾向を列挙すると、以下のようになる。

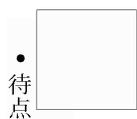
(1) 返点が、最初に返読される箇所のみ用いられ、基本的に、句切りに加点されていること

これについては、右に述べたように、助字の例が例外となる可能性があるが、それらの例を除く多くの返点が、句切りに用いられる形になっていることは、注目すべきではないかと思う。

(2) 待点が存すること

待点というのは、小林氏（一九七四）が、「下からの返読を中継して更に上方の漢字に返ることを示す」とされるものである（左の図9参照）。小林氏によれば、この待点もまた返読を示すもの―返点―である。

〈図9〉



待点は、次のように用いられている。

〔12〕 知其必成名ナツ（興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点・六五）

〈訓読文〉 其の必(ス)名を「名ヲ」成(サ)むことを知(リ)ぬ▲

待点は、小林氏が、「下からの返読を中継」するとされているように、左のような場合、

〔図 10〕

知其必成名

(其の必ず名を名さむことを知りぬ)

①のように、最初に返読される箇所には用いられず、②のように、返読されたところから更に返読されるような箇所に用いられている。
この例においては、「名」字の下が句切りとなり、「成」字の下は句切りとならないところである。

小林氏は、この待点について、「中継」という言葉を用いて説明されたが、この「下からの返読を中継する箇所」というのは、視点を変え
ると、つまり、「句切りとならない箇所」である。

思うに、この待点は、「句切りとならない箇所の返読を示す返点」なのではないだろうか。このように見ると、この待点と返点とは、次の
ように、相補的な関係にあると見ることができ。

返点 …… 句切りとなる箇所の返読を示す。

待点 …… 句切りとならない箇所の返読を示す。

もし返点が、句切りとならない箇所にも用いられるものであるならば、この待点のように「句切りとならない箇所に用いられる返点」をわざわざ用いる必要はあるまい。返点が句切りに用いられるからこそ、句切りとならない箇所で、この待点が有用となってくるのではないだろうか。

以上のように見てくると、「句・切・り・と・な・ら・な・い・箇・所・に・用・い・ら・れ・る・返・点」——待点——が存していること自体が、返点が「句・切・り・と・な・る・箇・所・に・用・い・ら・れ・る・返・点」であることを証明しているとも言えるのではないだろうか。

(3) 返点が施されると、多く、他の句切りの点が併記されないこと

ここでは、一例として興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点(㊤)種点一〇八〇年前後・第二群点・喜多院点を取り上げ、その返点と句切りの点とがどのように施されているのかを見てみたいと思う。

この興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点の句切りの点は、筆者の調査によると(第四章 第一節 参照)、

〈図 11〉



- ・ 切点 …… 文末・文中を書き分けない句切りの点。
- ・ 中下点 …… 用例数が三例しか見られないため、用法は不明。
- ・ 返点 …… 返読することを示す句切りの点。

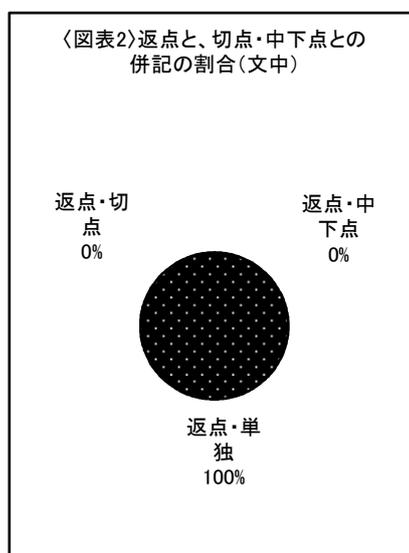
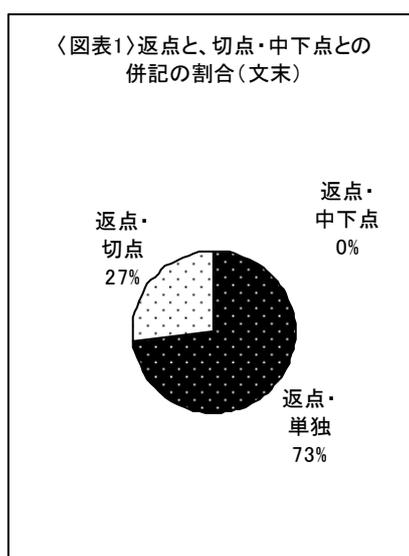
となっていると考えられるが、返点が施されると、その箇所が「文末の句切り」や「文中の句切り」となる箇所であっても、そこに切点や中下点を重ねて施されることはなく、多くの場合、返点のみが施された形になっている。例を示すと、返点は、左の用例13のように、「文末の句切り」(「言」字下)であっても「文中の句切り」(「衆」字下)であっても、多くの場合、単独で施される形になっており、左の用例13のような併記の形は取っていないということである。

〔13〕故召諸聖衆・集結微言 (興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点・一四)

〈訓読文〉 故に諸の聖衆を召シて・▲微言(平)ヲ集・結す▲

〔13〕 故召諸聖衆・集結微言

返点が単独で施された場合と、返点と、切点・中下点とが併記された場合の用例数の割合を示すと、次のようになる。図表1が文末の場合、図表2が文中の場合である。



※〈図表1〉「返点・単独」一〇三例、「返点・切点」併記三八例、「返点・中下点」併記〇例。

※〈図表2〉「返点・単独」二二三例、「返点・切点」併記〇例、「返点・中下点」併記〇例。

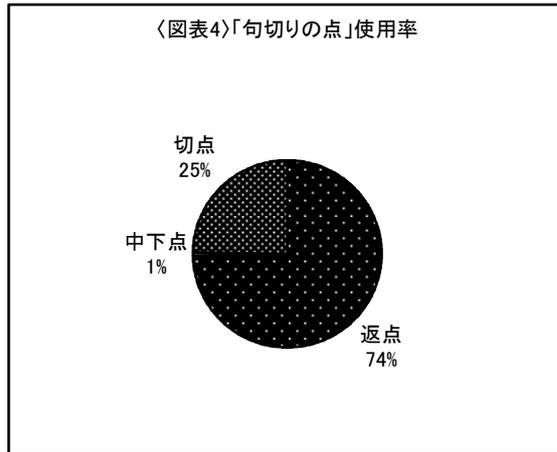
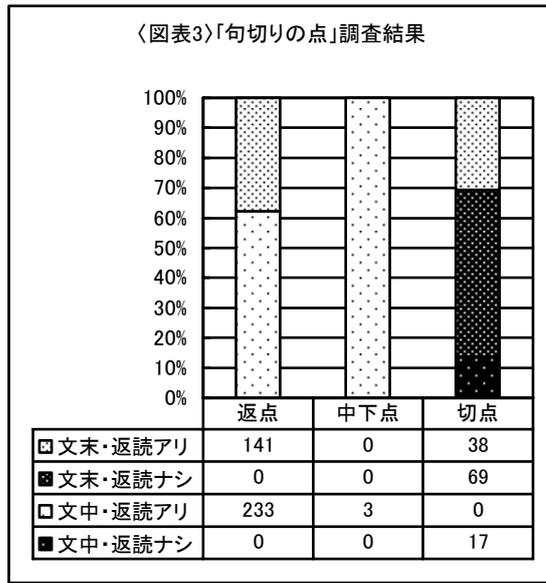
このように、返点が施された時に他の句切りの点が併記されないことは、句切りの点が句点(右下)・読点(中下)・返点(左下)の形で用いられている資料の場合も同様で、返点が施されると、句点・読点も多くの場合、重ねては施されていないようである。

思うに、もし訓点資料内で、切点・中下点、句点・読点などの句切りの点によってしか句切りを示すことができないのであれば、返点が施された場合にも、句切りを示すために、返点に並べて切点・中下点、句点・読点が見られてもよいはずである。

返点が施された場合に、多く切点・中下点、句点・読点などの他の句切りの点が施されないのは、やはり、返点が句切りの点として機能しているのと同じではないだろうか。

(4)句切りとなる箇所には、他の句切りの点以上に返点が多く用いられた資料が存すること

興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点（前掲）の句切りの点は、前掲の図11に示したように、切点・中下点・返点という形になっていると思われるが、切点・中下点・返点の用例数を比較してみると、切点や中下点のような句切りの点ではなく、返点がかなりの割合を占めている（第四章 第一節 参照）。



※〈図表3〉ただし、「切点」の「文末・返読アリ」三八例は、全て「返点」との併記例。また、「返点」の「文末・返読アリ」一四二例のうち、三八例は、「切点」との併記例。
 ※〈図表4〉「切点」一二四例、「中下点」三例、「返点」三七四例。

図表3は、文末の返読がある場合と返読のない場合、文中の返読がある場合と返読がない場合とで、どのような句切りの点が用いられている

るか、その用例数を示したものである。

この図表3に示されるように、この興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点においては、文中では、圧倒的に返点が用いられることが多く、文末であっても、やはり切点よりも返点の方が多く用いられている。

図表4は、資料内において切点・中下点・返点がどのくらい用いられているか、その割合を示したものであるが、これを見ても、返点が七四%を占め、句切りに施される点として、切点・中下点などの句切りの点より多く用いられている。

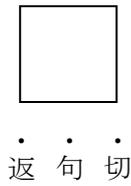
この興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点のような資料の場合、句切りに施される点として最も多く用いられているのは返点であり、このように、切点・中下点などの句切りの点以上に句切りに用いられているこの返点は、やはり、句切りの点として捉えてみる必要があるのではないかと思うのである。

(5) 返読のない箇所には偏る句切りの点が残ること

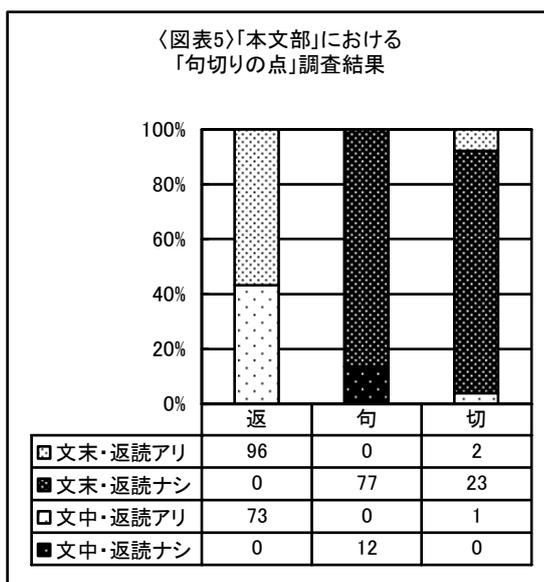
訓点資料を調査してみると、高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点（院政初期書写加點・第三群点・中院僧正点）のように、返点―つまり、返読のある箇所には偏る点―に対して、返読のない箇所には偏る点が見られる資料が残る（第四章 第三節 参照）。

この高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点は、西崎亨氏（一九九五）によれば、

〈図12〉



となつてゐるということであるが、これら「切」「句」「返」を調査してみると、



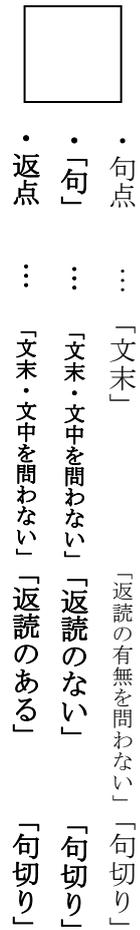
※ただし、「切」の「文末・返読アリ」二例、「文中・返読アリ」一例は、全て「返」との併記。また、「返」の「文末・返読アリ」九六例、「文中・返読アリ」七三例は、それぞれ「切」との併記例二例、「切」との併記例一例を含む。

となっている。

「切」は、返読の有無にかかわらず用いられ文末に偏っていることから句点、「返」は、句読にかかわらず用いられ返読のある箇所に偏っていることから返点と見てよいのではないかと思う。

「句」については、詳細は第四章 第三節で述べるので、ここでは、結論だけ述べることにするが、この「句」は、文末にも文中にも用いられることから読点とも考えにくく、むしろ、返読のない箇所に偏って用いられていることから、次のように、「返読のない句切り」を示していると見るべきではないかと思うのである。

〈図 13〉



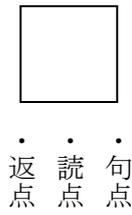
もしこのように見ることができれば、この「返読のない句切り」に対して、「返読のある句切り」というものが想定される。筆者は、この「返読のある句切り」に当たるものが返点なのではないかと思うのである。つまり、「句」と「返点」とをともに句切りの点と見て、「返読の有無」という句切れ方の違いによって、これらを書き分けていると見るのである。

このように、「句」対「返点」という関係が認められるものであるならば、返点は、他の句切りの点との関係においてその位置づけを持っていることになり、この点において、この返点は句切りの点のひとつとして機能していると思われるであろうと思う。

(6) 返点の形態が句切りの点と類似していること

ここで取り上げている返点—星点の返点—は、

〈図 14〉



というように、漢字の下の「句切り」の位置に「・」の形で表記され、句点・読点などの句切りの点と同様の形態を取っていると見えよう。このように、この星点の返点が、「句切り」に「・」の形で施されることは、「一二点」や「雁点」点「などの他の返点とその形態を比較してみても、特徴的なものではないかと思う。

勿論、形態の類似が、そのまま機能などの類似を意味するとは言えないであろうが、小稿で取り上げるこの星点の返点が、句点・読点などの他の句切りの点と同様の形態を持っていることも、これを句切りの点であると見る時、注目しておくべきであろう。

最初に述べたように、返点を句切りの点と見る見方は、助字がある場合に問題がないわけではない。しかし、以上、(1) (6)に述べたように、返点は、訓点資料において、句切りの点として機能し、他の句切りの点との関係においても句切りの点としての位置づけをもって用いられている可能性があるように思う。

小稿では、最初から返点を句切りの点から除外するのではなく、句切りの点のひとつとして検討する必要があると考え、返点を、次のように考えることにした。

返点 … 返読のある句切り。返読のあることを示すために施される「句切りの点」。

補足をすれば、この返点は、基本的に「返読の有無」に関わるもので、「句読」に関わるものではないであろうから、文末・文中ともに用いられるものであろうと考えている。

【不返点】

右の返点の考察の中、高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点（前掲）の「句」のように、「返読のない箇所」に偏って用いられる句切りの点が存することを述べた（前掲図13 参照）。

小稿では、これを、仮に

不返点 … 返読のない句切り。返読のないことを示すために施される「句切りの点」。

と呼ぶことにした。

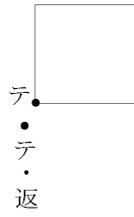
訓点資料において、この不返点のような句切りの点が一般的に用いられているものであるのかどうかは、小稿を含め、今後の調査によって明らかにしていきたいと考えている。

五、「テの有無」に関わる句切りの点

【テ・切点】【離れたテ】

博士家点とされる訓点資料においては、

〈図15〉



のように、漢字の壺に施される「テのヲコト点」に対して、「漢字の壺から離れた位置」に施される「テ・返」（返点を兼ねるテのヲコト点）とされる星点が存する。

第五章で述べるように、筆者は、この「テ・返」とされる星点は、「返読のあることを示すもの（返点）」として捉えるのではなく、「句切りを示すもの（句切りの点）」として捉えるべきではないかと考えている。従って、小稿においては、この「テ・返」とされる星点を、

テ・切点 … 「テのヲコト点」と「句切りの点」とを兼ねたもの。

と捉え、テ・切点と呼ぶことにしたいと思う。

このテ・切点は、

〔14〕 觀舞聽歌知樂意ス (神田本『白氏文集』三／四五)

〔訓読文〕 舞を觀、歌を聽(キ)て、樂音、舞音の意を知ヌ。

のように、助詞「て」「して」などに当てられることが多く、そういう意味では、文中に用いられるものとして、テ・読点としてもよいのかもしれないが、このテ・切点が、読点のように積極的に文中であることを示すものであるのか、現段階においては、筆者は断言できないので、右のようにテ・切点としておく。今後の調査によって、明らかに出来たらと思う。

なお、このテ・切点については、右の図15のように、漢字の壺に施されるテのヲコト点と対比して検討する必要がある、その時、これら両星点を「漢字の壺に施されるテのヲコト点」「漢字の壺から離れた位置に施されるテのヲコト点」と捉え、

壺のテ …… 「漢字の壺」に施されるテのヲコト点

離れたテ …… 「漢字の壺から離れた位置」に施されるテのヲコト点

のような略称を用いることがある(上が略称)。この後者の離れたテというのが、テ・切点のことである。

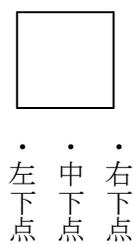
六、どのような句切りの点であるのか不明な場合

【右下点】【中下点】【左下点】

句切りの点の中には、その句切りの点の用例数が少なかったり、用例の傾向が明確でないことなどによって、その句切りの点がどのような句切りを示しているのか断じがたいことがある。

小稿では、句切りの点を言う時、その加点位位置によって、

〈図 16〉



のように言うが、その句切りの点がどのような句切りを指すのか明らかでない場合にも、無理に名称を付けることは避け、同様に、その加点位位置によって右下点・中下点・左下点という名称をそのまま用いることにした。

このような不明な句切りの点についても、他資料との比較を行なってゆけば、明らかにできるものもあるかもしれない。

七、句切りの点の補足説明

句切りの点の中には、例えば、切点―文末・文中ともに用いられる―であつても、文中よりも文末に多く用いられるなど、注目すべきかと考えられる傾向が見られる場合がある。

このような場合、単に切点とするのではなく、

切点（文末に多い）

のように、補足説明を加えたものがある。どの傾向が有意義なものであるのか現段階では明言できないため、どれほど有効な補足を加えることができるかは分からないが、加えるべきと考えたものについて補足することにした。

以下に、句切りの点の呼称をまとめた。

◎句切りの点の呼称

・「句読」に関わるもの

句点 …… 文末の句切り。

読点 …… 文中の句切り。

・「返読の有無」に関わるもの

返点 …… 返読のある句切り。

不返点 …… 返読のない句切り。

・「テの有無」に関わるもの

テ・切点（離れたテ） …… テのつく句切り。

・制約を受けないもの

切点 …… （純粹な意味での）句切り。

第二章 訓点資料における「句切りの点」概略および小稿の意義

第一節 先行研究

一、はじめに

小稿においては、平安・鎌倉時代頃の訓点資料における句切りの点を取り上げ、「句読点」の他、「返点」なども含めて検討を行なっている。この訓点資料における句読点・返点については、『国語学大辞典』（一九八〇）の小林芳規氏の解説が詳しくまた端的で、これらを理解する上で有用であろうと思われるので、まず、これを挙げることにする。

◎『国語学大辞典』（一九八〇）における「句読点」についての記述。

【沿革】句読点は、(1)漢文などあらかじめ書かれた文章を読解するために書き加える場合と、(2)文章を書記する時に文字と一緒に施す場合とがある。文献の上では(1)が早く、句読点の出所と見られ、(2)は後世になってから現われる。(1)漢文の読解に当たっては句読を示すことが最初の基本的作業となるので、早く奈良時代には『李善注文選抜書』（天平十七年（七四五）以前書写）に「、」を句読に用いた例がある。平安初期に訓点の記入が始まって多く用いられたが、句点と読点を形の上で区別せず、点または短線を漢字の右下や左下や中下に施すことが行われた。当初は句点と読点を同じ位置で示したり、位置を区別しても位置と句点読点との関係が一樣でなかったりしたが、次第に統一されて、右下が句点、中下が読点、左下が返点と定まった。ただし初期には、…を段落末、…を句末、・を読点に使い分けることと『大乘阿毘達磨雜集論』卷十六天平勝宝四年（七五二）写本の平安初期朱点など）もあつたが後世には伝わらない。『桂庵和尚家法倭』

「小林芳規氏（一九七四）では返点について、小林芳規氏（一九七七）では、句読点と返点とについて、より詳しく述べられている。

8 『国語学大辞典』（一九八〇）において、訓点資料における句読点について詳しく述べているのは、句読点の沿革を述べたところなので、その部分のみを抜粋した。

点』に「句点」於字之傍」、読点「字之中間」と説き、太宰春台の『倭読要領』で句読を述べるのは、漢文訓読の伝統に立つものである。仮名文でも後に古典としてこれを読解するために句読点を施すことが起こったが、「。」「・」「」の形を使い分けず、今日の句読点と目的や用い方が異なっている。(2)文章を書記する時に句読点を施すことは、伝統的な仮名文では普通は行わず、室町末期のキリシタン版や江戸時代のオランダ翻訳書に見られ、江戸時代の板本にも句読点を用いたものがあるが現行とは異なっており、一般には明治以降である。しかし当初は、(7)全く用いないもの、(4)部分的に用いるもの、(5)文末に「」または「。」「」だけを施すものなど様々であった。句読点を積極的に用い出すのは明治二十年(一八八七)ころからで、小説、新聞、雑誌などでは初めは個人差や記事内容による差があつて多様な姿を示し、各符号の用法も一定しないが、二十年代には変換期を迎え、また教科書はやや早く何らかの符号を用い始め、三十年代以降は現行に近くなる。明治二十年(一八八七)刊『国文句読考』(権田直助、明治二十九年(一八九六)井上頼圀補訂)や、明治四十三年(一九一〇)国定教科書の句読法の基準としての『句読法案』(文部省図書課)の解説書の出現は、その事情を窺わせる。すべての文章表記が現行のようになるのは昭和に入ってからで、公用文や法律文は並列の「、」以外は句読点を用いない習慣が長く昭和まで続き、新聞でも現行と同じになったのは朝日新聞が昭和二十六年(一九五二)からである。なお明治二十年(一八八七)ころには小説家で句読点に留意した者があり、山田美妙は「。」と「、」のほかその中間的用法に「、」（白抜きゴマ点）を用いたり、会話符号（「」）「『』」や「!」傍線「|」などを積極的に使用した。これらの会話符号などは翻訳を通じて外国の文章表記の影響が考えられる。

(小林芳規氏による)

◎『国語学大辞典』(一九八〇)における「返点」についての記述

返点 かえり 漢文訓読において、漢文の語序が日本語文と異なる場合、漢字配列のままに反倒して読むことを返読へんくくといい、この働きを書き表わした記号を返点という。【名称】平安時代には、ヨコト点などと区別なく「点」の総称の中に含まれ、特に返点だけを取り出していうことはなかった。鎌倉時代以降、ヨコト点が衰滅するにつれて意識されるようになる。点図集の中で、返読を示すヨコト点を「返」と称してその働きの面を指したが、次第に独立した名称となり、ヨコト点とも区別され始めた。点図集以外で「返点」という名称を用いた古例は、桃源の『千字文序』(両足院蔵)である。返点のうち、一字の返読を表す「かりがねてん」を雁点かりがねてんという。形が雁の飛ぶ姿に似るのでその名がある。

るようになって、今まで無かった一字返読専用の返点が必要となって考案されたものであろう。返点の変遷に与った力は、一返読表示法に二以上の異形態が生じた時に一形態に淘汰されること（符号の返点の消滅）と、返読の諸機能にに応じて、異形態を分担させ分析的に表記すること（雁点の成立）とにある。

（小林芳規氏による）

これまでの先行研究を見てみると、右の『国語学大辞典』（一九八〇）もそうであるが、「句読点」などの句切りの点と、「返点」とが分けて研究されることが多いようである。実際、論文などを見ても「句読点」「返点」という題目で分けて論じられ、また、辞書類にしても「句読点」「返点」という項目に分けられているようである。そして、以下に見る大坪併治氏（一九六一）のように、「星点の返点」を「句読点を利用するもの」とする指摘がありながらも、星点の返点と句読点との関連が述べられるものはほとんどないようである。

勿論、小稿のように、句読点と返点とを句切りの点として併せて見ていくとしても、その句切りの点と特に関連するのは、返点の中でも星点の返点に限定されるものであるから、句読点と返点とを見ていく際に、先行研究のように、句読点と返点とに分けて研究がなされるのは当然である。しかし、小稿で述べるように、星点の返点が句切りの点として認められるべきものであるならば、その星点の返点もまた句読点などの句切りの点に加え、その関連性が述べられるべきではないだろうか。

具体的に先行研究の内容を見てみると、返点に関する先行研究については、当該の返点がもともと訓点資料のような漢文で書かれた資料に用いられるものであるので、小稿で取り上げるような訓点資料における返点そのものを対象とし詳細に研究された論文が存しており、小稿を成す上でも大いに有用であった。

一方、句読点に関する先行研究については、当該の句読点が、返点とは異なり和文などにも用いられるものであるもので、句読点の変遷などを見るにつけても、訓点資料における句読点に主眼を置くというような論文は、管見では見られないようである。

筆者の調査によると、句読点についての先行研究は、近世から現代の句読点を対象とするものが多く、小稿で取り上げる平安・鎌倉時代の句読点を対象としても和文を扱うものがほとんどで、小稿で見るところの訓点資料における句読点については言及があってもわずかな言及にとどまるようである。

句読点の先行研究において、近世から現代の句読点を取り上げられることが多いのは、これが「(2)文章を書記する時に文字と一緒に施す」(前掲『国語学大辞典』(一九八〇))とされるもので現行の句読点に繋がるものであるからであろうと思う。

平安・鎌倉時代の句読点は、和文などにおいても「(1)漢文などあらかじめ書かれた文章を読解するために書き加える」(前掲『国語学大辞典』(一九八〇))とされるものである点で現行のものとは異なっているのであるが、先行研究を見ると、先人たちが打った句読点を見ることによって、その内容の解釈に役立てようとするものなどがあるようである。

これらに対して、小稿で取り上げる訓点資料における句読点については、訓点資料の中には、この句読点の他にもヲコト点や仮名点などのようにその資料を理解する上でより有用であろう訓点が存するためか、特にこの句読点を取り上げて研究するような論文はほとんど見られないようである。論文にヲコト点図が示されている場合でも「句」「切」と書かれているだけで、それがどのような句切りを示すものであるのか明らかでない場合が少なくない。

以下には、句切りの点に関する先行研究を見ていきたいと思う。なお、先に述べたように、小稿では、訓点資料における「句読点」と「返点」とを併せて「句切りの点」として検討するのであるが、ここでは先行研究に合わせて、句読点と返点とに分けて論文を見ていきたいと思う。

まずは、訓点資料における句読点・返点について、これらそのものを課題として研究したものや、これらについて多くの紙数を割いているものを挙げる。

◎句読点

- ・大坪併治(一九六一)「反点の発達」『訓点語の研究』風間書房、(一九九二)『改訂 訓点語の研究 上』大坪併治著作集1・風間書房
- ・小林芳規(一九七七)「表記法の変遷」『現代作文講座 6 文字と表記』明治書院
- ・宇野義方(一九八二)「句読法の歴史」『講座 日本語学 6 現代表記との史的対照』明治書院

◎返点

- ・足利衍述（一九三二）（復刻版）一九七〇）「返点」『鎌倉室町時代之儒教』有明書房
- ・大坪併治（一九六一）「反点の発達」『訓点語の研究』風間書房、（一九九二）『改訂 訓点語の研究 上』大坪併治著作集1・風間書房
- ・小林芳規（一九七四）「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』五四・遠藤嘉基博士古稀記念特輯号
- ・小林芳規（一九七七）「表記法の変遷」『現代作文講座6 文字と表記』明治書院
- ・宇都宮睦男（一九九〇）「返点法―返点・・」を中心として―『国語国文』五九・九

以下には、「句読点」「返点」の順に、これらの先行研究を中心にその内容を見ていきたいと思う。

二、訓点資料における「句読点」についての先行研究

訓点資料における句読点については、先行研究によって、古く文献の上で説かれた例が指摘されている。ここでは、句読点についての詳細な研究を見る前に、まず、古く句読点についてどのような認識が持たれていたかということを理解するためにも、筆者が先行研究で知り得た古い例を二、三示しておきたいと思う。

まず、「句読」というものが文献の上で説かれたのは、小林芳規氏（一九七七）によると、明応一〇年（一五〇一年）の『桂庵和尚家法倭点』が古い例であるということである。

◎『桂庵和尚家法倭点』

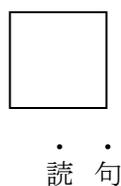
句読之事 字訓に曰く。句は、切也。一句ふつと、きるゝ処也。一句とは、一字も一句也。日の字は、一字の一句也。或は二字三字。或は

十字二十字。多しと雖も一句と為るの処之れ有り。其為人也孝弟而好犯上者鮮矣（それ人となりや孝弟にして上を犯さんことを好む者すくなし）。此の十三字。一句也。読、音は豆（とう）。韻会宥韻に曰く。凡そ經書語の絶する処、之れを句と謂ふ。語未だ絶せずして点し分くる、之れを読と謂ふ。句は、字の旁らに点し。読は、字の中間に点す。云々 私に云ふ。旁とは、字の下、右の旁ら也。中間とは、字の下、真中也。いかにも。朱点、なかと、そばと、まきれぬ様に、之れを点す也。人の初心なを云ふには、句等さへ、わきまへぬと申す也。法華經の、句切る様に。字の下、まんなかばかり。朱つけをいては。句読の差別、如何か知る可けん哉。

（用例は、宇野義方氏（一九八二）の訓読文によった）

これは漢文における句読点の打ち方について説いたもので、これによれば、当時、句読点について、

〔図 17〕



という認識があったことが窺われる。このように、右下を句点、中下を読点とする形は、後に見る諸氏の研究によれば、後世に多く見られる形であるということである。

下って、太宰春台『倭読要領』（一七二八年）にも、句読点について、左のようにあり、これによると、当時においても、句読点の加點形式が一樣ではないという認識があったようである。

◎『倭読要領』

○句読点を点することは、其法一樣ならず。或は圈を用ひ或は批を用ふ。圈とは、○なり。批とは、、なり。秘書省の校書の式には、句は字

の旁に点じ、読は字の中間に点ずといへり。中華の書の中に、此式を用て句読を点じたる本あり。其時は小圈を用ふ。又句には圈を用ひ、読には批を用ることあり。其時は句も読も皆旁に点ず。又句と読とを別たず、皆圈を用ひ、皆批を用ることあり。其時も句読俱に旁に点ず。かくの如く種々の点式あり。人人の意にて、時に臨て何れの式をも用るなり。中華より来れる書を多く見て、其異を考ふべし

(用例は、宇野義方氏(一九八二)の訓読文によつた)

この『倭読要領』に、「中華の書の中に、此式を用て句読を点じたる本あり」とあるのは、日本の側で加点した句読点について述べたものか、中国の側で加点された句読点について述べたものであるのか明らかではないが、石塚晴通氏(一九九二)によると、三世紀書写の楼蘭文献中には、句読点・科段などのような句切りを示す加点があるということである。

中国の文献に関しては、足利衍述氏(一九三二)によると、宋の毛晃撰『増韻』に、

◎『増韻』

句読。凡経書、成_レ文語絶処謂_二之句_一。語未_レ絶而点分_レ之以便_二誦詠_一謂_二之読_一。今秘省校書式。凡句絶則点_二於字之旁_一読分則微_二点於字之中間_一。

とあるということであり、中国においても、点の加点位置によつて「句読」を書き分けるといふ手法は行われていたようである。

小林氏(一九九五a)によると、やや新しい資料ではあるが、敦煌文献の『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』(S.5556)(十世紀書写加点)の角筆⁶では、句点と読点とを斜線か縦線かで区別しているということである。

小稿は、訓点資料に実際に用いられた句切りの点を調査することに主眼を置いているため、右のような文献における記述の調査を行なうものではないが、いずれ小稿の調査結果と文献における記述とを照らし合わせてみる必要はあろう。また、点図集に見られる句切りの点の呼称

⁶ 角筆…「読書始めなどに用いる、字をさし示す棒。また、書物の紙面に跡をつけて、訓点などを記入するのに用いるものをもいう。象牙、木、竹などで、筆の形に作られたもの。字さし。かくひち」(『日本国語大辞典 第二版』(一九七二))

も句切りの点を考察する上で調査する必要がある。

また、中国において用いられた句切りの点が、日本における句切りの点に影響を与えているとすれば、中国における句切りの点についても見てみる必要がある。

これらは今後の課題である。

以下には、訓点資料における句読点について述べた論文を見ていくことにする。

▽大坪併治（一九六一）「反点の発達」『訓点語の研究』風間書房、（一九九二）『改訂 訓点語の研究 上』大坪併治著作集1・風間書房

この論文は、平安初期から平安中期の訓点資料において、どのような返点^レが用いられているかということについて整理したものである。

ここで、句読点の論文ではなく、返点の論文を取り上げたのは、大坪氏が「星点の返点」を「句読点を利用」して返読を示すものとされているからである。

もともと返点についての論文であるため、句読点についての記述は多くはないが、この論文において、大坪氏は、古く句読点の加點形式は同様ではなかったが、時代が下ると、□・を句点、□・□を中点、□・を讀点と返点とに用いる形式が一般化していき、点の系統に関係なく、殆んどすべての点本に用いられるようになったとされている。これについては、後に見る小林芳規氏（一九七七）は、□・を句点、□・を讀点、□・を返点とされている。

この論文では、句読点と返点とを関連づけている点が注目されるが、右のように、□・を讀点と返点とに用いるとして、讀点に返読機能を認めている点については、慎重に見ていく必要があるだろう。この問題について、小林芳規氏（一九七四）は、「讀点はそこから上に返読する漢字に施される場合もあるから返点の働きを兼ねたとも考えられるが、讀点は返読しない箇所にもあるので、姑く返点から除くことにした」

○ 筆者は、返点を句切りの点として見てみる必要があるのではないかと考えている（第一章 四 参照）。

とされている。この問題についての筆者の考えは、第一章二で既に述べた。

▽小林芳規（一九七七）「表記法の変遷」『現代作文講座6 文字と表記』明治書院

この論文では、奈良末期・平安初期から句読点の加点が見られ、その当初は、句点と読点とを形の上で区別しておらず、時代を経るに従って、句点と読点との分化が生じたということが説かれている。

この句読点の変遷については、先の大坪氏（一九六一）の述べておられることと大きく変わらないように思うが、後世、□・を句点、□・を読点、□・を返点とする形式が普通となるとされている点については、大坪氏（一九六一）と異なっている。

先にも述べたが、大坪氏（一九六一）は読点に返読機能を認めるなど、句切りの点の認識について小林氏と異なっているようなので、その認識の違いが影響しているであろうと思う。

この論文は、表記を扱うものであるため、この句読点とともに返点についても取り上げられているのであるが、小稿のように句読点と返点とを関わらせるような捉え方はしていないようである。

▽宇野義方（一九八二）「句読法の歴史」『講座 日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院

この論文で述べられていることも、先の大坪氏（一九六一）・小林氏（一九七七）と、同様と見てよいのではないかと思う。宇野氏も、句読点の形や位置が一定していない方式から、□・が句点、□・が読点という方式が用いられるようになったとされている。この句点・読点の位置関係としては、小林氏（一九七七）と同様である。

◇ 先行研究と小稿との関わりについて

以上のように、訓点資料における句読点について述べた論文を見てみると、句・読・点についての論文であるため当然なのかもしれないが、句切りの点によって、どのように「句・読」を書き分けているかという視点のみからのものであって、

〈図 18〉



というように、句点・読点と並べて加えられる「返点」を、積極的に句切りの点の一つとして位置づけるような論考は見られないようである。小稿第一章 四で述べたように、この「返点」は、「句切りの点」として捉えるべき可能性のあるものである。

もし小稿で述べるように、この句読点などの句切りの点と、返点とが関わりのあるものであるならば、これらの先行研究のように、句切りの点を「句読」という視点のみから分類する方法では、当時の句切りの点を十分に説明しきれない可能性があるであろう。

この点において、句切りの点を見る際には、先行研究のように「句読」という視点からのみ検討を行なうのではなく、小稿で述べるように、「返読の有無」などの「句読」以外の視点をも持ちながら検討していくことが必要なのではないかと思うのである。

三、訓点資料における「返点」についての先行研究

小稿で取り上げるのは、種々の返点の中でも、「句切り」に関わる返点であるので、ここでは、「一二点」「雁点(レ点)」などの返点ではな

く、「星点の返点」に関する論文の記述を中心に見ていくことにする。

まず、文献に見られる返点についての記述であるが、小林芳規氏（一九七四）によると、返点に関する名称としては、現存最古の識語を持つ大東急記念文庫蔵 延応本「点図集」（延応元年（一一三九））の中の「田堂点仁和寺所用」「中院僧正点高野山所用」「俗点」のそれぞれの星点図の左下の点に、「返」の称が与えられている（中田祝夫博士編「古本点図集二種」による）のが最も古い例であるということである。また、右のような点図集以外の例としては、両足院蔵『千字文』序（桃源）に、

凡倭人之讀書、非_レ若_二梵漢之直下諷詠而會_レ之、盖_二帶_二其意_一自_レ下而反_レ上、謂_二之返點_一矣
とあるのが早い例で、江戸時代には、江村北海『授業編』卷三 訓点に、

點トハ古昔ノ「ヲコト點」ヨリイフ事ニテ、今ノ反點ハ點トイフニハナケレドモ因仍シテ點ト云ナリ
貝原益軒『点例』上 総論に、

凡點例ヲ下スニ五ノワカチアリ、一二ハ倭音ニヨムニ二ハ倭訓ニヨム三ニハ出爾波（中略）四ニハ返_リ點ナリ是ハ下ヨリカヘリテヨムニ種々ノ差別アリ、一二三の返點アリ、レノ返點アリ、上中下の返點アリ、甲乙丙丁ノ返點アリ、五ニハ_{クテ}豎點などの例が見られるということである。

右のような先行研究に挙げられている資料を見るかぎりでは、小稿で述べるように返点を句切りの点とするというような記述は見られないようである。しかし、文献に記述が見られないことが、返点が句切りの点でないということを示すものではあるまい。今後は、返点を句切りの点とする文献がないか調査するとともに、反対に返点を句切りの点としないことを述べた文献が存しないか見ていく必要があるだろう。ただ、点図集などで、他の句切りの点と並べて返点が示されることは注目しておく必要があるのではないかと思う。

以下には、訓点資料における返点について述べた論文を見ていくことにする。

▽足利衍述（一九三二）（復刻版）一九七〇）「返点」『鎌倉室町時代之儒教』有明書房

この論文は、星点の返点・雁点（レ点）・一二点・上下点などの返点について、時代的変遷を述べたものである。星点の返点が、仏典に多く見られるなどの指摘もある。

この論文は、古くに書かれたものであるためか、後の研究では、初期の返点として大東急記念文庫蔵『華嚴刊定記』（七八八年）が挙げられる所を、返点の萌芽が平安中葉前後であるとしたり、後に「返点を兼ねるテのヲコト点」とされる星点を、単なる「返点」としたりするなど、若干、注意が必要である。

▽大坪併治（一九六一）「反点の発達」『訓点語の研究』風間書房、（一九九二）『改訂 訓点語の研究 上』大坪併治著作集1・風間書房

この論文は、平安初期から平安中期の古い資料について、どのような返点が使われているかを調査し、整理したものである。大坪氏は、返点を、

- 1 句読点を利用するもの……星点の反点
- 2 数字を用ゐるもの……数字の反点
- 3 特殊な記号を用ゐるもの……記号の反点
- 4 文字を用ゐるもの……文字の反点

の四種に分類されている^二。後の小林芳規氏（一九七四）も、これに基づく分類を行っている。

^二 「星点の反点」は「・」などの返点。「数字の反点」は「一、二」などの返点。「記号の反点」は「）、）、…）」などの返点。「文字の反点」は「上、下」などの返点。

◎「星点の返点」についての記述

大坪氏は、大東急記念文庫蔵『華嚴刊定記』（七八八年）に見られる読点を「中止するか、または、上に返るべきことを示してゐる」とされ、星点の返点の古い例とされている。そのため、大坪氏によると、星点の返点は、奈良時代から使用されていることになる。

しかし、読点と返点とを分けて検討してみる必要があることは既に述べたとおりである（第一章一参照）。もしその読点が返読を示すものでなかったとすれば、星点の返点の使用は、もっと下ることになる。小林芳規氏（一九七四）は読点に返読機能を認めず、星点の返点の使用は平安初期からとされている。

▽小林芳規（一九七四）「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』五四・遠藤嘉基博士古稀記念特輯号

この論文は、平安初期から室町時代に至る訓点資料における返点の時代的な変遷について述べたものである。

小林氏は、先の大坪氏（一九六一）の分類に、「雁点^ㇿ」を加え、次のように返点を分類されている。

- A. 星点の返点
- B. 漢数字の返点
- C. 文字の返点
- D. 記号の返点
- E. 雁点

◎「星点の返点」についての記述

この論文は訓点資料における返点を取り上げた論文としては最も詳しく、星点の返点を理解する上で有用な指摘が多くある。そこで、小稿に関わるであろう指摘を簡条書きにして示しておくことにした。

^ㇿ 雁点…『漢文訓読に用いる返り点の一つ、レ点の古称。一字返りを示すもので、古く「ㇿ」を用い、形が雁行に似ていたところからいう」（『日本国語大辞典 第二版』（一九七二）

①星点の返点は、平安初期から見られ、ヲコト点の用いられた時期の平安時代に主として用いられる。平安中期から院政期までは、星点の返点を使用する群と使用しない群とがある。星点の返点は、ヲコト点と運命を共にし、ヲコト点の一般に衰滅する鎌倉時代以降は次第に用いられなくなる。

②星点の返点の加点点位置は、漢字の左下が普通であるが、古くは右下のこともある。

③院政期を過渡として後期以降は返点の量が増加し、次第に「返読すべき所には返点を施すのを原則とする」という傾向が一般的になる。この傾向は仏書だけでなく漢籍の方にも及ぶようである。

④星点の返点は仏書には基調をなすものとして盛用されるが、漢籍では「て」と兼用のヲコト点として用いるものであって、返点だけには使われない。漢籍で漢字の左下の星点を、返点と「て」とに兼用することは平安時代は無論、鎌倉時代以降もヲコト点が漢籍に機械的に伝存したものや、「て」の代りをしたものに、引続き用いられているが、漢字の右下の星点を、返点と「ば」とに兼用したものが、岩崎文庫蔵毛詩平安中期点には見られる。

ここで触れておかなければならないのは、①と④であるが、①の星点の返点の使用時期については、先の大坪氏（一九六一）のところで述べた。④の返点と「て」と兼ねた星点（以下、「テ・返」と略す）については、小稿の第五章で述べるように、筆者は、これを返点と見るのではなく、句切りの点と見るべきではないかと考えている。もしこのテ・返が、筆者が見るように句切りの点であったならば、このテ・返の位置づけも改める必要が出てくるであろう。

▽小林芳規（一九七七）「表記法の変遷」『現代作文講座 6 文字と表記』明治書院

この論文は、表記について述べるものであるため、返点についての記述に関しては、右の小林氏（一九七四）の方が詳しく、重複する所も

多い。

▽宇都宮睦男（一九九〇）「返点法—返点「・」を中心として—」『国語国文』五九・九

この論文は、返点の中でも特に、博士家点に見られる「返点を兼ねるテのヲコト点」（以下、「テ・返」）を取り上げ、平安時代から江戸時代にかけての資料を調査し、その星点が時代とともに用いられなくなっていく過程、及び、その原因について考察したものである。

この論文において、宇都宮氏は、テ・返が「返点」であるということを前提に論ぜられているが、小稿第五章に述べるように、このテ・返は返点ではなく「句切りの点」である可能性がある¹³。

この論文は、テ・返の返読機能についてのみ述べるものではないが、こと返読機能に関しての論については、小稿で述べるような調査を進めることによって、見方を改める必要が生ずるかもしれない。

もし小稿で述べるように、テ・返が返読機能を持たないものであったならば、例えば、宇都宮氏が、テ・返と他の返点との併記例が、時代を経るにつれて増加することから、テ・返が、次第に返読機能を失うと見ておられることなども問題となろう。

宇都宮氏の挙げられた資料を見ると、確かに、テ・返と他の返点との併記例が増加する傾向は見られるようであるが、小林芳規氏（一九七四）によると、返点は時代とともに詳細に施されるようになるということであるから¹⁴、テ・返と他の返点と併記例が増えたからと言って、その原因が、テ・返が返読機能を失ったことに直結しているとは一概には言えないであろう。返点の加点が増加したのは、何もテ・返の施された箇所に限ったものではあるまい。

思うに、もし返点に、時代的に詳細に施されるようになるというような傾向があるとするれば、例えば、句点・読点が増えられた箇所につい

¹³ 筆者は、この「テ・返」は、「テ・切点」とも言うべき「句切りの点」であり、「返読すること」を示すような機能はないのかと考えている（第五章参照）。

¹⁴ 宇都宮氏は、「□□□□」（□□）は、漢字を表す）のように、テ・返が単独で用いられた場合には、テ・返が返読機能を有するとされ、これに対して、「□□□□」のように、テ・返が他の返点と併用された場合には、テ・返が返読機能を失うとされている。

¹⁵ 小林芳規氏（一九七四）「院政期を過渡として後期以降は返点の量が増加し、次第に「返読すべき所には返点を施すのを原則とする」という傾向が一般的になる」

ても、恐らく、一二点などの返点が施されることが多くなっていくであろうから、つまり、句点・読点についても、返点との併記例が増加することになるであろう。これは、句点・読点が、返読機能を失ったわけではあるまい―句切りの点が施されている箇所には、返点が詳細に施されるようになっただけである―。

宇都宮氏は、テ・返が返点であるということを前提として、このテ・返と他の返点との併記例が増加するという傾向を、返読機能の消失と見たのであるが、小稿で述べるように、このテ・返が返点ではなく句切りの点であったとしても、この傾向を説明することはできよう。

つまり、宇都宮氏の言われるようにテ・返が返読機能を失ったために、他の返点が施されるようになったと見るのではなく、時代とともに返点が詳細に施されるようになる過程で、テ・返という句切りの点が施されている箇所についても、返点が詳細に施されるようになっただけであると見るのである。

宇都宮氏の示された傾向は、恐らく、テ・返が返点であるからこそ見られたというものではなく、この傾向をもって、テ・返が返点であるとするのは当たらない。

宇都宮氏の調査は、テ・返が返点であるのか句切りの点であるのかを明らかにした上で、改めて検討しなおしてみる必要があるのではないかと思う。

◇先行研究と小論との関わりについて

小稿で取り上げる「星点の返点」は、小稿第一章 四で述べたように、「句切りの点」として考察する必要があると思うが、先行研究においては、以上に見てきたように、一二点や雁点（レ点）などの他のヲコト点とともに論ぜられることが多く、句読点などの句切りの点とともに検討されることはほとんどないようである。

また、小稿第五章で取り上げる「テ・返」（返点を兼ねるテのヲコト点）についても、「返読のあること」を示すものとして考察され、これを「句切りの点」として捉えるような見方はなされていないようである。

返点について考察する際に、種々の返点どうしを比較することは、無論、重要なことである。しかし、「星点の返点」や「テ・返」などのように、句切りに施される返点を見る際に、同様に句切りに施される「句読点」などの句切りの点とどのような関係にあるのか、比較してみることがもまた必要なのではないだろうか。

第二節 小稿の意義

以上に見てきたように、先行研究においては、訓点資料の中に見られる句点・読点などについては「句読点」として論じられ、星点の返点や一・二点・雁点などについては「返点」として論じられている。

筆者は、決してこのような研究方法が誤っていると云っているのではない。

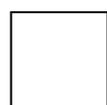
現在行われているような句点・読点などについて、その起源などについて考察する際には、訓点資料における句点・読点に焦点を当てて考察することが必要であろうし、また、訓点資料における返点について考察する際には、星点の返点も一・二点や雁点などの他の返点を含めて検討することが必要であろう。

しかし、小稿で述べるように、星点の返点やテ・返とされる星点が、訓点資料の中で句切りの点として用いられていたとすると、訓点資料における句切りの点を見る時に、句点・読点などのみを取り上げ、星点の返点やテ・返との関係に触れないのはどうか（星点の返点、テ・返の問題については、それぞれ第一章 四、第五章 参照のこと）。

小稿で述べたいのは、訓点資料における句切りの点を見る際に、句点・読点というような「句読点」——文末であるか文中であるか——に関わるものばかりに注目するのではなく、星点の返点のように「返読の有無」に関わるものなども句切りの点として位置づけ、それらが互いにとどのような関係になっているのか、或いは、どのように影響しあっているのかを見ることもまた必要なのではないかということである。

例えば、筆者の調査したところによると、西教寺本『秘蔵宝鑰』巻上（朱点）（院政末期か・第五群点・円堂点）において、句切りの点は、

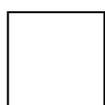
〈図 19〉



- ・句点 … 文末に偏る。返読のある箇所・返読のない箇所ともに用いられる。
- ・読点 … 文中に偏る。返読のある箇所・返読のない箇所ともに用いられる。
- ・返点 … 返読のある箇所に偏る。文末・文中ともに用いられる。

のような形で用いられているが（第四章 第四節 第一項 参照）、これに対して、高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点（院政初期書写加點・第三群点・中院僧正点）においては、これに類似した形ではあるものの、

〈図 20〉



- ・句点 … 文末に偏る。返読のある箇所・返読のない箇所ともに用いられる。
- ・不返点 … 返読のない箇所に偏る。文末・文中ともに用いられる。
- ・返点 … 返読のある箇所に偏る。文末・文中ともに用いられる。

というように、中下の点（不返点）に、文中に偏るといような傾向は見られず、むしろ、「返読のない箇所」に偏るといような傾向が見られる（第四章 第三節 第一項 参照）。

これら図 19、図 20 を比較した時、後者のような中下の点（不返点）は、読点と見ずに、むしろ、「返読のない句切り」を示していると見て、返点―「返読のある句切り」―と対になるものと見てみることも必要であろう。

もし句切りの点を見る際に、「返読の有無」という視点を持たずに、これら図 19、図 20 のようになった句切りの点の調査を行なうと、このように中下の点の用法が異なっているにもかかわらず、同様の形式の句切りの点とされてしまうおそれがある。

19 小稿では、「返読のないこと」を示す「句切りの点」を認め、「不返点」と呼ぶことにした。「第一章 四」参照。

小稿では、具体的に資料を検討していくことによって、このような分析方法が有用であることを示せたらと考えている。

小稿で述べるような調査は、いまだ始めたばかりであり、そのような調査を行なうことによって、一体どのようなことが明らかになるのか、筆者には明確に述べることはできない。しかし、もし小稿で述べるように、訓点資料における星点の返点やテ・返とされる星点の句切りの点であったとしたら、これらを句切りの点として位置づけ検討することは、句切りの点研究において、やはり必要なことなのではないかと思うのである。

第三章 訓点資料における「句切りの点」の調査方法

第一節 小稿において調査の対象とした資料

一、資料について

小稿において調査の対象としたのは、平安時代から鎌倉時代までの訓点資料である。訓点資料とは、漢籍・国書・仏典などに、仮名点やフコト点、返点などの符号―これらを訓点と言う―を付して訓読を示した資料を言う（小稿の序に、訓点資料の例として、高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点の一部のコピーを挙げている。参照のこと）。

訓点の例を示すと、次のようになる。

〈用例〉

〔15〕 抽^{スケ}茎^{ヒラケ}・敷^{イロト}薬^{アヤ}綵^{ヒラケ}綯^{イロト}端^{アヤ}妙^{ヒラケ}・（高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点・四才四）

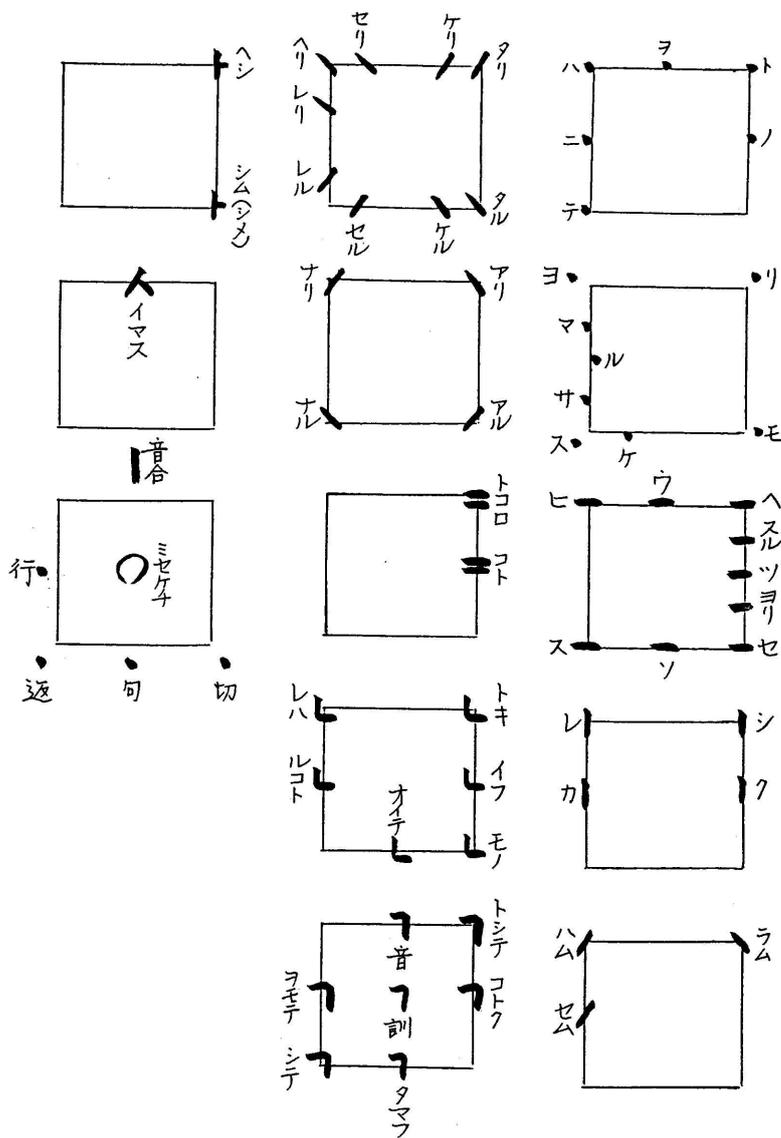
〈訓読文〉 茎(ヲ)抽^スケて^{ヒラ}敷^ケケたり薬^{ヒラ}綵^ケれる「綵^{イロト}レ^ルル」綯^{アヤ}ありて端^{アヤ}妙^{ヒラ}なり、

「抽」字・「敷」字の右に付された「スケ」「ヒラケ」などの仮名が「仮名点」であり、「抽」字左下に施された「・」や「敷」字右上に施された「レ」などが「フコト点」である。また、「茎」字左下の少し離れた位置に施された「・」が「返点」であり、「妙」字真下の少し離れた位置に施されている「・」が「句切りの点」である。

特に説明を要するのはヲコト点であろうと思うが、ヲコト点というのは、漢字の四隅や、上下、中間などに点や線を付けて、仮名の代わりとしたもので、仏家や博士家などによって、漢字のどの部分にどの仮名を配置するかなどについて相違が見られる。

このヲコト点が、漢字のどの部分に配置されているかを示したものを「ヲコト点図」と言い、例えば、右に挙げた高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点は、西崎亨氏（一九九五）によると、ヲコト点は、次のように帰納されるということである。

〔図 21〕ヲコト点図



このヲコト点図(図21)に示されるように、漢字の壺(「□」で示されたもの)の左下に施された「・」は、「て」を示しており、例えば、用例15の「抽^ス」は、「抽^スケテ」と訓読することを示している。

小稿で取り上げる句切りの点は、右のヲコト点図(図21)で言えば、「切」「句」「返」とされているものである。このそれぞれの句切りの点が具体的にどのような句切りを示すものであるのかについては、小稿第四章第三節第一項で述べているのでそちらを参照してほしいが、「返」は、返点のことである。小稿でこの返点を「句切りの点」として扱うこと既に述べた(第一章四参照)。

小稿の調査は、このような訓点資料における句切りの点をひとつひとつ確認していくことを行なったが、資料の原本に直接当たっては調査しておらず、複製本や、研究者によって模写された資料をもとに調査を行なった。

確かに、調査の厳密さと正確さを求めるのであれば、無論、原本に当たっての調査が望ましいことは言うまでもない。しかし、その原本は、古く貴重なもので、容易に調査できるものではなく、また、特に小稿の句切りの点についての調査などでは、その資料の一部だけを見ればよいというのではなく資料全体に及ぶため、一層困難である。

小稿で原本の調査を行っていない理由としては、実際問題として、右のように、原本に当たっての調査が困難であったこともあるが、以下に述べるように、小稿のように複製本などによって調査することにもまた意味があるであろうと考えたためである。

実際に、原本を調査すると言うことになる、やはり原本を出来得るかぎり傷つけないよう心がける必要がある。そのためには、何度も調査するべきではないし、また、何度も調査できるものでもなからう。その点を考慮するならば、やはり、原本に当たって調査する前の事前の準備として、複製本などによって調査を行い、あらかじめ見通しを立てておき、原本調査の際には最低限の調査でよいようにしておくことが必要であろう。

先にも述べたが、小稿で述べるような調査は未だ始めたばかりであり、訓点資料全体を見た時にどのような句切りの点が存しているか筆者はほとんど把握していない。そのため、実際に、原本に当たって調査を行うことになったとしても、その調査を絞り込むことはできないであ

ろうし、また、更には、調査の過程で、新たな視点による調査が必要となるなど、何度も調査しなければならなくなる可能性が充分考えられる。

この点において、筆者は、小稿の調査は、原本を対象とするには、準備が不充分であると考ええる。

小稿の調査は、原本に当たって、その原本を傷つける危険を冒してまでその厳密さや正確さを求めるほど突き詰められたものではなく、未だ多くの資料を見てその外観を捉え、どのような調査を行えば有効であるのか考えている段階である。

小稿の調査で大事なものは、原本に当たって得られる、あるひとつの資料における極々詳細な点までの厳密性や正確性などではなく、むしろ、出来る得るかぎり多くの資料を調査することによって得られる、見通しとなり得る傾向である。無論、原本を見ることが最上であろうが、小稿の調査のように、多くの資料を比較しつつ、何度も調査を行うためには、比較的収集が容易な複製本などの資料の方が都合がよい。

特に、小稿で取り上げる句切りの点などは、ひとつの資料に多くの用例が存しているため、複製本などの写りによって調査の段階で虫損や汚れなどによる誤認が多少あったとしても、その用例数から考えて、その多くの用例をもとに検討し、他資料と比較していけば、ある程度の傾向を見出すことができるであろう。どうしても問題となる箇所があれば、その部分について原本と照らし合わせてみればよいのである。実際に原本を調査された先学による訓読文なども参考になろう。

確かに、小稿で述べるような調査は、原本を対象としていない点において、正確性を欠くことは否めない。いずれ原本による確認作業が必要であろう。そういう意味では、小稿の調査は、原本調査に先立っての予備的な調査と見てもらってもよい。しかし、実際問題として、やはり、小稿のように複製本などによって調査を行うこともまた有用なのではないかと思う。

二、資料の分類について

小稿は、句切りの点を分類する際に、「句読」以外の視点ももって調査する必要があるのではないかということ述べるものであって、そのような調査を行った場合に、資料によって、どのような偏りが見られるかというような点については、筆者は把握していない。そのため、

資料を分類する際に、どのように分類すれば有用であるのかということもまた、筆者には未だ述べる準備がない。

しかし、ある程度、資料を分類しておくことは必要であろうから、ここでは、試みに、築島裕氏のヲコト点図の分類をもとに資料を分類しておこうと思う。

ヲコト点図の分類について、中田祝夫氏（一九五四）は、漢字の壺の四隅にどの仮名を配するかなどによって分類し、八つの群を立てられ、発生の古い順に「第一群点、第二群点、…、第八群点」とし、これらに該当しないものを「特殊点」とされたが、築島裕氏（一九八六）は、その特殊点を「特殊点甲類」と「特殊点乙類」の二つに分け、第一群点よりも第二群点が、第七群点よりも第八群点がそれぞれ先かとされた。築島氏によると、ヲコト点図の発生時期は、左の通りである。

- ◎特殊点甲類・特殊点乙類・第二群点・第一群点・第三群点・第四群点 …… 九世紀（平安時代初期）
- ◎第五群点 …… 十世紀初頭（厳密には九世紀極末に入るか）
- ◎第六群点・第八群点 …… 十世紀中葉
- ◎第七群点 …… 十一世紀初頭（確実な例）

小稿において資料を見る際には、これをもとに「第〇群点」に属するというような形で資料を分類してみようと思う。

三、小稿で取り上げた資料

以下に、築島裕氏のヲコト点図の分類に基づき、小稿で取り上げ調査を行なった全資料を示しておこうと思う。ただし、それぞれの群の中では、基本的に年代順とし、第五群点では、仏家点と博士家点とがあるので、それを分けた。

〈表1〉

◎第二群点

- ・興福寺本 大慈恩寺三藏法師伝（一〇八〇年前後^他・喜多院点）
- ・東大寺図書館本 釈摩訶衍論（一二〇八年・喜多院点）

◎第一群点

- ・東寺蔵 不動儀軌（一〇二五年・仁都波迦点）

◎第三群点

- ・高野山西南院蔵 大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽（院政初期・中院僧正点）

◎第五群点

〈仏家点〉

- ・高野山西南院蔵 聖燄漫徳迦怒王立成大神験念誦法（一〇七九年・↓）
- ・高野山西南院蔵 北斗七星護摩秘要儀軌（院政期頃・浄光房点、円堂点）
- ・西教寺本 秘蔵宝鑰（院政末期・円堂点）

〈博士家点〉

- ・毛利博物館蔵 史記 第九 呂后本紀（一〇七三年・古紀伝点）
- ・神田本 白氏文集 卷第三・卷第四（一一一三年・古紀伝点）
- ・岩崎本 日本書紀 卷第二十二 推古紀（平安中期末・↓）

◎第六群点

- ・高山寺蔵 十二天法（平安後期・叡山点）

第二節 訓点資料における「句切りの点」の加點状況

ここでは、訓点資料における句切りの点の調査方法を述べるに当たって、まず、その句切りの点^が訓点資料においてどのような用いられているのか、事前に述べておくべきであろうことについて簡単に述べておきたいと思う。ただし、筆者が目にした資料は、訓点資料の中でも極々一部の資料であり、訓点資料全体を見渡した時に、その句切りの点^が一般的にどのようなように用いられるものであるのかなどということについては、未だ述べる準備がない。

従って、ここで述べるのは、筆者が今回、訓点資料を調査した中で見られた傾向である。

今後の調査によつては、改めなければならないことも生ずるかもしれないが、現行の句読点などと異なつた点がある場合には、やはり事前^に述べておくべきであろうと考え、敢えて述べることにした。

なお、ここで言う句切りの点とは、句点・読点などに返点を加えたものである。

(1) 句切りの点は、恣意的なものである。

現在の漢文訓読では、句切りであれば基本的に句点・読点が打たれ、返読があれば基本的に返点が施されるという形を取るのであるが、訓点資料においては、句切りであっても句切りの点^が必ずしも打たれるというわけではなく、また、同様に返読があつても必ずしも返点が施されるわけではない。

小林芳規氏（一九七四）が、返点について

院政期を過渡として後期以降は返点の量が増加し、次第に「返読すべき所には返点を施すのを原則とする」という傾向が一般になる。この傾向は、仏書だけでなく漢籍の方にも及ぶようである。

と述べておられるように、時代によつて差はあるかもしれないが、訓点資料における句切りの点^が恣意的なものであることについては留意しておくべきであろう。

(2) 句切りの点は、併記されないことが多いようである。

句点と読点が併記された例が見られないことは、句点^が「文末の句切り」であり、読点^が「文中の句切り」であることを考えると、当然かもしれないが、筆者が調査したかぎりでは、これら句点・読点と、返点との併記例も多くは見られないようである。例えば、文中で返読

がある句切りなどでは、読点と返点とが併記されてもよさそうであるが、併記の例はほとんど見られず、読点と返点のいずれか一方のみが施された形になっている。切点と返点も同様である。ただし、文末の場合には、返点と、句点或いは切点との併記例がまとまった形で見られるようである。

(3) 訓点の加点位置は、必ずしも正確でないことがある。

訓点資料において、ヲコト点や句切りの点などの訓点は、人の手になるものであるので、あるヲコト点がある他のヲコト点と加点位置が近い場合など、その両者の書き分けが明瞭でないことがある。例えば、

〔図 22〕



のように、「漢字の左下の壺」に施された星点が「テのヲコト点」、「漢字の左下の壺から離れた位置」に施された星点が「返点」という形になっている場合、漢字の壺に施されるべきテのヲコト点が、返点と同じくらいに離れた位置に施されたり、また、反対に、漢字の壺から離れた位置に施されるべき返点、テのヲコト点と同じように漢字の壺近くに施されたりすることがある。特に、「国」のように漢字の字形が「口」に近いものであれば、ヲコト点を施すべき四隅なども明瞭であろうが、「十」などのように漢字の字形が「口」でない場合などは、一層、加点位置などに揺れが生じよう。

このように、訓点の加点位置については明瞭でない場合があるので、実際に訓点を見ていく際には、加点位置を絶対的なものとはせず、文脈などと照らし合わせながら見ていく必要がある。

第三節 訓点資料における「句切りの点」の調査方法

一、調査方法

句切りの点を調査するに当たって、まず、注意すべきことは、右の第二節の(1)で述べたように、訓点資料における句切りの点は恣意的なものであるから、つまり、この調査は、訓点資料において句切りの点が打たれている場合に、その句切りの点がどのような句切りに施されているかということを見るものであって、句切りとなる箇所であっても句切りの点が打たれていなければ、その箇所は調査対象とはならないということである。この点において、小稿の調査は、訓点資料に施されている句切りの点をひとつひとつ拾って行き、その傾向を見ることによって、その句切りの点が一体どのような句切りに用いられているかということを見ていくという形になる。

それでは、その傾向を見ていく際にどのような点について見ていけばよいかということであるが、筆者がこれまで調査したところによると、句切りの点を見ていく際に必要であろう視点は、次に示す三つであろうと思う。

無論、今後の調査結果次第では、これら三つに限らず他の視点をも設けて調査を行なわなければならない可能性もあるが、現時点では、以下の三つを中心に見ていけばよいのではないかと思う。

1. 「句読」 …… 「文末」であるか 「文中」であるか。 ↓ 「句点」「読点」など。
2. 「返読の有無」 …… 「返読がある」か 「返読がない」か。 ↓ 「返点」「不返点」など。
3. 「テの有無」 …… 「テがつく」か 「テがつかない」か。 ↓ 「テ・切点」など。

1. 「句読」は、句切りの点についての先行研究でも取り上げられている事柄であり、句切りの点を見る際には、この視点は、はずすことはできないであろう。2. 「返読の有無」は、小稿において、返点を句切りの点としたために設けたものである(第一章四参照)。3. 「テの有無」は、博士家点などにおいて用いられる「テ・返」(返点を兼ねるテのヲコト点)とされる星点を、小稿において、テのヲコト点と句切りの点とを兼ねたもの―つまり、「テ・切点」―と見たことによって設けたものである(第五章参照)。

これらのうち、3. 「テの有無」は、右に述べているように、小稿で言うところのテ・切点を対象とするものであるから、そのテ・切点を用いていない資料については、特に問題がないかぎりには調査からはずしてもよいであろう。

このテ・切点について、小林芳規氏（一九七四）は、これをテ・返と捉えられ、「星点の返点は仏書には基調をなすものとして盛用されるが、漢籍では「て」と兼用のヲウト点として用いるものであつて、返点だけには使われない」と述べておられる。小林氏によれば、仏家点において返点とされるものが、博士家点では全てテ・返として用いられていると考えてよさそうであり、つまり、小稿のテ・切点は、博士家点において用いられていると見てよさそうである。

従つて、小稿で、3. 「テの有無」という視点を持つて調査を行なうのは、博士家点を中心としたもので、仏家点については、基本的に、1. 「句読」、2. 「返読の有無」の二つの視点からの調査のみでよさそうである。

以上のことを踏まえて、具体的な調査方法を考えてみると、句切りの点を見る際には、基本的に、「句読」と「返読の有無」とを見ていけばよいであろうから、つまり、訓点資料の中で用いられている句切りの点を、左の四つに分けて見ていけばよいのではないかと思う（「テの有無」については後述する）。

A 文末・返読アリ	〈例〉観舞・聴歌・知楽意。 （舞を観、歌を聴きて楽の意を知ぬ。）
A 文末・返読ナシ	〈例〉雲陰・月黒・風沙・悪。 （雲陰り、月黒くして風沙、悪し。）
B 文中・返読アリ	〈例〉観舞・聴歌・知楽意。 （舞を観、歌を聴きて楽の意を知ぬ。）
B 文中・返読ナシ	〈例〉雲陰・月黒・風沙・悪。 （雲陰り、月黒くして風沙、悪し。）

※右の分類の「A (A)」「B (B)」は、それぞれ「文末」「文中」を表す。そして、中抜きであるか否かによつて「返読の有無」を表し、「A、B (中抜き)」「A、B」をそれぞれ「返読アリ」「返読ナシ」とした。訓点が施されておらず「文末」「文中」の別が明らかでない場合などには「C」とし、これについても「返読の有無」を中抜きであるか否かによつて表した。

例えば、「漢字の右下の句切りの点」を調査する際には、その「漢字の右下の句切りの点」を資料の中からひとつひとつ抜き出して行き、

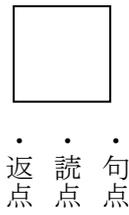
それが、右の四つのうち、どれに偏るかを見ていくのである。もしその句切りの点が、「A文末・返読アリ」と「A文末・返読ナシ」とに偏って用いられていたとすると、その場合、それは「返読の有無」とは関係なく「文末」に用いられていることになるから、つまり、それは句点であると考えられる。同様に、もし「返読アリ」に偏って用いられていれば、返点と考えるわけである。

なお、小稿の調査において、「文末」であるか「文中」であるかの判断は、基本的には、活用語の活用形や終助詞などの文末・文中を示す訓点をもとに行なった。ただし、活用語の連体形と終止形とが同形である場合など、文脈によって判断を行なったところもある。

厳密に言くと、このように、活用語の活用形や助詞などによって、文末や文中を判断する現代のやり方が、訓点資料の加点者たちが句切りの点を施す際の当時のやり方に、うまく合致するものであるのかどうかという問題もあるのかもしれないが、最初の試みとしては、まず、このように調査することにしてみようと思う。当時の加点者たちがどのように文末・文中というものを考えていたかというような問題については、もし問題となるのであれば、今後の課題としたいと思う。

以上のように句切りの点を分類していけば、右の第二節の(2)で述べたように、句切りの点は基本的に併記されていないようであるから、例えば、

〈図23〉



という形で句切りの点が用いられている資料においては、「文中・返読アリ」の句切りの場合、読点・返点のいずれか一方のみが施されることになる。

この読点と返点のいずれを施すかについては、恐らく、加点者が「文中であること」を示そうとすれば読点を施し、「返読のあること」を示そうとすれば返点を施すという選択がなされたのではないかと思う。つまり、「選択」については、恣意的であるということである。(本

章第二節 (1) 参照。

この句切りの点を併記しないという傾向を利用すれば、句点・読点などの「句読」に関わる句切りの点」と、返点などの「返読の有無」に関わる句切りの点」とは、併記が可能である場合にも併記されずに選択が行われるわけであるから（右の読点と返点の例など）、その両者の句切りの点のうちいずれを多く用いているかを見ていけば、「句読」に関わる句切りの点を多く用いる資料や、「返読の有無」に関わる句切りの点を多く用いる資料などを見出すことができる可能性がある。

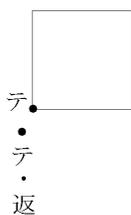
ここで述べたような調査を行えば、その句切りの点がどのような句切りを示しているかということを知るとともに、その句切りの点を用いている資料がどのような句切りに関心を持ち、それを書き分けようとしているのかということについても知ることができる可能性があるのではないだろうか。

二、「テの有無」についての調査方法

この句切りの点を「テの有無」という視点から調査することについては、先にも述べたが、筆者が、博士家点において用いられる「テ・返」（返点を兼ねるテのヲコト点）とされる星点を、「テ・切点」（テのヲコト点と句切りの点とを兼ねたもの）と見たことよっている。

このテ・切点については、「漢字の壺」に施されるテのヲコト点（以下、「壺のテ」と略す）が存することによって、漢字の左下にテのヲコト点（以下、「壺のテ」と略す）が施されていた場合に、どれを壺のテとし、どれをテ・切点とするのかという問題が生じる（左図24参照）。これは、本章第二節の(3)で述べたように、訓点資料においては、その加点位置が必ずしも正確でない場合があるからである。

〈図24〉



その点において、このテ・切点については、これを「テの有無」という視点から調査する前に、まず、これら壺のテとテ・切点とをどのように分類するかということが問題となる。

この問題は、テ・切点を返点とするか切点とするかということと大きく関わる問題であり、従って、小稿においては、このテ・切点について、「テの有無」という視点からの調査も行なつてはいるが、それ以上に、これを返点として捉えるべきか切点として捉えるべきかということについて、多くの紙面を割いている。

このテ・切点については、個々の資料の加点状況によってそれに適していると思われる調査方法を取つたため、その調査方法については、右に見た「句読」「返読の有無」に関わる句切りの点のようにまとまった形で調査方法を述べることはせず、その都度、述べることにしたいと思う。

このテ・切点の問題については、第五章で取り上げている。

三、本文部の句切りの点と別に分けて調査を行なつた句切りの点

小稿において、句切りの点を見ていく際に、句切りの点が施されていても調査対象からはずしたり、別に分けて調査を行なつたりしたものがある。それは、大きく分けて、以下のような場合である。

- (イ) 「陀羅尼」に施されたもの
- (ロ) 「和歌」に施されたもの
- (ハ) 「割注」に施されたもの
- (ニ) 「補入部」に施されたもの

小稿においては、本文全体から、右の(イ)～(ニ)を除いた本文を、便宜上「本文部」と呼ぶことにした。

(イ)の陀羅尼は仏書に見られるものであるが、陀羅尼は、本文部とは異なって訓読がなされないため、「句読」や「返読の有無」という視点から分類を行なえば、ほぼ確実に本文部とは異なった加點傾向が出ることになるであろう。

小稿のように句切りの点の加點傾向を見ていく場合には、やはり、この陀羅尼のような異質な部分は除いて傾向を出す必要があるだろうと考え、分析の際には、別に分けて見ていくことにした。

(ロ)は、『日本書紀』などにおいて、和歌が万葉仮名によって一字一音の形で表記されているような箇所には施された句切りの点のことで、このような場合も、右の(イ)と同様に、漢文の訓読のために施された本文部の句切りの点とは自ずと異なった傾向が生じることになるであろうから、分析の際には、別に分けて見ていくことにした。

(ハ)の割注や、(ニ)の補入部は、本文部に小字で加えられたものであり、可能性として、後に加えられた可能性が考えられよう。特に、(ニ)の補入部の場合には、その可能性はより強いであろう。

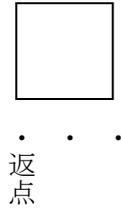
この可能性を考えると、やはり、本文部との加點者の違いや時代の違いなどを疑ってみる必要性はあるように思う。

この点を考慮し、これら(ハ)(ニ)のような場合についても、別に分けて検討することにした。

第四章 仏家点における「句切りの点」

序節

訓点資料は大きく仏家点と博士家点とに分けられるが、本章では、その前者の仏家点における句切りの点を見てみたいと思う。先行研究によると、訓点資料における句切りの点は、小稿で取り上げた資料のように「・」の形状のものばかりではなく、また、句切りの点の種類も、必ずしも三種類というわけではないようである。しかし、時代を経るにつれ、



という形に統一されるということである（第二章 参照）。

本章で取り上げた資料は、意図的に選んだわけではないが、第三節 第二項で取り上げた東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点を除き、全て右の形のものである。恐らく右の形を取る資料が多いためであろうと思う。

ただし、本章で取り上げた資料の句切りの点が、右のように同様に三点配置されているからといって、その全ての句切りの点が同様に用いられているわけではない。

本章では、資料の句切りの点をひとつひとつ検討していくことによって、それらの資料の中で句切りの点の用いられ方に差異が見られることを示したいと思う。

なお、本章で取り上げる仏家点においては、博士家点に見られるテ・切点のように「テの有無」に関わると考えられる句切りの点は用いら

れていないようなので、その句切りの点を調査する際には、左のように、「文末」「文中」、「返読アリ」「返読ナシ」という視点によって分類を行なうのが有用であろうと思う（第三章 第三節 参照）。

A 文末・返読アリ

A 文末・返読ナシ

B 文中・返読アリ

B 文中・返読ナシ

以下には、資料ごとに、句切りの点が右のいずれに偏って用いられているかを見ることによって、その句切りの点がどのような句切りを示しているかを考察していきたいと思う。

第一節 興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点における句切りの点

―句切りの点はどのように用いられているのか―

一、はじめに

本節で取り上げるのは、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』古点（以下、『三蔵』と略す）である。

この『三蔵』を調査対象として小稿で述べるような調査を行ってみると、そこに用いられた句切りの点は、必ずしも「句読」という視点によって書き分けられたものではないようであり、むしろ、その句切りの点が施される際には、「返読の有無」ということがらに大きな注意が払われているようである。

本節では、この『三蔵』を一例として取り上げ、その句切りの点がどのように用いられているかを考察することによって、訓点資料にお

ける句切りの点を見ていく際には、「句読」という視点に限定するべきではなく、小稿で述べるようにさまざまな視点から検討する必要があるのではないかということを描べたいと思う。

二、資料について

築島裕氏（一九六五）によると、この『三蔵』は、全十巻の卷子本で、巻第一の奥に、本文と同筆で、

延久三年七月十三日書寫之^{時西魁}_{初點也}

という識語があり、この「延久三年（一〇七一年）」という年号は、この本文の筆写の年代と認められるということである。また、築島氏は、巻第二以下も、別筆と見受けられるものの、恐らく巻第一と同時に、十人の書き手が分担して一巻ずつ書写したのではないかとされている。訓点については、築島氏は、次の六種に分類されている。

- (一) ㊤種点。巻第一の前半に付せられた朱点。識語が無いので加點年代は明確ではないが、仮名字体など訓点の方式から見て、大体延久・承保・承暦頃（一〇八〇年前後）の筆と認められる。
- (二) ㊦種点。㊤種点と同じ部分、即ち巻第一の前半だけに付せられてある墨点。加點年代は、これも識語が無いので明確ではないが、恐らく㊤種点の直後に、それと異った訓法を記す為に加點されたものらしい。多分㊤種点と同筆と思われる。従つて、この㊤㊦両種の点は、同類に属するものと認められる。
- (三) ㊧種点。巻第七の巻初から巻第十の巻尾に至るまで、合計四巻に互つて付せられた墨点。識語が、巻第七の表紙、及び巻第九と巻第十との奥にあつて、少くとも承徳三年（一〇九九）四月から五月・六月に互つて興福寺の僧濟賢の加點したものであることが窺はれる。
- (四) ㊨種点。巻第七から巻第十まで、合計四巻に互つて付せられた朱点。識語の日付が「五月四日」としかないので、年代は明確でないが、承徳三年かと考へられる。恐らく㊧種点と前後して付せられた訓点で、多くは㊧種点と異った訓法を示してをり、多分この二種は同筆と見てよいであらう。
- (五) ㊩種点。㊤㊦両種点が終つた箇所からすぐ後を続けて、即ち巻第一の後半から巻第二・三・四・五・六の巻末まで合計五巻半に互つて付

せられた墨点。加點識語が各巻尾にあり、永久四年（一一一六）二月に移点されたことが判る。

(六)㊦種点。巻第一・第二の二巻に互つて（但し、巻第二は奥書のみで、実際に加點された例は見出されない）所々に稀に付せられた墨点。巻第一・第二の奥書によつて嘉応二年に夕拝郎実守が加點したものであることが知られる。

右に示したように、『三蔵』においては、加點年代の異なる複数の訓点（一）が施されているということであるが、本節で資料として取り上げたのは、その中でも最も古いとされる㊦種点である。㊦種点（二）は、巻第一の巻首から巻第一の一三六行の六字目「典」までである。

本節では、その㊦種点における句切りの点（三）がどのようなこと（四）がらを書き分けているのか見てみたいと思う。

本節においてこの㊦種点を調査対象としたのは、出来るかぎり古い加點形式を明らかにしたいということもあつたが、それよりもむしろ、第二番目、第三番目の加點などを調査したのでは、特にそれらの加點がそれら以前の訓点に重ねて加點されている場合には、以前の訓点を避けて加點したり、或いは、以前の訓点にない部分を補つた形で加點したりするなど、以前に加點された訓点との関わりによつて、純粹な形での傾向が得られない可能性が考えられたからである。思うに、句切りの点をどのように用いているかということを見るためには、やはり、まず、句切りの点（五）が施されていない資料にどのように句切りの点を施しているかということを見るべきであつて、句切りの点（六）が既に施されている資料に、更に加えられた句切りの点などは、別に検討すべきではないかと思う。

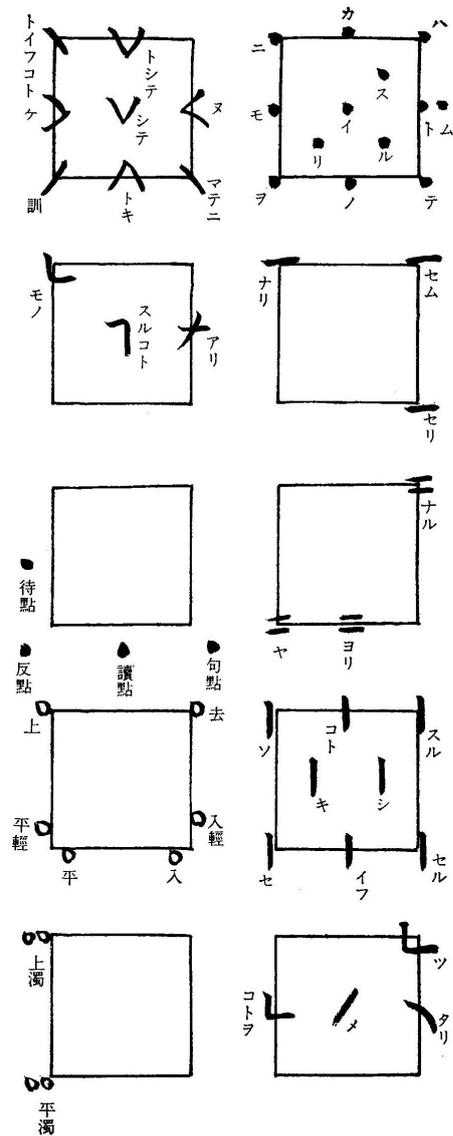
無論、この『三蔵』のように加點年代の異なる訓点（七）が施されている場合には、その加點年代ごとに、その句切りの点を調査し、比較を行うというような調査も有用であるうと思ふが、そのような調査については今後の課題とさせてほしい。

なお、以上に述べたように、小稿で取り上げるのは、『三蔵』の㊦種点のみであるので、特に問題がないかぎり、例えば、『三蔵』の㊦種点（八）の句切りの点（九）のようには言わず、『三蔵』の句切りの点（十）のよう（十一）に言うようにし、㊦種点という言葉は略することにした。

この『三蔵』の㊦種点のヲト点（十二）は、築島氏（一九六五）によれば、喜多院点（第二群点）で、左のようになっているということである。

〔図 25〕

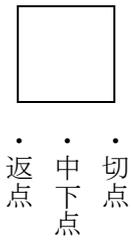
④種点 (延久承暦頃加點・朱点) ヲコト点図 (喜多院点)



築島氏は、右のヲコト点図 (図 25) のように、この『三蔵』における句切りの点を、右から順に句点・読点・返点とされている。句点・読点の定義にもよるが、句点・読点と並べられていることから考えて、句点は「文末の句切り」、読点は「文中の句切り」ということではないかと思う。

このように、築島氏は、『三蔵』の句切りの点を、句点・読点・返点とされているが、小稿の調査によると、

〔図 26〕



〔築島裕 (一九八六) の点図集所載の喜多院点では、右下点は「切」、中下点は「句」、左下点は「返」となっている。〕

となっているようである。右の図26で漢字の中下の点を「中下点」としているのは、以下に述べるように、この中下点は用例が三例しか見られず、これがどのような句切りの点であるのか明言できなかったためである。以下、句切りの点の名称は、この図26による。

なお、本節の調査資料としては、築島氏（一九六五）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』訳文篇の影印を用い、訓読文についても同書に従った。

三、句切りの点の使用状況

ここでは、『三蔵』における句切りの点の用例をもとに、その句切りの点が一体どのような句切りを示しているのかということ考察したいと思う。

まず、『三蔵』の句切りの点の用例を挙げる。なお、用例の下には、「文末・文中」の別と、「返読アリ・返読ナシ」の別とを括弧（ ）に入れて示した。

〈用例〉

【切点】

〔16〕 妙^レ辯雲飛^ヒ溢^イ思^イ泉涌^ワ。（四三）（文末・返読ナシ）

〈訓読文〉 妙^イ・辯雲のことくに飛^イヒ溢^イ・思^イ（平聲）泉のことくに涌^ワク。

〔17〕 方等一乘^レ・圓宗十地^レ・謂^イ之^イ大法^レ。（三）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 方等の一乗・圓宗の十地・之を大法と謂フ▲

〔18〕 聖者阿難・能誦持如来所有法蔵・如瓶瀉水・置之異器（二〇）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 聖者阿難・能ク如来所有の法蔵を誦持すること▲瓶の水を瀉して▲之を異器に置（ク）か如（シ）▲

〔19〕 因又謂余・曰・佛法之事豈預俗徒（五〇）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 因（リテ）又余に謂（ヒ）て▲曰（ハク）▲佛法（ノ）〔之〕事豈（ニ）俗（ニ）徒（ニ）に預（ケ）とや▲

〔20〕 凡講涅槃經・攝大乘論・阿毘曇・兼通書傳（二〇六）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 凡て涅槃經・攝大乘論・阿毘曇を講し▲兼（テ）て書（平）傳（平）ヲ通（セ）り▲

【中下点】

〔21〕 是故法・将如林・景脱・基・暹・為其稱首（九五）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 是の故（ニ）法・将（去）林の如（ク）▲景（平）か平（平）輕（平）か脱（入），基（平）輕（平），暹（去），其の稱（平）輕（平）首（上）為（り）▲

【返点】

〔22〕歸向之徒並遵其義（二七）（文末・返読アリ）

〈訓読文〉 歸_去向_平（之）〔之〕 徒_{トモカ}並に其の義_去に遵_{シタカ}フ▲

〔23〕故召諸聖衆集結微言（二四）（文中・返読アリ）

〈訓読文〉 故に諸の聖衆を召_メシテ▲ 微_平言_平ヲ集_メ結_ス▲

◎併記例

〔24〕是故歴代英聖仰而寶之（六）（句点返点併記・文末・返読アリ）

〈訓読文〉 是の故に歴_入代_去の英_平聖_去仰_{アツ}キテ〔而〕之を寶_訓トス▲

この『三蔵』は仏家点なので、第三章 第三節に述べたように、「文末・文中」、「返読アリ・返読ナシ」という視点によって句切りの点の分類を行なった。

調査結果は、次のようになった。

〈表2〉「句切りの点」調査結果

【切点】（全一四七例）

A 文末	・ 返読アリ	○例
A 文末	・ 返読ナシ	六九例

B 文中	・ 返読アリ	〇例
B 文中	・ 返読ナシ	一七例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一四例
A 文末	・ 返読アリ	三八例 (返点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読アリ	九例 (返点と重複)

【中下点】(全三例)

A 文末	・ 返読アリ	〇例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	〇例
B 文中	・ 返読ナシ	三例

【返点】(全四二〇例)

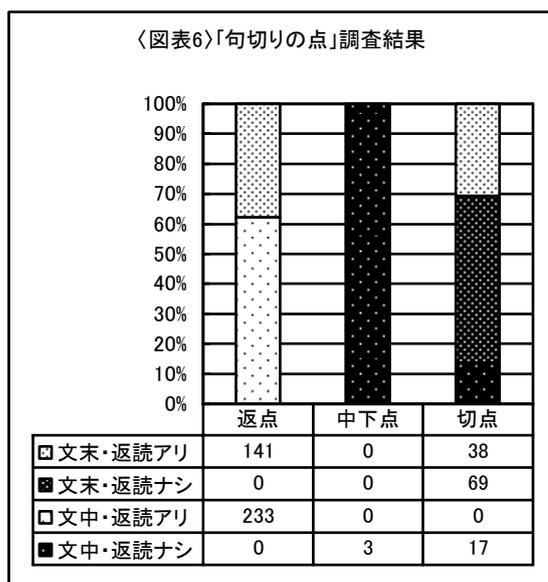
A 文末	・ 返読アリ	一〇三例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	一三三三例
B 文中	・ 返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	三七例
A 文末	・ 返読アリ	三八例 (切点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読アリ	九例 (切点と重複)

右の調査結果(表2)のうち、「C(C)文末・文中不明」に分類されたものなどは、句切りの点が打たれた箇所其他の訓点が全く施され

ていないなどによって、その句切りの点がどのような句切りに施されているのか断じがたいものである。

従って、『三蔵』における句切りの点がどのような句切りに打たれているのかということを知るためには、この「C(C)文末・文中不明」などのように訓み方の明らかでない箇所には打たれた句切りの点を除き、訓み方の明らかな箇所に打たれた句切りの点についてその傾向を捉える必要がある。

そこで、右の調査結果(表2)のうち、「C(C)文末・文中不明」などの訓み方の明らかでない例を除いてグラフにしたものが、左の図表6である。



※ただし、「切点」の「文末・返読アリ」三八例は、全て「返点」との併記例。また、「返点」の「文末・返読アリ」一四一例のうち、三八例は、「切点」との併記例。

この図表6によると、

〈表3〉

文末・返読アリ	∴	返点単独。	或いは、	切点・返点併記。
文末・返読ナシ	∴	切点単独。		
文中・返読アリ	∴	返点単独。		
文中・返読ナシ	∴	切点単独。	或いは、	中下点単独。

という形で、句切りの点が使われているようである。

この図表6で注目すべきは、以下のようなことであろうと思う。

- (1) 中下点がわずかに三例しか見られないこと。
- (2) 中下点が「文中・返読ナシ」に偏って用いられていること。
- (3) 切点が文末に多く用いられていること。
- (4) 「文中・返読アリ」には全て返点が使われていること。
- (5) 「文末・返読アリ」には、返点単独の場合と、返点・切点併記の場合があるが、必ず返点が使われ、切点が単独で用いられることがないこと。
- (6) 切点が文中に用いられる際には、返読ナシにしか用いられていないこと。
- (7) 切点・中下点の用例数よりも返点の用例数の方が多いこと。

図表6によれば、左下点(返点)は、文末・文中を問わず返読アリに偏って用いられていることから、やはり、返点と見てよいのではないかと思う。

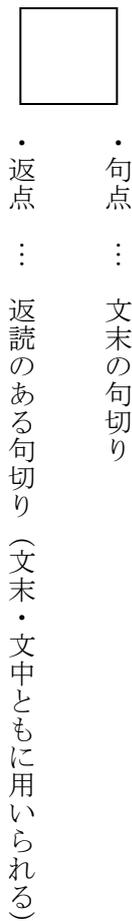
問題となるのは、右下点(切点)と中下点である。確かに、右下点(切点)は文末に偏り(文末一〇七例、文中一七例)、中下点は文中のみに用いられているから(文末〇例、文中三例)、一見、右下点(切点)が句点、中下点が読点であるかのように見える(右の図表6の傾向(2)(3))。

しかし、中下点の例はわずかに三例のみであり、これが読点として機能しているとは、あまりにも用例数が少なすぎるのではないかと思う（傾向(1)）。例えば、以下の本章 第四節 第一項で取り上げる西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）（院政末期か・第五群点・円堂点）では、句点三一八例に対し、読点は二一七例であり、読点がかなりの割合を占めている。そのような資料と比較してみると、この『三蔵』においても、右下点（切点）が句点であったとすれば、この右下点（切点）一〇七例に対して、もう少し用例が見られてもよいのではないだろうか。この『三蔵』の返点が文末一四一例に対して文中二三三例で、返点が文中に多く用いられているのを見ても、やはり中下点の用例数の少なさには疑問を覚える。

思うに、この『三蔵』に見られるわずか三例の中下点は、句点に対するところの読点として、句切りの点の主軸となるようなものではなく、むしろ、その用例数の少なさから考えて、臨時的・補助的なものであると見るべきなのではないかと思う。或いは、加点者の違いや時代の違いなどを考慮すべきなのかもしれない。

このように中下点を別に考えるものとして考察すると、もし仮に、右下点（切点）が句点であったとすると、この『三蔵』においては、

〔図 27〕



という形になり、つまり、返読のない箇所においては文中に施される句切りの点がないということになる。この『三蔵』においては、「文中・返読ナシ」に施すべき句切りの点はないのであろうか。

この「文中・返読ナシ」の句切りの点の問題としては、右下点（切点）に、多くはないが、文中に用いられた例が見られることが注目される。

この『三蔵』における右下点（切点）は、文末に多く用いられているものの、確かに文中に用いられていると見られる例が存するのである。例えば、前掲の用例 18 のように名詞の下に打たれた例、用例 19 のように「曰（いはく）」の下に打たれた例、用例 20 のように名詞が列挙

された場合にその名詞の間に打たれた例などは、文中に用いられた例と認められるべきものではないだろうか(他にも「方等一乘・圓宗十地」(三)、「化城・垢服・濟馬・馳羊」(四)などの例がある)。特に用例20では、「阿毘曇」の所から「講」字の所に返読されるため、その間にある「涅槃經」や「攝大乘論」の所で文が終わるとは考えにくく、更に、並列の形になって右下点(切点)が二点続けて用いられていることから見て誤点などの可能性も低く、確例と言えるのではないかと思う。

このような文中の例が存することから考えると、右下点(切点)は、やはり句点ではなく、切点と見た方がよいであろうと思う。

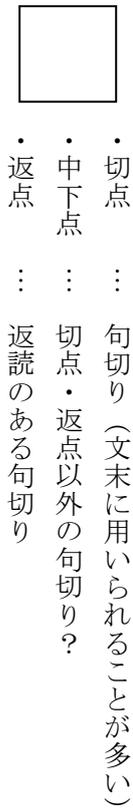
中下点については、用例数が少ないため確実なことは言えないが、もしこの中下点が「文中・返読ナシ」に用いられている(傾向(1))と
いうことを、

・「切点(多く文末に用いられる)が示す句切り」以外の句切り ↓ 文中
・「返点(返読ナシ)以外の句切り」 ↓ 返読ナシ

と見ることができるのであれば、或いは、この中下点は、切点・返点の両点を施すことのできない句切りを示すというような補助的なものであると見ることができるとは思えない。中下点が「文中・返読ナシ」に偏って用いられる例は、以下の、東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点(本章第二節)、高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神驗念誦法』承暦点(同第五節第一項)、高山寺蔵『十二天法』平安後期点(同第二項)にも見られる。

以上のように考察してみると、この『三蔵』においては、

〈図28〉



と見ることができないのではないかと思う。

四、切点・返点の用いられ方について―切点の偏りに着目して―

右においては、『三蔵』における句切りの点がそれぞれのようことから表しているのかということについて考察したが、ここでは、それらの句切りの点が、具体的にどのようなように用いられているのかということを見てみたいと思う。ただし、先にも述べたように、中下点については、用例数が少なくどのような句切りを示すものであるのか明らかでないので、切点と返点を中心に取り上げたいと思う。

先に図表6の傾向として(1)～(7)を示したが、この『三蔵』においては、切点の用いられ方に顕著な偏りが見られるようである。例えば、切点は、図表6に示すように文末・文中や返読アリ・返読ナシを問わずに用いられているようであるが、詳細に見てみると、必ずしも文末・文中、返読アリ・返読ナシともに同じように用いられているわけではなく、文末・文中という点では文末に偏り(傾向(3))、返読アリ・返読ナシという点では返読ナシに偏る(傾向(6))というような傾向が見られるのである。

以下には、このような切点の偏りに着目しながら、この『三蔵』において、その当該の切点が具体的にはどのように用いられているのか、そして、その切点の用いられ方と返点の用いられ方とを比較することによって、この『三蔵』という資料において、それらの句切りの点がどのような関わりあいの中で用いられているのかということなどを考察してみたいと思う。

まず、前掲の(3)に示したように、切点が、文末・文中ともに用いられていながら、その多くの用例が文末に偏って用いられていることについて見てみたいと思う。

この文末に偏るといふ傾向は、この切点が文中にも用いられていることから考えて、文末であることを示すためにこれを用いているとは考えにくい。これは、思うに、文末・文中ともに用いることのできる切点を、文末を示すのに多く用いていると見るべきであろうと思う。つまり、句切りの点を施す際に、「文中の句切り」にはそれほど重点が置かれず、「文末の句切り」に重点が置かれて施されたのではないかという

ことである。

考えてみるに、「文中の句切り」というのは、文の途中のまだ文が続いている箇所であり、対して、「文末の句切り」というのは、文が終わって文が切れる箇所である。つまり、文を切るという点から考えると、「文末の句切り」の方は、確かに「句切り」であろうが、一方の「文中の句切り」の方は、見方によっては、「句切り」とは言えない可能性があるだろう。もしこの『三蔵』における切点がこのように「句切り」に用いられているとすれば、ある種の合理性をもって施されていると見ることができるとは思えない。

このように見ると、『三蔵』において、文末・文中ともに用いられるべき切点と、文末に偏って用いられることは、現在いうところの文末・文中というような問題とは多少別のところにある、もつと基本的な問題として、当時の加點者たちが「句切り」というものをどのように考えていたかというような問題と関わるものである可能性もあるのではないだろうか。

それでは、そのように「文末の句切り」に多く用いられる切点と、文中に用いられた場合には、どのように用いられているのであろうか。「句切り」と関わるものなのであろうか。

筆者が調査したところによると、この『三蔵』において文中に用いられた切点は、前掲の用例18と20のように、全て名詞と考えられるもの下で打たれたものである（動詞連用形による中止や、動詞に助詞「て」などが下接して中止する場合などに用いられた例は見られない）。

考えてみるに、漢文において、漢字どうしが主述の関係にあるなど文法的に何らかの関係がある場合などには「句切りの点」が施されていなくても文脈などによってその内容を、ある程度は理解することができるのではないかと思うが、右のように、名詞が羅列されていたり、特に固有名詞が並べられたりする場合には、文脈などからその句切りを推測することができないことが少なくないであろう。

そのように見ると、右のように、文中の切点の用例が、名詞が羅列された例などを含め、名詞の下に施された例に偏って用いられることは、まさにそこに「句切り」の点が必要であったからである可能性があるであろう。

このように見てみると、切点が文末に用いられた例にしても、文と文とをはっきりと切り分ける必要がある所であり、文中に用いられた例にしても、やはり、名詞と名詞の間などをはっきりと切り分ける必要がある所であると見ることができるとは思えないだろうか。

思うに、この『三蔵』における切点は、文中に用いられた例の少なさから考えて、句切りとなっている箇所であるから付すというようなも

のではなく、句切りであることを示すことが必要であるから付すというようなものではないだろうか。

古来、日本においては、句切りの点是用いられていなかったことであるから、この『三蔵』のように、切点がほとんど文中に打れていないというのは、つまり、文中の句切りを示す必要がなかったということなのかかもしれない。

このような必要な箇所のみ切点を施すという形式は、もしこれが句切りの点を用いていなかった日本人の習慣を反映しているものであるならば、或いは、句切りの点の用いられ方として原初の形であるのかもしれない。

この切点が文中にほとんど打たれていないのに対し、返点は、文中において非常に多くの例を確認することができる（文中の切点一七例、文中の返点二三三例。図表6参照）。

もしこれを、文中の返読ナシの場合には句切りの点（切点）をほとんど施していないのに、返読アリの場合には句切りの点（返点）を詳細に施していると見るならば、なぜ返読アリの場合にのみ文中の句切りを示しているのかということが問題となり得よう。

これについては、返点が文中を示すために施されたものではないと見れば問題はないであろう。つまり、返点は、その名のおり返読のあることを示すために施されるものであるから、文全体に返点を施した結果として、文中にも施されることになったと見るのである。返点は、文中だけでなく文末においても一貫して返読のあることを示すために用いられている。

文中における切点と返点との用例数の差は、文の句切りを示すことを必要とする箇所と文の返読を示すことを必要とする箇所の相違によるものではないだろうか。以下に述べるように、この『三蔵』は、「返読の有無」を示すことに重きを置くと見られる資料であり、その点において、返点が多く用いられることになっているのであろうと思う。

以上、切点の文末・文中（句読）に関わる点について見てきたが、以下には、返読アリ・返読ナシ（返読の有無）に関わる点について見てみたいと思う。

図表6に示したように、切点は、返読アリ・返読ナシともに用いられており、返読アリ・返読ナシを問わずに用いられるものであると考えられるが、詳しく見てみると、図表6の傾向として(5)(6)に示したように、この切点は、文末に用いられる時には必ず返点との併記の形を取り、文中においては返読ナシにしか用いられていないのである。切点は返読アリにも用いることが可能であるはずであるから、この偏りには

意味があると見るべきであろう。

この問題を考えるには、まず、返読アリに句切りの点が施される場合には、必ず返点が用いられているという点に注目する必要があるように思う。図表6に示したように、文中・返読アリにおいては、その全ての場合において返点が用いられており、文末・返読アリにおいても切点と併記されることはあるものの、全ての場合に返点が用いられている。つまり、返読アリに句切りの点が施される時に、返点が用いられていない例はないのである。

この点において、この『三蔵』においては、「返読のあること」を示すことに非常に注意が払われていると言えるのではないだろうか。

このことを踏まえて、先の(5)(6)の傾向を見てみると、まず、(6)のように、切点が文中・返読アリに全く用いられないのは、先に検討したように、切点が文中・返読ナシにおいてもほとんど用いられないことから、先と同様に、切点が「句切り」を示すという点において文中に用いられにくい句切りの点であったということもあるかもしれないが、先に見た文中・返読ナシにおいては多少でも切点の例が見られたのに対し(一七例)、この文中・返読アリにおいては全く見られないのであるから、やはり、全く同じと見るべきではないかと思う。他にも何か原因があると思われるのではないかと思う。

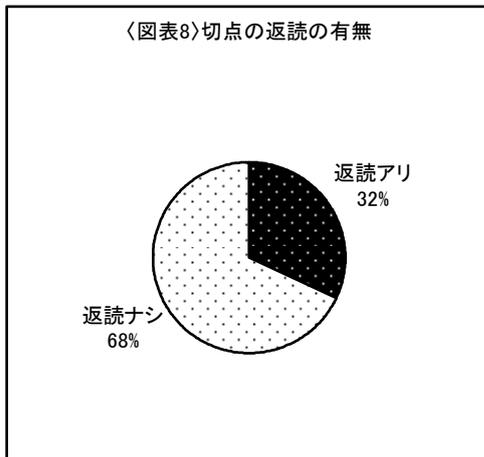
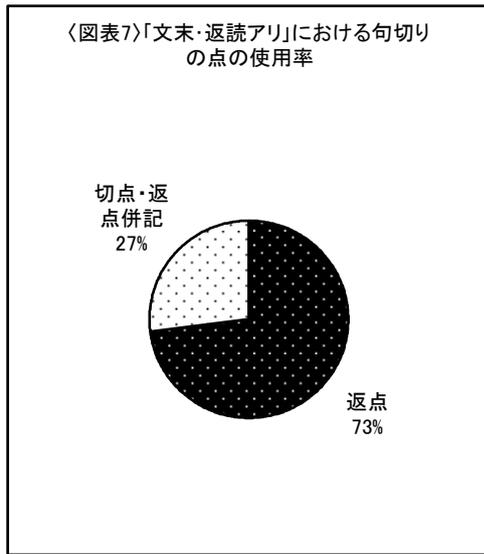
思うに、そのように切点が文中・返読アリに全く用いられていないのは、そのことに加え、右に述べたように、この『三蔵』が、返読アリの箇所には必ず返点を施す形を取っているためであり、つまり、その文中・返読アリに「返読のあること」を示す返点が優先的に施されたために、わざわざ「句切り」を示す切点を重ねて施す必要がなかったということなのではないだろうか。

(5)のように、文末・返読アリにおいて切点が必ず返点との併記の形になっていることについては、切点を施すような箇所であっても、返読のあることを示すということ(返点)が着実にこなされた結果ではないかと思う。

文末・返読アリに、返点が単独で施される場合と、切点・返点が併記される場合があるのは、返点が文末・文中ともに用いられるものであるので、返点のみを施したのでは、文と文とを句切るような句切り(文末の句切り)と、文の中の句切り(文中の句切り)とが区別できないからではないかと思う。思うに、切点と返点とが併記されるのは、文と文との句切りを一層明確に示す必要があるなどによるものではないだろうか。

ただし、そのように、返点単独の場合と、切点・返点併記の場合とで、文中の句切りと文末の句切りとを書き分けることが可能でありながら、この『三蔵』においては、多くの場合、それらを書き分けようとはしていない。左の図表7に示すように、文末・返読アリであっても、多くの場合、切点は打たれておらず、返点単独の形が取られている。

この『三蔵』においては、文末であることを示すよりも、返読のあることを示すことに心を砕いているようである。



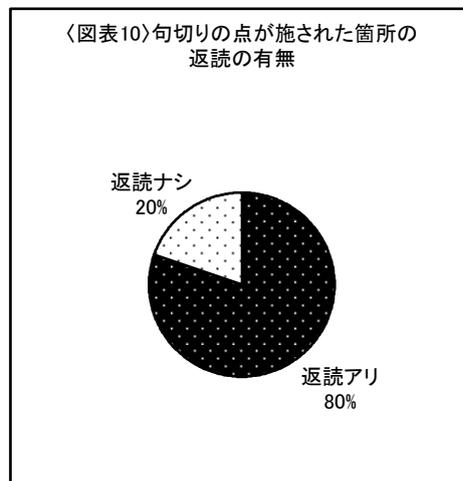
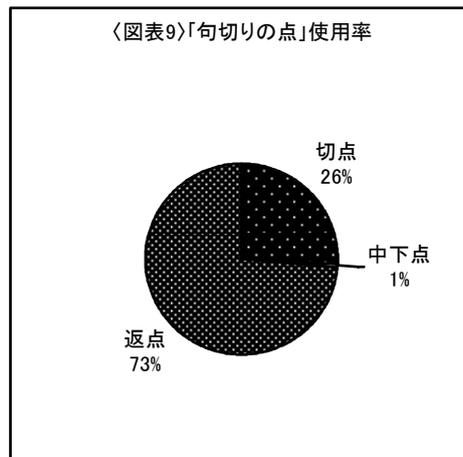
※〈図表7〉「返点」一〇三例、「句点・返点併記」三八例。

〈図表8〉「返読アリ」四七、「返読ナシ」例一〇〇例。

この『三蔵』のように、文中・返読アリ、文末・返読アリそれぞれにおいて、切点・返点ともに単独で用いることが可能であるはずにもかかわらず、前者には切点が用いられず、後者には切点が単独で用いられないなどの傾向が見られることは、やはり、この『三蔵』が、切点と返点とを選択可能である場合に、返点を用いる傾向の強い資料であると言えるのではないだろうか。切点の傾向をみても、やはり返点との選択が行なわれない返読ナシに偏る傾向が見られる（右の図表8参照）。

このように見てみると、この『三蔵』は、「返読の有無」を示すことに重きをおいて句切りの点を施している資料と見ることができるのではないだろうか（第三章 第三節 一 参照）。

そのように、この『三蔵』が「返読の有無」を示すことに重きを置いているであろうことは、句切りの点の用例数にも表れている。



※〈図表9〉「切点」一四七例、「中下点」三例、「返点」四二〇例。

〈図表10〉「返読アリ」四二〇例、「返読ナシ」一〇三例。

右の図表9のように、『三蔵』において用いられた句切りの点の割合をみても、最も多く用いられているのは、やはり返点である。また、そのように返点が多用されることによって、『三蔵』においては、図表10に示すように、句切りの点全体を見た時に、返読アリにばかり句切

りの点がほどこされ、返読ナシの場合には句切りの点がほとんど示されないという形になっている。

五、まとめ

以上に述べてきたように、この『三蔵』において、句切りの点として最も用いられているのは返点であり、その返点は、文末であろうと文中であろうと、制限されることなく自在に用いられている。

一方、切点は、返読アリの場合には返点が存することによってその使用が制限され、多くの場合、返読ナシに用いられる形になっている。このような句切りの点の傾向から考えて、この『三蔵』は、やはり、句切りの点によって「返読の有無」を示すことに強い関心のある資料と見てよいのではないかと思う。

この『三蔵』における句切りの点について、まず注目したいのは、その切点が、詳細に句切りを示すというようなものではなく、「句切り」を示すことが必要である場合に、任意的に用いられていると見られること、そして、句切りの点全体を見渡した時に、文中・返読ナシとなる箇所にはほとんど句切りの点が施されていない形になっていることである。

このように、文末のみに句切りの点を用い、文中にはほとんど句切りの点を用いないということについては、現在の感覚からすると多少不自然さを感じるかもしれないが、このことは、むしろ、古来、日本において句切りの点を用いられていなかったとすると、訓点資料においても、現在のように句切りの点を施すことがそれほど重要なものとされていなかったことを示している可能性が考えられよう。

この点については、この『三蔵』において「句切り」を示す切点と、「返読のあること」を示す返点とを比較した時、返点の方が多用される傾向にあることが示唆的である。句切りの点を使用する習慣のなかった日本人にとっては、漢文を訓読する際に、句切りの点によって単に「句切り」を示していくよりも、その句切りの点によって「返読の有無」を示すことの方が実用に即していたということなのかもしれない。小林芳規氏（一九七七）によると、古く句点と読点とが未分化な状態があったということであるから、その未分化の句切りの点を、現在のよう「句読」を示すのに用いる形式とともに、それを「返読の有無」に用いる形式が起る可能性もあったのではないだろうか。

句点が文末に偏って用いられる点については、現在いうところの「句読」という点から考えると確かに「文末」なのではあるが、その句点が、文中の名詞と名詞とを句切る「句切り」と、文末の文と文とを句切る「句切り」とに用いられていることについて、これを同様の加點意識によって施されていると見るならば、この切点の傾向を即座に「文末」ということばを用いて解釈することには不安を感じる。

この点については、当時の「句読」というものの捉え方が現在とは異なっている可能性があり、このような切点を扱う時に、「句読」という言葉とともに「文末」や「文中」などの言葉を用いることが適切であるのかどうかという問題も生じてくるのではないかと思う。しかし、現時点においては、小稿においても、「句読」や「文末」「文中」などの言葉を用いておこうと思う。このような用語の問題は、わずかな資料を見ただけで安易に変えるべきではなく、もっと多くの資料を見た上で結論を出すべきであろう。

このように、訓点資料における「句読」の捉え方などについて問題が生じてくるのは、小稿の見方が誤っているというのではなく、むしろ、小稿のような調査を行なったことよって、「句読」というものの捉え方などについて問題が浮上してきたということではないかと思う。筆者は、現時点においては多くの資料を見ていないため、このような問題提起にとどめるが、小稿のような調査を行なっていくことよって、「句読」の捉え方の問題などについても明らかにできる可能性もあるのではないかと思う。

ただし、この切点が、その「文末」に偏って用いられることは、やはり注目しておく必要があるように思う。なぜなら、この傾向によつて、当時、「句切り」を示すということと「文末」を示すということが重なる部分を持つていることが窺われるからである。

もし漢文に「句切り」を施した結果として、多く「文末」に句切りが施されることになるのであれば、つまりそれは、「句切り」を示す点が、多く句点として用いられていることに他ならない。

このように「句切り」を示す点が「文末」に用いられるということが、訓点資料全般に通用することがどうかは明らかではないが、もし「句切り」を示すということがらと「文末」を示すということが大きく関わるものであったとすると、この『三蔵』に見られる文末に偏る切点と、以下に見る西教寺本『秘蔵宝鑰』巻上（朱点）（本章 第四節 第一項）に見られる、読点とともに用いられる句点とがどのように関わるものであるのか考察してみる必要が生じてくるのではないだろうか。

先行研究においては、句切りの点を見る際には、多く「句読」という視点で行われているようであるが、以上のように見てみると、少なくともこの『三蔵』という資料においては、句切りの点が施される際には、「返読の有無」ということがらに大きな関心をもって施されている

ようであり、その点において、先行研究においては、句切りの点を見る際に、見落としていることがらがある可能性はないかと思う。

思うに、訓点資料の中に、この『三蔵』のような「返読の有無」を示すことに重きを置く資料が他にも存在しているとすると、やはり、句切りの点を見ていく際には、小稿で述べるように、「句読」という視点に限定せずに「返読の有無」などの他の視点も持ちながら検討していく必要があるのではないだろうか。

◎返点と切点の併記例についての気づき

返点と切点の調査を行なっている中で、併記例について、若干の偏りが見られたので述べておく。

左・上段の図表 11 は、文末において単独で用いられた切点と、同じく文末において単独で用いられた返点の用例数を、『三蔵』全一三六行について、一〇行ごとに区切って示したものである。

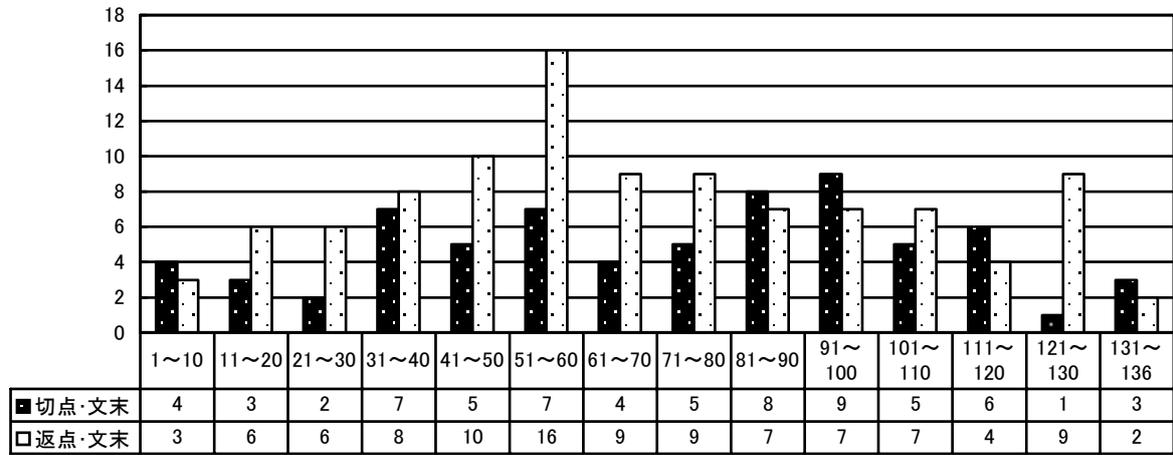
この図表 11 に示されるように、『三蔵』においては、単独で用いられた切点・返点については、ともに最初から最後まで、若干の上下はあるものの、ほぼ一貫して同じように用いられていると見てよいのではないかと思う。

これに対して、左・下段の図表 12 は、切点と返点とが併記された用例数を、右と同様に示したものである。ただし、この図表 12 の二種類の棒グラフは、文末であることが明らかな例と、明らかでない例とによって分けている。

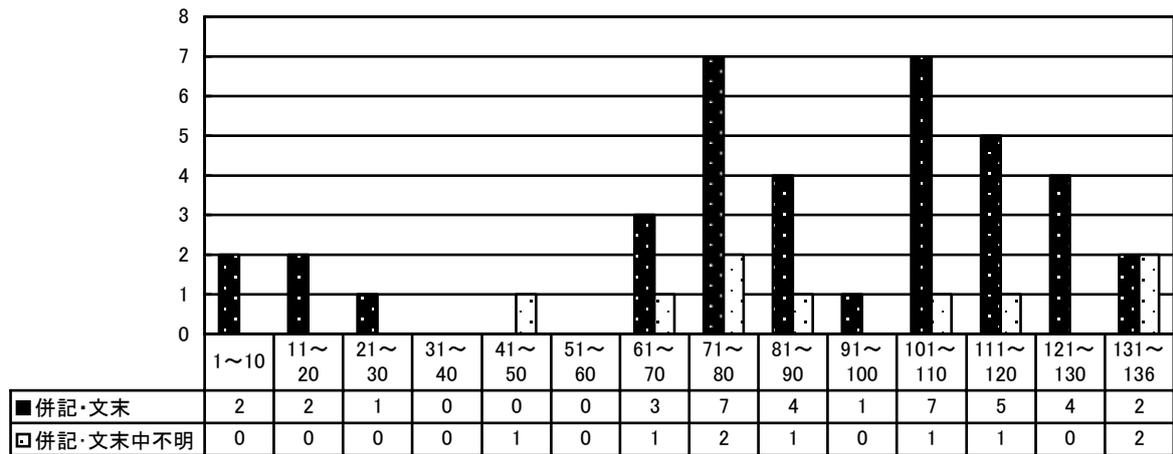
これら図表 11 と図表 12 とを合わせて見てみると、図表 11 の単独の例に図表 12 の併記例が上乘せされることになるから、つまり、全体の用例数としても、六一行以降増えていることになるのであるが、併記例は、六一行以降の後半部に偏って見られるようである。

この偏りに意味があるのか、或いは、これが何を示しているのかは明言できないが、若干の偏りが見られたのでここに示しておく。

〈図表11〉切点・返点の文末例の行数による偏り



〈図表12〉切点・返点併記の行数による偏り



第二節 東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点における句切りの点

—資料の一部で句切りの点の用いられ方に相違が見られる例—

一、はじめに

本節においては、東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点（以下、『不動』と略す）を資料として取り上げたい。

この『不動』は、小稿で述べるような調査を行ってみると、本文三〇六行（第二行目〜第三〇七行目）のうち、第二行目から第二九九行目までと、第三〇〇行目から第三〇七行目までとで、句切りの点の用いられ方に違いが見られるようである。

そこで、本節においては、この『不動』における句切りの点がどのように用いられているのかということと、一資料内において句切りの点の用法が異なる箇所が認められる場合があることを述べ、そのような句切りの点の違いを見出すためにも、小稿で述べるような調査が有効である可能性があることを述べてみたいと思う。

二、資料について

月本雅幸氏（一九八〇）によると、この『不動』は、一巻の卷子本（全三二五行）で、

万寿二年三月七日書寫已

という奥書によって、万寿二年（一〇二五年）に書写されたことが知られ、それに加えられた訓点は、その書写とほぼ同時期であるということがある。

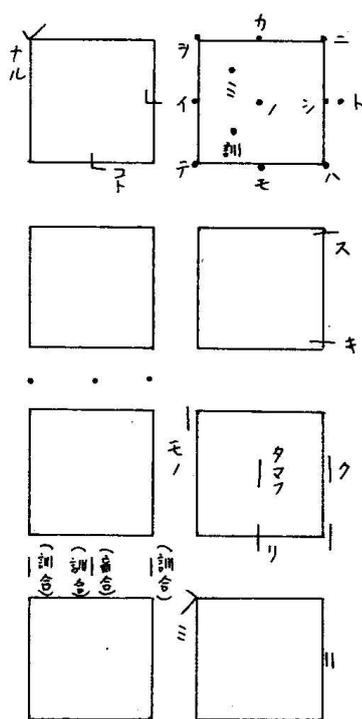
また、この『不動』には、

建永二年七月七日以他本一交了有頗相違事等以勝本可比較也

という別筆の奥書があり、建永二年（一二〇七年）に他本を用いて校合が行なわれたようである。

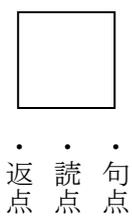
ヲコト点図は、第一群点に属しており、点図集所載の西墓点・仁都波迦点と星点のみ一致することである。月本氏は、ヲコト点を、次のように帰納されている。

〔図 29〕ヲコト点図



この月本氏のヲコト点図(図 29)では、句切りの点の名称は記されていないが、同論文において月本氏の作成された訓読文では、右下点を「」、中下点を「」とされているようなので、恐らく、

〔図 30〕



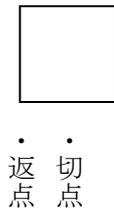
と見ておられるのであろうと思う¹⁶⁾。

小稿の調査によると、この『不動』においては、本文三〇六行（第二行目）第三〇七行目（第三〇七行目）のうち、第二行目から第二九九行目までと、第三〇〇行目から第三〇七行目までとで句切りの点の用いられ方に違いがあるようであり、やや疑問点はあるものの、句切りの点の解釈としては、

〔図 31〕 第二行目から第二九九行目まで



〔図 32〕 第三〇〇行目から第三〇七行目まで



とするべきではないかと思う。右の図 31 の中央下の点を「中下点」のように加地点位置による名称のまままでとどめたのは、その中下点の加地点傾向が判断しづらく、読点や不返点というように、名称をその機能によって断定することがためらわれたからである。

以下、句切りの点は、この図 31、図 32 の名称による。

なお、本節の調査資料としては、月本氏（一九八〇）「東寺蔵不動儀軌万寿二年点」所載の模写された原文を用い、訓読文も同論文によった。

¹⁶⁾ 築島裕氏（一九八六）によると、点図集所載の西墓点では、右下点が「切」、左下が「返」となっており、中下点の記載はない。また、仁都波迦点については、返点も含め、句切りの点の記載がない。

三、句切りの点の使用状況

この『不動』は、巻首の内題と、巻尾の補入部や尾題、識語などを除くと、本文の行数は全部で三〇六行（第二行目〜第三〇七行目）あるのであるが、そのうち、第二行目から第二九九行目までと、第三〇〇行目から第三〇七行目までとで句切りの点の用いられ方が異なっているようである。

そこで、ここでは、その第二行目から第二九九行目まで（以下、『不動』前部と略す）と、第三〇〇行目から第三〇七行目まで（以下、『不動』後部と略す）とを分けて、その句切りの点の傾向を見てみたいと思う。

▽第二行目から第二九九行目まで（『不動』前部）

まず、『不動』前部の句切りの点の用例を挙げ、その加點傾向を調査した結果を、表4、図表13として示した。

〈用例〉

◎本文部⁵⁰

【切点】

〔25〕 我不能^{アタハル}知^レ唯^{ノミ}如^{サト}来^{タマヘリ}了^{ヘリ}。 (一一二) (文末・返読ナシ)

〈訓読文〉 我^{アタ}レ知^ルルこと能^ハ不^ク唯^シ如^シ来^{ノミ}了^{ツタ}マヘリ。

〔26〕 尔^ニ時^ニ金^ニ剛^ニ手^ニ菩^ニ薩^ニ入^リ三^ニ摩^ニ地^ニ。 (一一三) (文中・返読ナシ)

⁵⁰ 小稿では、本文全体のうち、陀羅尼などを除いた訓読される部分を、便宜上、「本文部」と言うことにした（第三章 第三節 三 参照）。

〔訓読文〕 爾（ノ）時に金剛手菩薩。三摩地に入（リ）たまふ▲

〔27〕 由結是印。故結使皆斷壞真言曰（五三）（同）

〔訓読文〕 是ノ印を結（フ）に由（ル）か▲故に。結使皆斷壞真言（ニ）曰（ハク）

〔28〕 飲食供養印。二手靈心合定慧空入内（八四）（同）

〔訓読文〕 飲食供養ノ印ハ。二手靈心合にして定慧ノ空内（ニ）入レヨ

〔29〕 次一真言用前索印（二二六）（同）

〔訓読文〕 次ノ一ツノ真言に。前ノ索印を用（セ）ヨ▲

〔30〕 復次聖无動布字秘法。從頂乃至足一安布之（二四四）（同）

〔訓読文〕 復（タ）次（ニ）聖无動布字秘法は。頂（キ）從（リ）乃至足（マ）テに一一に之を安布セヨ▲

〔31〕 是聖无動尊摩訶威怒王布此秘密法十九種真言。

并布諸支分（二八八）（同）

〔訓読文〕 是ノ聖无動尊摩訶威怒王此レ「字イ」を布ケハ▲秘密ノ法（ト）、十九種ノ真言を。并（テ）諸ノ支分ニ布ク▲

〔32〕 已成初行滿心所願求者皆悉得成就（二二九）（同）

〔訓読文〕 已に初行を成スこと▲心（ミ）に満チナハ▲願（下）・求セム（ロ）所（ロ）ノ▲者（ロ）皆悉く成就（エ）（スル）こと得ム▲

〔33〕 欲（下）驗（下）法（下）成（下）者（下）能（下）摧（下）折（下）樹（下）枝（下）能（下）墮（下）落（下）飛（下）鳥（下）（二三〇）（同）

〔訓読文〕 驗（下）「驗（下）メ」法成セムト欲ハ▲者（下）能く樹ノ枝を摧折（下）（セム）「摧（下）キ折（下）リ」▲能く飛鳥ヲ墮落セム「墮（下）シ落（下）サム」▲

〔34〕 犢（下）母（下）同（下）色（下）者（下）蘓（下）數（下）滿（下）一（下）兩（下）（二三五）（同）

〔訓読文〕 犢（下）母（下）同（下）色（下）者（下）蘓（下）ノ數（下）一（下）兩（下）に滿（下）□▲

〔35〕 火光相出現（下）足踐於虚空（下）得成就大仙（下）（二三七）（同）

〔訓読文〕 火光（下）「光（下）」相（下）（ヒ）出現スルハ▲足（下）に「於（下）」虚空を踐（下）ムテ▲大仙（下）（ヲ）成就（下）（スル）こと得ム▲

【中下点】

〔36〕 一千遍（下）為限（下）（二三九）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕 一千遍を限リト為ヨ、

〔37〕 善男子諦（下）聽（下）（一六）（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 善男子諦（下）に（見）消（下）聽（下）ケ、

〔38〕我今・説是心及立印。〔二四〕（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕我今、是ノ心及立印を説カム▲

【返点】

〔39〕其光普照一切佛土。〔四〕（文末・返読アリ）

〔訓読文〕其ノ光リ普く一切佛土を照す▲

〔40〕時金剛手菩薩從三昧起告文殊師利言。〔二〇〕（文中・返読アリ）

〔訓読文〕時に金剛手菩薩三昧從り起テ文殊師利告ケテ言ハク

◎併記例

〔41〕以印置於口。〔九八〕（切点・返点併記・文末・返読アリ）

〔訓読文〕印を以て〔於〕口に置ケ▲

◎陀羅尼

【切点】

〔42〕憾引。〔一五五〕

【中下点】

〔43〕 娜莫三滿多母駄引南・麼訶味底マイチ哩夜リヤ・毘庾ヒエ・娜ナ・識キヤ帝テイ娑縛サハク訶カ (七八)

〔表4〕 調査結果

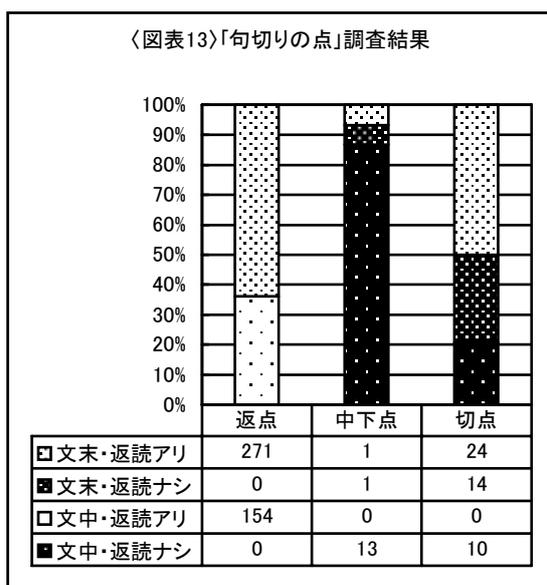
◎本文

【切点】 (全五一例)

- A文末 ・返読アリ ○例
- A文末 ・返読ナシ 一四例
- B文中 ・返読アリ ○例
- B文中 ・返読ナシ 一〇例
- C文末文中不明・返読ナシ 三例
- A文末 ・返読アリ 二四例 (返点と重複)

【中下点】 (全一七例)

- A文末 ・返読アリ 一例
- A文末 ・返読ナシ 一例
- B文中 ・返読アリ ○例
- B文中 ・返読ナシ 一三例
- C文末文中不明・返読アリ 一例
- C文末文中不明・返読ナシ 一例



※ただし、「切点」の「文末・返読アリ」二四例は、全て「返点」との併記。また、「返点」の「文末・返読アリ」二七一例のうち、二四例は「切点」との併記例。

◎陀羅尼

【切点】二例

【中下点】二二八例

【返点】(全四五八例)

- | | | |
|-----------|-------|-------------|
| A 文末 | ・返読アリ | 二四七例 |
| A 文末 | ・返読ナシ | 〇例 |
| B 文中 | ・返読アリ | 一五四例 |
| B 文中 | ・返読ナシ | 〇例 |
| C 文末・文中不明 | ・返読アリ | 三三例 |
| A 文末 | ・返読アリ | 二四例 (切点と重複) |

右の図表13は、右の表4のうち、陀羅尼の用例と、「C(C)文末文中不明」などのように、訓み方が明らかでない用例とを除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフによって示したものである。

この図表13によると、この『不動』前部においては、

〈表5〉

文末・返読アリ	∴	返点単独。	或いは、切点・返点併記。	或いは、中下点単独。
文末・返読ナシ	∴	切点単独。	或いは、中下点単独。	
文中・返読アリ	∴	返点単独。		
文中・返読ナシ	∴	中下点単独。	或いは、切点単独。	

という形で、句切りの点が用いられているようである。

まず、この『不動』前部において、右下点・中下点・左下点がそれぞれどのような句切りを示しているのかを見てみたいと思う。ただし、左下点については、右に挙げた図表13によっても、文末・文中を問わず返読アリとなる箇所¹⁾に用いられており、これが返点であることに問題はなからうから、以下には、右下点と中下点について見ていくことにする。

【右下点(切点)】

この『不動』前部における右下点は、右の図表13に示したように、「文末・返読アリ」二四例、「文末・返読ナシ」一四例、「文中・返読ナシ」一〇例という形で用いられている。

この右下点は、文中・返読アリに用いられないなど、「返読の有無」の表記(返点)に影響されたと考えられる傾向は見られるものの、返読アリ・返読ナシともに用いられているようであるから、これは、「返読の有無」に関わるものではないと見てよいのではないかと思う。

そこで問題となるのは、この右下点が「句読」に関わるものであるのか、或いは切点なのかということである。

この問題については、この右下点を、文末・文中という視点だけからその用例数を比較してみると、確かに文末の方が多く用いられており、一見、この右下点が句点として用いられているように見える。しかし、この右下点を、返読ナシのみの用例で比較してみると、文末（一四例）と文中（一〇例）とで大きな差は見られず、つまり、この右下点が文末に多く見られるのは、これが、文中・返読アリに用いられていないことが大きいのではないかと思う。

この文中・返読アリに右下点が用いられないという傾向は、先に見た『三蔵』（本章第一節）にも見られる傾向であり、その文中・返読アリに返点しか用いられていない点においても同様である。

先の『三蔵』において文中・返読アリに返点のみが用いられ、他の切点などの句切りの点が用いられないことについては、「返読の有無」の表示に重きが置かれたためと考えたが、もしこの『不動』前部においても同様であるのであれば、当該の右下点が文中・返読アリに用いられないのも、必ずしも右下点が句点であるからではなく、返点が優先的に施された結果であると考えることができよう。

そのように見ると、この右下点が文末に用いられるか文中に用いられるかという問題については、返読ナシでの傾向によって、文末にも文中にもほぼ同じように用いられていると見てよいと思う。

ただ、このように見ても、やはりこの右下点が文中に用いられた例が全一〇例ということで、用例数としてやや少ないようであるので、その用例が、誤点や汚れなどではなく、確かな用例であるのかどうかということについては確認しておく必要があるろう。

この右下点が文中に用いられた例は、前掲の用例26、35として全ての用例を挙げている。

これらの用例は、月本氏の模写された原本と訓読文とによっているが、筆者が見るに、月本氏が訓読文で「。」とされている中にも「。」とすべきではないものが含まれている可能性はありそうである。

例えば、用例29は一二六行目であるが、そのすぐ後の一三二行目には、

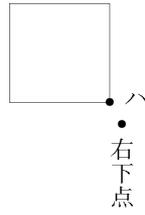
||

〔44〕復次心真言_ヲ用_フ金剛密印_ヲ（一三二）

〈訓読文〉復（夕）次（三）心真言には金剛密印を用（半）ヨ▲

とあり、これらと比較してみると、ともに「次々真言にハ印を用ゐよ」という形で類似した表現と見られるが、一方の用例29では「真言に」とされ、一方の用例44では「真言には」とされている。この『不動』前部において、ハのヲコト点と当該の右下点は、次の図33のような位置関係にあり（前掲の図29 参照）、訓点資料において訓点の加点位置が必ずしも明瞭でないこと（第三章 第二節 参照）を考慮すると、この『不動』前部において文中に用いられている右下点の中には、或いは、漢字から若干離れた位置に打たれたハのヲコト点が含まれているかもしれない。

〈図33〉



このような目で見てみると、用例28、33、35のように右下点とともにハの仮名点が併記された例などは、むしろ右下点をハのヲコト点と見て、ハのヲコト点とハの仮名点とが併記されていると見るべきかもしれない。

また、可能性としては、「ハ」という訓みから考えると、「者」字の下に右下点が打たれた用例32、33、34も、或いはハのヲコト点である可能性を疑ってみる必要があるかもしれない。

この『不動』前部においては、本章 第一節に見た『三蔵』と同じようにこの右下点が動詞連用形の中止の下に打たれた例などは見られず、その点においては、『三蔵』との類似が認められる。しかし、一方で、この『不動』前部においては、先の『三蔵』に見られたような並列に用いられた例は見られず――つまり、これは、その右下点が、単独の名詞の下に打たれているということであり――、その点において、この傾向は、右下点を「名詞＋ハ」というような形で訓むことのできる用例が多いことを意味しているとも言える。

このように見てみると、文中に用いられた右下点の用例は、訂正によっていくつ減ることになる可能性もあるかもしれないが、用例26、

27のような例まで、用例26「金剛手菩薩は」、用例27「故には」とするのでは恣意に過ぎるよう思うので、やはり、月本氏が認められたように文中の右下点もあるものと認めておこうと思う。この問題については、原本による確認作業が必要となるであろうが、これについては今後の課題とさせてもらいたい。

以上のような考察により、小稿においては、この『不動』前部において用いられている右下点を切点と見ることにしたいと思う。

【中下点】

この『不動』前部における中下点は、文中・返読ナシに偏って用いられてはいるものの、それに対するところの文末の例、返読アリの例もそれぞれ一例ずつ見られる。

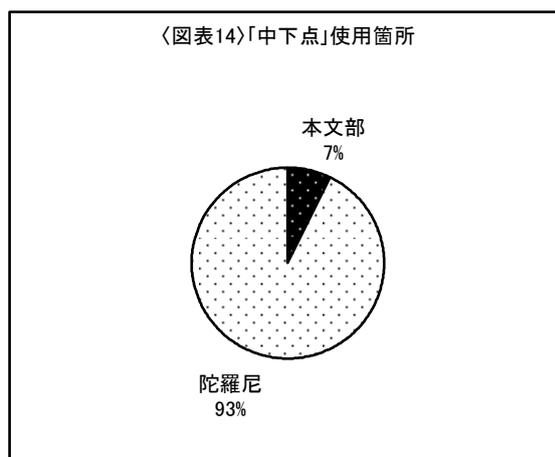
この『不動』前部の中下点については、その全体の用例数が少ないことによって、それら一例の用例を、有意味のものとして捉えてよいものであるのかどうか、その軽重を判断しにくく、その加点傾向として「文中・返読ナシ」に多く用いられていたとしても文中や返読ナシに用いられているとは断じがたい。また、反対に、文末・文中を問わず用いられている、或いは、返読アリ・返読ナシを問わず用いられているも断じがたい。

特に、この『不動』においては、『不動』後部に、文末・文中を問わず、更に返読アリ・返読ナシを問わない中下点が用いられており（後述）、その点において、この『不動』前部に一例ずつ見られるそれらの例が、その『不動』後部に見られる中下点の紛れ込みである可能性も否定できず、判断をより難しいものとしている。

この中下点の判断は、同様の加点傾向の見られる資料をもっと集めた上で行なうべきであろう。

ただし、この中下点は、この『不動』前部の本文部においては、わずかに一七例しか見られないが、陀羅尼においては、二一八例も見られる（左の図表14参照）。

※「本文部」一七例、「陀羅尼」二二八例



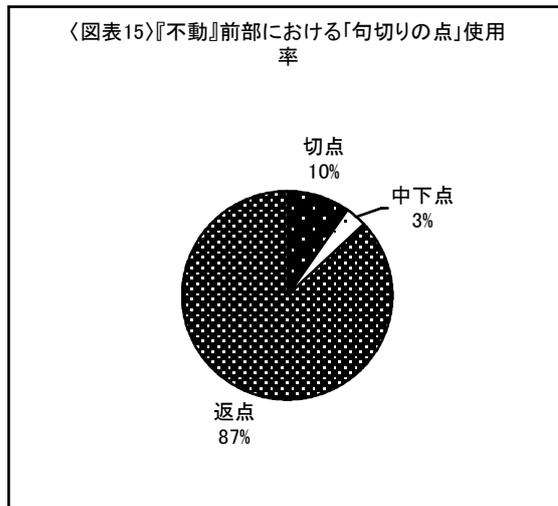
このように、ほとんどの中下点が陀羅尼に用いられることは、高山寺蔵『十二天法』平安後期点にも例が見られ（本章第五節第二項）、或いは、意味のある偏りなのかもしれない。この中下点を考える上で、留意しておくべきであろう。

以上のように、この『不動』前部の句切りの点は、右下点を切点、左下点を返点（中下点については保留）と見るべきであると思うが、その加点傾向は、本章第一節で見た『三蔵』とかなり似通った部分が見られるようである。以下には、この『不動』前部と『三蔵』との比較を行なっていく（本章第一節 図表6、本節 図表13とを比較のこと）。

先に見た『三蔵』において、その加点傾向として(1)～(7)を示したが、これを本節で取り上げたこの『不動』前部に当てはめて見てみると、次のように、多くの点において類似点が見られる。

(1) 中下点がわずかに三例しか見られないこと。

先の『三蔵』において、中下点は三例しか見られず、句切りの点の使用率を見ても、切点二六%、中下点一%、返点七三%で、中下点はほとんど用いられていなかったが（本章第一節 図表9 参照）、この『不動』前部においても、中下点は本文部においては決して多く用いられているわけではなく（本文部一七例、陀羅尼二一八例）、句切りの点全体の使用率を見ても、この『不動』前部と『三蔵』とは類似していると見てよいのではないかと思う（左図表15 参照）。



※「切点」五一例、「中下点」一七例、「返点」四五八例。

(2) 中下点が「文中・返読ナシ」に偏って用いられていること。

中下点については、『三蔵』では三例、『不動』前部では一七例しか見られず、断言はできないが、ともに文中・返読ナシに偏って見られ

ることは注目すべきかもしれない。

(3) 切点が文末に多く用いられていること。

これについては、『三蔵』では切点が文末に用いられた用例がかなり多いのに対し、『不動』前部では、返読ナシと比較して見ると、文末一四例、文中一〇例で、文末と文中とであまり大きな差は見られず、この点において、それらの傾向には相違が見られると見ることもできよう。しかし、『三蔵』の切点も文末にしか用いられないものではないから、必ずしも相対する傾向ではない。

このように、切点が文末に多く用いられるものなのか、或いは、文末・文中ともに同じように用いられるものなのかというような問題は、思うに、句切りの点の時代的な変遷や資料間の用法の違い、或いは、句点との関わりなどを調査していくことによって、何らかの傾向が見出せる可能性もあるのではないかと思う。今後の課題としたい。

(4) 「文中・返読アリ」には全て返点が用いられていること。

これは、『三蔵』『不動』前部とも同様である。

(5) 「文末・返読アリ」には、返点単独の場合と、返点・切点併記の場合があるが、必ず返点を用いられ、句点が単独で用いられることはないこと。

これも、『三蔵』『不動』前部とも同様である。

(6) 切点が文中に用いられる際には返読ナシにしか用いられていないこと。

これも、『三蔵』『不動』前部とも同様であるが、ただ、右の(4)と重複する所がある。

(7) 切点・中下点の用例数よりも返点の用例数の方が多いこと。

これも、『三蔵』『不動』前部とも同様である(本章第一節 図表9、右の図表15 参照)。ただし、『三蔵』では返点が文中に多く用いられるのに対し、『不動』前部では文末に多く用いられている点については相違が見られる。

以上のように、『不動』前部においては、先に見た『三蔵』と、やや異なった点はあるにしても、類似した傾向が見られるようである。

この『不動』前部については、右の(4)と(7)の傾向から考えても、やはり、『三蔵』と同様に、「返読の有無」に重きを置く資料であると見てよいのではないかと思う。

小稿では、訓点資料で句切りの点がいられる際に、「句読」という視点以外に、「返読の有無」というような視点などから書き分けられることもあったのではないかと述べているのであるが、先の『三蔵』に限らず、この『不動』前部においても「返読の有無」に重きを置く形式が見られることは、この形式が、一個人の書き癖や一資料内の特殊な用法に帰するものではなく、他資料にも及んでいる可能性を示しているのではないかと思う。

この点において、句切りの点を「句読」という視点のみから検討すべきではないのではないかとする小稿の主張は、誤ってはいないのではないだろうか。

▽第三〇〇行目から第三〇七行目まで（『不動』後部）

以下には、『不動』後部を見ていこうと思う。この『不動』後部では、前掲の図32に示したように、右に見た『不動』前部とは異なり、中下点が切点、左下点が返点という形で句切りの点がいられ、右下点は見られないようである。

まず、『不動』後部の用例を挙げ、その加点傾向の調査結果を、表6、図表16として挙げる。ただし、用例は、先の『不動』前部に見られなかった形の例のみを挙げた。

〈用例〉

◎本文部

【切点】

〔45〕 從^{ヨリ}黄昏^{コト}・起^{シテ}首^{シテ}・護^{スル}摩^{イタレ}至^{イタ}夜半^{イタラム}・〔下至〕（三〇〇）

〈訓読文〉 黄昏^{コンヨ}從^{ヨリ}・起^{シテ}首^{シテ}・護^{スル}摩^{イタレ}至^{イタ}夜半^{イタラム}・〔下至〕

◎併記

〔46〕如聖者所須^{キヨ}・皆使成^{シメム}・辨^セ之^ニ 〓 (三〇六) (切点・返点併記、文末・返読アリ)

〔訓読文〕 聖者所須ノ如ク「キヨ」▲ 皆之を成シ辨セ使メム▲

〔47〕若一夜護摩^{セムニ}・使者不出現^ハ・彼即決定死^{シナム}・(三〇六) (切点・返点併記、文中・返読アリ)

〔訓読文〕 若し一夜護摩セムニ「セハ」・使者出現セ不^サは▲ 彼レ即(チ)訓決定死^シナム・

〈表6〉

◎本文部

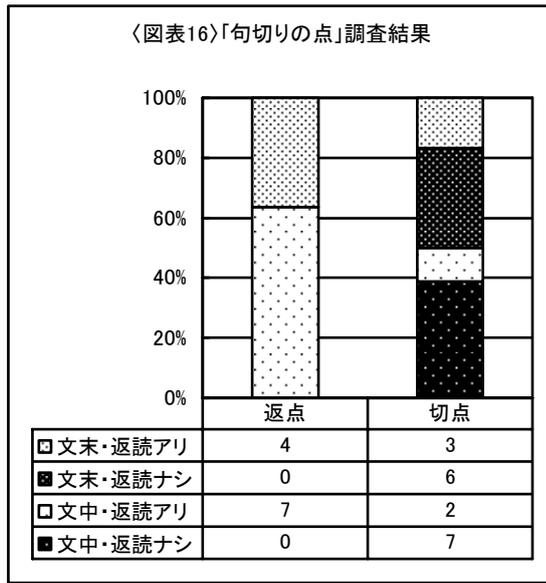
【切点】

- A 文末 ・ 返読アリ ○ 例
- A 文末 ・ 返読ナシ 六 例
- B 文中 ・ 返読アリ ○ 例
- B 文中 ・ 返読ナシ 七 例
- C 文末文中不明 ・ 返読アリ 一 例
- A 文末 ・ 返読アリ (返点併記) 三 例 (返点と重複)
- B 文中 ・ 返読アリ (返点併記) 二 例 (返点と重複)

【返点】

- A 文末 ・ 返読アリ 一 例

※ただし、「文末・返読アリ」の「切点」三例、「文中・返読アリ」の「切点」二例は、ともに全て「返点」との併記。また、「文末・返読アリ」の「返点」四例、「文中・返読アリ」の「返点」七例は、それぞれ「切点」との併記例三例、「切点」との併記例二例を含む。



◎陀羅尼
【切点】○例

- | | | |
|------|--------------|------------|
| A 文末 | ・返読ナシ | ○例 |
| B 文中 | ・返読アリ | 五例 |
| B 文中 | ・返読ナシ | ○例 |
| A 文末 | ・返読アリ (切点併記) | 三例 (切点と重複) |
| B 文中 | ・返読アリ (切点併記) | 二例 (切点と重複) |

右の図表 16 によると、この『不動』後部においては、左の表 7 のように句切りの点が用いられているようである。

〈表 7〉

文末・返読アリ	∴	返点単独。	或いは、	切点・返点併記。
文末・返読ナシ	∴	切点単独。		
文中・返読アリ	∴	返点単独。	或いは、	切点・返点併記。
文中・返読ナシ	∴	切点単独。		

この『不動』後部においては、用例数が少ないものの、左下点は、文末・文中を問わず返読アリに用いられていることから返点と見てよいようであり、また、中下点についても文末・文中、返読アリ・返読ナシを問わず用いられているから切点と見てよいのではないかと思う。

これら切点・返点の加減傾向をしてみるに、返点については、先に見た『三蔵』（本章 第一節）や『不動』前部と同様の傾向と見てよいように思うが、切点については、いくつか相違点が見られる。

大きな相違点は、次の二点である。

1. 中下点が切点であること。
2. 文中・返読アリに切点が用いられていること。

右の 1. については、可能性としては、この『不動』後部と先の『不動』前部における句切りの点の加減位置の対応から、この『不動』後部の中下点（切点）を、先の『不動』前部の中下点と対応するものとして、切点とはせずに中下点と見るべき可能性もあるかもしれない。

しかし、この『不動』後部と、先の『不動』前部とを比較してみると、左に示したように、(イ)と(ロ)という点においてこの『不動』後部の

切点(中下点)との類似が見られるのは、先の『不動』前部では、中下点ではなく切点(右下点)である²¹⁾。

◎『不動』前部

- ・切点(右下点) ∴ (イ) 返読アリの場合に全て返点との併記の形を取る。
- ∴ (ロ) 文末・文中、返読アリ・返読ナシともに用いられる。ただし、文中・返読アリには用いられない。
- ・中下点 ∴ (イ) 返点と併記されない。
- ∴ (ロ) 文中・返読ナシに偏って用いられる。

◎『不動』後部

- ・切点(中下点) ∴ (イ) 返読アリの場合に全て返点との併記の形を取る。
- ∴ (ロ) 文末・文中、返読アリ・返読ナシともに用いられる。

この点から考えると、やはり、この『不動』後部の中下点は、切点と見てよいのではないかと思う。

このように、『不動』前部の左下の切点と、『不動』後部の中下の切点とが対応していると見られることは、この『不動』前部と後部において、異なった句切りの点が用いられているということを示しているのではないかと思う。

右の2.については、先の『三蔵』や『不動』前部において、切点が、

◎『三蔵』・『不動』前部

- 文末・返読アリ ∴ 返点／返点・切点併記
- 文末・返読ナシ ∴ 切点

²¹⁾ただし、(イ)については、『不動』前部で、返読アリの例が文末にしか見られないのに対し、『不動』後部では、文末・文中とも見られる点、異なっている。↓相違点2.

文中・返読アリ …… 返点
文中・返読ナシ …… 切点

のように、文末・文中、返読アリ・返読ナシを問わずに用いられながら、文中・返読アリの箇所だけは全て返点が用いられる形になっていたのに対して、この『不動』後部においては、切点が、

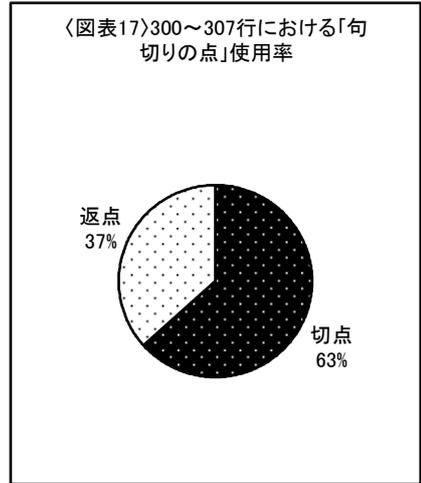
◎『不動』後部

文末・返読アリ …… 返点／返点・切点併記
文末・返読ナシ …… 切点
文中・返読アリ …… 返点／返点・切点併記
文中・返読ナシ …… 切点

という形で、文末・文中、返読アリ・返読ナシの全ての箇所に用いられているということである。

これは、先の『三蔵』や『不動』前部において、文中・返読アリに返点が用いられていたことに比べると、この『不動』後部における切点が、比較的返点の影響を受けずに用いられていることを意味しているのではないかと思う。これに関連してか、この『不動』後部において、**用例 45** 「起首シテ」^{（ハシ）}「起メ首メテ」^{（ハシ）}のように、切点が、文中で「動詞連用形」や「動詞＋助詞テ」の下に打たれた例が見られることは、先の『三蔵』や『不動』前部には見られなかったことであり、これは、切点の用いられ方の幅が広がっていることを意味しているのかもしれない。ただ、全体の用例数が少ないので確実なことは言えない。

このように切点が用いられた結果であろうと思うが、この『不動』後部で用いられている句切りの点の用例数を比較してみると、やはり、この切点が、返点よりも多く用いられている（左の図表 17 参照）。



※「切点」一九例、「返点」一一例。

以上のように、『不動』前部と後部においては、用いられる句切りの点の種類（前者が三種類、後者が二種類）や、両者に見られる切点の加点位置（前者が右下、後者が中下）、そして、その切点の用いられ方などに違いが見られるようである。

以下には、その『不動』前部と後部における句切りの点の加点状況の相違について見ていこうと思う。

四、東寺蔵『不動儀軌』万寿二年点の前部（二〇二九九行目）と後部（三〇〇〇～三〇七行目）における句切りの点の加点状況の相違について

ここでは、『不動』前部（以下、「前部」と略す）と『不動』後部（以下、「後部」と略す）における句切りの点の加点状況の相違について見ていきたいと思います。まず、なぜ小稿において、この『不動』を二九九行目と三〇〇行目との間で分けたのかということ述べたいと思う。

この『不動』における中下点が、「前部」では用例数が少なくどのような句切りを示す句切りの点であるのか明らかではなかったのに対し、

「後部」においては、切点として用いられていると考えられることは、右に述べた通りである。

この『不動』における中下点に注目し、資料全体でどのように用いられているのかを調査したものが、次ページ上段の図表18である。

この図表18は、「後部」の三〇〇～三〇七行の行数、八行に合わせ、資料全体を八行ごとに区切って、そのそれぞれの八行の中で中下点などの程度用いられているのか、その用例数を示したものである。ただし、その時、中下点が単独で用いられたものと、中下点と返点とが併記されたものとを分けて示してある。

なお、この図表18においては、二六六～二九九行目までは中下点の用例が全く見られず、「後部」三〇〇～三〇七行目に当たる部分から、中下点が見られているので、この三〇〇行目以降の部分については、三〇〇～三〇七行目という形でまとめて示すことにした。また、二六六～二九九行目については、用例が見られてもそれぞれ一例ずつであったので、紙面の関係から、用例が見られない箇所については八行に分けずまとめて示した。

この図表18に示すように、この『不動』において、中下点は、最初の二～二五行目と最後の三〇〇～三〇七行目に偏って用いられており、特に、後者の三〇〇～三〇七行目においては、それ以前の二～二九九行目まで一例も見られなかった中下点と返点の併記の例が見られる。

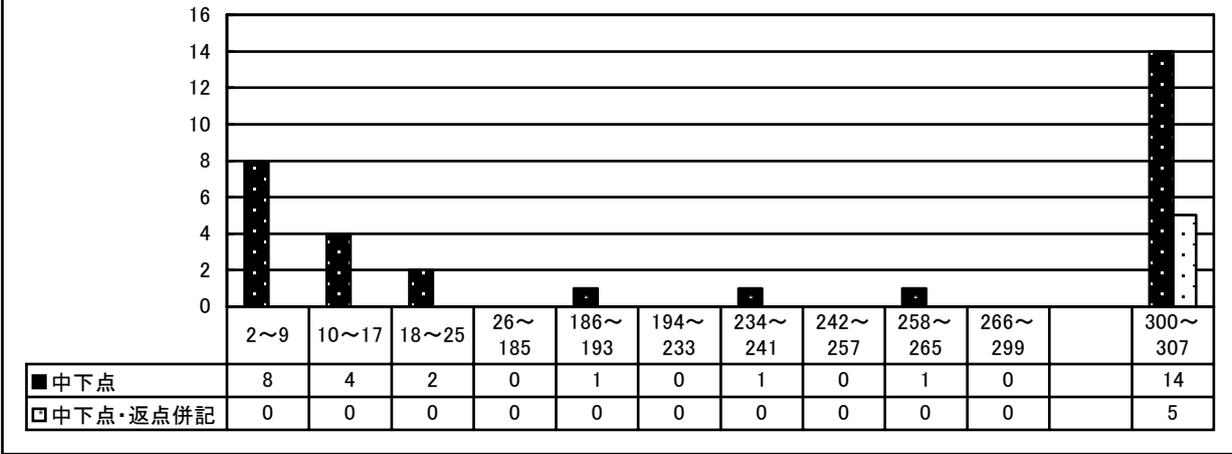
この点において、「後部」三〇〇～三〇七行目における中下点と異質なものであることが窺えるのではないだろうか。

この「後部」と「前部」との境界が存するであろう三〇〇行目前後における句切りの点の加点状況を示すと、次ページ下段の図34のようになる。

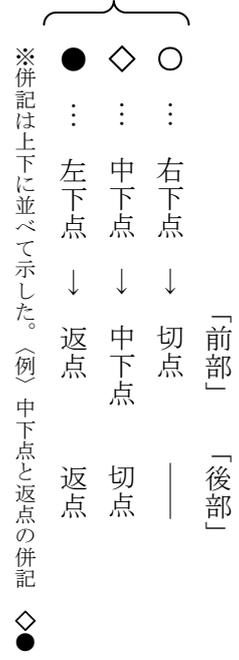
この図34は、『不動』の本文（二九二～三〇七行目）に、「右下点○」「中下点◇」「左下点●」という形で、句切りの点の加点状況を示したものである。

ただし、「後部」については、三〇〇～三〇七行目の全てを挙げたが、「前部」については、その「後部」(三〇〇～三〇七行目)の八行に合わせ、「後部」直前の二九二～二九九行目の八行のみを挙げた。

〈図表18〉中下点の行数による偏り



〔図34〕「前部」二九二〜二九九行目、「後部」三〇〇〜三〇七行目における句切りの点



作孩子相貌●對此畫像形●結一切密印●皆悉得成就●
 先所思念●事若舊若新等皆悉得成就●所有隱形法
 輪劍飛空藥若无是畫像●但於寂靜處念誦皆成就○
 又法或以鏡●中看一切事●或壁畫像上問看諸事等●
 皆得隨意應●又法以无病●童男或童女●作阿尾捨法●
 問三世諸事●皆悉得成就●復次說使者
 成就之法門●起黒月一日●對一像三時波念各一百八
 遍○至白十五日●月輪圓滿時最初承事法以苦
 練木柴◇及以白芥子◇從黄昏●起首◇護摩至夜
 半●使者即來赴◇不來●盡一夜◇●決定來出現◇來黃
 問持明者●求乞進止等◇●随意●而處分皆悉依奉
 行◇若欲往天宮●使者戴接往若所須宮觀◇皆
 悉能成辨◇若齒木淨水◇塗掃等事業悉皆能
 為作所使合作者◇一切能成辨◇如聖者所須◇●皆使
 成辨◇●之若一夜護摩◇使者不出現◇●彼即決定死◇聖
 聖者无動使◇法門說已竟

「後部」三〇〇〜三〇七行

「前部」二九二〜二九九行

この図 34 に示すように、二九九行目以前には用いられていなかった「中下点◇」が、三〇〇行目から突然、一行の中で三例も用いられるようになり、それ以降、その中下点が頻用されている。

この点から考えるに、小稿で述べるように、この「前部」二九九行目と「後部」三〇〇行目との間に境界を設けるべきではないかと思う。この「後部」の始まる三〇〇行目という数字についても、偶然かもしれないが、そのように切りのいい数字になっていることは、もし切りのいい所で訓点の加点がいったんやめられるようなことがあったとすれば、或いは、関係があるのかもしれない。

それでは、以下には、この「前部」と「後部」における加点状況の相違について見ていきたいと思う。

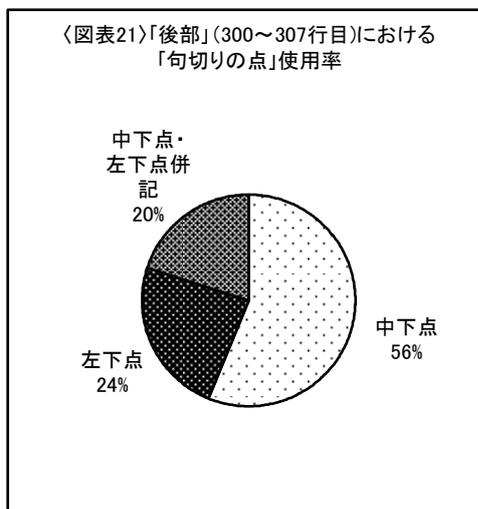
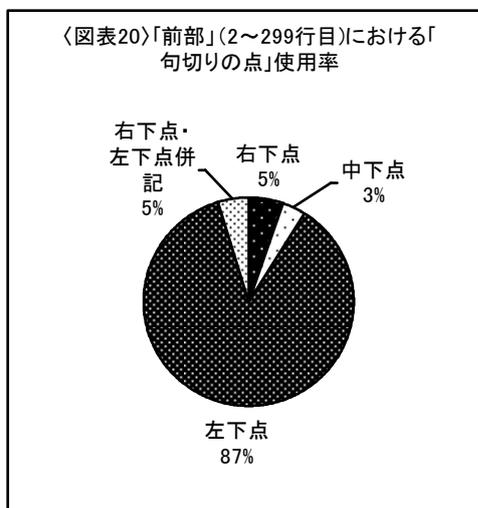
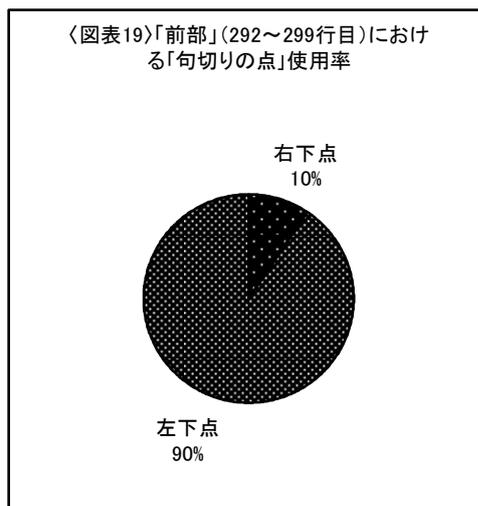
まず、右の図 34 に示した箇所において、どのような句切りの点を用いられているか、また、その句切りの点を用いられた時、単独で用いられているのか、併記の形で用いられているのかということを示したのが、次ページの図表 19 と図表 21 である。

図表 19 は、「後部」直前の「前部」八行の加点状況を示したものであり、図表 21 は、「後部」八行の加点状況を示したものである。同ページの図表 20 は、図表 19 が「前部」の一部の加点状況であるので、「前部」全体における加点状況を重ねて示したものである。

まず、この図表 19・図表 20 によって、「後部」直前の「前部」八行の句切りの点の用いられ方は、「前部」全体とほぼ同様のものと見てよいのではないかと思う。特に異なっているのは、「後部」直前の「前部」八行（図表 19）において中下点が全く用いられていないのに対し、「前部」全体（図表 20）においてはその使用例が見られることであるが、これは、前掲の図表 18 に示したように、中下点が、「前部」最初の二・三五行目に固まって使用されて以降、ほとんど用いられていないためである。この点については、なぜ『不動』の最初の部分と最後の部分とに用いられているのかという疑問はあるが、ここで問題としている「後部」直前の「前部」八行と、「前部」全体との加点状況の相違とは見なくてもよいであろうと思う。

これによって、先に見たように、「後部」直前の「前部」八行の加点状況が、「後部」の加点状況と異なっていたのは、「後部」直前の「前部」八行だけが「後部」と異なっているのではなく、「前部」全体が「後部」と、その加点状況において異なっているのではないかと思う。

◎「前部」



◎「後部」

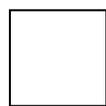
- ※〈図表19〉「右下点」二例、「中下点」〇例、「左下点」一九例、「右下点・左下点併記」〇例、「中下点・左下点併記」〇例。
- ※〈図表20〉「右下点」二七例、「中下点」一七例、「左下点」四三四例、「右下点・左下点併記」二四例、「中下点・左下点併記」五例。
- ※〈図表21〉「右下点」〇例、「中下点」一四例、「左下点」六例、「中下点・左下点併記」〇例、「中下点・左下点併記」五例。

▽「前部」の句切りの点



- ・右下点 ∴ 切点
- ・中下点 ∴ 中下点
- ・左下点 ∴ 返点

▽「後部」の句切りの点



- ・右下点 ∴ ナシ
- ・中下点 ∴ 切点
- ・左下点 ∴ 返点

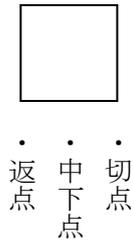
これら「前部」の加点点状況(図表19・図表20)と、「後部」の加点点状況(図表21)とを比べてみると、「前部」においては、そのほとんど

を返点（左下点）が占めているのに対し、「後部」においては、それとは反対に、かなりの部分を切点（中下点）が占めており、この点において、句切りの点の用いられ方かなりの差が見られると言ってよいのではないかと思う。

この『不動』については、先に示したように、その奥書によって他本による校合が行なわれたことが知られるので、その際のものであるのかは明らかではないが、何らかの形で句切りの点の用いられ方の異なる訓点が入り込むこともあり得たのかもしれない。

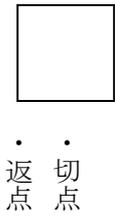
五、まとめ

本節で取り上げた『不動』については、「前部」と「後部」とで句切りの点の用いられ方に相違が見られ、「前部」においては、句切りの点
が、



のように配置され、多く返点によってその句切りが示される形となっている。この加點状況は、本章第一節で取り上げた『三蔵』と類似しており、「返読の有無」を示すことに重きを置いた加點がなされたのではないかと思う。

「後部」においては、句切りの点は、



のように配置され、返点によってその句切りを示すとともに、切点も頻用されている。この切点が多用されることによって、先の『三蔵』や「前部」に比べ、返読ナシの場合の句切りが多く示される形にはなっているが、この「後部」においても、返読アリの場合には、切点が施されても必ず返点が併記される形を取っており、やはり、「返読の有無」を示すことに対しては、強い関心があったであろうことが窺える。

以上のように、この『不動』については、「前部」と「後部」とで若干の差異は見られるものの、そのいずれにおいても、句切りの点が施される際には、「返読の有無」に関わって施されることが多く、「句読」などの書き分けはなされていないように思う。この点において、この『不動』も、やはり、先に見た『三蔵』と同様に、「返読の有無」に重きを置く資料と見てよいのではないかと思う。

本節で取り上げた『不動』については、小稿で述べるような調査を行なうことによって、図らずも「前部」と「後部」との句切りの点の相違を見出し、これを示すことができたのではないかと思う。

小稿のような調査は、句切りの点の用いられ方を明らかにするとともに、このように句切りの点の用いられ方の異なった部分―即ち、資料に手が加えられた部分など―を見出すのに役立つことができるかもしれない。

第三節 高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点、東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二

年点における句切りの点

―返読アリと返読ナシとを書き分ける資料―

第一項 高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎藏菩薩真言藏成就瑜伽』院政初期点における句切りの点

一、はじめに

本項においては、資料として、高野山西南院蔵『大毘盧遮那胎蔵菩薩真言蔵成就瑜伽』院政初期点（以下、『大毘』と略す）を取り上げた
い。

この『大毘』は、漢字左下の返点と、漢字中下の不返点^ㇿとの二つの句切りの点によって、「返読の有無」を示していると考えられる資料である。

本項においては、訓点資料には、句切りの点によって「句読」を示すものばかりではなく、この『大毘』のように、その句切りの点によって「返読の有無」を示していると考えられるものも見られることを述べたいと思う。

この『大毘』のような資料が存するとすれば、句切りの点を見る際には「句読」という視点のみから検討するだけでは充分ではなく、やはり、小稿で述べるような調査が必要となってくるのではないだろうか。

二、資料について

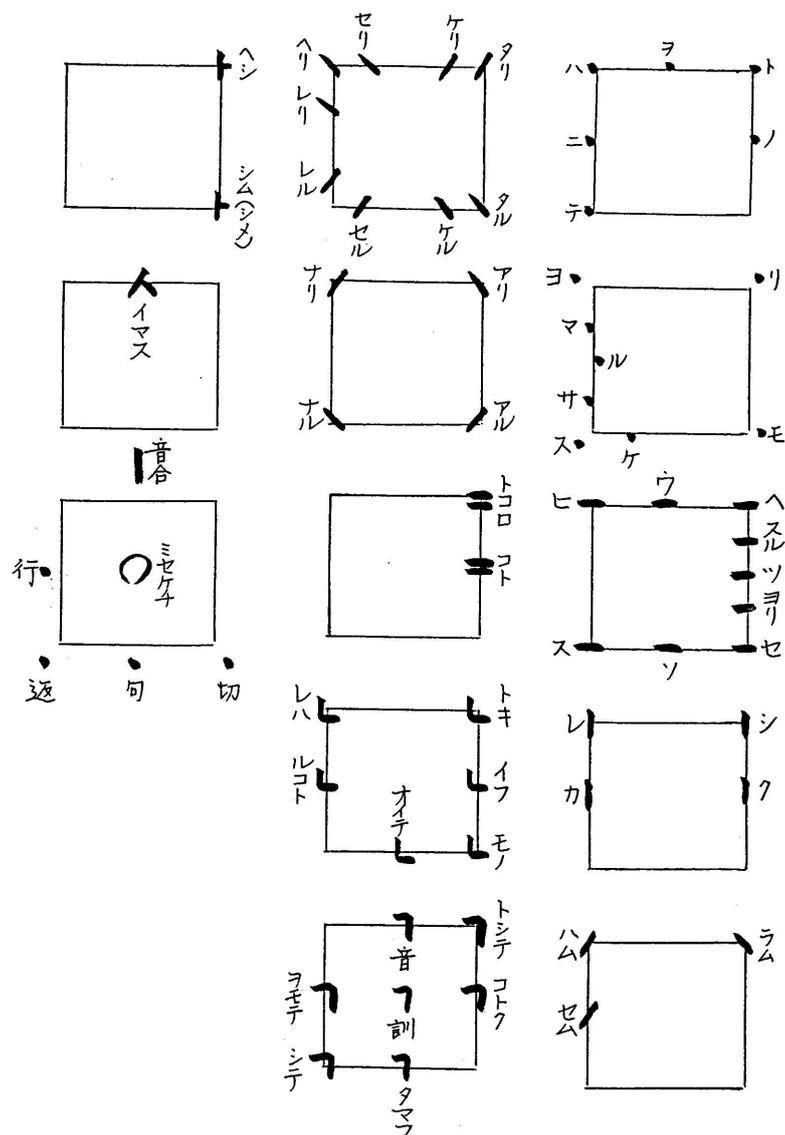
西崎亨氏（一九九五）によると、この『大毘』は、三三丁よりなる粘葉装本（各紙七行）で、識語に、
解脱房阿闍梨奉受之

とあるが、書写年代等は記されていないようである。この「解脱房」というのは、良禪（二七〇八〜一七九九年）の字ということである。
築島裕氏（一九八六）によると、この『大毘』は、院政初期の書写・加点で、ヲコト点は中院僧正点（第三群点）に符合するということである。

西崎氏は、ヲコト点を、次のように帰納されている。

^ㇿ 小稿では、「返読のないこと」を示す句切りの点を認め、「不返点」と呼ぶことにした（第一章 四 参照）。

〔図 35〕 フコト点図



この西崎氏のフコト点図(図35)では、句切りの点を「切」「句」「返」とされており、中下点を句点、左下点を返点と見ておられるのかとも取れるのであるが、同書において西崎氏の作成された訓読文では、右下点(切)を「。」、中下点(句)を「、」とされているようなので、

23 このように、右下点を「切」、中下点を「句」とする命名の仕方は、曾田文雄・岸岡民子両氏(一九七〇a)による『秘蔵』のフコト点図(本章 第四節 参照)にも見られ、もしかしたらそのような命名法があるのかもしれないが、筆者は知らない。ただし、小稿で述べるように、その『秘蔵』と、本節の『大毘』とは句切りの点の用いられ方が異なっており、同様の名称にすべきではないかと思う。

恐らく、西崎氏は、

〈図 36〉

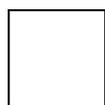


- ・句点
- ・読点
- ・返点

と見ておられるのであろうと思う²⁴⁾。

小稿の調査によると、この『大毘』における句切りの点は、

〈図 37〉



- ・句点
- ・不返点
- ・返点

となっているようである。不返点というのは、小稿第一章 四で述べたが、「返読のあること」を示す返点に対して、「返読のないこと」を示す句切りの点のことである。

以下、句切りの点は、この図 37 の名称による。

なお、本項の調査資料としては、西崎氏（一九九五）『高野山
西南院藏訓点資料の研究』の影印を用い、訓読文も同書によった。

三、句切りの点の使用状況

²⁴⁾ 築島裕氏（一九八六）によると、点図集所載の中院僧正点では、右下点が「大切」、中下点が「小切」、左下点が「返」となっている。

ここでは、『大毘』における句切りの点がそれぞれのどのような句切りを示しているのかについて考察してみたいと思う。
この『大毘』においては、陀羅尼の部分があり、また、本文部に割注が施された箇所がある。その割注の中にも陀羅尼の部分がある。
この陀羅尼や割注の部分については、小稿第三章第三節三で述べたように、別に調査してみる必要があるのではないかと思う。
そこで、本項においては、

▽本文部

◎本文部

◎陀羅尼

▽割注

◎割注・本文部

◎割注・陀羅尼

という形に分けて、用例を見ていききたいと思う。ただし、陀羅尼の部分については、訓読がなされないので、「句読」や「返読の有無」などの検討を行なう際には、これを除いた形で検討を行なった。

▽本文部

まず、『大毘』の本文部における句切りの点を見ていききたいと思う。

以下に本文部の句切りの点の用例を挙げ、その加点傾向の調査結果を表8、図表22として示した。

〈用例〉

◎本文部

【句点】

〔48〕 聖天之位。(六オ二) (文末・返読ナシ)

〈訓読文〉 聖天の「之」位なり。

〔49〕 部母忙葬鷄亦持堅恵杵。(二九オ二) (文末文中不明・返読ナシ)

〈訓読文〉 部母忙葬鷄とアリ亦(マ)持堅恵杵(ナル)ものと(アリ)。

〔50〕 手垂數珠騁三月持髮髻。(二二オ三) (句点返点併記・文中・返読アリ) (句点返点併記・文末・返読アリ)

〈訓読文〉 手より數珠騁を垂(レ)て。三月にして髮髻を持せり。

【不返点】

〔51〕 住此字門者事業悉成就。(一オ五) (文末・返読ナシ)

〈訓読文〉 此の字門(ニ)住する。▲者ものは事業悉(ク)成就す。

〔52〕 善男子諦聽内心漫荼羅。(三ウ七) (文中・返読ナシ)

〈訓読文〉 善男子諦聽(シ)て。内心の漫荼羅あり。

〔53〕 此最上壇故。(五オ四) (文末文中不明・返読ナシ)

〈訓読文〉 此れ最上の壇なるか故(ナリ)。

【返点】

〔54〕阿字至娑賀（二オ六）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕阿字より娑賀に至せ

〔55〕身行^レ輪布之^レ眉間^レ咽心^レ膈（二オ五）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕身の行・輪に之（ウ）布（キ）て・眉間と咽と心と膈となり

〔56〕能具多功德^レ生衆三昧^レ王（九ウ五）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕能く多の功德を具して・衆の三昧を生ずる・王なり

〔57〕尔時薄伽梵告金剛手^レ言（二オ四）（文末文中不明・返読アリ）

〔訓読文〕〔尔〕時に薄伽梵金剛手に告（ケテ）言（ハク）、

〔58〕百光遍照真言^レ曰（九オ二）（文中・返読ナシ・誤点？）

〔訓読文〕百光遍照の真言を^{（ハク）}曰（ハク）

〔59〕念未来衆生^レ為断一切疑^レ故^レ説大真言王^レ曰（五オ七）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕未来衆生を念して・一切疑を断（セム）か為の^{（ハク）}故（ニ）大真言王を説（キ）て^{（ハク）}曰（ハク）

◎陀羅尼

【不返点】

〔60〕曩莫糝曼多没駄喃^引阿（二ウ二）

〔表8〕 調査結果

◎ 本文部

【句点】（全二七例）

A文末	・返読アリ	〇例
A文末	・返読ナシ	二三例
B文中	・返読アリ	〇例
B文中	・返読ナシ	〇例
C文末文中不明	・返読ナシ	一例
A文末	・返読アリ （返点併記）	二例 （返点と重複）
B文中	・返読アリ （返点併記）	一例 （返点と重複）

【不返点】（全一〇〇例）

A文末	・返読アリ	〇例
A文末	・返読ナシ	七七例
B文中	・返読アリ	〇例
B文中	・返読ナシ	一二例
C文末文中不明	・返読ナシ	一一例

【返点】（全二五三例）

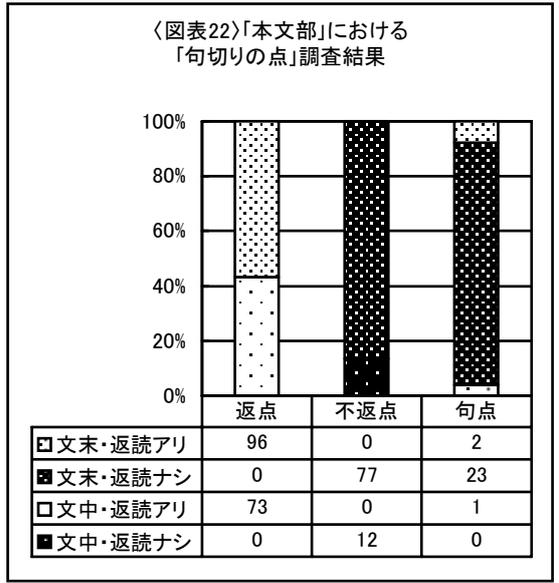
A文末	・返読アリ	九四例
A文末	・返読ナシ	〇例

- B 文中 ・ 返読アリ 七二例
- B 文中 ・ 返読ナシ 〇例
- C 文末文中不明・返読アリ 八四例
- A 文末 ・ 返読アリ（句点併記） 二例（句点と重複）
- B 文中 ・ 返読アリ（句点併記） 一例（句点と重複）

【誤点？】「返点」二例

◎陀羅尼

【不返点】二八七例



※ただし、「句点」の「文末・返読アリ」二例、「文中・返読アリ」一例は、全て「返点」との併記。また、「返点」の「文末・返読アリ」九六例、「文中・返読アリ」七三例は、それぞれ「句点」との併記例二例、「句点」との併記例一例を含む。

右の図表22は、右の表8のうち、陀羅尼の用例と、「C(C)文末文中不明」などのように訓み方が明らかでない用例とを除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフによって示したものである。

この図表22によると、この『大毘』においては、

〈表9〉

文末・返読アリ	∴	返点単独。或いは、句点・返点併記。
文末・返読ナシ	∴	不返点単独。或いは、句点単独。
文中・返読アリ	∴	返点単独。(或いは、句点・返点併記?)
文中・返読ナシ	∴	不返点単独。

のように用いられているのではないかと思う。文中・返読アリの句点の一例については、誤点や汚れの可能性があるので、右のように括弧()に入れて示した。この問題については、後に述べる。

以下には、この調査結果により、この『大毘』における右下点・中下点・左下点がそれぞれどのような句切りを示しているのかということ
を考察したいと思う。

まず、左下点については、文末・文中と問わず返読アリの場合にのみ用いられていることから、やはり、返点と見てよいのではないかと思う。問題は、右下点と中下点である。

「句読」という観点から見ると、右下点(句点)は、文中・返読アリの一例を除き全て文末に用いられているが、中下点(不返点)についても、文中一二例に対し、文末七七例で、そのほとんどが、やはり文末に用いられている。この点から考えると、右下点(句点)が句点である可能性が高いであろうが、中下点(不返点)が句点である可能性も全く否定できるものではない。可能性から言うと、右下点(句点)にも一例ではあるが、文中に用いられた例が見られ、中下点(不返点)に至っては一二例も文中に用いられた例が見られるのであるから、これら

右下点(句点)と中下点(不返点)とがともに、或いは、いずれかが切点である可能性もあるかもしれない。

まず、右下点(句点)について、小稿でこれを句点であると考えたのは、次のような理由からである。

この『大毘』は、右下点(句点)・中下点(不返点)ともに、返読ナシに偏った形で用いられており、また、右下点(句点)が返読アリに用いられる際には、必ず返点との併記の形が取られている。この点において、この『大毘』は、先に見た『三蔵』(本章第一節)や『不動』前部(同第二節)のように、「返読の有無」を示すことに重きを置く資料と傾向が類似していると見てよいのではないかと思う。本章第一節で見たが、『三蔵』においては、切点が「文末・返読アリ」に用いられた時には、三八例全てが返点との併記の形になっており、一方、「文中・返読アリ」の場合には、切点は全く用いられていない(本章第一節 図表6 参照)。これは、見方を変えようと、返読アリの場合、文中では返点を施すだけでその句切りを示しているが、文末においては返点が施されていても、敢えて重ねて切点を施し、そこが句切りであることを改めて示しているとも見ることができないのだろうか。この切点が返点と併記された加点状況から考えるに、そのように返点を重ねて切点が施されたのは、やはり、そこが文末であることが大きく関わっているのではないかと思う。

このように見てみると、『三蔵』などと類似した点の見られるこの『大毘』において、返点との併記された例が見られるのは、右下点(句点)だけであり、わずかに二例だけではあるけれども、この二例によってこの右下点(句点)が、文末ということに関わって施される点である可能性が示されているのではないかと思う。特に、この右下点(句点)については、句点とした時に例外となるのが、一例だけであることを考え合わせると、一層、句点である可能性が高まってくるように思う。この例外となる一例については、考えてみるに、先の『三蔵』や『不動』前部においても、返点と併記されるのは文末の場合のみで、文中の場合には、返点のみの形になっていたもので、この『大毘』の例のように、文中において返点との併記の形になっているのは、やや不審である。このような例が他の資料にもあるのかどうか調査するとともに、誤点や汚れの可能性も視野に入れて検討すべきではないかと思う。

以上のように考えると、当該の右下点(句点)が句点である可能性が高いのではないかと思うのであるが、この句点に対する所の読点が存しない点において断言することは、やや躊躇される。中下点(不返点)が読点に当たるものであれば問題はないのであるが、その中下点(不返点)は、右に見たように、むしろ文末に偏って用いられるものである。

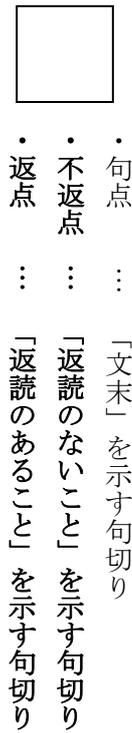
小稿においては、完全に断言するものではないけれども、やはり、右下点(句点)については、句点と見てよいのではないかと思う。その

理由としては、先に見た『三蔵』などの資料においては、中下点という文中に用いることが可能な句切りの点がありながらこれをほとんど用いておらず、この点において、切点(左下点)を文中に用いざるを得ない形になっていたのに対し、この『大毘』においては、中下点(不返点)を、一文末に用いることが多いけれども多用しており、この点において、右下点(句点)を文中に用いずともよい形になっているからである。このように、右下点(句点)を句点として用いても困らない形になっていることは、やや消極的な理由ではあるけれども、これによって、右下点(句点)を句点と見ても大きな間違いはないのではないかと思う。

このように、右下点(句点)を句点とすると、それでは、一方の中下点(不返点)については、どのように考えればよいであろうか。この中下点(不返点)は、前掲の図表22に示したように、文末七七例、文中一二例で、句点に対すところの読点であるとは考えにくい。ここで注目したいのが、この中下点(不返点)が「返読ナシ」にしか用いられていないということである。

句切りの点を「句読」という視点で見なければ、この中下点(不返点)のような句切りの点は、切点であるというように考えざるを得ないであろうが、以上に見てきた『三蔵』や『不動』前部のように、「返読の有無」に強い関心をもって句切りの点を施していると考えられる資料が存していたとすると、この中下点(不返点)が返読ナシにしか施されていないという傾向も見逃すべきではないであろう。思うに、この中下点(不返点)は、次のように見るべきではないだろうか。

〈図38〉



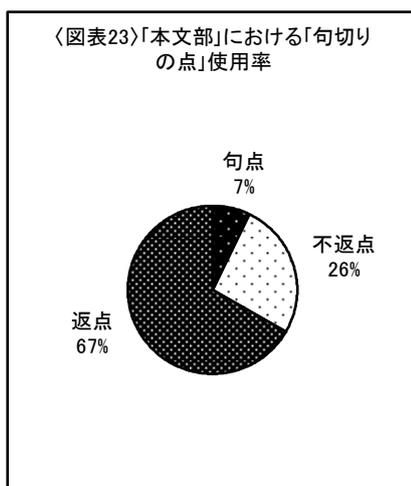
句点という句切りの点があると、それに対すところの読点というものを想定したくなるであろうが、先に見た『三蔵』や『不動』前部などにおいても、返点を除いて文中にはほとんど句切りの点が施されておらず、この『大毘』においてもそうである。訓点資料においては、読点と句点とが対になった形で用いられるのではなく、句点のみという形もあり得るのではないかと思う。

そのように考えると、中下点(不返点)は、無理に「句読」に関わるものと考えする必要はなく、むしろ、その「返読ナシ」に用いられると

いう傾向から「返読の有無」に関わるものと見てみる必要もあるのではないだろうか。

筆者は、この中下点(不返点)については、右の図38に示したように、返点と対になるものと見て、不返点としてはどうかと考えている。思うに、先に見た『三蔵』や『不動』前部においても句切りを示す際には、返点が多く用いられていたが、そのように「返読のあること」を示すということを突き詰めていくと、「返読のあること」に対して「返読のないこと」をも示すというようにその意識が向かっていく可能性はあるのではないかと思う。

この『大毘』においても、句切りの点の使用率をみると、左の図表23のように、返点が最も多く用いられており、この点において、「返読の有無」を示すことに重きを置いていると見てよいのではないかと思う。



※「句点」二七例、「不返点」一〇〇例、「返点」二五三例。

この『大毘』においては、もし右に述べたように、中下点を不返点と見ることができれば、「返読の有無」を示す句切りの点は、返点とこの不返点との二点ということになり、つまり、右の図表23に示すように、句切りの点の九三%を、「返読の有無」に関わる句切りの点が占めることになる。

以上のように見てみると、この『大毘』についても、やはり、「返読の有無」を示すことに重きを置く資料と見るべきではないかと思う。もし右で述べたように、返点と不返点とによって「返読の有無」を示しているとする、一層、その傾向の強い資料と見るができるように思う。

以下には、右に見た『大毘』の本文部と同様に、『大毘』の割注の部分における句切りの点を見てみようと思う。まず、右に示したのと同様に、割注における句切りの点の用例と、加点傾向の調査結果、表10、図表24とを挙げる。ただし、用例については、右に見た本文部に見られなかった形の用例のみを挙げた。

▽割注

◎割注・本文部

【不返点】

〔61〕 破碎令盡・(二四ウ六左) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕 破碎盡(シム)〔令〕なり

〔62〕 如鈎・相背・(六ウ三右) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕 鈎の如(ク)して、相ひ背(ケ)よ

〔63〕 謂悲者而此菩薩從觀音眼中・生・(二三ウ一右) (文末文中不明・返読アリ)

〔訓読文〕 悲といふ者〔而〕此〔ノ〕菩薩觀音〔ノ〕眼中從〔リ〕▲生す〔ヲ〕謂〔フ〕

◎割注・陀羅尼

【句点】

〔64〕囉、怛、曩二合、播、拈二。||
 (二三ウ四右)

〔表10〕調査結果

◎割注

【句点】(全三二例)

A文末 . 返読アリ

A文末 . 返読ナシ

B文中 . 返読アリ

B文中 . 返読ナシ

C文末文中不明・返読ナシ

C文末文中不明・返読アリ (返点併記)

〇例

九例

〇例

〇例

二二例

二例 (返点と重複)

【不返点】(全一三〇例)

A文末 . 返読アリ

A文末 . 返読ナシ

B文中 . 返読アリ

B文中 . 返読ナシ

C文末文中不明・返読アリ

C文末文中不明・返読ナシ

一例

六〇例

一例

二七例

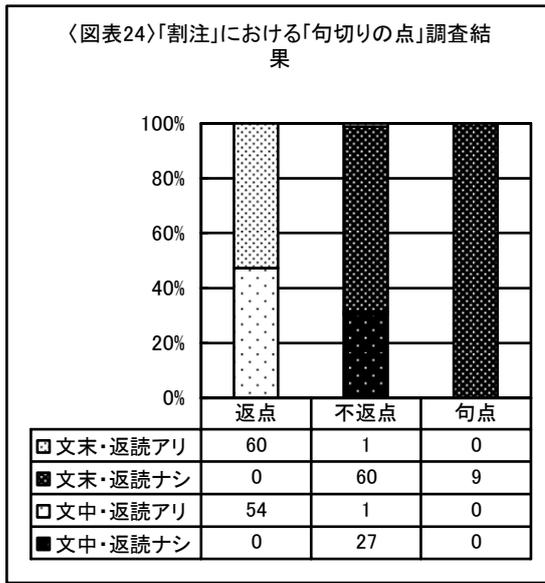
六例

三五例

【返点】(全三〇八例)

A文末 . 返読アリ

六〇例



◎割注・陀羅尼
 【句点】二例
 【切点】六例

A 文末
 ・返読ナシ ○例

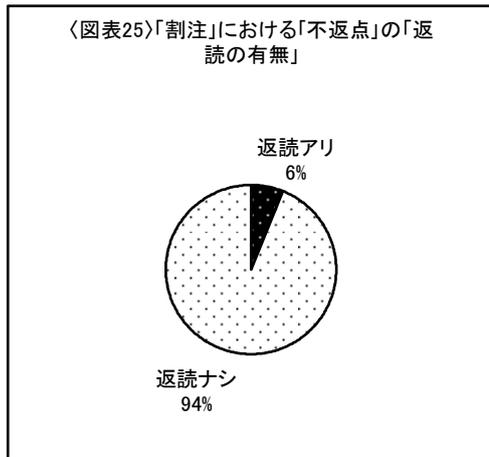
B 文中
 ・返読アリ 五四例

B 文中
 ・返読ナシ ○例

◎ 文末文中不明・返読アリ 一九二例

◎ 文末文中不明・返読アリ (句点併記) 二例 (句点と重複)

※ 「返読アリ」八例、「返読ナシ」一二三例。



割注については、加点傾向は本文部とほとんど変わらないと見てよいのではないかと思うが、若干、異なった例が見られる。それは、返読アリに用いられた不返点の例が、わずかに二例ではあるが見られることである。これについては、訓み方が明らかでないので厳密に言えば確例ではないのであるが、右の二例の他にも返読アリに施されたと思われる例が六例ある（前掲表10 ↓ 不返点「文末文中不明・返読アリ」）。これらの例は、小稿のように中下点を不返点と見ると、返読ナシにのみ用いられるはずの不返点だが、返読アリに用いられている点において、大いに問題である。現在、筆者としては、この例外となる八例（↑二例十六例）について明確に処理するすべを持たない。この問題を解決するためには、他資料においても本文部と割注との加点状況の違いを調査し、それらとの比較を行なってみる必要がある。この点において、小稿においては、この問題は保留の形にしておきたい。

ただ、ここで問題としている不返点は、本文部では、一〇〇%「返読ナシ」に用いられており、割注においても、右に述べたように八例の例外があるものの、左の図表25のように、九四%が「返読ナシ」に用いられている。

筆者としては、この偏りを偶然とすべきではなく、不返点については、やはり、「返読ナシ」に用いられていると見るべきではないかと思う。割注に見られる八例をもって、この偏りの全てを否定してしまうべきではないのではないだろうか。

四、まとめ

小稿で述べてきたように「返読の有無」なども視野に入れ調査を行なってくると、『三蔵』（本章 第一節）、『不動』（同 第二節）のように、返点を多く用い、「返読の有無」を示すことに重きを置くと考えられる資料以外にも、本項で取り上げた『大毘』のように、返点と不返点という二つの句切りの点によって「返読の有無」を書き分けていると見られる資料を見出すことができる可能性があるが、そうである。

先の『三蔵』や『不動』前部が、返点によって返読アリのみを示していたのに対し、この『大毘』が、返点・不返点の二点によって返読アリ・返読ナシを示しているとなると、この『大毘』は、句切りの点を「句読」を示すものとして発展させるのではなく、「返読の有無」を示すものとして発達させたと見ることはできないのではないかと思う。

もし『大毘』のような資料が、他にも存するとすれば、句切りの点を見ていく際に、小稿で行っているような視点が、やはり必要となってくるのではないだろうか。

第二項 東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点における句切りの点

一、はじめに

本項で取り上げる東大寺図書館本『釈摩訶衍論』序 承元二年点（以下、『釈摩』と略す）は、小稿で取り上げる他の資料と異なり、句切り

の点が、右下点と左下点の二点しか用いられていない。しかし、その二点は、本節第一項に見た『大毘』の返点と不返点との関係と同様の関係にあるようである。本項では、句切りの点が二点しか用いられていない資料においても、句切りの点を「返読の有無」によって書き分ける資料が存することを示したいと思う。

二、資料について

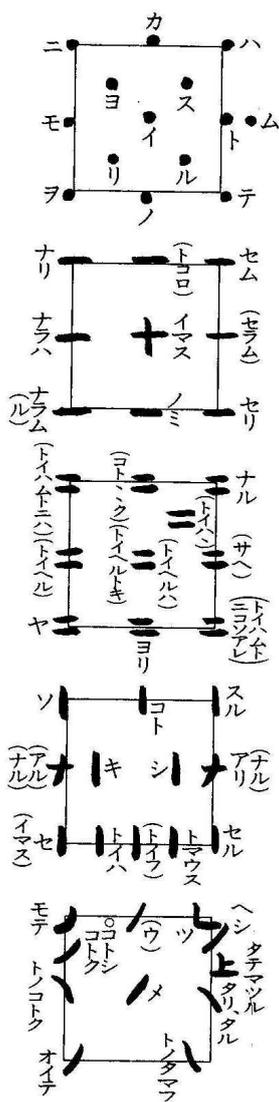
中田祝夫氏（一九六一）によると、東大寺図書館本『釈摩訶衍論』承元二年点は十帖あり、全巻に訓点があると言う。第一帖の末尾の識語によると、承元二年に書写されたようである。中田氏は、第三帖に「同月廿五日 移点畢」（朱）とあることから、本文の朱点は移点であろうとする。ヲコト点は喜多院点（第二群点）であると言う。

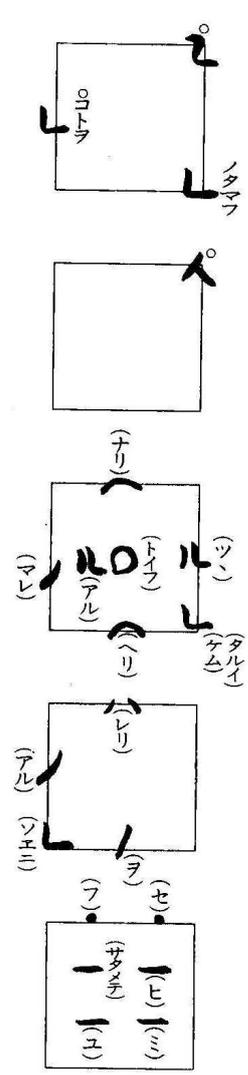
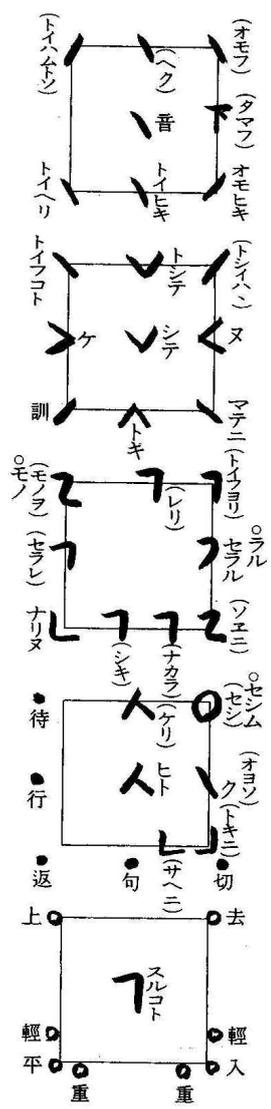
本項で取り上げるのは、中田氏の論文に掲載された「序」の部分のみである。中田氏によると、この序の部分の訓が最も詳しいということであるが、この序にはヲコト点がなく、全て墨点であるということである。

従って、小稿で取り上げる『釈摩』は、厳密に言えば、ヲコト点を用いられていないので喜多院点と見てよいのかどうかという問題もあるのであるが、この「序」以降に喜多院点が用いられているということなので、小稿では喜多院点の資料として見ることにしたいと思う。

喜多院点（第二群点）は、築島裕氏（一九八六）によると、次のように帰納されるということである。

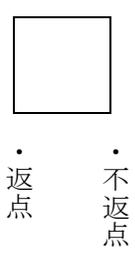
〈図39〉ヲコト点図





この築島氏のヲコト点図(図39)では、句切りの点を右下から順に「切」「句」「返」とされているが、「返」以外の「切」「句」については、これがどのような句切りを示すものであるのかは明らかではない。ただし、小稿では、同じく喜多院点を用いた資料として、先に『三蔵』における句切りの点を見た(本章第一節参照)。『三蔵』においては、右下から順に「切点」「中下点」「返点」となっているようである。小稿の調査によると、この『三蔵』における句切りの点は、

〈図40〉



となっており、中下点是用いられていないようである。以下、句切りの点の名称はこの図40による。

なお、本項の調査資料としては、中田祝夫氏（一九六一）「東大寺
図書館本 釈摩訶衍論承元二年点」の模写された原文を用い、訓読文は、塩入亮忠・平等通昭両氏訳（一九三二）『国訳一切経』論集部四によった。

三、句切りの点の使用状況

以下に、句切りの点の用例を挙げ、その加点点傾向の調査結果を表11、図表26として示した。

〈用例〉

【不返点】

〔65〕大海之瀾泰然ナミタイネンナリ（二八）（文末・返読ナシ）

〈訓読文〉大海ノ〔之〕瀾泰ナミタイ然ネンナリ

〔66〕兩曜之面圓臨群星之目具舒リヤウエウノヲモテマトカニソクミンセインメツフサニヒラケタリ（二七）（文中・返読ナシ）

〈訓読文〉兩リヤウ曜エウ之ノ面圓ヲモテマト臨ソク群クン星セイン之ノ目具メツフ舒サニヒラケタリ

【返点】

〔67〕乘於等觀シテニ達于恒利イタルコウリニ（三）（文末・返読アリ）

〈訓読文〉〔於〕等ニ觀ヲ乘シテ▲〔于〕恒コウ利リ▲
ニ乘シテ▲〔于〕恒コウ利リ▲
ニ乘シテ▲〔于〕恒コウ利リ▲

〔68〕 却^{サツ}・飲^テ・往^{ヨロ}・向^コ・即^ヒ・急^シ・来^{ヨク}・後^シ (一〇) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕 却^サツテ往^{ヨロ}向^コヲ飲^ヒ・即^シシテ来^{ライ}後^{コウ}平^{ヘイ}ヲ急^{スミヤ}カンス▲

〔表 11〕 調査結果

◎ 本文部

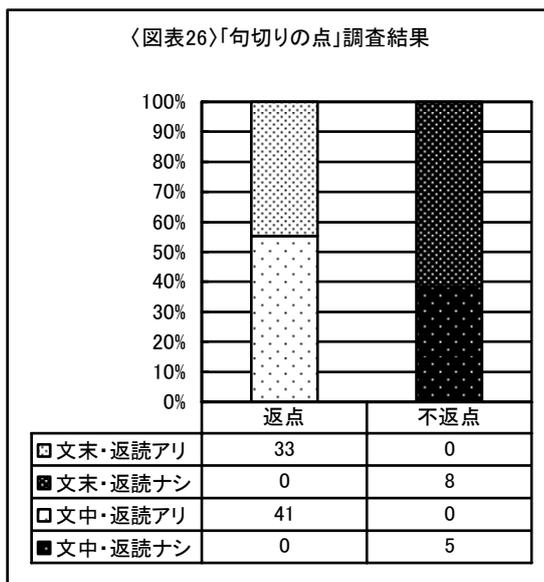
【不返点】 (全一六例)

- A 文末 ・ 返読アリ ○ 例
- A 文末 ・ 返読ナシ 八 例
- B 文中 ・ 返読アリ ○ 例
- B 文中 ・ 返読ナシ 五 例
- C 文末文中不明・返読ナシ 三 例

【返点】 (全七四例)

- A 文末 ・ 返読アリ 三三 例
- A 文末 ・ 返読ナシ ○ 例
- B 文中 ・ 返読アリ 四一 例
- B 文中 ・ 返読ナシ ○ 例

左の図表 26 は、右の表 11 のうち、「C (C) 文末文中不明」などのように訓み方が明らかでない用例を除き、句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。



〈表 12〉

文末・返読アリ …… 返点単独。
 文末・返読ナシ …… 不返点単独。
 文中・返読アリ …… 返点単独。
 文中・返読ナシ …… 不返点単独。

右の図表 26 に示したとおり、やや用例数が少ないものの、左下点（返点）が文末・文中を問わず返読アリに偏り、右下点（不返点）が文末・文中を問わず返読ナシに偏るといふ傾向が見て取れる。これは、先に見た『大毘』の不返点（中下）、返点（左下）と同様の傾向と見てよいのではないかと思う（本節 第一項 参照）。

ただ、ここで問題となるのは、前掲の築島氏のヲコト点図(図39)によると、喜多院点では三つの句切りの点在用いられているということである、これについては、小稿第四章第一節で取り上げた『三蔵』も同じく喜多院点であるが、やはり三つの句切りの点在用いられていた。また、その『三蔵』において、句切りの点は右から順に切点・中下点・返点となっていると考えられるが、「返読の有無」によっては書き分けられておらず、やはり、この『釈摩』と異なっている。ただし、句切りの点として返点が多く用いられる点については類似している。この問題については、他の喜多院点の資料なども調査した上で判断すべきことがらであると思うので、ここではこの問題については保留としたいが、或いは、この『釈摩』においてヲコト点在用いられていないことと何らかの関係があるのかもしれない。筆者は以前、真福寺本『将門記』(承徳三年(一〇九九年)書写)(以下、『将門』と略す)における句切りの点を調査したことがあるが、その『将門』においても、この『釈摩』と同様に「返読の有無」を書き分ける形で二つの句切りの点在用いられていたのである(拙稿(一九九七))。『将門』もまたヲコト点在用いられていない資料である。もしそのように見ることができれば、この『釈摩』は、ヲコト点在用いられている部分と用いられていない部分とで分けて検討してみる必要があるのかもしれない。

いずれにせよ、右の調査結果から考えるに、この『釈摩』においては、句切りの点を「返読の有無」によって書き分けていると見るべきであろう。このように二つの句切りの点によって「返読の有無」を書き分けていると見られる資料は、先に見た『大毘』(本節第一項参照)のように、返点・不返点に加え、句点などの「句読」に関わる句切りの点在用いられる資料に比べ、一層、明瞭な形で、句切りの点を「返読の有無」を書き分けるために用いていると言えよう。つまり、句切りの点を純粹に「返読の有無」に関わるものとしてのみ用いているということである。

このように句切りの点を「返読の有無」に関わるものとしてしか用いない資料の存在は、先の『大毘』で行なった返点・不返点という見方の傍証となるものではないかと思う。

思うに、先の『大毘』のような資料は、この『釈摩』のように「返読の有無」を書き分ける形に、句点を加えたものではないだろうか。資料を通覧するに、『三蔵』(本章第一節)においても、文末・文中ともに用いられるべき切点が文末に偏って用いられ、後に述べる高野山西南院蔵『聖徳漫徳迦怒王立成大神驗念誦法』承暦点・高山寺蔵『十二天法』平安後期点(本章第三節)においても、文末の場合には返読

があつても返点が用いられずに句点が用いられるという傾向が見られることから考えると、当時、句切りの点が打たれる際に「文末を示す」ということがひとつの関心事であつたことは間違いない。そのように見ると、「返読の有無」を示す二つの句切りの点に、もう一点加える時に、文末を示す句点を加えることは自然な流れであるように思う。

四、まとめ

この『釈摩』のような資料においては、不返点が返読のない句切りにのみ用いられていることから見て、返読のある箇所では、返点句切りの点として機能していると思ふを得ないのではないだろうか。

このような資料が他にも存しているとすれば、やはり、小稿で述べるように、返点を句切りの点として位置づけ、返読のある箇所（返点）のみでなく返読のない箇所（不返点）にも注目する必要があると言えるのではないだろうか。

第四節 西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）高野山西南院蔵『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点における句切りの点

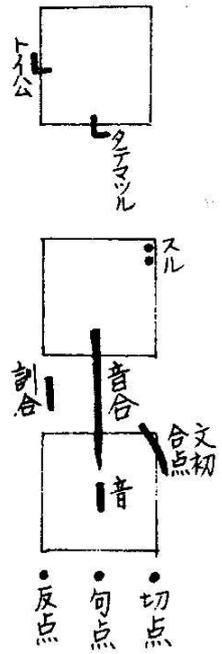
—句点・読点の用いられる資料として—

第一項 西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）における句切りの点

一、はじめに

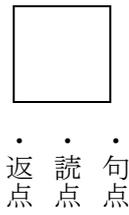
本項においては、西教寺本『秘蔵宝鑰』卷上（朱点）（以下、『秘蔵』と略す）を取り上げたい。

以上に見てきた『三蔵』（本章 第一節）、『不動』前部（同 第二節）、『大毘』（同 第三節）においては、句切りの点として返点が多く



この曾田・岸岡両氏のヲコト点図(図41)では、句切りの点を切点・句点・反点とされており、中下点を句点、左下点を返点と見ておられるのかも取れるのであるが、同論文において曾田・岸岡両氏の作成された訓読文では、右下点(切点)を「」、中下点(句点)を「」とされているようなので、恐らく、曾田・岸岡両氏は、

〔図42〕



と見ておられるのであろうと思う²⁶。

小稿の調査でも、右と同様の結論が得られたので、以下、句切りの点の名称は、この図42による。

表題に示したように、ここで取り上げるのは、西教寺本『秘蔵宝鑰』上・中・下三冊のうち、巻上のみである。本来であれば、この三冊とも調査を行なうべきであるが、小稿の目的を達するには、出来るかぎり多くの資料の傾向を見ることが必要であり、また、巻上だけでも、その傾向を得ることができたと判断したからである。巻中・巻下については、今後の課題とさせてもらいたい。

²⁵ これと同様の命名法が、西崎亨氏(一九九五)による『大毘』のヲコト点図(本章第三節)にも見られる(本章第三節注²³参照)。
²⁶ 築島裕氏(一九八六)によると、点図集所載の田堂点では、右下点が「切」、中下点が「係」、左下点が「返」となっている。

また、小稿で資料として用いたものが、曾田・岸岡両氏による朱点の調査に基づく資料であるため、小稿の調査結果も、その朱点に基づくものである。

なお、本節の調査資料としては、曾田文雄・岸岡民子両氏（一九七〇b）「西教寺本秘蔵宝鑰併解読文（上）」の模写された原文を用い、訓読文も同論文によった。ただし、その模写された原文では、ヲコト点や句切りの点は施されているものの、仮名点は省略されているようなので、仮名点を見る際には、訓読文を参照しながら調査を行なった。

三、句切りの点の使用状況

ここでは、この『秘蔵』における句切りの点がどのような句切りを示しているのかということについて述べてみたいと思う。

まず、『秘蔵』における句切りの点の用例を挙げ、その加點傾向を表13、図表27として示す。
なお、『秘蔵』には、割注が存するので、本文部と割注とに分けて検討することにする。

▽本文部

〔用例〕

※用例は、曾田・岸岡両氏（一九七〇b）により、敢えて仮名点を加えることはしなかった。訓読文を参照されたい。

【句点】

〔69〕四生盲者不識盲。（二ウ一）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕四生の盲「左メシヒ」者盲（ト云）ことを識ラ不。

〳〳

〔70〕自他受用日弥新。（四ウ四）（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 自他受用日に弥新タなり。

〔71〕梵天等為覺寶。四吠陀論等為法寶。(一八〇二) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕 梵天等を覺寶と為し「為(ス)」。四吠陀論等を法寶と為(ス)。

〔72〕然猶生々之々輪轉六趣。死去沈淪三途。(六ウ三) (文中・返読ナシ)

〔訓読文〕 然(モ)猶^(ト)生れ々れ之^(ユ)キ々て六趣に輪轉し、死去^(サ)り「去(ル)」。死去(リ)て三途に沈淪す。

〔73〕凡夫狂醉不辨善惡。(六オ五) (句点読点併記・文末・返読アリ)

〔訓読文〕 凡夫狂醉して善惡を辨へ不。「」

〔74〕未知生人之本。誰談死者之起。(七ウ四) (句点返点併記・文末・返読アリ)

〔訓読文〕 生人之本を知(ラ)未、誰か死者之起(リ)を談せむ。

〔75〕是故本覺内熏佛光外射。欸尔節食數々檀那。(二一〇二) (文末文中不明・返読ナシ)

〔訓読文〕 是(ノ)故(ニ)本覺内に熏し佛光外に射シテ「左、イル。」欸^(コウ)尔に節食し數々「左、シハク」檀那す。

【読点】

〔76〕又天有幾種。請示其名。(一五オ二) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕 又天に幾の種クカ〔右訓「クカ」は「クサ」か〕か有る、請ふ其の名を示せ。

〔77〕 耽酒・耽色・誰覺後身之報。〔二オ一〕〔文中・返読アリ〕

〔訓読文〕 酒に耽フケり、色に耽フケ（リテ）▲誰か後身之報を覺サトラム。

〔78〕 日夜作・六度逆耳・不入心。〔二ウ四〕〔文中・返読ナシ〕

〔訓読文〕 日夜に作り、六度耳に逆ヘテ〔左、サカヘ（テ）〕▲心に入レ不。

〔79〕 五嶽戴足・迷似羊目。〔七オ二〕〔読点返点併記・文中・返読アリ〕

〔訓読文〕 五嶽を足に戴タケ（タケ）とも、迷フ（フ）こと羊の目に似たり。

〔80〕 人常為人・畜常為畜。〔八ウ四〕〔文末・返読アリ〕

〔訓読文〕 人は常に人タ為り、畜は常に畜タ為り。

【返点】

〔81〕 遂使十悪快心。〔二ウ四〕〔文末・返読アリ〕

〔訓読文〕 遂タクマシ（三）十悪心に快タクマ（シクセ）〔タクマシ〕カラス〔使〕使シメツ▲

〔82〕 閻魔獄卒構獄・斷罪・餓鬼禽獸焰口・桂驪。〔二オ一〕〔文中・返読アリ〕

〔訓読文〕 閻魔獄卒獄を構へ^{カマ}▲罪を斷り^{コトハ}、餓鬼禽獸口を焰イ^ヤ(テ)▲體に桂(ク)。

〔表 13〕 調査結果

【句点】 (全三一八例)

A 文末	・ 返読アリ	八四例
A 文末	・ 返読ナシ	八五例
B 文中	・ 返読アリ	三例
B 文中	・ 返読ナシ	四例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	九一例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	三八例
A 文末	・ 返読アリ (読点併記)	三例 (読点と重複)
A 文末	・ 返読ナシ (読点併記)	二例 (読点と重複)
B 文中	・ 返読アリ (読点併記)	二例 (読点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読アリ (読点併記)	四例 (読点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読ナシ (読点併記)	一例 (読点と重複)
A 文末	・ 返読アリ (返点併記)	一例 (返点と重複)

【読点】 (全二七例)

A 文末	・ 返読アリ	一一例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	七七例

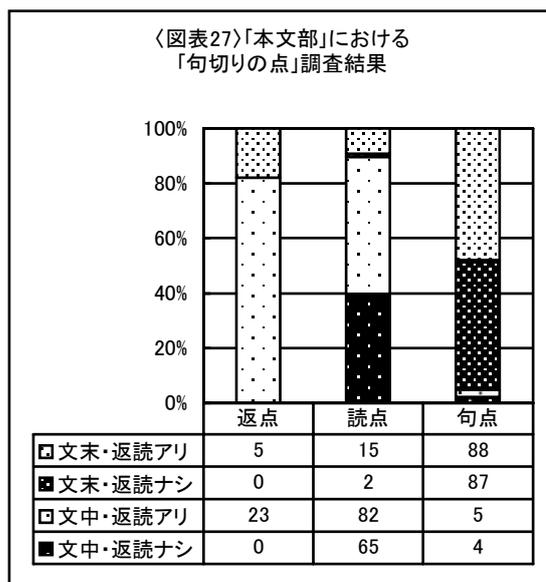
B 文中	・ 返読ナシ	六五例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	四〇例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	八例
A 文末	・ 返読アリ	三例 (句点と重複)
A 文末	・ 返読ナシ	二例 (句点と重複)
B 文中	・ 返読アリ	二例 (句点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読アリ	四例 (句点と重複)
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一例 (句点と重複)
A 文末	・ 返読アリ	一例 (返点と重複)
B 文中	・ 返読アリ	三例 (返点と重複)

【返点】(全九三例)

A 文末	・ 返読アリ	三例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	二〇例
B 文中	・ 返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	六五例
A 文末	・ 返読アリ	一例 (句点と重複)
A 文末	・ 返読アリ	一例 (読点と重複)
B 文中	・ 返読アリ	三例 (読点と重複)

【誤点?】「句点」二例、「読点」四例、「返点」二例

左の図表27は、右の表13のうち、「C（C）文末文中不明」などのように、訓み方の明らかでない用例を除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。



※ただし、以下のように併記例を含んでいる（表13 参照）。

- 「句点」 「文末・返読アリ」 八八例… 「読点」 三例、 「返点」 一例。
- 「句点」 「文末・返読ナシ」 八七例… 「読点」 二例。
- 「句点」 「文中・返読アリ」 五例… 「読点」 二例。
- 「読点」 「文末・返読アリ」 一五例… 「句点」 三例、 「返点」 一例。
- 「読点」 「文末・返読ナシ」 二例… 「句点」 二例。
- 「読点」 「文中・返読アリ」 八二例… 「句点」 二例、 「返点」 三例。
- 「返点」 「文末・返読アリ」 五例… 「句点」 一例、 「読点」 一例。
- 「返点」 「文中・返読アリ」 二三例… 「読点」 三例。

この図表27に示したように、右下点（句点）は、多少、文中に施された例も見られるが、その用例のほとんどが文末に用いられており、句点と見てよいのではないかと思う。また、中下点（読点）も、多少、文末に施された例があるものの、その用例のほとんどが文中に用いられていることから、やはり読点と見てよいように思う。これら右下点（句点）と中下点（読点）とは、それぞれが文末と文中とに用いられていることにより、互いにそれぞれが句点と読点であることを証明し合っていると考えるのではないかと思う。

この時、注目すべきは、これら句点と読点とが、ともに返読アリ・返読ナシに全く関わらず、また、単独で用いられていることである。このことは、以上に見てきた『三蔵』や『不動』前部の切点返読ナシに偏って用いられ、また、返読アリの場合には、必ず返点との併記の形を取っていたことは対照的である。

この『秘蔵』における句点・読点は、返読アリ・返読ナシに関わらず、単独・自在に用いられていることから、より純粋な形の句点・読点であると言えるのではないだろうか。

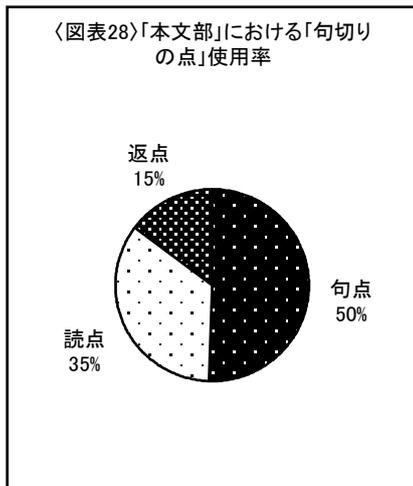
ただ、ここで問題となるのが、それらを句点・読点とした時に、若干ではあるが、例外となる例が見られることである。即ち、文中に施された句点(用例71、72)と、文末に施された読点(用例76)の例である。この例外と見られる用例を見てみると、例えば句点では、用例71では確かに「為し。」と動詞連用形に句点が打たれた形になっており、また、用例72でも「去り。」と訓ずるのであれば、同様に連用形に句点が打たれた例となる。

しかし、この『秘蔵』においては、用例75のように「射して」と「射る」というように文中の形と文末の形とを併記する例も見られるので、恐らく右の用例71、72のような例についても文中に句点が施されたものと見るのではなく、右のそれぞれの訓読文に示したように、用例71では「為し」という訓み方と「為す」という訓み方が併記されたものと見、用例72も「去り」という訓と「去る」という訓とを併記したものと見た方がよいのではないかと思う。用例72については「去り」ではなく「去れり」と訓ずる可能性もあるかもしれない。右の図表27に示したように、句点のほとんどが文末に用いられていることを考えると、このような例についても例外とするのではなく、文末となる形で訓読されていると見るべきではないかと思う。

読点の例についても同様である。用例76などは、形から言うところ確かに「くか有る」という係り結びの形で文末となっていると見るべきであろう。しかし、それに続く文を見てみると「請ふ其の名を示せ」で、恐らく文意としては続いていないかと思う。

小稿の調査においては、文末か文中かという判断を活用形などの形に表れるものによっているもので、このような例については、文末の例として処理されてしまうことになる。しかし、文脈などによって文のつながりを判断するようにすると、恐らく文末・文中の判断に客観性を欠くことになってしまうのではないかと思う。筆者としては、まず、小稿のように、活用形などの形の上から判断しその傾向を見た上で、文脈などを見ていくべきではないかと思う。

このことを踏まえて右の読点の例を検討してみると、小稿の調査によって、かなり明確な形で、中下点(読点)が文中に偏って用いられるという傾向が見られる。これによって、中下点(読点)は、やはり読点と見るべきであろうと思う。この時、右のような例外と見られる用例が見られるのは、恐らく右に見た句点と同じように、文中の形に訓む訓み方があったのではないかと思う。或いは、この読点の場合は、用例76のように文意としてつながっているような例もあろう。



※「句点」三二八例、「読点」二二七例、「返点」九三例。

この読点については、例えば、用例80のように対句の形になった場合に、その前句が終止形の形で句切りとなり、そこに読点が打たれるような例が見られ、文末か文中かという判断が難しい場合も少なくない。しかし、この『秘蔵』においては、右のように形の上から調査を行ない、その結果、中下点（読点）が文中に偏るといふ傾向が得られたのであるから、その調査結果によつて、右のような例外的な用例についても、むしろ演繹的に、文中とされるような訓み方がなされたのではないかと考えるべきではないだろうか。

以上のように見てみると、句点・読点の例外と見られる例についても例外せずに解釈することができ、この『秘蔵』における右下点（句点）と中下点（読点）とは、やはり、それぞれ句点・読点と見てよいのではないかと思う。

この句点と読点に関連して、この『秘蔵』においては句切りの点の併記例を見ると、表13に示したように、句点と読点とが併記される例が珍しくない。この句点と読点の併記例については、右のように見てくると、恐らく句点（文末）と読点（文中）とを同一訓の中で生かした訓み方がなされているのではなく、文末となる訓み方と、文中となる訓み方の複数の訓を示しているのであろうと思う。

これは、「文末の句切り」とするか「文中の句切り」とするかについて、こだわった表れとも見ることができのではないだろうか。この点において、この『秘蔵』における句切りの点の使用率を調査してみると、次の図表28のようになる。

このように、この『秘蔵』においては、句点・読点がその使用率のほとんどを占めている。この句切りの点の使用率は、先に見た『三蔵』や『不動』前部、『大毘』において、返点が多用されていたことは対照的である。『三蔵』における句切りの点の使用率は、切点二六%、中下点一%、返点七三%（本章第一節 図表9 参照）、『不動』前部における句切りの点の使用率は、切点一〇%、中下点三%、返点八七%（同第二節 図表15 参照）、『大毘』における句切りの点の使用率は、句点七%、不返点二六%、返点六七%（同第三節 図表23 参照）である。この『秘蔵』においては、句切りの点として、多く句点と読点とが用いられており、それらの点によって「句読」が示される形になっている。また、その時、それら句点と読点は、返読アリであっても返読ナシであっても同様に単独で用いられ、「返読の有無」が示される形にはなっていない。この加點状況から考えるに、この『秘蔵』は、「返読の有無」を示すことよりも「句読」を示すことに重きを置く資料と見ることができるとはならないだろうか。

以下には、この『秘蔵』の割注における句切りの点を見てみたいと思う。

この割注における句切りの点は、用例数が少ないので明言はできないが、以上に見た本文部と同様の傾向と見てよいのではないかと思う。よって、ここでは用例は挙げず、その加點傾向のみを見ることがしたい。加點傾向の調査結果を表14、図表29として示す。

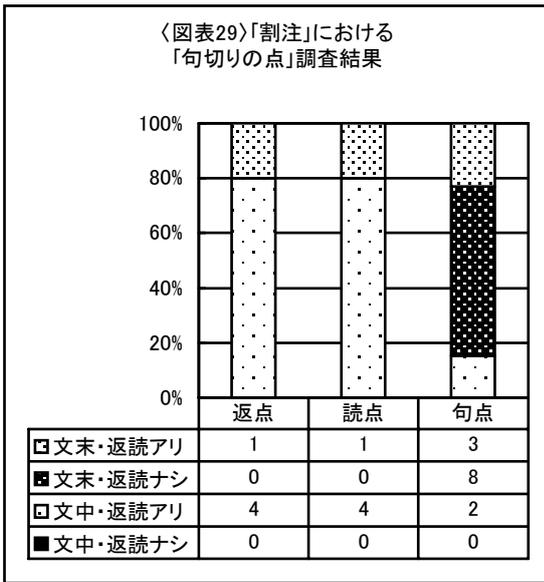
▽割注

〈表14〉

【句点】（全二六例）

A 文末	・ 返読アリ	三例
A 文末	・ 返読ナシ	八例
B 文中	・ 返読アリ	二例
B 文中	・ 返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	一二例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一例

〈図表29〉「割注」における「句切りの点」調査結果



【返点】(全九例)

- A 文末 ・ 返読アリ 一例
- A 文末 ・ 返読ナシ 〇例
- B 文中 ・ 返読アリ 四例
- B 文中 ・ 返読ナシ 〇例
- C 文末文中不明・返読アリ 四例

【読点】(全五例)

- A 文末 ・ 返読アリ 一例
- A 文末 ・ 返読ナシ 〇例
- B 文中 ・ 返読アリ 四例
- B 文中 ・ 返読ナシ 〇例

左下点（返点）は、文末・文中を問わず返読アリに用いられていることにより、返点と見てよいであろうと思う。

右下点（句点）については、返読アリ・返読ナシを問わず文末に用いられていると見て、句点と考えてよいのではないかと思う。文中に二例、例外的な用例が見られることも、右に見た本文部と同様のものと見てよいのではないだろうか。

中下点（読点）は、返読アリに偏って用いられており返点であるかのような傾向が見られるが、本文部との対応から考えてもこれを返点とするよりは、用例数が少ないために、文中・返読ナシの用例がそろわなかったと見た方がよいのではないかと思う。やはり、この中下点（読点）は、文中に多く用いられていると見て、本文部と同様に読点と見るべきではないだろうか。

この割注については、用例数が少ないため断言するのは危険であるかもしれないが、本文部と同じものと見て矛盾するような傾向は見られないようである。このように見ると、割注の所だけ異なった句切りの点が見られていると見るよりも、同様のものと見ておく方がよいのではないかと思う。

四、まとめ

小稿 第三章 第二節で述べたように、訓点資料においては、基本的に句切りの点は併記されていないようである。そのため、先に見た『三蔵』や『不動』前部、『大毘』のように、返点を多く用いれば切点や句点などが返読ナシに偏ってしまうことになり、反対に、本節で見た『秘蔵』のように、句点・読点を多く用いれば返点の使用が制限されてしまう。

この『秘蔵』のように、句点・読点が多く用いられれば、その句点・読点は、返読アリ・返読ナシを問わずに施されるのであるから、そこでは「返読の有無」が示されないことになる。もし「返読の有無」を示すのであれば、返点を併記するか、「一二点」や「雁点（レ点）」などの他の返点を施す必要があるだろう。

このように見ると、この『秘蔵』において句点・読点が多くもちいられていることは、この『秘蔵』が、句切りの点によって「句読」を示す形を取っている資料であると見ることができのではないだろうか。

この点において、先の『三蔵』や『不動』前部、『大毘』のような資料を、句切りの点によって「返読の有無」を示すことに重きを置く資料と見るのであれば、この『秘蔵』は、句切りの点によって「句読」を示すことに重きを置く資料と見ることはできないかと思う。

考えてみるに、もし仮にこの『秘蔵』のように句切りの点によって「句読」を示すという形式が徹底されていったとすると、返点という句切りの点は併記という形で用いられないかぎりはその使用範囲は一層制限され、最終的には全く使用することができなくなるであろう。この点については、後世、「句切りの点」によって「句読」を示し、「一二点」や「雁点（レ点）」などの他の返点によって「返読の有無」を示すというような住み分けが行なわれていることと符合しているように思う。

小林芳規氏（一九七四）によると、この返点（星点の返点）は、ヲコト点と運命を共にし、ヲコト点の一般に衰滅する鎌倉時代以降は次第に用いられなくなるということであるが、或いは、この『秘蔵』に見られるように句切りの点によって「句読」を示すという形式が一般的になっていったということなのかもしれない。今後、このような視点からの調査も必要となってくるのではないかと思う。

第二項 高野山西南院蔵『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点における句切りの点

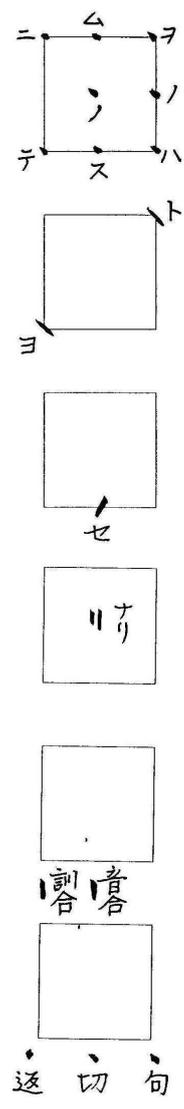
一、はじめに

本項においては、本節第一項の『秘蔵』と同様の傾向にある資料の例として、高野山西南院蔵『北斗七星護摩秘要儀軌』院政期点（以下、『北斗』と略す）を取り上げる。

二、資料について

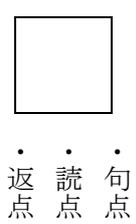
西崎亨（一九九五）によると、この『北斗』は、粘葉装本で各紙七行の五丁よりなるということである。奥書・識語はないが、西崎氏は、院政期頃の書写・加点になると推定されている。所用フコト点は、第五群点に属するものであるが、築島裕氏（一九八六）が「浄光房点ト円堂点トノ混用力」とされるものである。西崎氏によると、フコト点図は、次のように帰納されるといふことである。

〔図43〕フコト点図



西崎氏のフコト点図（図43）によると、句切りの点は、右から順に「句」「切」「返」となっているということであるが、西崎氏は、本章第三節第一項に見た『大毘』のフコト点図において、右から句点・不返点・返点と見られる句切りの点をそれぞれ「切」「句」「返」とされていることから考えて、特に「句」「切」については、小稿で言うところの句点・切点を表しているとは一概には言えないように思う。ただし、西崎氏の同書の訓読文では、右の図43の「句」を「。」、「切」を「、」で示しているようであるから、西崎氏は、恐らく、

〔図44〕



と見ておられるのであろうと思う。小稿の調査でも、右と同様の結論が得られたので、以下、句切りの点の名称は、この図44によることにする。

なお、本項の調査資料としては、西崎氏（一九九五）『高野山
西南院藏訓点資料の研究』の影印を用い、訓読文も同書によった。

三、句切りの点の使用状況

以下に、句切りの点の用例を挙げ、その加点傾向の調査結果を表15、図表30として示した。

〈用例〉

【句点】

〔83〕 於^シ 靜室中^ニ 作^ツ 一水壇^ヲ。（二オ五）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕 靜室中に於^シ 一水壇を作^ツレ。

〔84〕 食^ク 謂^フ 飯^ヲ 腦菓^ト 餅蘓蜜^等。（二ウ二）（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 食は謂^フ（ハ）ク、飯^ヲ 腦菓^ト 餅蘓蜜^等ナリ。

〔85〕 不^シ 視^ス 異^ト 恠^ヲ 疫病死^亡 不起^シ 境内^ニ。（五オ一）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕 異^ト 恠^ヲ 視^ス（セ）不^シテ。疫病死^亡 境内^ニに起^ラ不^シ。

〔86〕 或圓或方^各 足^セ 一肘^ニ。（二オ五）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕或(ハ)圓(ニテ)或(ハ)方(ニテ)。各一肘(三)足セ。

【読点】

〔87〕今作曼茶羅・(ニオニ) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕今曼茶羅ヲ作ル、

〔88〕降臨此處・納受護摩・擁護 (ニオニ) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕此(ノ)處ニ降臨(シ)テ、護摩ヲ納受(シ)テ、擁護(シ)テ

〔89〕次誦一字頂輪王真言・并召北斗七星真言 (ニオニ) (文中・返読ナシ)

〔訓読文〕次(ニ)一字頂輪王真言、并(セテ)召北斗七星真言を誦せよ。

〔90〕謂・北斗七星者日月五星之精也 (ニウニ) (文末文中不明・返読ナシ)

〔訓読文〕謂(ハク)、北斗七星と者日月の五星(ノ)〔之〕精也。

【返点】

〔91〕擲之於爐内・火烧之 (三オニ) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕之を擲(シ)テ、〔於〕爐の内に、火に之を焼ケ。

〔表 15〕 調査結果

◎「本文」

【句点】(全三八例)

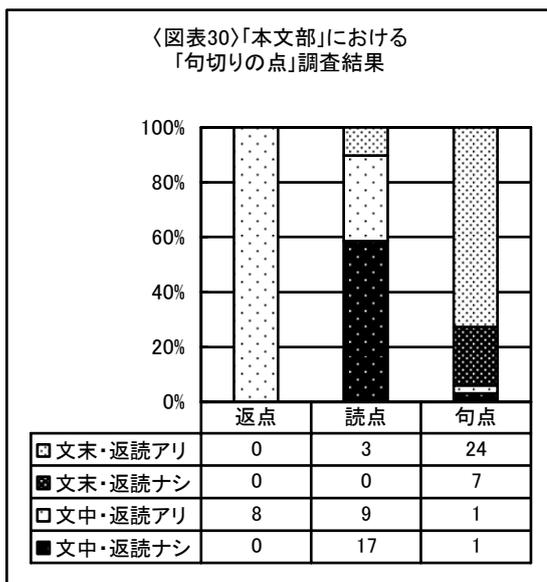
A 文末	・ 返読アリ	二四例
A 文末	・ 返読ナシ	七例
B 文中	・ 返読アリ	一例
B 文中	・ 返読ナシ	一例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	三例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	一例
(返点併記)		
		一例 (返点と重複)

【読点】(全三三例)

A 文末	・ 返読アリ	三例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	九例
B 文中	・ 返読ナシ	一七例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	一例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	三例

【返点】(全一八例)

A 文末	・ 返読アリ	〇例
A 文末	・ 返読ナシ	〇例
B 文中	・ 返読アリ	八例



左の図表30は、右の表15のうち、陀羅尼の用例と、「C(C)文末文中不明」などのように、訓み方の明らかでない用例を除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。

◎陀羅尼
【読点】 九例

B 文中
・ 返読ナシ
○ 例

C 文末文中不明・返読アリ
九例

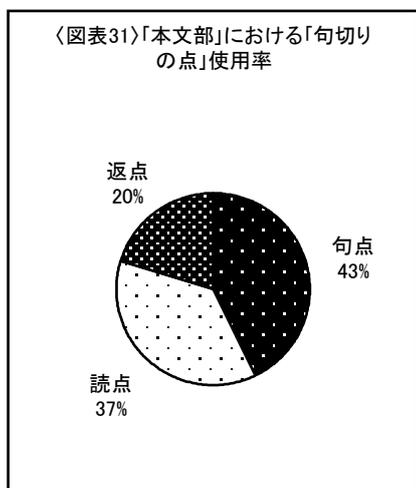
C 文末文中不明・返読アリ (句点併記)
一例 (句点と重複)

右の図表30に示したように、右下点（句点）が返読アリ・返読ナシを問わずに文末に偏り、中下点（読点）が返読アリ・返読ナシを問わずに文中に偏るといふ相補的な偏りが見られることから考えて、右下点を句点、中下点を読点と見てよいではないかと思う。文中に打たれた句点二例と文末に打たれた読点三例とが問題となるが、このような例については、本節第一項の『秘蔵』のところで述べたように、句点が施されたところに文中となるような別訓が存するなど、文末・文中の形となる両訓が併記されていると見て、例外としなくてもよいのではないかと思う。勿論、誤点や汚れなどの可能性も考慮すべきである。

左下点（返点）は、文中にしか用いられておらず、これが読点である可能性も考慮すべきであろうが、小林芳規氏（一九七四）によると、星点の返点の加点点位置は、漢字の左下が普通であるということなので、やはり返点と見てよいのではないかと思う。文中に偏っているのは、用例数が少ないために文末の用例が出なかった可能性もあるが、このような傾向は、後の本章第五節で取り上げる高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法』承暦点、高山寺蔵『十二天法』平安後期点にも見られる。

先の『三蔵』（本章第一節）において、文末・文中を問わずに用いられるべき切点が多量に用いられていることを述べたが、もしその傾向が、当時の加点点者が文末の句切りを示すことに特に関心を持っていたことの表れであるならば、右の『北斗』における傾向は、この『北斗』が「句読」を示す句切りの点を施す中で、特に文末を示すことを徹底したことによって生じた可能性があるかもしれない。つまり、文末の場合に、「返読の有無」（返点）を示すことよりも「句読」（句点）を示すことに重きが置かれ句切りの点が打たれたということである。

本項で取り上げた『北斗』は、句点・読点を用いていること、そして右のような返点の偏りを鑑みても、やはり「句読」を示すことに重きを置く資料と見てよいであろうと思う。この点については、句切りの点の用例数を見ても、下の図表31に示すように、返点よりも句点・読点が多く用いられる形になっている。



※「句点」三八例、「読点」三三例、「返点」一八例。

四、まとめ

句切りの点が併記されないものであるとすると、「句読」を示すことに重きが置かれ、句点・読点が多く用いられるようになればなるほど、返点の使用範囲はせばまっていくであろう。その点において、この『北斗』における返点が文中に偏って用いられていることは、一用例数が少ないため注意が必要であるが、「句読」のひとつとして文末が徹底して示された結果である可能性があらう。

もしこの偏りが、返点が句点・読点の影響を受けた結果であるならば、そのように句点・読点と影響関係にある返点も、やはり小稿で述べるように、句切りの点として検討してみる必要があるのではないだろうか。

また、句点・読点などの「句読」を示す句切りの点と、返点・不返点などの「返読の有無」を示す句切りの点の関係を見ていく際には、この『北斗』における返点のように偏った用いられ方がなされている例などについても注意しておく必要があるのではないだろうか。

第五節 高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法』承暦点、高山寺蔵『十二天法』平安後期点における句切りの点

— 文末を示すことに重きのある資料 —

第一項 高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法』承暦点における句切りの点

一、はじめに

本項においては、高野山西南院蔵『聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法』承暦点（以下、『聖燄』と略す）を取り上げたい。

この『聖燄』における中下点は、返読ナシに偏り、また更に文中に偏るといふ、不返点とも読点とも取れるような傾向を見せている。また、左下点も返読アリに偏るといふ返点としての傾向を見せながら文中に偏るといふ読点であるかのような傾向も見せている。

本項では、この『聖燄』の句切りの点がどのように用いられているかを示すとともに、なぜこのような傾向が見られるのかということについても考察したいと思う。

二、資料について

西崎亨氏（一九九五）によると、この『聖燄』は、本文一九丁の粘葉装の細長本で各紙四行よりなっているということである。卷末（一九丁オ）に墨書で、

承暦三年十一月十四日真慈悲寺天之受讀了

增長嚴

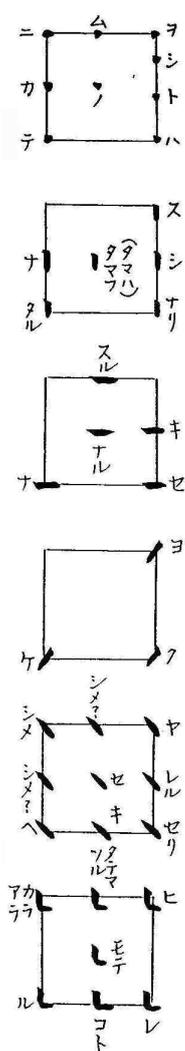
とあり、承暦三年（一〇七九年）の加点と見てよいようである。書写年代については識語がないので明らかではないが、築島裕氏（一九八六）は、平安時代後期とされている。

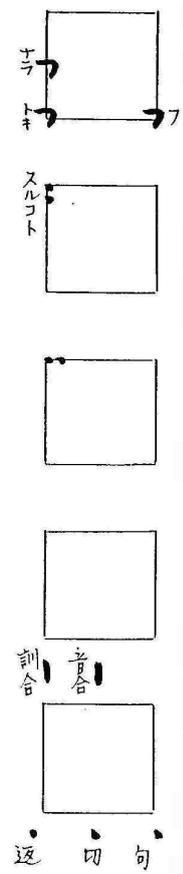
西崎氏によると、この『聖燄』の訓点は、全巻にわたって白点によって施されており、朱点・墨点がごくわずかに見られるということである。

所用ヲコト点は、第五群点に属するもので、西崎氏は、次のように帰納されている。

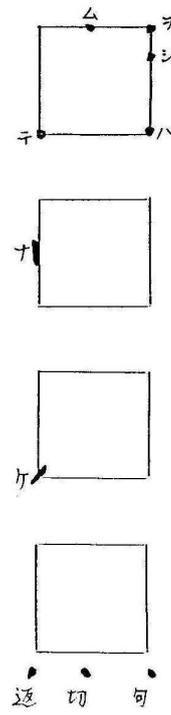
〈図 45〉ヲコト点図

《白点》

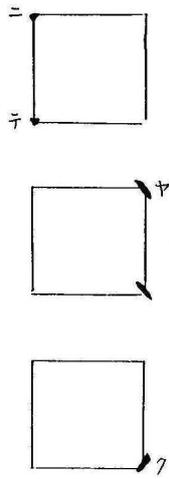




《朱点》



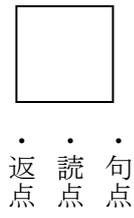
《墨点》



この西崎氏のヲコト点図(図45)によると、白点・朱点にのみ句切りの点が見られ、墨点には句切りの点は見られないようである。また、その白点・朱点とも、右から「句」「切」「返」という形で同様の句切りの点が見られているということである。

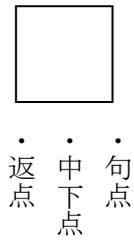
西崎氏が同書において作成された訓読文によると、右下点(句)を「」、中下点(切)を「|」という形で訓読されているようなので、恐らく、西崎氏は、

〔図 46〕



と見ておられるのであろうと思うが、「切」という名称をどのような意味で用いておられるのかについては詳細は明らかではない。小稿の調査によると、特に中下点についてその加點傾向をどのように読み解くべきかが難しく、確定的な結論が出にくい。そこで、ここでは断定せずに、左のようにおきたいと思う。

〔図 47〕



以下、句切りの点の名称は、この図 47 による。

なお、本節では、調査資料として、西崎氏（一九九五）『高山 西南院藏訓点資料の研究』の影印を用い、訓読文も同書によった。

三、句切りの点の使用状況

ここでは、この『聖籙』における句切りの点がどのような句切りを示しているのかということを見てみたいと思う。

まず、『聖籙』における句切りの点の用例を挙げ、その加點傾向を表 16、図表 32 として示す。

ただし、この『聖燄』の句切りの点は、右に見たように白点と朱点とがあるので、これらを分けて見ていくことにした。また、陀羅尼が存するので、その部分は別にして検討を行なった。

《白点》

《用例》

◎本文部

【句点】

〔92〕真言句中安^{オケ}彼人名。(五ウ三) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕真言の句の中に彼の人の名を安^オケ。

〔93〕其身・長大无量由句。(二オ二) (文末・返読ナシ)

〔訓読文〕其の身、長大にて「にて」无量由句なり。

〔94〕念誦・畢已當出道場。(一八ウ三) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕念誦、畢へ已て當に道場を出て。

〔95〕顧視四方如師子奮迅。(二オ二) (文末文中不明・返読アリ)

〔訓読文〕四方を顧視すること▲師子の奮迅するに如(タリ)。

〔96〕即成。(二一オ二) (文末文中不明・返読ナシ)

〔訓読文〕即(チ)成(ル)。

〔97〕恐怖不安（四オ二）（白点句点・朱点句点併記・文末・返読アリ）

〔訓読文〕恐怖『オ』（シ）て安カ（ラ）不シ。「。」「」

〔98〕取鳥翅ツハサ一百八枚・搵芥子油於三角爐中燒（八オ二）（白点句点・朱点中下点併記・文末・返読ナシ）

〔訓読文〕鳥の翅ツハサ一百八枚を取て・芥子の油に搵メて・三角の爐の中に〔於〕燒ケ。「『、』」

【中下点】

〔99〕其家・国界災・起・疫病旱澇（二〇オ三）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕其の家、国界に災、起キて、疫病し旱澇カムラウ「ラ」ウ（セ）む。

〔100〕満一月已設觀嘯即坐臥不安・遠走而去（六オ二）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕一月を満シて・已ナは設觀嘯、即チ坐臥シ、安カ不シて・遠く、走て〔而〕去ラむ。

〔101〕尔時威徳王・白佛言（四オ二）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕時に〔尔〕威徳王、佛ニ白シテ言ク、

【返点】

〔102〕畫了結鏹印・按彼心上・誦真言加持（五オ二）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕 畫き了て鋤(ノ)印を結て、彼の心の上を按シて、真言を誦(シ)て、加持(セ)よ。

〔103〕 聞此真言不随順教法者尚能銷融。(四才三) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕 此の真言を聞て、教法に随順せざる者、尚(ホ)能(ク)、銷融(ス)と。

〔104〕 以二榑釘左右三肩。(七才二) (文末文中不明・返読アリ)

〔訓読文〕 二の榑を以(テ)、左右の二の肩に釘て。

〔105〕 於世間作障者所居宮殿皆大震動。(三ウ四) (白点返点・朱点返点併記・文中・返読アリ)

〔訓読文〕 世間に〔於〕障を作れる者、〔ノ〕所居の宮殿、皆、大(キ)に震動(ス)と。

◎陀羅尼

【中下点】

〔106〕 曩莫二滿多没駄喃・阿鉢囉合底賀多。(二才三)

〔表 16〕 調査結果

◎本文部

【句点】 (全一五四例)

A 文末
・ 返読アリ

八九例

A 文末
・ 返読ナシ

四一例

B 文中
・ 返読アリ

一例

B 文中 ・ 返読ナシ ○ 例
 C 文末文中不明・返読アリ 二〇 例
 C 文末文中不明・返読ナシ 一 例
 A 文末 ・ 返読アリ (朱点句点併記) 一 例 (朱点句点と重複)
 A 文末 ・ 返読ナシ (朱点中下点併記) 一 例 (朱点中下点と重複)

【中下点】(全一五〇例)

A 文末 ・ 返読アリ ○ 例
 A 文末 ・ 返読ナシ ○ 例
 B 文中 ・ 返読アリ ○ 例
 B 文中 ・ 返読ナシ 八三 例
 C 文末文中不明・返読ナシ 六七 例

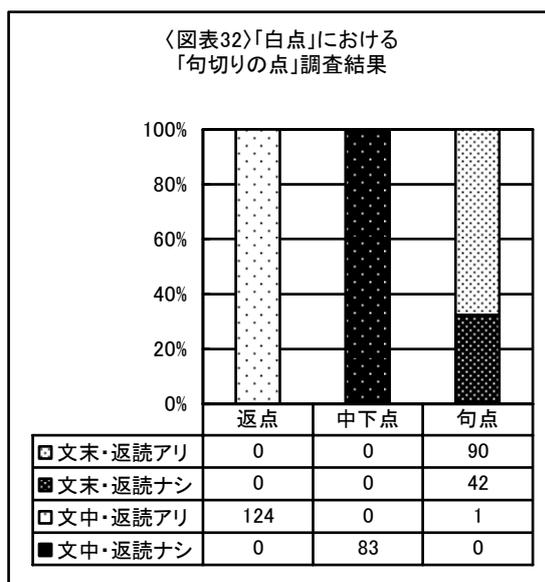
【返点】(全一三八例)

A 文末 ・ 返読アリ ○ 例
 A 文末 ・ 返読ナシ ○ 例
 B 文中 ・ 返読アリ 一二三 例
 B 文中 ・ 返読ナシ ○ 例
 C 文末文中不明・返読アリ 一四 例
 B 文中 ・ 返読アリ (朱点返点併記) 一 例 (朱点返点と重複)

◎陀羅尼

【中下点】 一二三 例 (+補入一例)

左の図表32は、右の表16のうち、陀羅尼の用例と、「C(C) 文末文中不明」などのように訓み方が明らかでない用例とを除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。



※ただし、以下のように併記例を含む(表16参照)。

「句点」文末・返読アリ」九〇例：「朱点」「句点」一例。

「句点」文末・返読ナシ」四二例：「朱点」「中下点」一例。

「返点」「文中・返読アリ」九〇例：「朱点」「返点」一例。

〈表17〉

文末・返読アリ …… 句点単独。

文末・返読ナシ …… 句点単独。
文中・返読アリ …… 返点単独。(或いは、句点単独?)
文中・返読ナシ …… 中下点単独。

右の図表 32 に示したように、右下点(句点)は、返読アリ・返読ナシを問わず文末に用いられているので、句点と見て問題はないのではないかと思う。この点については、用例数も多くほぼ確実と見てよいのではないかと思う(この句点の文中・返読アリの一例については、誤点や汚れなど見てよいのではないかと思う)。

返点についても、小林芳規氏(一九七四)によると、訓点資料において返点は漢字の左下に配置されるのが普通であるということであり、また、右の図表 32 でも返読アリにのみ用いられているので、恐らく返点であろうと思う。ただ、これが文中にのみ用いられ、文末に用いられていないことに問題はある。

中下点については、文中にのみ用いられていることから、これを句点と対する所の読点と見ることもできるであろうが、その時、対する句点が、返読アリ・返読ナシを問わずに用いられているのに比べると、当該の中下点が、返読ナシにしか用いられていないことが不審である。もしこの中下点が文中を示すものであるならば、先の『秘蔵』『北斗』(本章 第四節)における読点のように返読アリにも用いられていてもよさそうである。この点において、この中下点は、積極的に「文中の句切り」を示すものではなく、句点によって示すことのできない句切りに用いられたために、結果的に文中に偏ってしまった可能性があるかもしれない。

そのように、もし中下点が読点ではなかったとすると、その中下点が返読ナシに偏る傾向が改めて注目される。この傾向は、先の『大毘』における不返点に類似した傾向であるからである。しかし、先の『大毘』の不返点は、文末・文中を問わずに用いられていたが、この中下点は、文中にしか用いられていない点において不審である。もし不返点であるならば、文末の返読ナシを示すのにも用いられるのではないだろうか。そのように見ると、この傾向についても、当該の中下点が、返点によって示すことのできない句切りに用いられたために、結果的に返読ナシに偏ってしまった可能性が考えられるかもしれない。

このように見てみると、この『聖籙』における中下点は、読点としても返点が用いられる返読アリの部分にまで踏み込んでその「文中の句切り」を示すことができず、また、不返点としても句点が用いられる文末の部分に踏み込んでその「返読のない句切り」を示すことができな

いというような、読点としても不返点としても不完全なものとなっているようである。

筆者が思うに、この中下点にそのような傾向が見られることについては、この『聖燄』という資料において、どのような句切りを示すことに重きが置かれているかということと関わる問題ではないかと思う。

小稿 第三章 第二節で述べたように、句切りの点は基本的に併記されないようであるから、例えば、文末・返読アリという箇所では、一併記がなされないのであれば―句点と返点のどちらを施すかというような選択が行なわれることになる。

これを踏まえて傾向を見るに、最も制限を受けずに自由に用いられているのは句点であろう。この句点は、返読アリの箇所であっても返点によって影響を受けずに―或いは、制限を受けずに―用いられており、また、中下点によっても何らかの影響を受けているようには思われな。この点において、この『聖燄』において最も重きが置かれているのは、「文末を示すこと」であると見てよいのではないかと思う。このことは、『三蔵』において切点が文末に多く用いられていたこと、そして、『大毘』において読点が存せず句点のみが用いられていたことに通じているように思う。

そして、この句点に次ぐのが返点であろうと思う。この返点は、文末においては句点にその句切りの点としての座を譲っているものの、文中においては、「返読のあることを示す」という返点の機能を十分に發揮していると見てよいのではないかと思うからである。

最後に、句切りの点として最も低く位置づけられるのが中下点ではないかと思う。この中下点は、見方によっては、句点の用いられる文末と、返点の用いられる返読アリとを避けた形で用いられていると見ることができるよう思う。或いは、右に見たように、読点としても不返点としても不完全であるかのような加点傾向が見られるのはそのためであるのかもしれない。

このように考えると、この中下点については、いくつかの可能性が考えられるように思う。

(1) 「中下点」が「読点」である可能性。

まず、一つめは、中下点が読点である可能性である。

この時、問題となるのは、この中下点が返読ナシにしか用いられていないことである。これについては、先に見た『三蔵』や『不動』前

部、そして『大毘』における加點傾向によって、ある程度は説明が可能かもしれない。

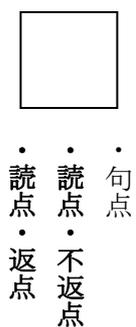
先に見た『三蔵』、『不動』前部においては、文末・返読アリの場合には返点とともに切点を併記するのに対し、文中・返読アリにおいては返点のみで済ませていた。そして、『大毘』においては文末を示す句点のみ存し、文中を示す読点が存していなかった。

これらの点から考えるに、訓点資料においては、「文末の句切りを示すこと」ほどには「文中の句切りを示すこと」に積極的ではない可能性があり、また、その点において、文中ではその「文中の句切りを示すこと（切点・読点）」よりも「返読の有無を示すこと（返点）」が優先される可能性があるのではないかと思う。

このように見ることが可能であれば、この『聖燄』において、その中下点が仮に読点であったとしても、文中・返読アリの場合に返点にその座を譲った形で―即ち、文中・返読ナシに偏った形で―用いられた可能性はあるのかもしれない。

或いは、可能性としては、そのように「文中の句切りを示すこと」よりも「返読の有無を示すこと」の方に関心の向く文中においてのみ、「返読の有無」を書き分け、

〈図 48〉



という書き分けを積極的に行なっている可能性もあるかもしれない。

(2) 「中下点」が「不返点」である可能性。

二つめは、中下点が不返点である可能性である。

この時、問題となるのは、この不返点が文中にしか用いられていないことである。これは、一見、大きな問題であるようにも思われるが、先に見た『大毘』の傾向と比較してみると、

〔表18〕『聖燄』における句切りの点

- 文末・返読アリ …… 句点単独。
- 文末・返読ナシ …… 句点単独。
- 文中・返読アリ …… 返点単独。
- 文中・返読ナシ …… 不返点※単独。

※今、仮に「中下点」を「不返点」と見る。

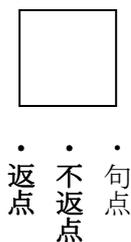
〔表19〕『大毘』における句切りの点

- 文末・返読アリ …… 句点・返点併記。或いは、返点単独。
- 文末・返読ナシ …… 句点単独。或いは、不返点単独。
- 文中・返読アリ …… 返点単独。
- 文中・返読ナシ …… 不返点単独。

のように大きく異なるのは太字で示した箇所、つまり、文末・返読アリにおいて返点が併記されること、或いは返点が単独で示されること
 があること、そして、文末・返読ナシにおいて不返点が単独で示されることのみである。これらは、全て「返読の有無に関わる句切りの点
 (返点・不返点)」が用いられたことによる相違である。つまり、『大毘』の形(表19)から、「文末を示すこと(句点)」を徹底させ、句
 点のみで示す形を取ると―即ち句点単独の形を取り、併記の形をなくすと―、その相違点となっている「返読の有無に関わる句切りの点(返
 点・不返点)」は除かれ、『聖燄』の形(表18)になるのである。

このように見ることができるのであれば、この『聖燄』は、『大毘』のように、

〔図49〕



という「返読の有無」を示す形から、「文末の句切りを示すこと（句点）」を徹底させたものと見るができるかもしれない。

(3) 「中下点」が積極的に何らかの句切りを示すというのではなく、句点の示す「文末の句切り」と、返点の示す「返読のある句切り」とによって示すことのできない句切り―即ち「文中・返読ナシ」―に用いられている可能性。

先に述べたように、この中下点は、読点としても返読アリには用いられておらず、また、不返点としても文末に用いられておらず、いずれにしても不完全な形で用いられていることになる。

この点から考えるに、可能性としては、この中下点が、積極的に文中（読点）や返読ナシ（不返点）を示すものではなく、結果的に文中や返読ナシに偏って用いられることになった可能性も考えておくべきであろうと思う。

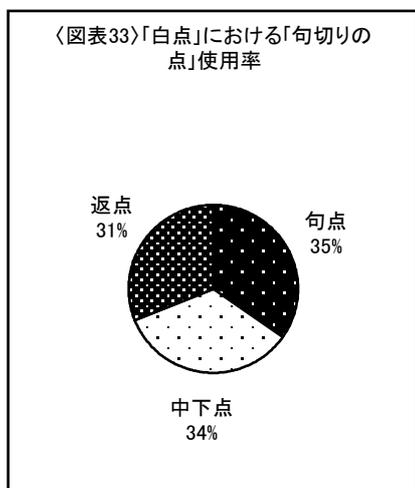
先の『三蔵』や『不動』前部、『大毘』においては、返読アリ（返点）と文末（切点・句点）の表記が中心と見てよいであろうから、可能性としては、それ以外の句切りを示す句切りの点が用いられる可能性もあるのではないだろうか。

以上のように、中下点の解釈の可能性として(1) (3)を挙げたが、勿論、これら以外の解釈も可能であるかもしれない。いずれにせよ、小稿で取り上げるような少ない資料をもとに結論を出すのは危険であろう。

これに関連して、この『聖燄』における句切りの点の使用率についても、下の図表33に示すように、どのようなことながら重きを置いた資料であるのか、明確にしにくい形となっている。

問題となっている中下点を「句読」に関わるもの（読点）と見るか、「返読の有無」に関わるもの（不返点）と見るかによって、この図表33の解釈は大きく変わってくる。中下点を読点と見れば、句切りの点によって「句読」を書き分ける資料と見ることができようし、また「反対に、中下点を不返点と見れば、句切りの点によって「返読の有無」を書き分ける資料と見ることができよう。或いは、その「句読」を書き分ける資料と、「返読の有無」を書き分ける資料の間的なものと見る見方もできるかもしれない。

※「句点」一五四例、「中下点」一五〇例、「返点」一三八例。



この『聖燄』の加点傾向については、この偏りが有意なものであるのかどうか、もつと多くの資料を調査し、この『聖燄』をどのように位置づければよいのか考察してみる必要があるのではないかと思う。今後の課題としたい。

以下には、この『聖燄』の朱点における加点傾向を見てみたいと思う。

《朱点》

◎本文部

【句点】

〔107〕能・令所作之法・速得成就。 (二三才一) (文末・返読アリ)

〈訓読文〉 能(ク)、所作(ノ)〔之〕法を令て▲速に成就すること得令む『。』

【中下点】

〔108〕底・畫彼人形。 (四ウ三)

〈訓読文〉 底ソコニに『、』彼の人の形を畫け。

【返点】

〔109〕於一淨室・作三角壇。 (四ウ二) (文末・返読アリ)

〈訓読文〉 一ノ淨室に〔於〕▲三(争)角(下)の壇『を』作れ▲

〔110〕其捨觀噓即患病吐血而死。 (七才四) (文中・返読アリ)

〔訓読文〕其(レ)觀(ヲ)捨(テ)即(チ)患病(シ)『て』血『を』吐^{ハク}『イ』『て』▲〔而〕死(ナ)む。

〔表20〕調査結果

◎本文部

【句点】

- A文末 ・返読アリ 一例
- C文末文中不明・返読アリ 一例
- A文末 ・返読アリ 一例 (白点句点と重複)

【中下点】

- A文末 ・返読ナシ 一例 (白点句点と重複)
- B文中 ・返読ナシ 一例

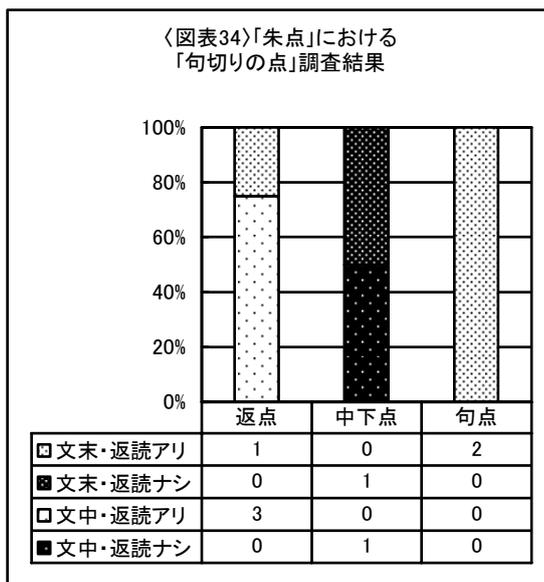
【返点】

- A文末 ・返読アリ 一例
- B文中 ・返読アリ 二例
- B文中 ・返読アリ 一例 (白点返点と重複)

◎陀羅尼

【中下点】

一例



※ただし、以下のように併記例を含む（表20 参照）。

「句点」「文末・返読アリ」二例：「白点」「句点」一例。

「中下点」「文末・返読ナシ」一例：「白点」「句点」一例。

「返点」「文中・返読アリ」三例：「白点」「返点」一例。

この『聖燄』の朱点については、用例数が少ないので明言はできないが、右に見た白点とは異なって、返点は、文中・文末を問わず返読アりに用いられており（白点では文末の例なし）、中下点は、文末・文中を問わず返読ナシに用いられている（白点では文末の例なし）。この点において、この朱点の中下点は不返点と見てよいかもしれない。句点は、文末・返読ナシに用いられていない点において問題がないわけではないが、句点と見てよいのではないかと思う。

このように見ることができれば、この『聖燄』における朱点については、先に見た『大毘』と同様の傾向（前掲の図49の形）に

あると見ることも可能かもしれない。

この『聖燄』の朱点については、用例数は少ないが、もしこの偏りが偶然でないとすれば、或いは、先に見た白点の傾向も『大毘』に近いものと見て、前掲の(1)～(3)のうち、(2)と見るべきなのかもしれない。

四、まとめ

本節で取り上げた『聖燄』の中下点は、「文中・返読ナシ」に偏って用いられている（前掲の図表 32 参照）。従って、もしこれを、先行研究において多くなされているように「句読」という視点のみから検討を行なうと、この中下点は読点と見なされることになるであろう。しかし、先に見た『秘蔵』や『北斗』（本章 第四節）における読点が、文中に用いられる際に返読アリ・返読ナシを問わなかったのに対し、この『聖燄』における中下点は、文中に用いられるものの返読ナシにしか用いられないのである。これらを同じ読点と見るべきであろうか。

筆者が思うに、現時点においては、先の『秘蔵』『北斗』の読点とこの『聖燄』の中下点に見られる相違が何を意味するものであるのか明らかではないが、同じく文中に用いられながら「返読の有無」に関して違いが見られるとすれば、やはり、別に分類して見る必要があるのではないかと思う。もしそのような相違に意味があるとすれば、「句読」という視点からのみの考察を行なっていたのでは何らかの見落としをしてしまうおそれがある。

筆者は、小稿のような調査を行なうことによって、句切りの点の変遷などにおいて、新たな視点を加えることができるのではないかと考えている。

第二項 高山寺蔵『十二天法』平安後期点における句切りの点

一、はじめに

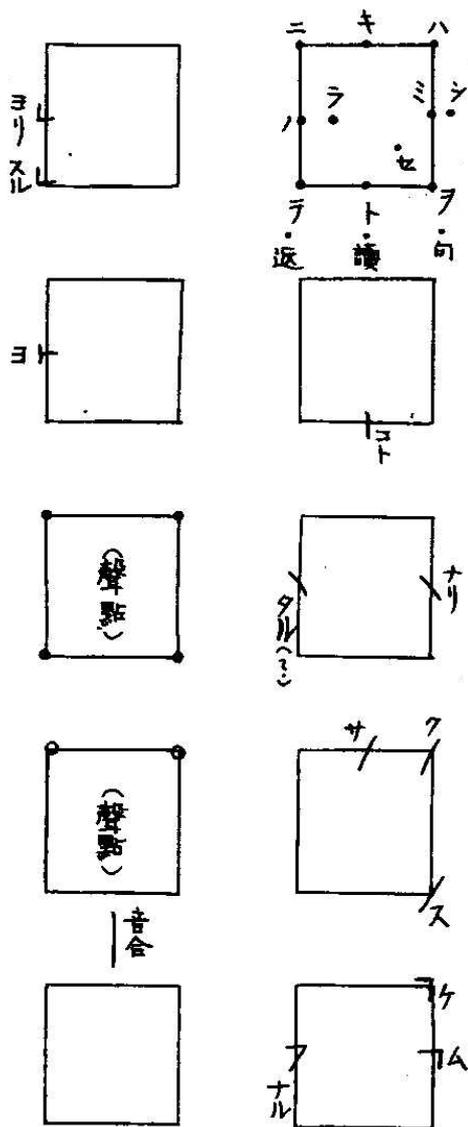
本項においては、本節第一項の『聖飫』と同様の傾向にある資料として、高山寺蔵『十二天法』平安後期点（以下、『十二』と略す）を取り上げる。

二、資料について

松本光隆氏（一九八七）によると、この『十二』は、粘葉装の本で一丁片面七行の一六丁よりなっているということである。奥書はないが、松本氏は、本文の書写・加点を平安時代後期と推定されている。

ヲコト点は、叡山点（第六群点）で、松本氏は、次のように帰納されている。

〔図50〕ヲコト点図



この松本氏のヲコト点図(図50)によると、句切りの点は、右から順に句点・読点・返点と見ておられるようであるが、小稿の調査によると、中下点はわずかに四例しか見られず、また、先の『聖燄』の例から考えて、中下点を読点と断ずることには不安を覚える。そこで、ここでは、左のようにしておきたいと思う。

〔図51〕



以下、句切りの点の名称は、この図51による。

なお、本項の調査資料としては、松本光隆氏(一九八七)「高山寺藏十二天法平安後期点」の模写された原文を用い、訓読文も同論文によった。ただし、その原文には訓点は一切施されておらず、訓点は全て訓読文によって示されているので、調査の際には、訓読文をもとに句切りの点の加点位置を推定しながら行なった。

三、句切りの点の使用状況

この『十二』における加点傾向は、先に見た『聖燄』と同様であるので、用例は省き、その加点傾向のみを表21、図表35として示す。

〔表21〕調査結果

◎本文部

【句点】(全九二例)

A文末 ・返読アリ

四七例

A 文末	・返読ナシ	二六例
B 文中	・返読アリ	〇例
B 文中	・返読ナシ	二例
C 文末文中不明	・返読アリ	一一例
C 文末文中不明	・返読ナシ	四例
A 文末	・返読アリ	二例

(返点併記)
(返点と重複)

【中下点】(全四例)

A 文末	・返読アリ	〇例
A 文末	・返読ナシ	〇例
B 文中	・返読アリ	〇例
B 文中	・返読ナシ	二例
C 文末文中不明	・返読アリ	二例

【返点】(全五五例)

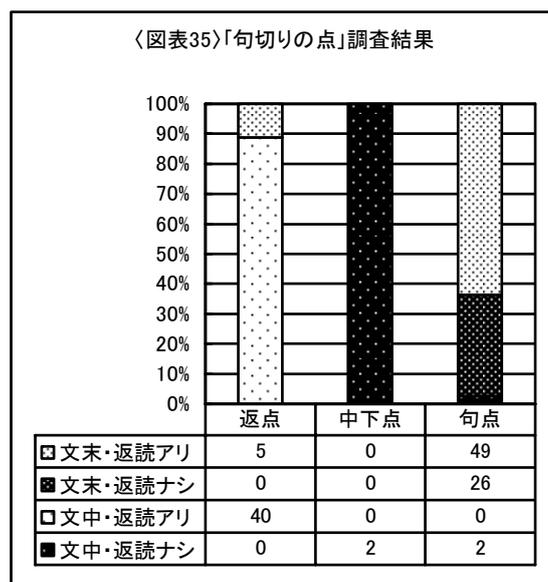
A 文末	・返読アリ	三例
A 文末	・返読ナシ	〇例
B 文中	・返読アリ	四〇例
B 文中	・返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・返読アリ	一〇例
C 文末文中不明	・返読ナシ	二例

(句点併記)
(句点と重複)

◎陀羅尼

【中下点】 二二例

左の図表35は、右の表21のうち、陀羅尼の用例と、「C(C) 文末文中不明」などのように訓み方が明らかでない用例とを除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。



※ただし、「句点」「文末・返読アリ」四九例、「返点」「文末・返読アリ」五例は、それぞれ「返点」との併記例二例、「句点」との併記例二例を含む(表21参照)。

〈表22〉

文末・返読アリ …… 句点単独。或いは、返点単独。或いは、句点・返点併記。

文末・返読ナシ …… 句点単独。
文中・返読アリ …… 返点単独。
文中・返読ナシ …… 中下点単独。(或いは、句点単独?)

図表 35 に示したように、右下点(句点)は、返読アリ・返読ナシを問わず文末に偏って用いられていることから、句点と見てよいのではないかと思う。二例ほど文中に打たれた例が見られるが、句点が文末、返点・中下点が文中という、ある種、相補的な関係が見られることから考えて、この二例は誤点や汚れなどの可能性を考えた方がよいかもしくない。

中下点は、先の『聖燄』と同様に、文中・返読アリに偏って用いられており、また、用例数が二例のみということもあいまって、読点と見るべきか不返点と見るべきか、それともそれ以外の句切りの点と見るべきか明らかでない。ただ、この中下点の全ての用例を見ると、陀羅尼に二例用いられており(表 21 参照)、中下点の多くが陀羅尼に用いられるという傾向は、『不動』前部と同様である(本章 第二節 参照)。意味のある偏りである可能性があるだろう。

返点についても、やはり先の『聖燄』と同様に、文中に偏るという傾向が見られる。『聖燄』と異なっているのは、若干、文末に用いられた例が見られるということである。

先の『聖燄』のところで述べたように、このような資料をどのように位置づけるべきかということについては断言しがたいが、少なくとも返点よりも句点の方が、加点の際に優先されているであろうことは言えるように思う。その点において、『聖燄』やこの『十二』は、読点こそないが、「句読」を示すことに重きを置く資料につながるものである可能性はある。この点においては、「句読」を示すことに重きを置く資料と見られる『北斗』において、用例数が少ないため多少問題はあるが、返点が文中に偏っていることは、これと関連するものとして注意しておく必要があるかもしれない。

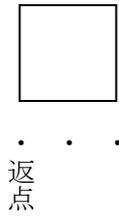
四、まとめ

この『十二』や先の『聖骸』は、ともすれば読点・句点・返点という形で処理されてしまう可能性のある資料である。しかし、実際に調査を行なってみると、その読点に見える中下点はその文中に偏るといふ傾向とともに返読ナシに偏るといふ傾向をも見せ、またその返点も単に返読アリに偏るといふのでなく文中に偏るといふ傾向をも見せるのである。

このような偏りが有意なものであるのか明言はできないけれども、句切りの点の変遷などを見ていく際には、このような調査を試みる必要もあるのではないだろうか。

第六節 仏家点における「句切りの点」――まとめ――

本章で取り上げた資料における句切りの点は、『釈摩』（第三節 第二項）を除いて、全て、



というように、三つの句切りの点が配置された形のものである。

しかし、その句切りの点を、小稿で述べるように、「文末・文中」、「返読アリ・返読ナシ」という形でひとつひとつ分類していくと、その用いられ方は、必ずしも同じではない。

本章第一節で取り上げた『三蔵』においては、



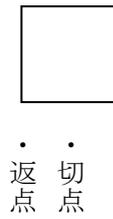
という形で、返点を多用する形で句切りの点が施されている。

第二節で取り上げた『不動』においては、前部と後部とで句切りの点の用いられ方が異なっており、これらを分けて検討する必要があると思われるが、

〈前部〉



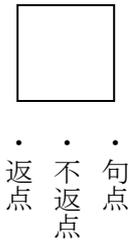
〈後部〉



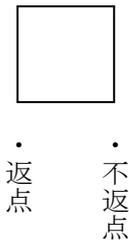
という形で句切りの点がいられており、特に前部については、右の『三蔵』と同様の傾向にあると考えられる。『三蔵』『不動』前部における中下点は、ともに用例数が少なく、これがどのような句切りを示すものであるのか明らかでない点についても同様である。ただし、『不動』前部の中下点が陀羅尼に用いられている点については、『十二』(第五節 第二項)にもその傾向が見られ、この中下点について考察する際の手掛かりとなるかもしれない。

第三節で取り上げた『大毘』(第一項)、『釈摩』(第二項)については、

『大毘』



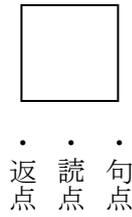
『釈摩』



となつていふと考へられ、以上の資料において返読アリのみを示していたのに対し、返読ナシについてもこれを示していると見られる点異なつてゐる。

以上に示した『三蔵』、『不動』前部、『大毘』、『釈摩』は、句切りの点の中で返点が多く用いられるとともに、返点以外の句切りの点はその返点に制限を受けているかのような傾向が見られ、そのような点からこれらの資料は、「返読の有無」を示すことに重きを置いていると考へられる。

これらに対し、第四節で取り上げた『秘蔵』(第一項)、『北斗』(第二項)は、



という形で句切りの点が用いられており、以上の資料とは異なつて、返点以外の句切りの点が返点の影響を受けているような傾向は見られない。句点にしても読点にしても、返読の有無にかかわらず用いられている。『北斗』においては、反対に返点の方が文中に偏るといふような傾向も見られる。これらの資料は、句点・読点が多用される形になっており、その点において、「句読」に重きを置いていると考へられる。

第五節で取り上げた『聖燄』(第一項)、『十二』(第二項)は、



となっており、中下点が、文中・返読ナシに偏って用いられていることによって、これを読点と見るべきか不返点と見るべきか明らかでない。また、これらの資料においては、返点が、文中に偏って用いられている点についても同様の傾向が見られる。これは、文末・返読アリにおいて、返点よりも句点に重きを置いた加点が行なわれた結果であろうと思う。

その点において、「句読」に重点を置く資料に近いものである可能性はある。或いは、「返読の有無」に重点を置く資料と、「句読」に重点を置く資料の中間的なものである可能性もあるかもしれない。

以上のように資料を通覧すると、訓点資料における句切りの点は、必ずしも「句読」という視点のみから施されるものではなく、少なくとも「返読の有無」ということが関わって用いられていると見るべきではないだろうか。

筆者は、このような句切りの点の用いられ方から見て、句切りの点の変化の流れとして、現在の句読点につながるような、句切りの点を「句読」を書き分けるのに用いる形式『秘蔵』『北斗』に向かう流れと、「返読の有無」を書き分けるのに用いる形式『大毘』『釈摩』に向かう流れとの、少なくとも二つの流れがあった可能性があるのではないかと考えている。

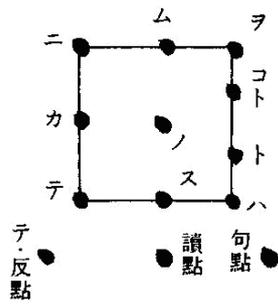
この小稿で述べたような調査方法が、果たして当を得たものであるのかどうかについては、今後も調査を行なっていく必要があるであろうが、小稿の調査によって、同様に三つの句切りの点が用いられた資料間においても、その相違点を見出すことができるということを示すことができたのではないかと思う。

第五章 博士家点における「テのヲ」ト点

序節

本章で取り上げる博士家点は、先に見た仏家点とは異なり、全て第五群点に属している。この博士家点における句切りの点は、例えば、神田本『白氏文集』（本章 第一節 参照）においては、

〔図 52〕 神田本『白氏文集』ヲコト点図（一部）



（太田次男・小林芳規氏（一九八二）による）

のように、右下点が句点、中下点が読点、左下点がテ・返点とされる。この時、先の仏家点と特に異なっているのは、漢字左下のテ・返点である。このテ・返点は、小林芳規氏（一九七四）が、「星点の返点は仏書には基調をなすものとして盛用されるが、漢籍では「て」と兼用のヲコト点として用いるものであって、返点だけには使われない」とされるもので、博士家点に見られ、テのヲコト点と返点とを兼ねると言われるものである。

本章で特に問題とするのは、このテ・返点とされるテのヲコト点である。このテ・返点は、右に示したように返点とされるものであるが、

筆者が思うに、これは、返点とされるような「返読を示すもの」ではなく、「句切りを示すもの」として見るべきではないかと考えている。その点において、小稿では、この「テ・返点」を「テ・切点」と呼ぶことにしている（第一章五参照）。訓読文においても、このテ・切点を、「テ」と「切点」とを合わせたものという意味で、「て、」としてゴシック体で示している（訓読文凡例参照）。

このテ・返点とされる点を、テ・返点とするかテ・切点とするかという問題は、句切りの点を検討する際にも関わってくる問題である。例えば、句切りの点どうしの関係を考える際にも、これをどのように位置づけるかによって、解釈は異なってくる。この点において、本章では、このテ・返点の問題を大きく取り上げてみたいと思う。

このテ・返点の問題を難しくしているのは、右のヲコト点図（図52）に示したように、この博士家点において、テのヲコト点が二種類見られるということである。一つは、「漢字の壺に施されるもの（テのヲコト点）」（以下、「壺のテ」と略す）、もう一つは「漢字の壺から離れた位置に施されるもの（テ・返点）」（以下、「離れたテ」と略す）である。これら二種類のテのヲコト点の違いは、右のヲコト点図（図52）に示したように加点位置の違いである。しかし、実際の訓点資料の上では、第三章第二節で述べたように、訓点の加点位置は必ずしも正確なものではないから、つまり、これら二点の判別は、かなり恣意的なものになってしまうのである。例を示すと、例えば、右にヲコト点図を挙げた神田本『白氏文集』では、次に示すようにテのヲコト点が用いられている。

〔111〕 觀舞聽歌知樂意（三／四五）

（訓読文） 舞を觀、歌を聽（キ）て、樂（音、角音）の意を又（又）。

〔112〕 雲陰月黒風沙惡（三／三五六）

（訓読文） 雲陰（クモ）リ、月黒（クラ）ク（シ）て、風（カゼ）・沙（スナ）・惡（アク）シ。

用例111は、テのヲコト点が施された所から返読される例である。この例は、「歌」字から返読され、「聴」字を訓んだ後、「聴きて」という形でテのヲコト点が訓まれている。用例112は、テのヲコト点[・]が施された所から返読されない例である。この例は、「黒くして」という形でテのヲコト点[・]が訓まれている（それぞれ訓読文を参照のこと）。

用例111の場合は、返読のある箇所であるので、このテのヲコト点[・]は離れたテであると見て問題はないであろう。もしこれが壺のテであれば、「歌」字に何らかの形で「て」を付けた訓じ方をしなくてはならなくなる。

テのヲコト点の判別で問題となるのは、用例112のような場合である。この用例112のような場合は、離れたテをテ・返点とする見方では、そのテのヲコト点の施された箇所は返読のある箇所ではないから、テのヲコト点[・]は必然的に壺のテ（テのヲコト点）であると判断されることになる。一方、小稿で述べるように離れたテをテ・切点とする見方では、そのテのヲコト点[・]が施された箇所は句切りとなる箇所であるので、これをテ・切点と見てもよいことになる。無論、壺のテ（テのヲコト点）と見ることも可能である。

ここで問題なのは、右のような判別方法では、

◎「離れたテ」を「テ・返点」とする見方を取る場合

- ・ 返読のある場合 ↓ テ・返点
- ・ 返読のない場合 ↓ 壺のテ（テのヲコト点）

◎「離れたテ」を「テ・切点」とする見方を取る場合

- ・ 句切りとなる場合 ↓ テ・切点
- ・ 句切りとならない場合 ↓ 壺のテ（テのヲコト点）

というように、加点位置いかに関わらず、自らに都合のよいように、離れたテと壺のテとを判別してしまうことになるということである。これでは、離れたテが一体どのようなことを示しているのか明らかにすることはできないのではないだろうか。

このテ・返点の問題―即ち離れたテがテ・返点であるのかテ・切点であるのかという問題―を解決するためには、次のような方法があるのではないかと思う。

- (1) 壺のテと離れたテとを加点位置によって正確に書き分けている資料を調査する。
- (2) 壺のテと離れたテとの加点位置が正確なものではなくても、離れたテを解釈する上で手掛かりとなるような傾向が見られる資料を調査する。

この点において、本章では、(1)の例として神田本『白氏文集』を取り上げ、以下の第一節で検討を行なっている。(2)の例としては、岩崎本『日本書紀』巻第二十二推古紀を取り上げ、続く第二節で検討を行なっている。

第一節 神田本『白氏文集』における「テのヲコト点」

一、はじめに

本節においては、神田本『白氏文集』(以下、『白氏』と略す)を取り上げ、その「離れたテ^ㇿ」が「テ・返点」とされるような「返点^ㇿ」ではなく、「句切りの点^ㇿ」であることを述べたいと思う。

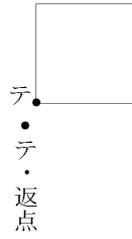
先に述べたように、博士家点における離れたテを、テ・返点であるのか、テ・切点であるのかということを考察するに当たり、まず問題となるのは、左の図53のように、漢字の壺左下に壺のテ^ㇿが存することである。離れたテの加点傾向を見るためには、まずこれら壺のテと離れ

⁵³ 小稿では、「漢字の壺から離れた位置に施されるテのヲコト点」のことを「離れたテ」という。これはその加点位置による呼称で、小稿でいうところの「テ・切点」のことである(第一章五参照)。

⁵⁴ 小稿では、「漢字の壺に施されるテのヲコト点」を「離れたテ」に対して「壺のテ」という。これは、他のヲコト点と同様に「テ」を示すヲコト点である。(第一章五参照)。

たテとを分ける必要がある。しかし、実際問題として、訓点資料においては、このような微妙な加点位位置による書き分けが明確でない場合があり（第三章 第二節 参照）、そのため、離れたテについての考察が困難であることが少なくない。

〈図 53〉



本節で取り上げた『白氏』は、以下に述べるように、その壺のテと離れたテとを加点位位置によってかなり正確に書き分けていると見られる資料である。筆者は、この『白氏』における離れたテを調査することによって、この離れたテが、テ・返点ではなく、テ・切点とも言うべき句切りの点であることを述べたいと思う。

二、資料について

本節で取り上げる『白氏』は、太田次男氏（一九八二）によると、卷三、卷四の二軸が存している。そして、卷三尾に、

嘉承二年五月五日〔以〕未時書寫畢／〔于時看俵之射聞郭公之聲〕／藤原知明^{〔別時筆〕改茂明}

天永四年三月廿八日^{〔一三三〕}雨申時^{〔一〇七〕}雨中點了／藤原茂明

とあり、卷四尾には、書写奥書はないが、

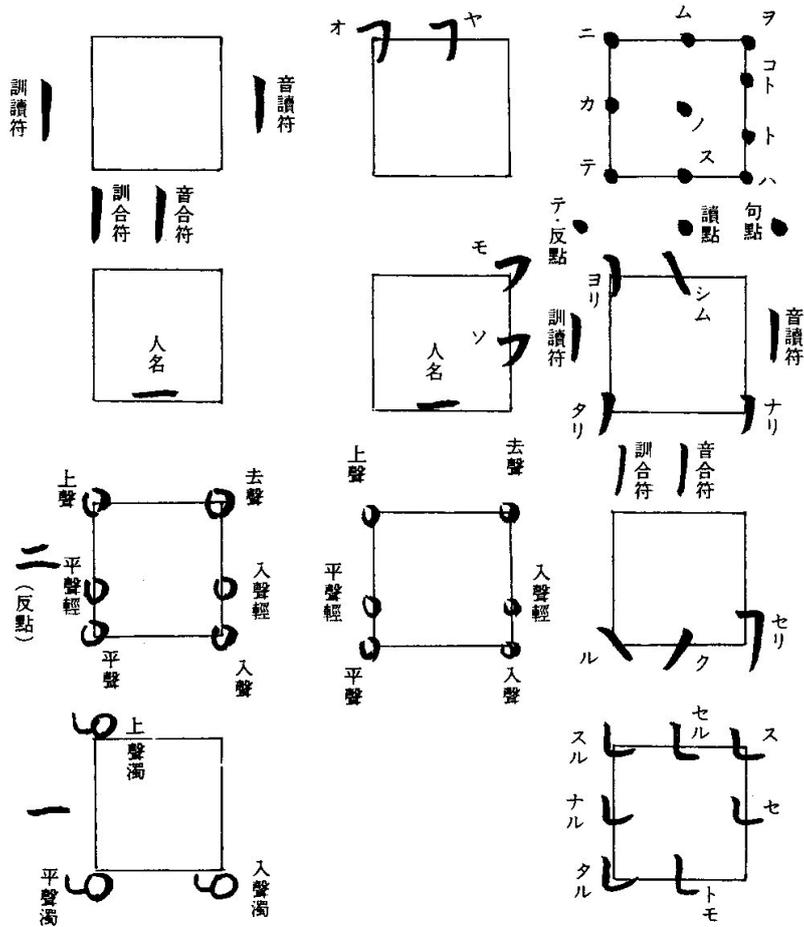
天永四年三月廿八日點了／藤原茂明

とある。太田氏によると、卷三、卷四の本文は同筆ではないので、別々に書写された本文に、両巻を通じて、同じ時期に加点されたものであ

るということである。

『白氏』の所用ヲコト点は、築島裕氏（一九八六）が、古紀伝点（第五群点）とされるもので、太田次男・小林芳規両氏（一九八二）によると、左のように帰納されるということである。

〔図54〕ヲコト点図



右のヲユト点図(図54)においては、離れたテを、テ・反点として、返点と見ているようである。小稿においては、これが返点ではないのではないかということ、以下に述べていきたいと思う。

なお、本節の調査資料としては、太田・小林両氏(一九八二)『神田本白氏文集の研究』の影印を用い、訓読文についても同書によった。また、本節で調査対象としたのは本文部の朱点「・」のみであり、墨点、星点「一」、線点「二」、割注や補入等は調査から除いた。

三、「壺のテ」と「離れたテ」との判別方法

先に、離れたテについて見ていくためには、まず壺のテと離れたテとを分けることが必要であることを述べたが、ここでは、その壺のテと離れたテとの判別方法について考察したいと思う。

まず、壺のテと離れたテの用例を挙げる。用例は、太田・小林両氏(一九八二)『神田本白氏文集の研究』よりコピーした。なお、ここでは、壺のテ・離れたテの別は示さず全て「二重線」によって示した。

〈用例〉

[113] 観舞聴歌知樂意又 (三／四五)

〔訓読文〕舞を觀、歌を聽(キ)て、樂(音、角音)の意を知ヌ。

[114] 青黛又

丁二卒

畫眉之细长マユカキ (三ノ一三九)

〔訓読文〕 青キ「黛」マユカキ「左、マユカキ」、眉を畫イテ、々(眉)細ク「長シ」マユカキ「イ、ソヒエタリ」マユカキ「イ、ホソク、ナカシ」。

〔115〕 夜深不敢使人知スレテ (三ノ一七二)

〔訓読文〕 夜深ケテ、「イ、「テ」敢テ、人を使テ、知ラ使(メ)不_角「シメス」スレテ「イ、「シメス」」。

〔116〕 雲陰月黑風沙惡クモ (三ノ三五六)

〔訓読文〕 雲陰リ、月黒ク(シ)テ、風・沙、惡シ。クモ

〔117〕 其詞質イハレ

而俚イハレ (三ノ三五)

〔訓読文〕 其(ノ)詞、質_{スナホ}に(シ)〔而〕て、「イ、「ニシテ」イハレ俚シ、

〔118〕 天水茫茫無覓處トクメ (三ノ九三)

〔訓読文〕 天・水茫々として、覓ルニ「イ、(モトムル)に」トクメ「イ、「トム」トクメ「左、モトメム」トクメ處無(シ)。

[119] 鶯歸鶯至情悄然 (三ノ一三五)

〔訓読文〕 鶯歸リ、燕至テ、情、悄ト然たり。

[120] 紅藍染ふ為紅線紅於藍 (四ノ一一一)

〔訓読文〕 紅・藍(ま)に染(ム)。々(染)(メ)て、紅・線(ま)と爲(ナ)して、〔於〕藍よりも紅なり、

[121] 路傍走出再拜迎 (三ノ三五八)

〔訓読文〕 路の傍に走(リ)出(テ)て、再・拜シテ、迎(フ)。

[122] 詔

開水注恩波 (三ノ二三八)

〔訓読文〕 詔(シ)て八・水を開(キ)て、恩・波を注(ツ)ク、

[123] 至

今西海向岸邊箭孔日痕滿枯骨 (三ノ三二二)

〔訓読文〕今に至(ル)マてに、西(シ)河(カ)の岸(キ)の邊(ヘ)に、箭(ヤ)ノ孔(アナ)〔左、アト〕、刀(タ)ノ痕(キストコロ)〔左、アト〕、枯(カ)骨(カ)〔左、枯(レ)タル骨〕に滿(ミ)リ

〔124〕人間織(ヒ)為(ル)塞(サイ)北(ペイ)秋(シュウ)鷹(トウ)行(コウ)

染(ネ)作(サ)江南(カンナン)春(シュン)水(スイ)色(シキ) (四ノ一三七)

〔訓読文〕人(ヒト)間(マ)に織(ヒ)シム。々(ヒト)ては塞(サイ)北(ペイ)の秋(シュウ)の鷹(トウ)の行(コウ)を爲(ナ)ス〔左、ナシ〕、染(ネ)メては江南(カンナン)の春(シュン)の水(スイ)の色(シキ)を(ナ)ス。

〔125〕為(ル)

君(キミ)使(シ)無(ム)私(シ)之(ノ)光(ヒカ)及(ツ)万(マン)物(モノ)蟄(チ)蟲(チュウ)照(テ)蘇(ソ)〔左、シテ〕〔イ、照(テ)蘇(テ)〕萌(モ)草(クサ)焉(ヤ) (四ノ三五三)

〔訓読文〕君(キミ)か爲(ニ)に、私(シ)無(ム)キ〔之(ノ)〕光(ヒカ)を(シ)使(シ)て、万(マン)物(モノ)に及(ツ)シて、蟄(チ)蟲(チュウ)、照(テ)蘇(ソ)〔左、シテ〕〔イ、照(テ)蘇(テ)〕萌(モ)草(クサ)、

出(デ)てシメヨ〔左、出(デ)サ使(シ)メムニハ〕

〔126〕若(ニ)為(ル)將(シヤウ)苦(ク)度(タク)殘(ザン)年(ネン) (三ノ三六一)

〔訓読文〕若(ニ)爲(ル)シてか〔左、イカテカ〕苦(ク)〔シヒ〕を將(シ)テ、モ〔テ〕、殘(ザン)の年(ネン)〔イ、殘(レ)年(ネン)を度(タク)ラム〕〔イ、ワタサム〕〔左、オクラム〕。

〔127〕
ホ 欲見者ホ 易論也
サト (三三／三五)

〔訓読文〕 見む「イ、ム」「左、「ル」」者の「之」論り易(カラ)む「イ、「ヤスカラム」」ことを欲(シ)てなり「也」

これらの例のテのヨコト点(壺のテ・離れたテ)を見るに、用例113、114については、テのヨコト点が返読のある箇所には施されていることから、これを離れたテとすることに問題はあまい(用例113は「歌」字の左下、用例114は「眉」字の左下)。このような例については、離れたテをテ・返点と見ても返読のある箇所であるから離れたテが用いられていることになり、テ・切点と見ても句切りとなる箇所であるから同様に離れたテが用いられていることになる。

問題は、返読のない箇所に施されたテのヨコト点である。右の用例113、114に対して、以下の用例115〜127は全て返読のない箇所に施されたテのヨコト点である。この場合、離れたテをテ・返点と見る立場を取るのであれば、これらは全て壺のテということになるのではないだろうか。返読のない箇所であるため、これらが離れたテ(テ・返点)ということはあるまい。しかし、筆者の目には、その加點位置から見るに、用例115〜121も離れたテであるように見えるのである。これは、この『白氏』において加點位置が正確なものではないためであろうか。

小稿においては、このように壺のテと離れたテとを判別する際に、漢字に近いとか遠いとかいうような目測では客観性に欠けると考え、やや厳格にすぎるかもしれないが、仮に、次のような基準を設けてみた。

- ・壺に加點 … 漢字に重なるか、或いは接する。

〔図55〕



・壺から離れた位置に加点 … 漢字から離れている。

〔図 56〕

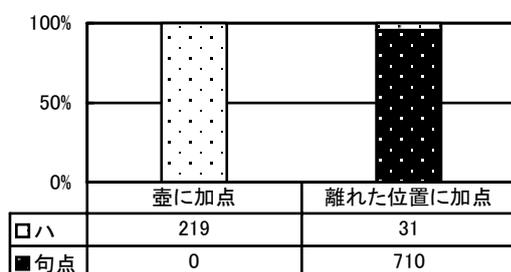


つまり、漢字の字形いかに関わらず、テのヲコト点と漢字の一部に触れているか否かによって分類を行なってみるといふことである。このようにすれば、客観性が得られるであろう。勿論、このような厳密な分類を行なってみても、当のその資料においてその書き分けがなされていないければ、返って事実とは異なる傾向が出てしまうことになってしまふであろう。

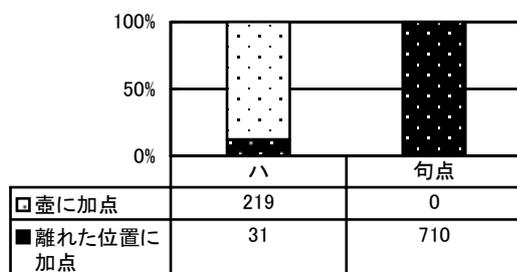
そこで、この基準が、これら壺のテと離れたテとを判別するのに適切なものであるのかどうかを見るために、まず、これら壺のテ・離れたテとちよほど左右対称の関係にある「ハのヲコト点」と「句点」とを、この基準に従って調査してみることにした（前掲図 54 参照）。これらハのヲコト点と句点とを正確に判別することができれば、当該の壺のテと離れたテとを判別することにも有効であろう。

調査結果は、以下のようになった（「ハのヲコト点」全二五〇例、「句点」全七一〇例）。

〈図表36〉「ハのヲコト点」「句点」の加点状況



〈図表37〉「ハのヲコト点」「句点」の加点状況



図表 36 は、右の基準に従って、漢字の右下に施された点―即ちハのヲコト点と句点を合わせたもの―を、「壺に加点」と「(壺から) 離れた位置に加点」との二つに分類し、そのそれぞれの中に、ハのヲコト点や句点がどの程度含まれているかを示したものである⁸⁶。つまり、これによれば、先の基準によって「壺に加点」されていると判断された点は、二一九例全てがハのヲコト点であり、一方、「離れた位置に加点」されていると判断された点は、ハのヲコト点が三一〇例、句点が七一〇例であるということである。

図表 37 は、図表 36 を作り変えたもので、ハのヲコト点・句点と考えられる点が、先の基準で見た時に、「壺に加点」されていると判断されたか、「離れた位置に加点」されていると判断されたかを示したものである。これによると、ハのヲコト点は、二一〇例が「壺に加点」と判断され、三一〇例が「離れた位置に加点」と判断されている。句点は、七一〇例全てが「離れた位置に加点」と判断されている。

先に定めた基準は、厳密に過ぎるかと思われたが、右の調査結果によると、先の基準に漏れたのは、ハのヲコト点の三一〇例のみで、これはハのヲコト点の全用例のうちの二割強である。

この調査結果によって、先に定めた基準は、確かに若干の例外が出ることも、厳密に過ぎるところもあるかもしれないが、加点位置を客観的に判断する上でかなり有効であると言えるのではないだろうか。また、同時に、この『白氏』においては、「壺に加点」「壺から離れた位置に加点」という点において、かなり正確に書き分けられていると言えるのではないかと思う。

四、「壺のテ」と「離れたテ」の調査結果

右のハのヲコト点と句点との調査によって、先に定めた基準によって調査を行なうことがかなり有効であることが言えたのではないかと思う。そこで、ここでは、当該の壺のテと離れたテについて、同様の調査を行なってみたいと思う。なお、この調査によって、「壺に加点」されていると判断されたテのヲコト点については、三〇例のみであるので、本節末にその全用例の訓読文を示した。

左に示す調査結果は、「離・れ・た・テ」を「テ・返・点」と見た場合に、先に基準によってどのように分類されるのかを示したものである（「テの

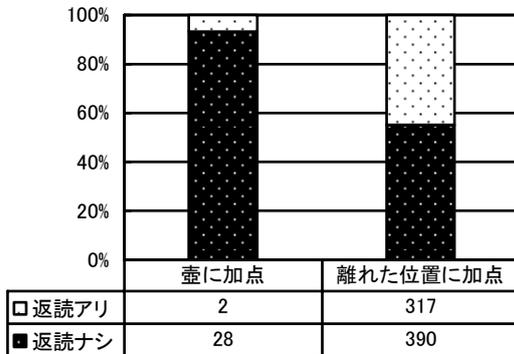
⁸⁶ 漢字右下に施された点のうち、どれをハのヲコト点とし、どれを句点とするかについては、訓読文などによって判断した。

ヲコト点「全七三七例」。もし「離れたテ」が「テ・返点」であるならば、離れたテは返読のある箇所^④に用いられ、壺のテは返読のない箇所^⑤に用いられるはずであるから、従って、先の基準によって分類した時、

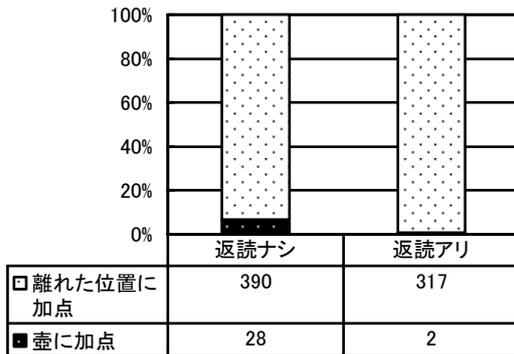
「離・れ・た・位・置・に・加・点」 ← 返読アリ
 「壺・に・加・点」 ← 返読ナシ

という偏りが見られるはずである。そこで、ここでは「返読の有無」に着目して分類を行なってみることにした。

〈図表38〉「壺のテ」「離れたテ」—「返読の有無」による分類—



〈図表39〉「壺のテ」「離れたテ」—「返読の有無」による分類—



④ テのヲコト点は、ほとんどの場合、助詞「テ」「シテ」として用いられるため、「㊦」「㊧」(返読アリ)、「㊨」(返読ナシ)の「㊩」(動詞など)の部分に関わった形で用いられる。従って、「返読される箇所(㊩)」に施されたテ・返点を除くと、「㊩」に施された壺のテ—即ち「返読のない箇所」に用いられたものが残る。

図表 38 は、先の基準によってテのヲコト点（壺のテ・離れたテ）を、「壺に加点」と「離れた位置に加点」との二者に分類した時に、それぞれの箇所において「返読の有無」がどのようになっていたのかを示したものである。この図表 38 は、もし「離れたテ」が「テ・返点」であるならば、右に示したように、「離れた位置に加点」が「返読アリ」に偏り、「壺に加点」が「返読ナシ」に偏るといふ傾向が見られるはずのものである。

繰り返しになるが、先のハのヲコト点と句点との書き分けの調査によって、先の基準による分類は、この『白氏』においてかなり有効であると考えてよいのではないかと思う。とするならば、図表 38 における「離れた位置に加点」は離れたテの用例数とそれほど大きく異ならない形で一致し、また、「壺に加点」も壺のテの用例数と大きく異なっていないと見てよいのではないかと思う。しかし、この図表 38 に示すように、この『白氏』における「離れたテ（離れた位置に加点）」は、その過半数が「返読ナシ」に用いられているという調査結果が得られた。つまり、「離れたテ（離れた位置に加点）」と「返読アリ」との間に一致が見られないということである。これでは、「離れたテ」を「テ・返点」とすると、その過半数が例外ということになってしまう。この調査結果は、「離れたテ」が「テ・返点」ではないということを示すものではないだろうか。

図表 39 は、右の図表 38 を作り変えたもので、「返読アリ」「返読ナシ」それぞれの箇所にてのヲコト点が施された時に、「壺の加点」されているか（壺から）離れた位置に「加点」されているかを示したものである。この図表 39 によっても、この『白氏』におけるテのヲコト点が、「返読アリ」「返読ナシ」によって書き分けられていないことが見て取れるのではないかと思う。これに示されるように、この『白氏』におけるテのヲコト点は、そのほとんどが（壺から）離れた位置に「加点」されている。

このように、『白氏』におけるテのヲコト点を分類した時に、そのテのヲコト点のほとんどが「壺から離れた位置に加点」されていると判断されることは、先のハのヲコト点・句点の調査結果があったとしても、一抹の不安を覚える。壺の右下（ハのヲコト点・句点）と左下（壺のテ・離れたテ）とで加点状況が異なっている可能性はあるのであろうか。

そこで、今度は、高野山西南院蔵『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』康和点（一一〇〇年・一一〇一年加點・第一群点・西墓点）（以下、『甘露』）において同様の調査を行なってみた。この『甘露』において、左下の点は、左に示すように、漢字の壺に施されたものが「テのヲコト点」、漢字から離れた位置に施されたものが「返点」となっている。

〔図 57〕

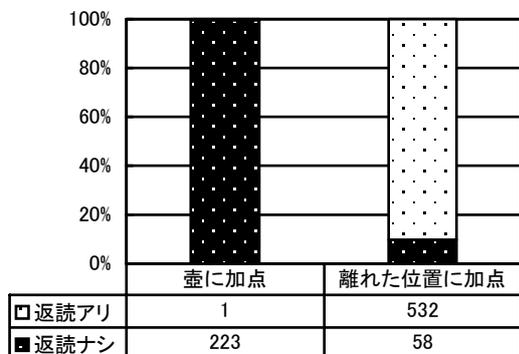


調査結果は、次のようになった（「テのヲコト点」全二八一例、「返点」全五三三例）。なお、調査資料としては、西崎亨氏（一九九五）『高野山西南院蔵 訓点資料の研究』を用いた。このテのヲコト点と返点の場合も、

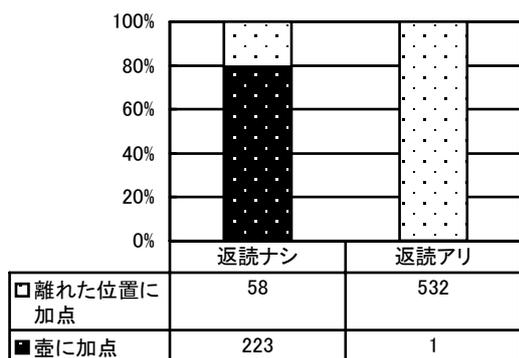
「離れた位置に加点」（返点） ↓ 返読アリ
 「壺に加点」（テのヲコト点） ↓ 返読ナシ

となるはずなので、先のテのヲコト点の場合と同様に「返読の有無」によって分類を行なった。

〈図表40〉「テのヲコト点」「返点」―「返読の有無」による分類―



〈図表41〉「テのヲコト点」「返点」―「返読の有無」による分類―



これら図表40、41によると、この『甘露』においては、「返読アリ（返点）」の場合には「壺から」離れた位置に加点」され、「返読ナシ（テのヲコト点）」の場合には「壺に加点」されるということが、かなり正確に行なわれていると見てよいのではないかと思う。

先に設けた基準が客観性を重視し厳密に過ぎるため、確かに、「壺に加点」されているはずのテのヲコト点のうち五八例を「壺から」離れた位置に加点」されていると判じ、また、「壺から」離れた位置に加点」されているはずの返点のうち一例を「壺に加点」されていると判じることになってしまっているが、これら図表40、41には、「返読の有無」による加点位置の書き分けがなされていることを示す傾向がかなり明確に表れているのではないだろうか。

このように、この『甘露』において左下に施されるテのヲコト点と返点とが加点位置によって書き分けられていることから考えると、『白氏』においても、同様に左下に施されている壺のテと離れたテとの書き分けがそれほど困難であったとは考えにくいように思う。特に『白氏』においては、右下のハのヲコト点と句点とを加点位置によって書き分けているのであるから、なおさらである。

これらの調査結果から考えるに、『白氏』における壺のテと離れたテとを調査した時に、これらが「返読の有無」に関わるとは思えないような傾向を示すのは、『白氏』において加点位置による書き分けが正確になされていないからでもなく、また、本節で設けた基準が厳しすぎるからでもなく、やはり、「離れたテ」を「テ・返点」とする前提に問題があったと見るべきではないだろうか。

五、「壺のテ」と「離れたテ」の用いられ方について

以上のように、壺のテと離れたテとが「返読の有無」に関わるものでなかったとすると、この『白氏』において、これらの点は、どのように使い分けられているのであろうか。

ここで、まず注目したいのは、次のような例である。

〔113〕 観舞 聴歌 知樂意 (三／四五)

〔訓読文〕 舞を觀、歌を聴(キ)て、樂(音、角音)の意を知ヌ。

〔116〕 雲陰 月黒 風沙 惡シ (三／三五六)

〔訓読文〕 雲陰(クモ)リ、月黒(クラ)クシて、風・沙、惡シ。

用例113、116の実線部は読点の例で、用例113が「返読のある箇所」に読点がいれた例、用例116が「返読のない箇所」に読点がいれた例である。用例113、116の点線部は句点の例で、用例113が「返読のある箇所」に用いられた例、用例116が「返読のない箇所」に用いられた例である。

このように、『白氏』においては、句切りの点(句点・読点)が「返読の有無」に関わることなく用いられているのである。

この時、これら用例113、116の二重線部はテのフコト点の用例であるが、先の調査において、ともに離れたテと判ぜられたものである。用例113は、その離れたテの所で「返読のある」例、用例116は「返読のない」例である。

これら用例113、116は、次のように並べてみると、読点・離れたテ・句点の三点が、同様に「返読の有無」に関わらない形で用いられていると見ることができるとは思わないかと思う。

〔113〕 観舞 (読点)	聴歌 (離れたテ)	知樂意 (句点)
〔116〕 雲陰 (読点)	月黒 (離れたテ)	惡シ (句点)

このように、読点・離れたテ・句点の三点を並べてみると、「離れたテ」を「テ・返点」とする見方では、用例113の「聴歌」の所だけそのテ・返点によって返読することを示し、「観舞」「知樂意」の所では返読のある箇所であってもそれを示していないことになる。そもそもテ・

返点は「テ」を示すものであるから、「観舞」「知楽意」のように「テ」のつかない箇所では用いることができない。

なぜ「テ」のつく箇所のみ返読することを示す必要があったのだろうか。また、反対に、なぜ返点を「テ」のつく箇所に限定して、句点・読点を施すような箇所を用いることができない形にしまったのであろうか。

先の加点位置の調査結果に加え、この点においても、「離れたテ」を「テ・返点」とする見方には不合理さが感ぜられるように思う。これら用例 113、116 は、むしろ、

〔113〕 観舞（連用形中止・読点） 聴歌（助詞テ・離れたテ） 知楽意（終止・句点）

〔116〕 雲陰（連用形中止・読点） 月黒（助詞テ・離れたテ） 〈風沙〉 悪（終止・句点）

というように、日本語において多く見られるであろう「連用形中止」「助詞テのつく中止」「終止」という三種類の句切れ方にうまく対応する形で、「読点」「離れたテ」「句点」が用いられていることに注目すべきではないだろうか。

このように見ると、離れたテが、句点・読点という句切りの点と同様に「返読の有無」に関わらずに、「くて」となる句切りの点として用いられている可能性があるのではないだろうか。

もしこのように離れたテが句切りの点であるならば、この離れたテに対するところの壺のテには、それとは反対に「句切りとならない箇所」に偏る傾向が見られる可能性があるだろう。

そこで、先の調査によって「壺に加点」と判断された三〇例がどのような箇所に用いられているのか見てみることにする（前掲図表 38、39 参照）。

この「壺に加点」の三〇例のうち、「返読アリ」に用いられた二例については、後にも考察するが、壺のテが返読のある箇所に用いられるとは考えにくいので、恐らくこれらは離れたテが「壺に加点」されてしまった例であろうと思う。

それでは、その残りの二八例はどのように用いられているであろうか。

「壺に加点」の二八例を調査してみると、最も多く見られたのは、前掲用例 123 「今に至るまで」、用例 124 「々（織）ては」、用例 125 「出でしめよ」、用例 126 「若為にしてか」、用例 127 「欲してなり」のように、「テ」の下で句切りとならずに何らかのことはが続いていく例で、二

八例中二〇例にも及んだ。

右に見たように、離れたテが「くて」という形でその下が句切りとなる場合に用いられていると見られるのに対し、この「壺に加点」されたテのヲコト点が、「くて」の後にことばが続きその下で句切りとならない箇所によく用いられていることは偶然と見るべきではないと思う。

これは、「離れたテ」が「句切りの点」として用いられているからこそ、それに対するところの「壺のテ」が「句切りとならない箇所」に偏って用いられることになっていると見るべきではないだろうか。

このような考察をもとに、先に行なったテのヲコト点の加点位置についての調査結果を整理しなおすと、次のようになる。

〈表 23〉

(1) 「くて」(「句切り」となっている)	返読あり
a 壺に加点	二例(後掲用例128)
b 壺から離れた位置に加点	三一七例(用例113)
(2) 「くて」(「句切り」となっていない)	返読なし
a 壺に加点	八例(用例122)
b 壺から離れた位置に加点	三八六例(用例114、121、後掲用例130)
(3) 「くて」(「句切り」となっていない)	返読なし
a 壺に加点	二〇例(用例123、127)
b 壺から離れた位置に加点	四例(後掲用例129)

(1)(2)は、「くて」の形になって「て」の下で句切りとなる場合に、先の基準によって「壺に加点」「壺から離れた位置に加点」と判断された例がどの程度あるのかを示したものである。(1)と(2)との相違は、「返読の有無」である。(3)は、これらに対して、「くて」のように「て」

の後に何らかのことが続いて「て」の下で句切りにならない場合の例のうちわけである。

これら(1)～(3)を通覧するに、「壺から離れた位置に加点」されたテのヲコト点(1)(2)に偏り、「壺に加点」されたテのヲコト点(3)に偏る傾向を見て取ることができないかと思う。

もし「離れたテ」が「テ・返点」であったとしたら、「返読アリ」と「返読ナシ」の境界である(1)と(2)(3)との間に「壺に加点」「壺から離れた位置に加点」という加点の差が見られるはずであるが、右の表23に示したように、実際にその加点の差が見られるのは、(1)(2)と(3)との間である。例を示すと、用例119、123「至」、用例120、124「々」、用例121、125「出」は、全て「返読のない箇所」にテのヲコト点(用いられた例であるが、それぞれ同じ漢字の例で前者が「壺から離れた位置に加点」された例であり、後者が「壺に加点」された例である。これら前者と後者の違いは、「返読の有無」ではなく、「句切り」となっているか否かの違いである。

これは、やはり離れたテと壺のテとの違いが「句切り」であるか否かに関わっていると見るべきではないだろうか。

筆者が考えるに、壺のテと離れたテとの関係は、次のようなものではないかと思う。

・離れたテ …… 「句切り」の「て」
・壺のテ …… 「て」

離れたテと対立関係にあると見るならば、壺のテは『句切り』にならない『て』とするべきであろうか、考えてみるに、この壺のテは、他の「ニのヲコト点」や「ヲのヲコト点」などと同様に「テのヲコト点」なのであるかと思う。そういう意味において、右に単に「て」としているように、『句切り』にならない」という形で限定されるべきものではないかと思う。

右に示した表23は、先に述べたように客観性を求めるに当たって厳密に過ぎるところがあるので、若干の例外となるような例が見られることは当然なのであるが、以下には、その例外に特に問題となるようなものがないか見ておきたいと思う。

六、「壺のテ」の例外

先の表23を見てみると、先の「壺のテは『て』である」という考察に当てはまらない例が見られる。即ち、「返読のある箇所」であるにもかかわらず、「壺に加点」されたテのヲコト点の例である（表23の(1)a）。用例を左に挙げる。

[128] 徒使 飢人重

勞費 (三ノ二一九)

〔訓読文〕 徒に飢、人「イ、飢(エタル)人」を使って、重(ネ)て、勞(ま)費(ま)せ「イ、「シム」使「ム」。

このような例は二例のみであるので、これは、加点位置を判断する基準を厳密にしすぎたための誤差であると考えてよいように思う。但し、この二例は、ともに「使役」の用例であるので、もしこれを「飢・人を使って」と読まずに、「飢・人を(シ)て」、或いは「使」飢・人を(シ)て」のように読むことができるならば、これは誤差ではなく、(2)aに入れるべき例であると言えるように思う。

表23の(2)aについては、先に述べたように壺のテを「て」と見れば例外ではないのであるが、この(2)aのような場合にどのように解釈するのかについて述べておこうと思う。用例としては、前掲の用例122に当たる。

この(2)aは、「て」という形になり、その下が句切りとなっているにもかかわらず、テのヲコト点か「壺に加点」されていることが問題であるように思われるかもしれない。しかし、このような例については、壺のテによって単に「て」という訓みを示しているだけで、句切りであることを積極的に示すものではないと見れば問題はないように思う。

例えば、用例122では、訓読文で示すと「詔(シ)て」のように、他のヲコト点と同様に訓読するということである。もしこれに施された

テのヲコト点が離れたテであつたならば、句切りであることを示し「詔(シ)て、」とするのである。

七、「離れたテ」の例外

離れたテは、先の表23の(3)bが例外となる。つまり、「て」の後に何らかのことばが続き、そこが句切りとなっていないにもかかわらず、「壺から離れた位置」にテのヲコト点が施された例である。左に用例を挙げる。

[129] 飢食濃粧倚栳イ ア イシ ヨシ ヨリ (四ノ二二七)
シヤカニヌコマヤカニ

〔訓読文〕 飽(クマ)てに食シ、濃「コマ」(ヤカ)に「左、シナヤカニヌコマヤカニ」粧(ヒ)て、栳「ヒ」に倚レリ、

[130] 問マタ

翁脣打來幾年ウツシ ヲチキリ コノタイクセソ 策カキ (三ノ一六二)
イクハクフ

〔訓読文〕 問フ、翁音「左、オ(キナ)」、脣ヒチ、折(レ)てより「イ、「ヲレテヨリ」コノ「カタ」 來、幾「トセ」年ソ「イ、「イクハク」の(トシソ)」「左、角「イクハクノトシソ」「左、「イクハクノトシソ」

用例129は「飽(クマ)てに」となると考えられる例である。これは、先に定めた基準に従うかぎり「壺から離れた位置に加点されている」と

せざるを得ない。しかし、このような用例は、他の用例と対照して同様の形になった時に壺のテが加点されるということが確認でき、また、多少主観的なものになるが、比較的壺に近い位置に加点されているようである(例えば用例129では、用例123のような他の「くまでに」の例によつて壺のテが加点される箇所であろうことが確認できる)。従つて、このような例は、わずかに「壺から離れた位置」に加点されてはいるが、壺のテとして扱うべき例であると考ええる。これは、壺に加点されるべきハのヲコト点にやや「壺から離れた位置」に加点された例が見られること(先の調査参照)と同様の傾向と考えられ、そのことから壺のテと認めてよいように思う。

用例130は「折(し)てより」となると考えられる。この用例130のように「来」の字が存して「くてよりこのかた」となる例は他に三例あったが、その全ての例(全四例)において離れたテが加点されている点で、右に検討した用例129とは異なっている。確かに、これらの例は、もしテの後に何らかの言葉が続いていく読み方しかなければ、全ての例が例外的な形を取っているということである。これまでの考察における明らかな例外となり得るように思う。しかし、思うに、これらの例は、これまで検討してきた多くの離れたテのうちわずかに四例のみの例外であり、この四例の例外によつてこれまでの全ての考察を否とするよりも、むしろ、反対に、これまで見てきたその離れたテの用例の検討から演繹的に、これらの例についても離れたテの所で句切りになる読み方が存在しているのではないかという見方も必要ではないかと思う。つまり、「くてこのかた」という読み方が存在しているのではないかというのである。もしこのような読み方が存在しているならば、これらの例も例外としなくてよくなる。ここでは、この「くてこのかた」という読み方を傍証するものとして、左の用例131、132を取り挙げたいと思う。

[131] 一人上林三四年

又逢今歳苦寒天 (三ノ二七九)

〔訓読文〕 一人(ヒト)上(ト)林(ノ)三(ノ)四(ノ)年(ト)、又(マタ)逢(ユ)今(イマ)歳(ト)苦(ク)寒(サム)天(キ) 天(ト)左(サ)月(ツキ)に逢(ユ)ヘリ 左(サ)アヒ(アヒ)又(マタ)。

[132] 到君

家舎イ五六年君家大人ラシイ頻有言イ (四ノ二五三)

〔訓読文〕君か家・舎「イイへ」に到て、「イ(イ)タシヨリ」五六年、君か家の大・人、頻に言フこと有ラク。

用例131は「上林に入レて三四年」と読むと考えられる。この例は「来(このかた)」という語こそないが、「イで(より)〇〇年」という形で当該の用例130と一致しており、「イでこのかた〇〇年」という読みの存在を考えるのに都合がよいように思う。用例132は「君か家舎に到レて五六年、」君か家舎に到レシヨリ五六年、」という二種類の読み方が考えられる。この例は、その読み方の一方が用例131に挙げたような「イで句切りになる読み方」と一致し、もう一方が「ヨリが付く読み方」という点で当該の用例130と一致しており、注目すべきであるように思う。

ここで問題としている用例130は、これら用例131、132、特に用例132の例から考えると、「折レてイよりイ来イ、イ幾イ年イ、」折レてイ来イ、イ幾イ年イ、」という二種類の読み方が示されていると考えた方がよいのではないだろうか。このように考えれば、一見、例外的に見えるこれらの例についても、やはり離れたテは句切りに用いられているということになり、例外としなくてもよくなるように思う。この考察に従い、これらの例は、表23では(2)bに入れた。

以上、壺のテと離れたテの例外をそれぞれ見てきた。しかし、このように例外を検討してみると、『白氏』においては、多少加点の揺れはあるものの、壺のテと離れたテとが「句切り」という観点からかなり正確に加点し分けられていると見てよいのではないかと思う。

八、「離れたテ」と「句点」「読点」との関係について

先に離れたテと、句点・読点とが、ともに「返読の有無」にかかわることなく句切りに用いられており、日本語における「助詞テがつく中

止」「終止」「連用形中止」という三種類の句切れ方にうまく対応していることは述べたが、筆者が調査するに、この『白氏』における読点は、左に示す用例133、134のように、「テのつかない句切り」に用いられているようである。

[133] 豈徒・^タ許^ホ・^ホ聖文^ホ。(三／六三)

〔訓読文〕 豈徒、聖文に誇(ル)ノミナラムヤ。

[134] 昭陽人^{シヤウヤウジン}・^シ不見^ミ・^シ織時^{オリトキ}・^シ應^{オウ}不^フ惜^シ。(四／一四四)

〔訓読文〕 昭陽の人「イ、昭、陽、人」々・々・々(昭陽人)、織(リ)シ時を見不レは、惜^{アタラ}シマ不ル應^ヘシ「左、惜^{アタラ}シカラ不ル應^ナラム」

これについては、左の用例135のような例外が見られないわけではないが、ほぼ全ての例について言えることである。むしろ、この用例135のような例については、「初め」、或いは「初めに」というようにテのつかない形で訓む可能性を考えてみる必要があるのかもしれない。

[135] 漢^{カン}・^{カン}武帝^ミ・^{カン}初^{ハジメ}・^{カン}喪^{ウシナ}李^リ夫人^{フジン}。(四／一八七)

〔訓読文〕 漢の武帝、初(メテ)、李夫人を喪(ウシナ)ヘリ「左、ワカレニキ」。

以上の考察から、離れたテ・句点・読点には次のような関係があると考えられる。

□	句点	：	句切り（文末）
	読点	：	「て」が付かない句切り
	離れたテ	：	「て」が付く句切り

これら三点は、それぞれ同様に「壺から離れた位置」に加点され、横一列に並ぶ形で配置されている。そして、その句切れ方の違いに応じ、左・右・中央に振り分けるように加点されている。前掲の用例113を例にとるならば、「舞を觀」という「テの付かない句切り」の場合には「中央」に、「歌を聽(キ)て」という「テの付く句切り」の場合には「左」に、「樂の意を知(リ)ヌ」という「終止の句切り」の場合には「右」というように加点されていることである。このように離れたテが、句点・読点という句切りの点と同様に「壺から離れた位置」―句切り―に配置され、それらとともに選択的に用いられるのは、この「離れたテ」もやはり同様に「句切りの点」であったからではないだろうか。

九、「離れたテ」「句点」「読点」の併記例

用例の中には、これら離れたテ・句点・読点が併記された用例も見られる。左にその用例を挙げる。

[136]
應

作雲南望郷鬼万人塚上尖切

(三ノ一七八) (離れたテ・朱点。読点・墨点)

〔訓読文〕〔應〕雲・南ノ望・郷の鬼まと作て、「イ、ナリテ」万・人の塚の上に「イ、ヘニ」「左、ホ(トリニ)」、哭スルコト、「イ、

(シ)て、「左シテ」^イ 叻^イ、々々ラマシ「左スヘカラマシ」「イ、應」「イ、應」

[137] 河南長吏言憂農課久晝夜

捕蝗虫…(三ノ二七) (離れたテ朱点。句点・墨点)

〔訓読文〕河・南の長・吏、農を憂^訓(ヲ)と言^イ(ヒ)「左マ(ウシ)」て、「イ、農憂(フル)コトヲ言ス。」人に課^{オホ}せて、晝^ヒ―夜^ヨ、蝗^去

・蟲を捕(へ)シム。

[138] 村南村北哭聲

哀^イ別^レ耶^ヤ嬢^嬢夫^夫別^レ妻^妻 (三ノ一六九) (句点・墨点。読点・朱点)

〔訓読文〕村、南「左(ムラ)ノミナミ」、村、北「左(ムラ)ノキタ」に哭^イする「イ、ナク」「イ、スル」―聲^カ哀^イ「シ」、^{イ、}「イ、」兒^音

は耶嬢「イ、耶嬢」^{ヤシヤウ}、平濁^{平濁}角^角(上濁、色)「イ、耶^ヤ、^イ嬢^嬢」を別^レ、夫^夫は妻^妻を別^レル。

[139] 後茲夫維地軸轉五十年

来^コ制^シ不^フ禁^キ

(三ノ一五六) (離れたテ・朱点。句点・朱点)

〔訓読文〕 茲^{コレ} 「イ、ヨリ」 從^{ヨリ}、天・維地・軸、轉ル^{メク} 「イ、轉^上ス」。 「イ、轉^シて、」 五十年より 來^{コノ} 制^{カク}すること 「イ、シ」 「角、」 スルコト」 「イ、」 スルコト」 「左、シテ」、禁^キ 「志^平」 (セ) 不。

もしこれら離れたテ・句点・読点の三点が選択的に用いられているならば、併記されることはないはずである。

これらの併記例を見ると、併記されたその一方が星点「・」であればもう一方は星点「-」になっており、また、両方が星点「・」であってもその一方が「朱点」であればもう一方は「墨点」という形になっており、併記された両方が同様の表記であるのは139の一例のみである。このことから考えると、これらは併記されてはいても、ある一種類の読み方の中で併用されているのではなく、二種類以上の読み方の、その異なった読み方にそれぞれ対応して用いられていると考えられるように思う。例えば、用例136では、「哭^シて、」のような形で、一種類の読み方の中で、離れたテと読点とが併用されているのではなく、「哭^シテ」という「テの付く句切れ方」に離れたテが対応し、「哭スルコト」という「テの付かない句切れ方」に読点が対応しているということである。

このように見てみると、これら併記例は先の検討に反するものではなく、むしろ、その対応により、先の見方を傍証していると言えるように思う。

十、まとめ

『白氏』において、以上のような傾向が見られたが、同様に古紀伝点と言われる毛利博物館所蔵『史記』第九 呂后本紀(以下、『呂后』と略す)、東北大学図書館所蔵『史記』第十 孝文本紀にも同様の傾向が見られるようである。

特に、右前者の『呂后』については、笹岡祐子氏(二〇〇一)が、本節で『白氏』に行なったのと同様に、加点位置の基準を厳密に設定し

た調査をされており、その調査によって、『呂后』においても、ハのヲコト点と句点とがかなり正確に加点し分けられていること、そして、それに対して壺のテと離れたテとは、離れたテを返読を示すものと見たのでは明確な書き分けを見出すことができないことを明らかにされている。笹岡氏の調査によっても、『呂后』における離れたテは、句切りの点と見るべきようである。

本節で述べた「句切りを示すテのヲコト点」は―それがたとえ個人的な書き癖等に帰されるものであったとしても―少なくとも一部の資料においてはその存在を認めざるを得ないように思う。テのヲコト点で「返読すること」を示す資料が一方にあり、そのまた一方にこの『白氏』のような、テのヲコト点で「句切り」を示す資料が存するとすれば、今後、次のような事柄についての調査検討が必要であるように思う。つまり、この『白氏』に見られるような「句切りを示すテのヲコト点」がどのような資料に偏って見られるのか、また、「返読を示すテのヲコト点」とどのような関係にあるのか、時代による違い、流派・学派による違いはあるかなどである。

へ「壺に加点」されていると判断されたテのヲコト点 用例へ

◎「ててて」(句切りとなっていない) 返読ナシ (表23) (3) a 全二〇例

- 「欲^ホ(シ)てなり」(三／三五)、「至(ル)マてに」(三／六一)、「至(ル)マてに」(三／一七五)、「致^{見通}(シ)てに」(到(ル)マてに)「イ、到(ル)マテニ」(三／一七五)、「香(シクシ)ては」^イ、「カハシクシテハ」(三／三三二)、「暖^{アタ、カ}(ニ)シては」(三／三三二)、「到(ル)マてに」(三／二六八)、「至(ル)マてに」(三／三二二)、「移(ス)マてに」(三／三二二)、「若^{イカ}為^ニシてか」^左、「イカテカ」(三／三六一)、「飽^ア(ク)マてに」(四／六〇)、「至(ル)マてに」(四／七七)、「々(織)ては」(四／一三七)、「染(メ)ては」(四／一三八)、「及(フ)マてに」(四／一九七)、「用(テ)セム」^左、「モテ(セム)」(四／二四三)、「到(ル)マてに」(四／二八二)、「用(テ)セむ」^イ、「モテ(セム)」(四／三四四)、「出(テ)シメヨ」^左、「出(サ)使^シ(メムニハ)」(四／三五三)、「至(ル)マてに」(四／三五六)

◎「て」(句切りとなっている) 返読ナシ(表23) (2) a 全八例

「詔シて」(三ノ二二八)、「還て」(三ノ二八三)、「因(リ)て」(三ノ三四七)、「去て」(四ノ四二)、「断て」(左エ) (四ノ六一)、「寫シて」(四ノ六六)、「至(ル)マて」(四ノ七三)、「綻(ヒ)て」(四ノ八八)

◎「て」(句切りとなっている) 返読アリ(表23) (1) a 全二例

「飢、人ヲ、飢(エタル)人」を使って (三ノ二一九)、「中、使を令て」(三ノ三一六)

〈付記〉

本節は、以下の発表・論文をもとにしたもので、それに若干の加筆・訂正を加えたものである。

- ・『神田本白氏文集』における「て」のヲコト点についての一考察」国語学会 春季大会 (一九九六) における口頭発表
- ・『神田本白氏文集』における「て」のヲコト点について」『山口国文』二二 (一九九八)

第二節 岩崎本『日本書紀』卷第二十二 推古紀における「テのヲコト点」

― 助字「之」に加点された「テのヲコト点」に着目して ―

一、はじめに

「離れたテ」を「テ・返点」とするのか「テ・切点」とするのかという問題を解決するためには、先に見た『白氏』(本章第一節)のよう
に、「壺のテ」と「離れたテ」とが加点位置によってかなり正確な形で書き分けられている資料を調査するのが最も望ましいであろう。しか
し、訓点資料の性格上、書写などの段階においてその加点位置が曖昧なものになってしまったりすることも少なくないであろうと思う。その

ような場合、壺のテと離れたテとを加点位置によって判別することができなくなり、結果、離れたテの傾向を見ることができなくなってしまう。

それでは、そのように加点位置が曖昧な資料は、離れたテの問題を解決するためには全く役に立たないのであろうか。

本節で取り上げる岩崎本『日本書紀』卷第二十一推古紀（以下、『推古』と略す）も、筆者の調査によると、先に見た『白氏』のように、壺のテと離れたテとが、その加点位置によって正確に書き分けられてはいないようであり、その点において、この『推古』は、その加点位置によって離れたテの問題を考えることが難しい資料である。

しかし、この『推古』における助字「之」は、一貫して不読とされているようであり、これを利用することによって、離れたテの問題を解決する手掛かりとすることができるよう思うのである。

本節においては、この『推古』における助字「之」に施されたテのヲコト点を調査することによって、問題の離れたテが、やはり「テ・返点」ではなく、「テ・切点」と捉えるべきものであることを述べたいと思う。

二、資料について

この『推古』には識語はないが、築島裕氏（一九七八）によると、書写年代は、平安時代の中期を下らないであろうということである。訓点については、朱書と墨書の加点があり、平安時代中期から室町時代に至る数次の加点がある。

築島裕・石塚晴通両氏（一九七八a）は、この訓点の加点時期について、

①平安中期末点（朱点―仮名・ヲコト点）

②院政期点（墨点―仮名・ヲコト点、朱点―ヲコト点）

③室町時代宝徳三年点及文明六年点（共に一条兼良加点）（墨点―仮名）

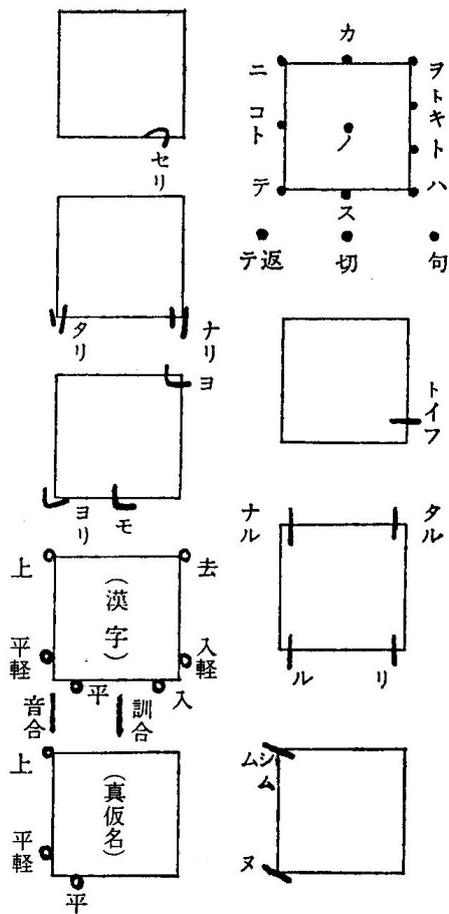
とされ、右のように、①～③の記号で訓点を分類されている。

小稿の調査は、右の築島・石塚両氏の分類に従い、平安中期末点(①)を対象として行なった。

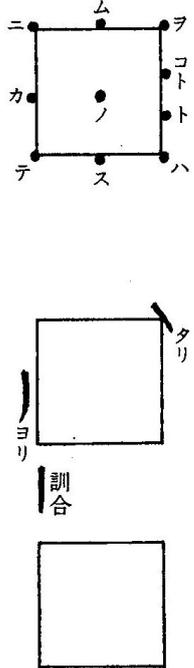
ヲコト点は、築島氏(一九七八)によると、第五群点に属するものであり、左のように帰納されるということである。

〔図58〕ヲコト点図

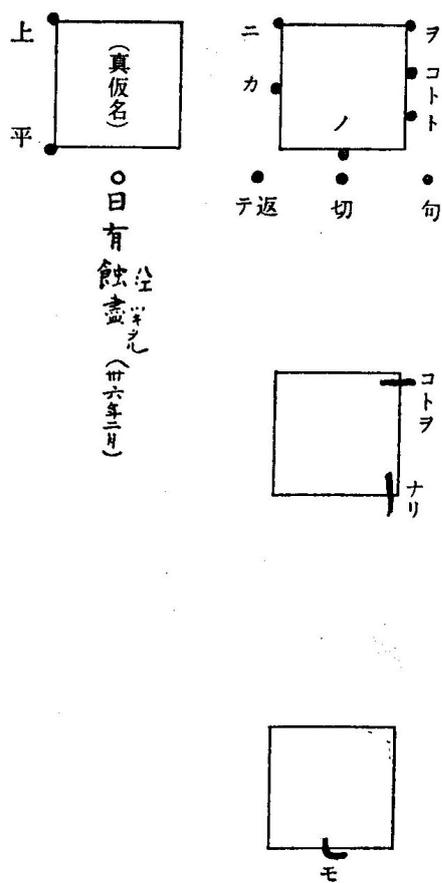
〔第一図〕朱点・平安中期末点(①)



〔第二図〕朱点・院政期点(②)



〔第三圖〕 墨点・院政期点(㊸)



なお、本節で調査資料として用いたのは、複製日本古典文学館『日本書紀』卷第二十二推古(一九七二)である。訓読文及び歌の解釈については、日本古典文学大系『日本書紀』下(一九六五)を参考にした。

三、岩崎本『日本書紀』卷第二十二推古紀における助字「之」

助字「之」は、「の」と訓まれたり「これ」と訓まれたりなどする助字であるが、本節で特に取り上げるのは、この助字「之」の中でも、「動詞十之」の形になって陳述を示すとされるもの(今日「これ」と訓まれるようなもの)である。

この陳述を示す助字「之」について、小林芳規氏(一九六二)は、仏家点・博士家点の資料を比較調査され、左のような、仏家点と博士家

点との訓法の違いや、時代的な相違などについて明らかにされている。

一、仏家点では、

イ、平安初期には、陳述助字としては不読で、上にそれが指す語句のある際に「コレ」と代名詞の訓を充てる。

ロ、平安中期以降は、一様に「コレ」と訓ずるのが一般である。

二、博士家点では、平安中期以降も（桂庵らの新点の影響を蒙るまでは）不読であつた。

小林氏によれば、古く博士家点では、「之」字は不読とされてきたようである。

また、小稿で取り上げたこの『推古』の「之」字についても既に調査がなされており、林勉氏（一九七三）によって、「之」字が不読であることが指摘されている。

しかし、この「之」字が不読であるのかどうかということについては、小稿の内容に関わる問題であるので、ここでは、『推古』における「之」字が不読であることを確認しておくことにする。

左に、「之」字の用例を挙げる。

なお、用例は、複製日本古典文学館『日本書紀』巻第二十二推古（一九七二）からコピーした。また、『推古』においては、仮名点が重ね書きされた例が多く見られ、このコピーのみでは分かりにくいと思われるので、築島・石塚両氏（一九七八a）による翻刻を並べて挙げることにした。その翻刻に付された㊤㊥は、加点時期である（前掲）。但し、ヲコト点・句点・合符の朱点は一・二の例外を除いて全て㊤ということであり、その㊤の符合は省略されている。訓読文は、参考として、日本古典文学大系『日本書紀』下（一九六五）の訓読文を挙げたが、『推古』の訓点と一致していない所もある。

[140] 其治民之本要在乎礼 (一一三)

其治^か民^を之本^ヲ、要^カ在^リ乎^イ禮^ト。

〔訓読文〕 其れ 民を治むるが本、要ず禮に在り。

[141] 則四生之終歸萬國之極宗 (一〇七)

則^ス四^ノ生^ヲ之^ノ終^ニ歸^ス萬^ノ國^ノ之^ノ極^ニ宗^{ナリ}。

〔訓読文〕 則ち四生の終、萬の國の極宗なり。

[142] 至于三乃從之 (七)

至^ス于^テ三^ニ乃^チ從^ス之^ヲ。

〔訓読文〕 三に至りて乃ち從ひたまふ。

[143] 破堂戸而納之 (二七〇)

破^ス堂^ノ戸^ヲ而^{シテ}納^ス之^ヲ。

破^④堂^⑤の戸^⑥を而^⑦納^⑧む之^⑨。

〔訓読文〕堂の戸を破ちて納れむ

〔144〕夫^①使^②人^③雖^④死^⑤之^⑥不^⑦失^⑧旨^⑨。(二二〇)

夫、使^①人^②は雖^③死^④之^⑤不^⑥失^⑦旨^⑧。

〔訓読文〕夫れ使たる人は死ると雖も、旨を失はず。

〔145〕父^①天^②皇^③愛^④之^⑤令^⑥居^⑦南^⑧上^⑨。

殿^① (一九)

父^①の天^②皇^③、愛^④之^⑤令^⑥居^⑦南^⑧上^⑨。

殿^① (一九)

〔訓読文〕父の天皇、愛みたまひて、宮の南の上殿に居らしめたまふ。

右の例のように、『推古』における「之」字は、「の」や「が」と訓まれるなどして連体修飾の形になる場合（用例140、141）、この「之」字自体には全く訓点が施されていない。加點が見られるのは、平安中期末の例に、この「之」字に対してではなく「之」字の上の漢字にカのヲコト点加點された例が二例（用例140）、室町期の例に、やはり「之」字の上の漢字にノの仮名点加點された例が六例（用例141）見られるのみである。

このように「之」字自体に「ノ」や「カ」を示す訓点が施されていないことから考えると、やはり「之」字は不読であると見てよいのではないかと思う。

同様に、「之」字が「動詞十之」の形になって陳述を示し、「之（コレ）を」或いは「之（コレ）に」などと訓まれる形になる場合（用例142、145）にも、この『推古』においては、この「之」字に、「之を」と訓むためのヲのヲコト点や、「之に」と訓むためのニのヲコト点などの訓点が施された例は見られない。

また、「□レ之」のように返点が加點された例つまり、「之」字を、「之を」「之に」などと訓んで返読することを指示した例も、平安中期末・院政期点には見られない。時代の下った室町期点には返点が加點された例が一例（用例143）見られるが、これは新しい時代の訓法と見てよいのではないかと思う。

このような加點状況から考えると、「動詞十之」（陳述）の場合においても、古く（平安中期末・院政期点）は、やはり不読であったと見てよいのではないかと思う。

「之」字について詳細に見ていけば、これら以外の用法もあるうが、小稿で特に取り上げるのは、「動詞十之」（陳述）の例であるので、ここでは、右に見たように、「動詞十之」（陳述）の場合に、その加點状況から見て、その「之」字が不読であろうことを確認するに止めておく。

四、岩崎本『日本書紀』卷第二十二 推古紀における「之」字に加點された「テのヲコト点」

ここで見ていくのは、右に見た「動詞十之」（陳述）の形になるものの中でも、更にその「之」字の左下にテのヲコト点が付点された例である。

この『推古』においては、「動詞十之」（陳述）の形になる場合、テ・ヲコト点は、全・テ・之・字の左下に加・点・さ・れ・て・い・る。

このように、テのヲコト点が付点された部分ではなく、不読とされる「之」字の方に加・点・さ・れ・て・い・る・こ・と・は、注目すべき事ではないかと思ふのである。例えば、左に挙げる用例146の「聞きて」と訓読される例などは、この『推古』においては、

聞之

となつてゐるのであるが、「之」字が不読であるとする、テのヲコト点を「之」字には加・点・せ・ず・に、

聞之・（訓読文）聞(キ)て「之」

とするような表記も可能であろう。

この両者を比べてみる時、この『推古』において、なぜテのヲコト点が付点された「聞」字ではなく、不読とされる「之」字の方に加・点・さ・れ・て・い・る・の・か・と・い・う・こ・と・に・つ・い・て・も、やはり、考察する必要があるのではないかと思ふのである。

本節では、この点に着目し、「之」字が不読であるということと、テのヲコト点が付点された「之」字の左下に加・点・さ・れ・て・い・る・こ・と・を・考・え・合・わ・せ・な・が・ら・用・例・を・解・釈・す・る・こ・と・に・よ・つ・て、この『推古』における離れたテが「句切りの点」である可能性を示していきたいと思ふ。

先ず、「之」字の左下にテのヲコト点が付点された用例を挙げる（全四一例）。テのヲコト点は、全・テ・平・安・中・期・末・点（A）であった。

[146] 爰天皇聞之大

驚（八一）

爰ト天 皇、聞 之ト大ト
驚テ

〔訓読文〕 爰こゝに天皇てんこう、聞ききて大きおほに驚おどろきて、

〔147〕 新羅王惶之

舉白旗 (五〇)

新羅④キツの王④カシコ、惶④カシコ之テ

舉④キツ白旗④カシコ

〔訓読文〕 新羅きしの王かしこ、惶かみて白はき旗はたを舉あげて、

〔148〕 仍奏表之曰

仍④タ奏④マウツフ表④ミ之④マ曰④マ

〔訓読文〕 仍よりて表まうしを奏たてりて曰まうさく、

先にも述べたが、この『推古』における壺のテと離れたテとは、その書き分けが明瞭な形では行われてはいないようである。そこで、この「之」字に加点されたテのヲコト点を検討するに当たって、先ず問題としたいのは、

(1) 「之」字に加点されたテのヲコト点は、壺のテであるのか、離れたテであるのか。

という問題である。

本来ならば、この問題は、壺のテと離れたテとの加點位置などによって判断すべき事からであり、その加點位置の書き分けが不明瞭なこの『推古』においては、その判断はできないということになるのである。筆者は、この『推古』については、このテのヲコト点と、不読とされる「之」字とを併せて検討することによって、その糸口を見出せるのではないかと思うのである。

以下には、「之」字に加點されたテのヲコト点を、「壺のテ」と見た場合と、「離れたテ」と見た場合とに分けて考察を行い、その「之」字に加點されたテのヲコト点を、そのどちらとするべきかを考えてみたいと思う。

◎「之」字に加點されたテのヲコト点を「壺のテ」と見た場合

右の用例146～148に挙げたような「之」字に加點されたテのヲコト点を、壺のテであると見ると、これは文字通り、テのヲコト点が「之」字の壺に加點されているということであるから、その壺のテの解釈としては、「之」字自体を「テ」と訓んでいるということになるのではないかと思う。例えば、用例146の「聞之」(訓読文 聞きて)を例に取ると、

聞之 ↓ (訓読文 聞(キ)之)

ということである。

これが、最も基本的な解釈であろう。

しかし、この解釈では、先に見たように『推古』において「之」字が不読とされていることに反して、「テ」の場合にのみ、「之」字を訓読することになる。これでは、解釈として一貫性に欠けるのではないだろうか。

そのように見ると、この「之」字を「テ」と訓読しているとする解釈には問題がありそうである。

この「之」字に加點された壺のテについては、もうひとつの解釈として、「動詞+之」(陳述)の、「動詞」と「之」とを熟合せた形で訓読しているために、「之」字に壺のテが加點されているという見方も考えられるかもしれない。用例146「聞之」(訓読文 聞きて)を例として、

仮に、合符や仮名点を書き加えて示すと、

聞^キ之^キ ↓ 《訓読文》 聞^キ之^キキテ

のように、「聞」と「之」とを熟合させ、「聞之」全体を「キキテ」と訓んでいるから、その下の字の「之」に壺のテが加点されたと見るということである。

この「動詞」と「之」とが熟合しているという見方については、以下のように、「動詞十之」（陳述）の形になってテのヲコト点が加^キ点^キされ^レていない用例―「之」字の所で「て」とはならず終止形になったり「とも」という形になったりした例―を検討することによって、その可能性は低いと言えるのではないかと思う。

左に、「動詞十之」（陳述）の形になってテのヲコト点が加^キ点^キされていない用例を挙げる。

[149]

目^メ以^ヨ巢^ス枝^キ

而^ニ産^ム之^キ (四一)

因^テ以^テ巢^④枝^④

④コウメリ

而^④産^④之^④。

《訓読文》 因^よりて枝^{きのえだ}に巢^{すく}ひて産^こめり。

[150]

其^イ獨^ト生^ヒ之^キ何^{ナニ}益^{ヤシ}

矣 (三八三)

其獨^①生^②之^③何^④益^⑤か^⑥ら^⑦む
矣。

〔訓読文〕 其れ獨り生くとも、何の益かあらむ。

〔151〕 今朕則自蘇

何出之 (四六五)

今朕は則自蘇

何出之

〔訓読文〕 今朕は蘇何より出でたり。

右に挙げた用例 149 ～ 151 のように、「動詞十之」(陳述)の形になってテのヲコト点が加点されていない用例を見ると、そこに加点されている助詞や助動詞、活用語尾などは、全て「動詞」部分に加点されており、テのヲコト点の時のように「之」字には加点されていないのである。用例 149 は「り」、用例 150 は「とも」、用例 151 は「たり」の例であるが、それぞれのヲコト点、トモのヲコト点、タリのヲコト点は、全て「動詞」部分に加点されている(但し、室町期点(◎)の仮名点には、用例 151 のように、「之」字に「タリ」と加点された例が見られる)。

このように、テのヲコト点以外のヲコト点が、「之」字にではなく、「動詞」部分に加点されているのは、やはり、「動詞」と「之」とを熟合させるような訓み方をしておらず、「之」字を不読としているからではないかと思う。例えば、用例149の「産之」(訓読文 産めり。)の場合に、「コウメリ」のりのヲコト点が、

産之。

のように、「之」字に加点されたりはせずに、「産」という「動詞」の部分に加点されているのは、やはり、これを「産・之」という形で熟合させて「産・之」全体を「コウメリ」と訓んでいるのではなく、「産」字のみを「コウメリ」と訓み、「之」字を不読としているからではないだろうか。

このような他のヲコト点の加点状況から考えるに、用例146「聞之」のように「之」字にテのヲコト点が付された場合にのみ、特に、これを「聞之」と解釈し、熟合された形で訓まれているとすることは、その解釈として一貫性に欠けるのではないかと思う。

このような「動詞＋之」(陳述)の例については、テのヲコト点が付された場合とそれ以外のヲコト点が付された場合とで異なった解釈をするのではなく、やはり、一貫して、熟合した形では訓まれておらず、「之」字を不読していると見るべきではないだろうか。

この「動詞」と「之」とが熟合した形では訓まれていないという見方については、「動詞＋之」(陳述)の形になった場合に、「動詞」と「之」とが合符で結ばれた例が見られないこと、そして、左の用例152、153の「□・□之」「□□之」の例のように、動詞部が合符で結ばれても、「之」字だけは合符で結ばれないということも、これを裏付けているかもしれない。

〔152〕兩國使_レ人_ヲ望_ミ瞻_ル之_ヲ愕_リ然_ル (四二二)

兩國の使^④人、望^④ | 瞻^④之^④ | 愕^④然^④。

〔訓読文〕 兩國の使人、望瞻りて愕然づ。

〔153〕 新

新 羅 奉^{ウケタ}命^ミ以^テ驚^{カシ}懼^ル之^ヲ (四二九)

新 羅 奉^{ウケタ}命^ミ以^テ驚^{カシ}懼^ル之^ヲ

〔訓読文〕 新羅、命を奉りて、驚き懼る。

このように見ると、「動詞」と「之」とが熟合しているから、壺のテが「之」字に加点されているという見方にも問題がありそうである。

以上のように、「之」字に加点されたテのヲコト点を壺のテと見ると、その壺のテが「之」字に加点されていることを、「之」字が不読であるということと矛盾することなく説明するのは難しいのではないかと思う。これは、やはり、「之」字に加点されたテのヲコト点を壺のテとする見方に問題があるのではないだろうか。

むしろ、用例 149 「産^{コト}之^ヲ」のように、テのヲコト点以外のヲコト点が「之」字ではなく「動詞」部分に加点されていることから考えて、この「之」字に加点されているテのヲコト点は、他のヲコト点とは異なつた加点がなされるもの―離れたテ―であると見た方がよいのかもしれない(もしこのテのヲコト点が壺のテであったとすると、他のヲコト点の加点状況から考えて、例えば、用例 146 「聞^{コト}之^ヲ」(〔訓読文〕聞きて)―

では、「聞之・」という加点がなされるのではないだろうか。

このように見てくると、「之」字に加点されたテのヨコト点は、壺のテではなく、離れたテであると見た方がよさそうである。

◎「之」字に加点されたテのヨコト点を「離れたテ」と見た場合

離れたテは、先にも述べたように「返点を兼ねる」と言われるものである。一方、筆者は、これを「句切りの点」として捉える可能性を考えている。

そこで、右のような考察から、「之」字に加点されたテのヨコト点を、離れたテと見るべきであるということになると、次は、

(2) 「之」字に加点された離れたテは、「返読を示すもの」であるのか、「句切りを示すもの」であるのか。

ということが問題となる。つまり、この離れたテを、「返読を示すもの」と見た場合と、「句切りを示すもの」と見た場合とで、どちらが現状に即した解釈ができるかということである。

以下には、この離れたテを、「返読を示すもの」と見た場合と、「句切りを示すもの」と見た場合とに分けて、検討を行いたいと思う。

▽離れたテを「返読を示すもの」と見た場合

離れたテを「返読を示すもの」と見ると、離れたテは「之」字の左下に加点されていることから、これは、左図のように「之」字から上へ返って訓むことを指示していることになる。



そして、この「之」字から返読される時、「之」字が不読ということでは返読は出来ないであろうから、このような場合、やはり、「之」字を「之（コレ）」を「或いは「之（コレ）」に」などと訓んで返読していると見るべきではないかと思う。例えば、用例146の「聞之」（訓読文 聞きて）では、

聞之 ↓ （訓読文） 之（コレ）聞（キ）て

というように、「ヲ」を補って「之（コレ）」と訓むことになる。

しかし、右のように、加点されていない「ヲ」や「ニ」を補って訓むことは不可能ではないにしても、先に見たように、『推古』において、「之」字に「ヲ」や「ニ」を示す訓点が見られないことから考えると、「之」字は、右のように「コレヲ」や「コレニ」とは訓まれておらず、不読であると考えた方がよさそうである。

つまり、換言すると、「之」字に加点された離れたテを解釈する時、「仮説」として、離れたテを「返読を示すもの」と考えると、

〈仮説〉

・離れたテは「返読を示すもの」である ↓ 「之」字から返読する ↓ 「之」字を「コレ」と訓む。

〈加点状況〉

・「之」字に「ヲ」や「ニ」を示す訓点が見られない ↓ 「之」字は不読である ↓ 「之」字を「コレ」と訓まない。

というように、「仮説」と「加点状況」との間で、「之」字を「コレ」と訓むか訓まないかという点において、矛盾を生じることになるということである。

このように矛盾を生ずるのは、やはり離れたテを「返読を示すもの」とすることに問題があると思われるべきではないだろうか。

▽離れたテを「句切りを示すもの」と見た場合

もしこの離れたテを「句切りを示すもの」と見るならば、右に見た用例146の「聞之（訓読文）聞きて」についても、

聞之・↓（訓読文）聞(キ)て「之」

のように訓読することができ、「之」字を不読とすることにも問題は生じない。離れたテが「之」字の左下に加点されるのは、「之」字の下が「句切り」になるからである。

このように、「之」字にテのヲコト点が付された例を検討してみると、この「之」字に加点されたテのヲコト点は離れたテであり、そして、その離れたテは「句切りを示すもの」——句切りの点——であると考えた方が、より矛盾なく説明できるのではないかと思う。

五、離れたテを「句切りの点」と見た場合の助字の訓読

以上に述べてきたように、離れたテを句切りの点と見ると、「而」を始めとする「テ」に関わる助字について、若干、訓読の仕方が異なってくる可能性があるのです。ここでは、「而」「以」を例として、少し述べておきたいと思う。

まず、『推古』より、「而」「以」の所で「て」となって、テのヲコト点が付されている用例を挙げる。

◎「而」

[154] 其留臣（七令）而用則為國有利（三〇七）

其留^㉞臣^㉟而^㊱用^㊲給^㊳。則^㊴爲^㊵國^㊶有^㊷利^㊸。
㊱(給) ㊲(タ) ㊳(ハ) ㊴(去) ㊵(ナ) ㊶(ム) ㊷(ホ) ㊸(サ)

〔訓読文〕 其れ臣を留めて用ゐたまはば、國の爲に利有りなむ。

[155] 於是集諸僧尼

而推之。
(四四五)

於是集諸僧尼
㉞(ニ) ㉟(ノ) ㊱(ニ)

而推之。
㊱(カ)

〔訓読文〕 是に、諸の僧尼を集へて推ふ。

[156] 乃當廐戸而不勞忽産之

乃當廐戸而不勞忽産之
㉞(ウ) ㉟(マ) ㊱(ハ) ㊲(ナ) ㊳(ム) ㊴(タ) ㊵(ア) ㊶(セ) ㊷(リ)

〔訓読文〕 乃ち廐の戸に當りて、勞みたまはずして忽に産れませり。

◎「以」

[157] 百

百 濟王命以遣於吳國 (二四八)

濟^㉔の王^㉕、命^㉖以^㉗て遣^㉘於^㉙吳^㉚の國^㉛。

〈訓読文〉 百濟の王、命せて吳國に遣す。

ここで取り上げたいのは、用例156のように「而」字の左下にテのヲコト点が付された例である。離れたテを返点(返読を示すもの)とする見方によつて、この用例156を訓読すると、

當^㉜既^㉝戸^㉞一^㉟而^㊱ ↓ 〈訓読文〉 既の戸に當(リ)而^㊲

のように、「戸」字の所から返読され、「而」字の所からは返読されないので、「而」字に加点されたテのヲコト点は、必然的に壺のテと考えられ、従つて、訓読文としては、「而」字を「テ」、或いは「シカウシテ」などというように、「而」字自体を訓む読み方をしていくことになるのではないかと思う。これは、つまり、離れたテを返点(返読を示すもの)と見ると、テのヲコト点が付された「而」字は、必然的にそれ自体を訓読することになる—つまり、「而」字は不読とはならない—ということである。

しかし、離れたテを「句切りの点」と見ると、左のように、「而」字が不読となる可能性が生じてくる。

當既戸而・↓ （訓読文） 既の戸に當りて〔而〕

「而」字の下が「句切り」となっているから、「而」字の左下に離れたテ（句切りの点）が加点されていると見るのである。

この問題については、用例157に挙げた「以」字も同様で、左のように、不読となる可能性があるのではないかと思う。

命以・↓ （訓読文） 命せて〔以〕
コトオホ

このように、離れたテを「句切りの点」と見ると、助字などの訓読において、異なった訓み方をする可能性が生じる場合がありそうである。

六、まとめ

先の『白氏』の調査においては、その加点位置を調査することによって、離れたテは「テ・切点」と見るべきであるとの結論に至った。

そして、本節においてもこの『推古』の助字「之」に施されたテのヲコト点を調査することによって、やはり同様に、離れたテは「テ・切点」と見るべきとの結論に至ったわけである。

前節と本節とで取り上げた離れたテの問題は、訓点資料における加点位置が正確性に欠けるからということで最初から調査を断念するのではなく、加点位置が正確と見られる資料を探してみたり、また、本節で述べたように、離れたテの問題を考える上で手掛かりとなりそうな資料を探してみたりする必要があるのではないだろうか。

確かに、前節の『白氏』の調査にしても、本節の『推古』の調査にしても、個々の資料について述べるもので、訓点資料全体に見られる離れたテの問題について総括的な結論を出すものではない。しかし、『白氏』や『推古』などのいくつかの資料において、離れたテを「句切りの点」と見るべき同様の傾向が見られることは、これを偶然としてしまうのではなく、ひとつの傾向として認めるべきではないかと思うのである。未だわずかな資料しか示すことができないが、この問題に関しては、少なくとも一部の資料については、「句切り」を示す離れたテが存在している可能性が認められると言ってよいのではないだろうか。

〈付記〉

本節は、以下の発表・論文をもとにしたもので、それに若干の加筆・訂正を行なったものである。

・「助字に加点された「テのヲコト点」について―『岩崎本 日本書紀 卷第二十二 推古紀』を中心として―」西日本国語国文学会(二〇〇六)における口頭発表

・『岩崎本 日本書紀 卷第二十二 推古紀』における「テのヲコト点」について―助字「之」に加点された「テのヲコト点」に着目して―『東アジア研究』五(二〇〇七)

第三節 博士家点における「テのヲコト点」―まとめ―

以上に述べてきたように、博士家点に見られる「離れたテ」については、「返読を示すもの」と見て「テ・返点」とするのではなく、「句切りを示すもの」と見て「テ・切点」とすべき傾向の見られる資料が存するのである。

しかし、資料のそろっていない現時点においては、筆者は、博士家点の全ての離れたテがテ・切点であると断ずるつもりはなく、テ・返点からテ・切点が生じた可能性、或いはテ・切点からテ・返点が生じた可能性など、さまざまな可能性を考慮しながら調査を行なっている。

ただ、筆者が調査したわずかながらの資料の傾向から見通しを述べると、

(1) 博士家点の中でも特に『白氏』、毛利博物館蔵『史記』第九 呂后本紀、東北大学図書館蔵『史記』第十 孝文本紀のように、築島裕氏(一九八六)が古・紀伝点とされる資料において、壺のテと離れたテとが正確に書き分けられていると見られ、その時、離れたテがテ・切点として用いられていると考えられること。

(2) 小林芳規氏(一九六二)によると、博士家点における助字「之」は、もともと不読であったものが、桂庵らの新点の影響を受けて訓読さ

れるようになったということであるが、もし博士家点が仏家点の影響を受けるものであるならば、仏家点において漢字左下を返点に当てる
ことがなされているのを受けて、博士家点においてもテ・切点をテ・返点とするようになる可能性が考えられること。

(3) 右の(2)に関連して、『推古』のように、壺のテと離れたテの加点位置による判別が難しいと見られる資料において、助字などの加点傾向を
調査してみると、離れたテをテ・切点と見るべき傾向が見られ、もともとは離れたテをテ・切点として用いていた可能性が考えられること。

以上の点により、少なくとも「テ・切点↓テ・返点」という流れはあったのではないかと考えている。

このテ・切点の問題については、有用な資料を探しつつ調査を行なっていく必要があるのではないかと思う。

第六章 博士家点における「句切りの点」

序節

先の第五章に述べたように、この博士家点における「テ・切点」については、漢字の壺に施される「壺のテ（テのヲコト点）」との判別が不可能であることが少なくない。例えば、

〔158〕
雲陰^{クモ}月^{ツキ}黒^ク風^{カゼ}沙^サ・^テ忌^{イミ}
（三ノ三五六）

〈訓読文〉雲陰^{クモ}リ、月黒^クク（シ）て、風^{カゼ}・沙^サ、^テ忌^{イミ}シ。

では、「黒」字に施されたテのヲコト点を、仮に、テ・切点と判別しても、

雲陰^{クモ}リ、月黒^クク（シ）て、風^{カゼ}・沙^サ、^テ忌^{イミ}シ。

と訓読することが可能であるし、また、壺のテ（テのヲコト点）と判別しても、

雲陰^{クモ}リ、月黒^クク（シ）て、風^{カゼ}・沙^サ、^テ忌^{イミ}シ。

と訓読することが可能である。両者の違いは、そこが「句切りであること」を示しているか否かの違いのみである。

このため、句切りの点を調査する際に、このテ・切点と壺のテとが施されている中から、句切りを示しているテ・切点のみを取り出すこと

83 例参照。
「テ・切点」を訓読する際には、「テ」であることと「句切り」であることを示すために、「て」のように「テ」と「読点」とを合わせた形でゴシック体で示すことにした（訓読文凡

は、実際問題として不可能である。小稿では「離れたテ」をテ・切点と考えており、この見方に従って、右の用例158のように句切りに施される形になっているテのヲコト点を、加点位置いかに関わらずテ・切点として抜き出すことは可能であるが、そのような形で抜き出したテのヲコト点を句切りの点として検討するには、やはり問題がある。

そこで、本章においては、テ・切点（左下点）については、これを調査対象からはずし、まず、博士家点における右下点と中下点とがどのように用いられているのか調査を行なってみたいと思う。

調査方法としては、先に見た仏家点と同じように、文末・文中、返読アリ・返読ナシという視点から分類を行なった。

第一節 岩崎本『日本書紀』卷第二十二 推古紀における句切りの点

一、はじめに

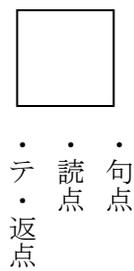
先の第四章においては仏家点における句切りの点の検討を行なった。本節においては、岩崎本『日本書紀』卷第二十二 推古紀（以下、『推古』と略す）を取り上げ、その仏家点の句切りの点に対し、博士家点における句切りの点がどのように用いられているのか見ていこうと思う。

二、資料について

この『推古』は、第五章 第二節において既に取り上げたので、詳細はそちらを参照してほしい。調査資料として用いた文献も、訓読文などの参考とした資料についても同様である。

築島裕氏（一九七八）のヲコト点図（第五章 第二節 図58）によると、句切りの点は、平安中期末点と院政期点とに見られるようであり、両者ともに右から、「句」「切」「テ・返」という形になっているということである。築島氏の同書においては、訓読文は付されていないが、その原文の翻刻において、築島氏は、右下点を「。」、中下点を「。」とされているので、恐らく、築島氏は、

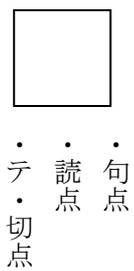
〔図 59〕



と見ておられるのであろうと思う。

小稿の調査によると、この『推古』における句切りの点は、

〔図 60〕



となっているようである。左下点をテ・切点とすることについては、先の第五章に述べた。以下、句切りの点の名称は、この図 60 による。

本節においては、この『推古』の訓点の中でも最も古いと考えられる「平安中期末点」について、その句切りの点の加減傾向を見てみたいと思う。また、その時、本章 序節で述べたように「テ・切点（左下点）」は調査対象から除き、「句点（右下点）」と「読点（中下点）」の二点についてのみ調査を行なった。

三、句切りの点の使用状況

これまで見てきた仏家点の場合と同様に、まず、この『推古』における句切りの点の用例を挙げ、その加減傾向を表 24・図表 42 として示

す。ただし、この『推古』においては、和歌が万葉仮名によつて一字一音の形で表記されている箇所があり、その場合、陀羅尼などと同様にこれも訓読されるものではないので、以下に行なう検討の際には、これを別にし、本文部と和歌（一字一音）という形に分けて検討を行なつた。なお、用例は、複製日本古典文学館『日本書紀』巻第二十二推古（一九七二）からのコピーと、築島・石塚両氏（一九七八）による翻刻を並べて挙げた（用例の挙げ方の詳細については、第五章 第二節を参照のこと）。

〈用例〉

◎本文部

【句点】

〔159〕 沈水漂著於淡路嶋

（二七）（文末・返読アリ）

㊦㊧テム、㊦㊧ヨレリ
沈水、漂着 於 淡路の嶋。
㊦（平）㊦（平）

〈訓読文〉 沈水、淡路嶋に漂着れり。

〔160〕 百寮上表勸進

（七）（文末・返読ナシ）

㊦ツカサ
百寮上表を勸進。
㊦㊧マウソフミ、㊦㊧マツル
㊦㊧ヘフミ、㊦㊧

〈訓読文〉 百寮、表を上りて勸進る。

【説点】

斯那提流箇所名又曰彼德也

多烏箇夜摩爾伊比爾惠互許夜執屢多山

諸能多比等阿波札於夜那斯尔那礼奈其旅人

理難迷夜佐須陀氣能积弥波夜那祇伊刺竹

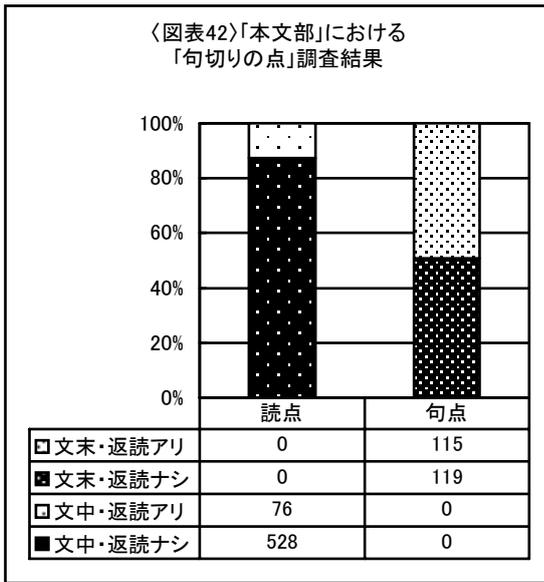
比尔惠互許夜留諸多比等阿波礼復叶

(三一九)

斯那提流箇所名又曰級照也

多烏箇夜摩爾伊比爾惠互許夜勢屢岡山

諸能多比等阿波礼於夜那斯尔那礼奈其旅人



◎和歌(二字一音)

【句点】三九例

【読点】一例

【見消】「読点」一例

【誤点?】「句点」三例、「読点」一例

A 文末	・返読アリ	〇例
A 文末	・返読ナシ	〇例
B 文中	・返読アリ	七六例
B 文中	・返読ナシ	五二八例
C 文末文中不明・返読アリ		三〇例
C 文末文中不明・返読ナシ		八例

右の図表42は、右の表24のうち、「和歌（一字一音）」の用例と、「C（C）文末文中不明」などのように訓み方が明らかでない用例とを除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。

この『推古』においては、右下点（句点）は、返読あり・返読ナシを問わず文末に用いられており、中下点（読点）も、やはり返読あり・返読ナシを問わず文中に用いられている。これらは、それぞれ句点・読点と見て問題はないであろうと思う。

「文中・返読ナシ」の用例数が、特に多くなっているが、これは、

「文末・返読アリ」

文末であるため、その多くが動詞などの用言に関わる句切り

「文末・返読ナシ」

となる。

「文末・返読アリ」

返読ありであるため、その多くが動詞などの用言の所に返読

「文中・返読アリ」

される形で、用言に関わる句切りとなる。

のように、「文末・返読アリ」「文末・返読ナシ」「文中・返読アリ」の場合には、その句切りの多くが、用言に関わる句切りとなるのに対し、当該の「文中・返読ナシ」の場合には、その用言に関わる句切りに加え、名詞などの体言の後の句切りのように用言に関わらない句切りにも用いられており、その分、用例数が多くなっているようである。

四、まとめ

この『推古』は、右に示したように、返読ありであっても返読ナシであっても一様に句点・読点を単独で施す形を取っており、「返読の有無」を示すような形は取られていない。これは、先の仏家点で見た『秘蔵』『北斗』（第四章 第四節）と同様の傾向と見てよいのではないか

と思う。

先の『秘蔵』『北斗』においては、この加點傾向により、「句読」に重きを置く資料であろうと考えたのであるが、この『推古』についても、やはり、同様に「句読」を示すことに重きを置く資料と見てよいのではないだろうか。

先の『秘蔵』『北斗』との関連性を考えてみると、先の『秘蔵』『北斗』もここで取り上げた『推古』も第五群点に属すとされるものである。関連があるものなのか明言はできないが、今後も注意しておきたいと思う。

第二節 毛利博物館蔵『史記』第九 呂后本紀における句切りの点

一、はじめに

本節では、毛利博物館蔵『史記』第九 呂后本紀（以下、『呂后』と略す）を取り上げ、博士家点における句切りの点の加點傾向を見てみたいと思う。

二、資料について

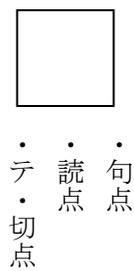
山田孝雄氏（一九三五）によると、この『呂后』は、卷子一軸で、本文は一三紙からなっているということである。

奥書は、左のようになっており、大江家国によって、延久五年（一〇七三年）に書写・加點されたようである。また、康和三年（一一〇一年）に、大江家行によって校合が行なわれている。建久七年（一一九六年）の奥書もある。

同年同月廿九日點合了

延五正廿四辰書了

〔図 62〕



となつてゐるようである。以下、句切りの点の名称は、この図 62 による。

なお、本節で調査資料として用いたのは、『呂后本紀 第九』（一九三五）である。訓読文については、吉田賢抗氏（一九七三）を参考にした。

三、句切りの点の使用状況

これまでと同様に、まず、この『呂后』における句切りの点の用例を挙げ、その加點傾向を表 25、図表 43 として示す。

〔用例〕

【句点】

〔164〕 佐高祖^{タスケ}・定天^{メタリ}下^{タス}。（二二）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕 高祖^{タスケ}を佐^{タス}けて、天^{メタリ}下^{タス}を定^{メタリ}メタリ。

〔165〕 上^ウ・益^{トム}疏^{ムス}。（九）（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 上（去）、益（マ）疏（ム）す〔疏（ム）す〕疏（ム）ス。

〔166〕 酒・顧カヘリミ・磨サシマネイテ左サシマネイテ右サシマネイテ執フセテ戟フセテ者モ皆フセテ陪フセテ兵シリンギ罷サル去サル（二六〇）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕 酒カヘリ、顧カヘリミテ左・右の「か」執モ・戟モの者モを磨サシマネク。「磨サシマネイテ」「磨サシマネ（キ）て」、皆、兵を陪フ（セ）て、「陪フ（セ）テ」罷シリンキ去サル〔去サル〕

〔167〕 又・恐オチ灌オチ・嬰オチ・畔ソム之ソム欲マ待マ灌マ・嬰マ兵マ与マ斉マ・合マ而マ發マ（二八九）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 又、灌オチ、嬰オチか、畔ソム（カム）ことを恐オチ〔之〕「灌オチ、嬰オチを恐オチて、畔ソムク〔之〕」。灌オチ・嬰オチか兵の〔与〕斉マ（ト）、合マ（ハム）ことを〔合マハムコトヲ〕待マ（チ）て、發マ（セ）むと〔發マセムト〕欲マ〔發マセムト〕す〔欲〕。

【読点】

〔168〕 為セハ呂カクヌケ氏カクヌケ・右カクヌケ袒カクヌケ・檀セ為セ劉カクヌケ氏カクヌケ・左カクヌケ檀カクヌケ（二一九）（句点読点併記・文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 呂カクヌケ・氏カクヌケの為セに〔セ〕は「セハ」、右に袒カクヌケ（キ）、〔袒カクヌケケ〕。劉カクヌケ・氏カクヌケの為セにセは、左に檀カクヌケケ〔檀カクヌケケ〕。

〔169〕 無ナク少式妙反・長張兩反・皆ツ斬ツ之ツ（二三七）（文中・返読アリ）

〔訓読文〕 少ナク（去）・長ナク（去）と「ト」無ナクク、皆ツ斬ツ（リ）ツ〔之〕。

〔170〕 呂后・兒・二人・皆・為將タリ。（二二）（文中・返読ナシ）

〔訓読文〕 呂后の、兒訓、二人、皆、將去為タリ。

◎併記例

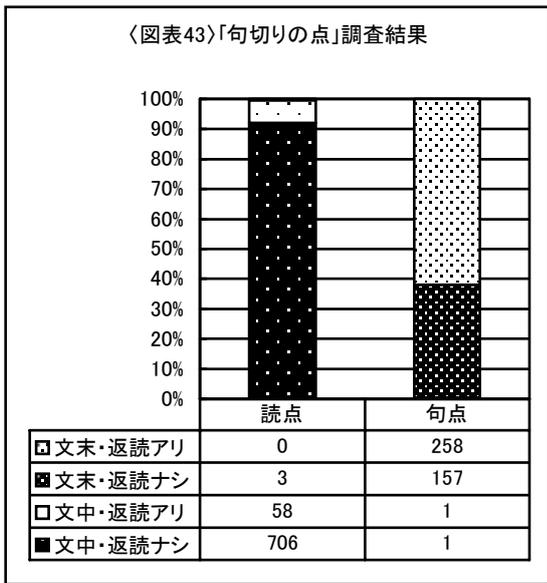
〔171〕 太尉・行・至ル・將軍呂・祿亦・已解上・將印・去サ。（二二〇）（句点読点併記・文末・返読ナシ）

〔訓読文〕 太尉、行キて至る「至ル」。「至リ」、〔読点見消〕將軍呂・祿亦、已に上・將の印を解イて、去ル〔ルのヲコト点見消〕「去リ」又。

〔表 25〕 調査結果

【句点】

A 文末	・ 返読アリ	二五八例
A 文末	・ 返読ナシ	一五六例
B 文中	・ 返読アリ	一例
B 文中	・ 返読ナシ	一例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	五八例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一〇例
A 文末	・ 返読ナシ	一例（読点と重複）
C 文末文中不明	・ 返読アリ	五例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一例



※ただし、以下のように併記例を含む(表25 参照)。

「句点」「文末・返読ナシ」一五七例：「読点」一例。
「読点」「文末・返読ナシ」三例：「句点」一例。
「読点」「文中・返読アリ」五八例：「テ・切点」二例。
「読点」「文中・返読ナシ」七〇六例：「テ・切点」三例。

【読点】

- A 文末
・ 返読アリ
 - A 文末
・ 返読ナシ
 - B 文中
・ 返読アリ
 - B 文中
・ 返読ナシ
 - C 文末・文中不明
・ 返読アリ
 - C 文末・文中不明
・ 返読ナシ
 - A 文末
・ 返読ナシ (句点併記)
 - B 文中
・ 返読アリ (テ・切点併記)
 - B 文中
・ 返読ナシ (テ・切点併記)
- 〇例
二例
五六例
七〇三例
二例
六例
一例 (句点と重複)
二例
三例

右の図表43は、右の表25のうち、「C(C) 文末文中不明」などのように、訓み方の明らかでない用例を除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。

この『呂后』において、右下点(句点)は、返読アリ・返読ナシを問わず文末に用いられており、中下点(読点)も、やはり返読アリ・返読ナシを問わず文中に用いられているので、これらは、それぞれ句点、読点と見て問題はないであろうと思う。この時、句点の「文中・返読アリ」一例(用例166)、「文中・返読ナシ」一例(用例167)と、読点の「文末・返読ナシ」三例(用例168)とが問題となるが、これらについても、この『呂后』における句点・読点がそれぞれ明らかに文末・文中を示していることと見られることから考えて、句点が文中に用いられたり、読点が文末に用いられたりしているとは見られず、やはり、他の例と同様に句点が文末を、そして、読点が文中を示しているとは見べきではないかと思う。例えば、句点の「文中・返読アリ」の例として挙げた用例166は、「サシマネイテ」というように文中の形に句点が施されたものではなく、訓読文に示したように、「サシマネイテ」という訓み方と「サシマネク」という訓み方が併記されているのではないかと思う。句点の「文中・返読ナシ」の用例167と、読点の「文末・返読ナシ」の用例168も同様である(訓読文参照)。

この『呂后』においても、本章第一節で見た『推古』と同様に、読点の「文中・返読ナシ」の用例数が抜きん出て多いが、これについても、先の『推古』の所で述べたように、読点が名詞などの体言に施された例がここに集中するためであろうと思う。

四、まとめ

この『呂后』についても、先に見た『推古』と同様に、句点と読点とが、返読アリ・返読ナシに関わらず文末・文中という形で明確に使い分けられている。

博士家点全体において句切りの点がどのようなように用いられているのか未だ明らかではないが、もし博士家点において、このように句点・読点を用いられているのであれば、仏家点との関わりを考える上で、『秘蔵』『北斗』(第四章 第四節)のように句点・読点を用いている資料との関連性を考えていく必要があるかもしれない。

小稿のように、句切りの点を調査することによって、どの程度まで訓点資料の変遷などに関わっていけるものであるのか不明であるが、注目しておきたいと思う。

第三節 神田本『白氏文集』巻三における句切りの点

一、はじめに

本節では、神田本『白氏文集』巻三（以下、『白氏』と略す）を取り上げ、博士家点における句切りの点の加減傾向を見てみたいと思う。この『白氏』における中下点は、先に見た博士家点の『推古』（本章第一節）、『呂后』（同第二節）における読点（中下点）のようには、明確な形で文中に用いられておらず、その点において、読点でない可能性もあるかもしれない。

本節では、『白氏』における句切りの点の加減状況を見るとともに、この『白氏』における中下点をどのように捉えるべきか考察してみたいと思う。

二、資料について

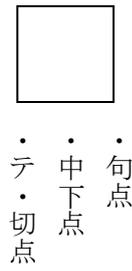
この『白氏』は、第五章 第一節において既に取り上げたので、詳細はそちらを参照してほしい。調査資料として用いた文献も、訓読文などの参考とした資料についても同様である。

小林芳規氏（一九八二）によるヲコト点図（第五章 第一節 図 54 参照）では、句切りの点を、右から順に「句点」「読点」「テ・反点」とされているが、左下点を「テ・返点」と見るべきではなく、「テ・切点」と見るべきこと、既に述べた（第五章 参照）。

この『白氏』における句切りの点は、小林氏のヲコト点図においても「句点」「読点」「テ・反点」とされているように、小稿においても、

先の『推古』『呂后』の例から考えて「句点」「読点」「テ・切点」と見たい所であるが、以下に述べるように小稿の調査によると、この『白氏』の中下点は、その加点傾向として必ずしも文中に偏って用いられているとは言いがたく、本節では、これを読点とはせず、次のように中下点という形で保留しておくことにした。

〔図 63〕



この中下点の問題については、無理に読点と見るのではなく、もっと資料を集めてから結論を出すべきであろうと思う。以下、句切りの点の名称は、この図 63 による。

三、句切りの点の使用状況

まず、『白氏』における句切りの点の用例を挙げ、その加点傾向を表 26、図表 44 として示す。ただし、ここで調査対象としたのは、朱点・星点「・」の句切りの点のみで、墨点や線点「一」の句切りの点については、調査から除いた。また、補入された部分についても、調査から除いた。割書については、後に別に考察する。

〈用例〉

◎本文部

【句点】

〔172〕 歌七徳・舞七徳。 (六二) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕七徳を歌ヒ、七徳を舞フ。

〔173〕夷聲邪一乱・華一聲和。〔七三三〕（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕夷の聲は邪一乱にシテ、「華一聲」〔左、華ノ聲〕は和音なり。

〔174〕其中一虜・語諸一虜。〔三四七〕（文中・返読アリ）

〔訓読文〕其の中に「左、ナカノ」一、一虜「イ、ヒトリノ」〔左、虜〕、「諸一虜」〔音、角音〕に「左、カタヘノ虜」に語ラク「イ、カタル」。

【中下点】

〔175〕太宗十八・擧義一兵・白髻黄一鉞・定兩一京。〔四六〕（文末・返読アリ）

〔訓読文〕太宗（人多）十八にシテ、義一兵を擧（上）す「イ、アク」〔音、白髻黄一鉞〕、「兩一京を定ム」。

〔176〕雲濤・煙浪最深處・人傳一山。〔九〇〕（文末・返読ナシ）

〔訓読文〕雲の「イ、ノ」濤，煙の浪の「最（モ）」〔左、イト〕深（シ）處に，人傳フ「左、フ）ラク」〔音、ウチ〕中に，三ノ神一山有りと。

〔177〕剪鬚・燒藥・賜功臣・李一勳・嗚一咽・思殺身。〔五七〕（文中・返読アリ）

〔訓読文〕鬚を剪て、藥に燒（キ）て、功臣に賜（ヒ）シかは、李一勳（セキ）入（入）撃（入）名，「嗚（平聲）一咽（入）シテ、身（ヲ）殺（サ）むことを思（ヒ）キ」〔左、ヘリ〕

[178] 功成^リ・理定^リ・何^ソ・神速^ハ コトクヘスミヤカナル (四八) (文中・返読ナシ)

〔訓読文〕 功成り、「理定りて何ソ、神〔音の〕コトク速ナル。

[179] 樂^シ・終^シ・稽首^シ・陳^ル其事^シ (四五) (文中・返読ナシ)

〔訓読文〕 樂、終〔音〕稽首して、其〔音〕事を「陳〔音〕す。

[180] 異^ル・牟^ル・尋^ル男^ヲ・閣^{カク}・尋^ル勸^ヲ・特^ニ勅^シ・召^ス・對^シ延^ヲ・英^ヲ・殿^ニ (三一九) (誤点?)

〔訓読文〕 異^ル・牟^ル・尋^ル〔音〕か男^ヲ〔音〕、尋^ル閣^{カク}〔音〕入^{カク}懸^{カク}〔音〕、勸^{カク}〔音〕去^{カク}〔音〕入^{カク}名^{カク}〔音〕特^{カク}に勅^{カク}して、延^{カク}・英^{カク}・「殿に召對〔音〕去〔音〕ス〔イ、召對〕」。

[181] 玄宗^ノ・雖^モ・好^ム・度^ム・曲^ヲ・然^ル・未^ダ・嘗^ヒ・使^シ・蕃^ヲ・漢^ヲ・雜^リ・奏^ス (七四・左) (見消)

〔訓読文〕 玄宗、雅より、度^ム・曲^ヲを好^ム〔ムト〕雖^モ、然^ル〔モ〕、未^ダ〔タ〕嘗^ヒより、蕃^ヲ・漢^ヲを使^シて、雜^リ・奏^ス〔使^シ〕〔再読〔メ〕〕〔未^ダ〕〔再読。〕

[182] 笙歌^ノ・一^ニ聲^ヲ・衆^ノ・側^ニ耳^ヲ・鼓^ヲ・笛^ヲ・万^ニ曲^ヲ・無^ク・人^ノ・聽^ク (二〇四) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕 笙歌、一^ニ聲^ヲ〔左、モ〕、衆^ヲ〔左、ハ〕、耳^ヲを側^ニツ〔左、ソハム〕、鼓^ヲ・笛^ヲ、万^ニ曲^ヲ、人^ノの聽^ク無^クシ。

[183] 豈^カ徒^カ・耀^カ神^カ武^カ・豈^カ徒^カ・誇^カ聖^カ文^カ (六三) (文末・返読アリ)

〔訓読文〕 豈^カ徒^カ、神武^カを耀^カスノミナラムヤ、豈^カ徒^カ、聖文^カに誇^カ〔ル〕ノミナラムヤ。

[184]

大^ノ行^ノ之^ノ路^ノ・能^ク・摧^ク・車^ノ・若^シ・比^レ・人^ノ・心^ノ・是^レ・夷^ノ・途^ノ。

〔左〕ナラフルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔右〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔左〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔右〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。

〔訓読文〕「大^ノ行^ノ之^ノ路^ノ」能^ク、車^ノを摧^ク、若^シ、人^ノの心^ノに比^レフルモノナラハ〔左〕レハ〔右〕「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。

〔左〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔右〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。

〔左〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔右〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。

[185]

司^ノ天^ノ臺^ノ・仰^テ・觀^ミ・俯^シ・察^ス・天^ノ・人^ノ・際^ノ。

〔訓読文〕「司^ノ天^ノ臺^ノ」仰^テ「イ」て、觀^ミ、俯^シて、察^スル、天^ノ・人^ノの際^ノを。

[186]

捕^ル・々^々・蝗^ノ・々^々・竟^ツ・何^カ・利^ヲ・徒^ラ・使^シ・飢^レ・人^ノ・重^カ・勞^ヲ・費^ス。

〔訓読文〕蝗^ノを捕^ルへ、々^々（蝗^ノ）を々^々（捕^ル）フルニ竟^ツに何^カの利^ヲアラム左「イ、カアル」徒^ラに飢^レ人^ノ「イ、飢^レ人^ノ」を徒^ラに、重^カ（ネ）て、「勞^ヲ」

〔左〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。〔右〕「ハ」は「ハ」に比フルモノナラハ、是「ハ」、安なる「イ」「ナル」流〔音〕角なり。

[187]

太^ノ平^ノ・由^リ・實^ヲ・不^レ・由^リ・聲^ヲ・（三三五）（文末・返読アリ）

〔訓読文〕 太平は實^ナに由^ヨレリ〔イ、ヨル〕、聲^ナに〔左、ニハ〕由レルに不^ス〔イ、ヨラス〕。

〔表 26〕 調査結果

◎ 本文部

【句点】

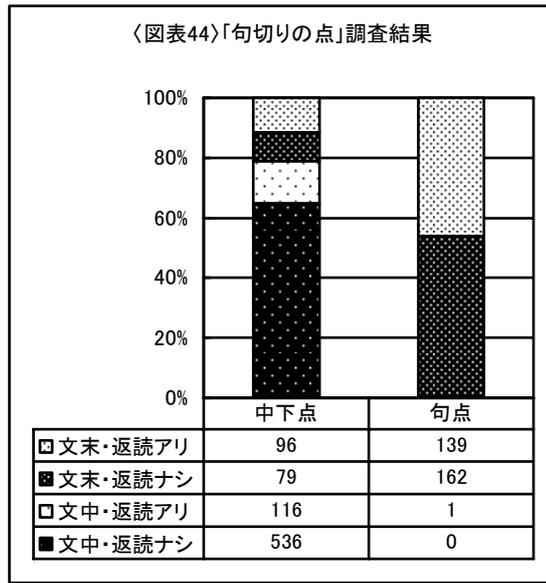
A 文末	・ 返読アリ	一三九例
A 文末	・ 返読ナシ	一六二例
B 文中	・ 返読アリ	一例
B 文中	・ 返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	四四例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	六例

【中下点】

A 文末	・ 返読アリ	九六例
A 文末	・ 返読ナシ	七九例
B 文中	・ 返読アリ	一一六例
B 文中	・ 返読ナシ	五三六例
C 文末文中不明	・ 返読アリ	三七例
C 文末文中不明	・ 返読ナシ	一七例

【誤点？】「中下点」一例

左の図表44は、右の表26のうち、「C（C）文末文中不明」などのように、訓み方の明らかでない用例を除き、本文部における句切りの点の用例数の偏りをグラフにしたものである。



右の図表44に示したように、右下点（句点）については、返読アリ・返読ナシを問わず文末に用いられていることから、句点と見て問題はないのではないかと思う。

また、中下点の「文中・返読ナシ」の用例が特に多く見られることも、先に見た『推古』（本章 第一節）、『呂后』（同 第二節）と同様である。

この『白氏』の句切りの点の傾向で問題なのは、この『白氏』における中下点、文末にも文中にも用いられているということである。つまり、この『白氏』における中下点、先の『推古』や『呂后』とは異なって、読点ではないという可能性があるということである。ただ、この中下点、文末においても文中においても、返読アリ・返読ナシに関わらず用いられており、その点においては、先の『推古』や『呂后』における句点や読点と通じていると見てよいかもしれない。

この『白氏』における中下点にこのような傾向が見られる原因としては、現時点においては、この『白氏』が漢詩であるということに関係しているのではないかと考えている。

確かに、この『白氏』の中下点、文中だけでなく文末にも用いられているが、その文末に加点された用例を検討してみると、「対句」の対になった句の前句の後に加点された例(用例182、183、左の182参照)や、複数の文が「対句」になっている場合、その文どうしを句切った例(用例184、左の184参照)など、「対句」の前句と後句とのまとまりを意識しているかと思われる例が少なからず見られるのである(対句であるかどうかと言う点については、訓点の加点者がそれを対句として訓んだかどうかという問題などもあり、正確な用例数は示しにくい、筆者が対句と見たのは、四三例)。

〔182〕 笙歌・一聲・衆・側耳・鼓笛・万曲・無人聽。(二〇四)

笙歌、一声、衆、耳を側つ

鼓笛、万曲、人の聴く無し。

〔184〕 大行之路・能・摧車・若・比人心・是・夷途。

巫峡之水・能・覆舟・若・比人心・是・安流。(二八九)

大行の路、能く、車を摧く、若し、人の心に比ぶるものならば、是れは、夷らかなる途なり。

巫峽の水、能く、舟を覆す、若し、人の心に比ぶれば、是れは、安なる流なり。

また、用例 176、185 のように、動詞部を動詞の補格となる部分より先に訓み、「倒置」のような形で訓んだ例も見られる（左の 185' 参照）（倒置の例についても対句と同様に用例数を示しにくい所があるが、筆者が倒置と見たのは、四〇例）。

〔185'〕 司天臺・仰・觀・俯・察・天一人際、（二〇三）

司天臺、仰いで觀、俯して察る、天人の際を。

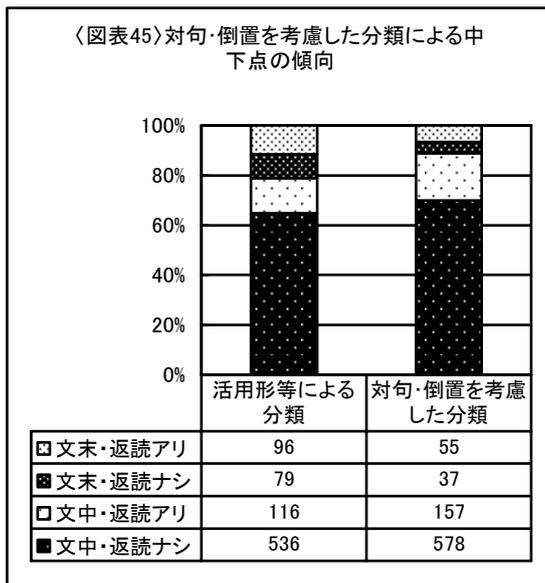
このように、「対句」を意識したと見られる加点がなされたり、「倒置」のような形に訓読されたりする例が多く見られるのは、やはり、この『白氏』が漢詩であるからではないかと思う。思うに、この『白氏』の文は、漢詩であるため散文とは異なり、一文が特に長くなったり短くなったりということはないであろうし、漢詩の形式などから文の句切りの位置を知ることについてはそれほど難しいものではないのではないかと思う。しかし、その一方で、文どうしの関係については、対句や倒置などの技巧の影響もあろうが、詩であることから考えると、文どうしの関係が密接で、文と文とを必ずしも切り離すべきではないということも起こり得るであろう。そのような目で見ると、用例 175、186、187 についても確かに形こそ「終止形」ではあるが、文意としてはひとまとまりのものとして見ることも可能であるのかもしれない（左の 186' 参照）。

〔186'〕 捕々蝗々竟何利・徒使飢人重勞費、（二一九）

蝗を捕へ、蝗を捕ふるに竟に何の利あらむ、徒に飢人をして重ねて浪費せしむ。

小稿のように句切りの点を分類していく場合、もしこのような文末に用いられた中下点の例を、文脈上繋がっている可能性があるからといって文中として分類していくと、結局、活用形が「終止形」であっても文末としたり文中としたりすることになり、分類の基準が主観的なものになるおそれがある。そのため、小稿のような分類を行なう際には、分類上は、このような中下点の例も、やはり文末として処理せざるを得ない。しかし、そのような調査を行なった上で、この点を考慮し、別に分類しなおしてみることが可能である。

左の図表45は、右に見た対句・倒置の例を文中と認めて分類しなおしたものである。図表45中の、左のグラフが分類しなおす前の中下点の加點傾向で、右のグラフが分類しなおした中下点の加點傾向である。



このように、対句・倒置の例を文中と認めただけでも、例外と考えられる文末の用例の半数近くが解消できるようである。このことから考えるに、この『白氏』における中下点も、やはり読点である可能性はあるのかもしれない。

四、「割書」「序」(一〜四〇行目)における中下点の加點傾向

この『白氏』における加點傾向が、漢詩であることに起因しているとすれば、この『白氏』の中で漢詩の形になっていない箇所について調査すれば異なった傾向が見られる可能性があるかもしれない。

そこで、この『白氏』において、漢詩の形になっていないであろう部分として、「割書」と「序」(一〜四〇行目)の部分の中下点の調査を行って見た。

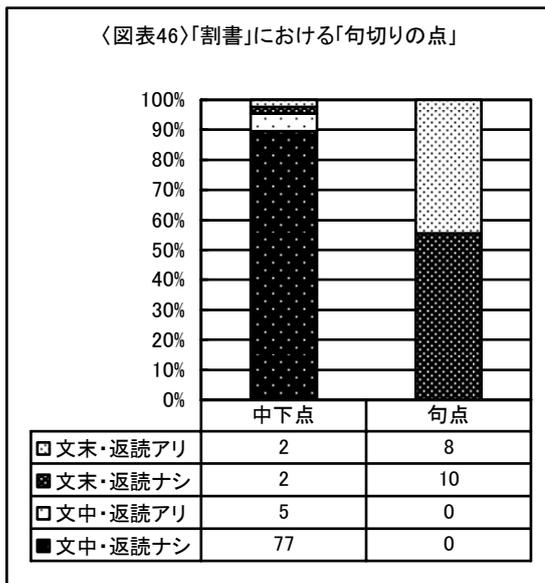
まず、「割書」における句切りの点の加點傾向を表27、図表46として示し、「序」については、問題となるのは中下点だけであるので、中下点のみの加點傾向を表28、図表47として示した。

◎「割書」

〈表27〉

【句点】

A 文末	・返読アリ	八例
A 文末	・返読ナシ	一〇例
B 文中	・返読アリ	〇例
B 文中	・返読ナシ	〇例
C 文末文中不明	・返読アリ	二四例
C 文末文中不明	・返読ナシ	九例



【見消】「中下点」一例（用例181）

【中下点】

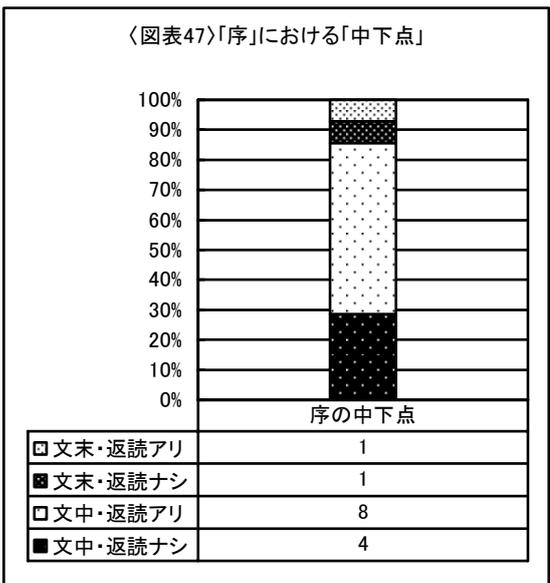
A 文末	・ 返読アリ	二例
A 文末	・ 返読ナシ	二例
B 文中	・ 返読アリ	五例
B 文中	・ 返読ナシ	七例
C 文末文中不明・返読アリ		九例
C 文末文中不明・返読ナシ		一三例

◎「序」(二〜四〇行目)における中下点の加減傾向

〔表 28〕

【中下点】

A 文末	・返読アリ	一例
A 文末	・返読ナシ	一例
B 文中	・返読アリ	八例
B 文中	・返読ナシ	四例
C 文末文中不明・返読ナシ		一例



割書における句切りの点の加減傾向を見てみると、右下点（句点）は文末に用いられており、本文部と同様に句点と見て問題はないようである。問題の中下点については、本文部に比べると文中に偏る傾向が見て取れなくもない。用例数が少ないため、文末に用いられている四例をどのように判断するか難しいところである。

序については、用例数が少ないものの、中下点が文中に偏る傾向は見取れそうである。しかし、この少ない用例の中で、やはり文末の例が見られることが気がりである。

これら割書・序とも用例数が少ないため、確実なことは言えないが、先に見た『推古』や『呂后』の傾向を考え合わせると、このように中下点が文中に偏って用いられているとも取れる傾向が見られることには意味があるのかもしれない。

五、まとめ

この『白氏』における中下点は、以上に述べたように、読点かと思われる傾向―即ち、文中に用いられるという傾向―が全く見られないというわけではない。先に見た『推古』や『呂后』の加減傾向から考えると、むしろ読点として見るべきであるようにも思われるが、ここでは、無理に結論を出さずに保留の形にしておこうと思う。この問題は、もしこれが『白氏』が漢詩であることによるものであったとすれば、やはり、この『白氏』以外にも漢詩の資料を集めて調査する必要があるであろうし、いずれにせよ、もっと資料を集めてから検討を行なうべきであろうと思う。

ただ、この『白氏』においても、先の『推古』『呂后』と同様に、句点・中下点が「返読の有無」に関わらない形で用いられていることは注目すべきではないかと思う。この『白氏』では、中下点が読点ではない可能性があり、その点においては、先の『推古』などは異なっているかもしれないが、これらはいずれも博士家点に属するものであり、これらがいずれも句切りの点を「返読の有無」に関わらない形で用いていると見られることには、やはり注目しておく必要があるのではないだろうか。

この点において、この『白氏』は、少なくとも「返読を示すことに重きを置く資料」ではないと見てよいのではないかと思う。特に、第五

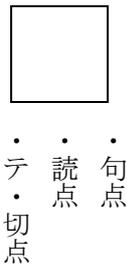
章第一節で述べたように、この『白氏』における左下点が「テ・切点」というものであったとすれば、この『白氏』における句切りの点は、三点とも全て「返読の有無」に関わらないものとなる。思うに、この『白氏』についても、『推古』『呂后』と大きく異なるものではなく、同様に博士家点に属するものとして、「句読を示すことに重きを置く資料」というものから大きくかけ離れたものではないのではないかと思うのである。

第四節 博士家点における「句切りの点」――まとめ――

本章で取り上げた『推古』（本章第一節）、『呂后』（同第二節）、『白氏』（同第三節）における句切りの点の加点傾向を見てみると、先に見た仏家点のように返点を多く用いるような傾向は見られず、むしろ句点と読点（中下点）とを中心として用い「返読の有無」を示さない形を取っているようである。これが博士家点全体における傾向に通ずるものであるのか、今後調査が必要ではあるが、博士家点において、このように、句切りの点によって「返読の有無」を示さない形が多く取られる資料が存することは注目すべきではないかと思う。

小稿第五章において、筆者は、博士家点における左下点は、「テ・返点」ではなく、「テ・切点」ではないかという考えを述べたが、もしこの左下点が、筆者の言うようにテ・切点であったとすれば、博士家点における句切りの点は、

〈図 64〉



ということになるから、つまり、句切りの点によっては、「返読の有無」を全く示していないことになる。この見方は、その『推古』などにおける、句切りの点によって「返読の有無」を示さないという傾向に通じるものがあるのではないだろうか。

考えてみるに、もし小稿で取り上げたような『推古』などについて、その左下点(テ・切点/テ・返点)を、仮に「テ・返点」であると考
えたとすると、

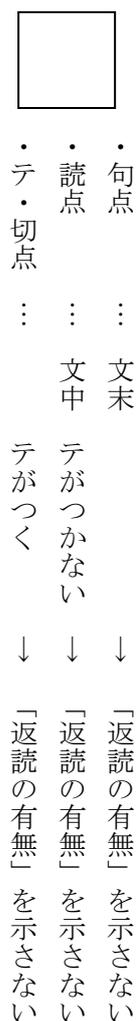
〈図 65〉



ということになり、「て」と訓まれる箇所のみ、「返読の有無」を示す形になっているということになる。なぜ句点や読点の場合には「返読の
有無」を示さない形で済ませているのに、「て」と訓まれる場合にのみ、「返読の有無」を示す形を取ったのであろうか。この点、やはり不
合
理であるように思う。

この問題に関しては、小稿で述べるように、

〈図 66〉



と見て、句切れ方の違いによって、「句点」「読点」「テ・切点」が書き分けられていると見た方が一貫性があり、理にかなっているのではな
いだろうか。

この博士家点における訓法について、小林芳規氏（一九六七）は、博士家各家における訓法の違いを指摘され、明経道ミナトでは清原家・中原家、紀伝キデン関係では菅原家・大江家・藤原家の順に和文調がかった訓読がなされるとされている。

例えば、藤原三家の日野家の訓法について、小稿に関連があると思われる特徴を抜き出すと、次のようである。

①接統法の訓法について、菅原家で「トキハ」を用い、又、大江家では「テ」を用いて、中性的な訓法をする傾向のある所を、日野家では、或種の接統助詞を文意によって用い分けている。（二一六〇頁）

②菅原家・大江家訓がそれぞれ助詞・助動詞等の読添えのない箇所を、日野家訓はこれらを読添える。（二一五九頁）

③菅原家・大江家訓が終止形式とする所を、日野家訓は中止し連続形に訓読する。（二一五九頁）

右の小林氏の指摘された特徴は、ある家で「くときは」とされる所を、他家では「くて」としたり、助詞を使い分けて訓じたりするというような、訓読される際に用いられる言葉の問題であろうと思うが、これらを「句切り」という観点から見ると、これらの訓法において用いられる句切りの点は、次のように考えられるのではないだろうか。

まず、右の①についてであるが、菅原家の「くときは」という訓では「読点」が用いられ、大江家の「くて」という訓では「テ・切点」、日野家では「て」の有無によってさまざまな句切りの点が用いられることになるであろう。

②の「助詞・助動詞」などについても、それに助詞「て・して」などが含まれているとすれば、さまざまな句切りの点が用いられることになる。

③の「終止」「中止」については、菅原家・大江家の「終止」では「句点」、日野家の「中止」では「読点」或いは「テ・切点」が用いられ

※ 明経道：「令制の学制で、大学寮に置かれた課程の一つ。経書の専攻を内容とし、論語・孝経のほか、周易・尚書・三礼（さんらい）・詩経・左伝などを学習した。令の規程では、算・書の二課程に対する一般課程であったが、のち、紀伝・明法の二課程が置かれるに至ってこの称が与えられた」（『日本国語大辞典 第二版』（一九七二））

※ 紀伝：「平安時代の大学寮の学科の一つ。中国の正史である史記、漢書、後漢書、三國志、晉書など、あるいは文選、詩文等の教授をした。この道としての公称は平安時代にはじまるが、実質的な学習は奈良時代にも行なわれていた」（『日本国語大辞典 第二版』（一九七二））

ることになるのではないだろうか。

このように見る時、その各家の訓法の違いを示すのに、句切りの点の有効に機能するであろう例が見られることは注目すべきではないかと思う。例えば、各家の訓法に「終止」と「中止」とがある場合、「句点」と「読点」を有効に活用することができよう。

ここで特に注目したのは、各家の訓法の違いの中に、「くて」とするか否かという違いが見られることである。これは、前掲の図 66 に示したように、筆者が考える「読点」と「テ・切点」との違いと一致するものである。

考えてみるに、先に述べたように、博士家各家によってその訓法が異なっていたとすると、やはり、訓読する際には、その他家との訓法の違いというものが意識下にあつたのではないかと思う。もしそうであつたとするならば、小稿で述べるように、「終止」したり「中止」したり「くて」をつけたりするような他家との違いを示すのに便利であるように句切りの点を配置すること（図 66 参照）は、理にかなつていないのではないだろうか。

小稿の調査は、未だ行き届いたものではないけれども、思うに、博士家点における句切りの点は、「返読の有無」に関わるものではなく、「文末」であるのか「文中」であるのか、或いは「くて」であるのかというような、文の句切れ方を示すものであり、小稿の調査における加
点傾向もその一端を示しているのではないかと思うのである。

終章 訓点資料における「句切りの点」 ―まとめと見通し―

一、小稿で取り上げた資料における偏り

小稿で取り上げた資料は、数ある訓点資料の中の二、三の資料であり、これをもって訓点資料全体の句切りの点云々について論ずるつもりはない。しかし、小稿で述べたように、句切りの点を見ていく際に、「句読」という視点からだけでなく、「返読の有無」というような視点を加えて見ていくことによって、また、異なった見方ができるということは示すことができたのではないかと思う。

本章では、わずかな資料ではあるが、小稿で取り上げた資料を並べてみた時に、資料によって、どのような偏りがあるのかを考えてみたいと思う。左に、表 29 として、小稿で取り上げた資料を全て挙げる（資料の分類については、第三章 第一節 一 参照）。

なお、小稿で見てきたように、返点が多く用いられ、切点や句点に返読がない箇所にも偏るなどの傾向が見られる資料を「返読の有無を示すことに重きを置く資料」として「●」を付して示し、対して、「返読の有無」が示されない形で句点・読点が見られる資料を「句読を示すことに重きを置く資料」として「○」を付して示した。『聖燄』『十二』（第四章 第五節）は、中下点や文中・返読ナシに偏っており、これが読点とも不返点とも取れるような傾向を示している。『聖燄』『十二』（第四章 第五節）は、中下点や文中・返読ナシに偏っており、これ（第六章 第三節）は、中下点や句点でない可能性があり問題であるが、その中下点や句点が「返読の有無」に関わらずに用いられていることにより、仮に「○」という形で示すことにした。

〈表 29〉小稿で取り上げた資料

・「返読の有無」を示すことに重きを置く資料	↓	●
・「句読」を示すことに重きを置く資料	↓	○

◎第二群点

●興福寺本 大慈恩寺三藏法師伝（一〇八〇年前後^他・喜多院点）

●東大寺図書館本 釈摩訶衍論（一二〇八年・喜多院点）※中下点ナシ。

◎第一群点

●東寺蔵 不動儀軌（一〇二五年・仁都波迦点）※「前部」のみ。

◎第三群点

●高野山西南院蔵 大毘盧遮那胎藏菩薩真言蔵成就瑜伽（院政初期・中院僧正点）

◎第五群点

〈仏家点〉

●高野山西南院蔵 聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法（一〇七九年・―）

○高野山西南院蔵 北斗七星護摩秘要儀軌（院政期頃・浄光房点、円堂点）

○西教寺本 秘蔵宝鑰（院政末期・円堂点）

〈博士家点〉

○毛利博物館蔵 史記 第九 呂后本紀（一〇七三年・古紀伝点）

○神田本 白氏文集 卷第三・卷第四（一一一三年・古紀伝点）

○岩崎本 日本書紀 卷第二十二 推古紀（平安中期末・―）

◎第六群点

●高山寺蔵 十二天法（平安後期・叡山点）

資料が少ないため、これから読み取れることも多くはなく、また、何らかの傾向が見られたとしても、果たしてそれが訓点資料全体の傾向を反映したものであるのか明言することはできないけれども、この表 29 によるかぎりでは、「句読を示すことに重きを置く資料」(○) は第五群点にまとまった形で見られるようである。『聖燄』『十二』は、右で「○」としたが、『聖燄』はその第五群点に属するものであり、『十二』はその第五群点より後の第六群点に属するものなので、或いはこれらは第五群点の他の「○」に類するものと見て、総じて「句読を示すこと

に重きを置く資料」が第五群点以降の比較的時代の下ったものにまとまった形で見られると解釈すべきなのかもしれない。『聖燄』十二が、句点と読点とを用いる資料であるのかは明らかではないが、少なくとも句点に重きを置いた加点を行なっていることは既に述べたとおりである(第四章 第五節 参照)。

小稿で「テ・切点」を用いているとする博士家点は、右に示すように「句読を示すことに重きを置く資料」と考えられるが、それと同様に第五群点に属する仏家点が、やはり同様に「句読を示すことに重きを置く資料」と認められることは、これら第五群点における仏家点と博士家点との間に何らかの関連性を見るべきなのかもしれない。もし仮にそのように第五群点において「句読」を示すことに重きを置く形で句切りの点を用いられていたとすると、博士家点に見られる「テ・切点」も、「返読の有無」を示す「テ・返点」と見るのではなく、やはり「句読」に関わるものとしての「テ・切点」と見た方がよいということにもなってくるかもしれない。「句読」を示し、文末と文中とを書き分けていけば、その次の発想として、その文中を、助詞「て」がつくかつかないかということを書き分けようというような発想も起こり得るのではないだろうか。

勿論、今後このような調査を行なっていけば、第五群点以前の資料に「句読を示すことに重きを置く資料」が出てくることもあるであろうし、また、反対に、第五群点以降の資料に「返読の有無を示すことに重きを置く資料」が見つかることも充分考えられる。

しかし、このような調査を行なっていくことによって、句切りの点の変遷の一端を明らかにすることができるのではないだろうか。

二、まとめと見通し — 仏家点 —

現在、日本において句切りの点を用いられる際には、句点・読点という形で、「句」(文末)と「読」(文中)とが書き分けられることがほとんどであろう。そのためか、訓点資料における句切りの点を見る際にも、文末に打たれているか、それとも文中に打たれているか、或いはそれらを書き分けていないかというような視点によって分類されることが多かったのではないかと思う。しかし、日本における句切りの点の使用を見てみると、古く和文には句切りの点を打たないことが普通であり、早くその使用が見られるのは、訓点資料においてであるということである(小林芳規氏(一九七七))。小稿で取り上げた資料は、決して資料として古いものではないかもしれないけれども、その句切りの点

の用いられ方を見てみると、やはり、その文末と文中とが書き分けられていないと見られる資料が存している。

考えてみるに、漢文という外国の文章が日本に入ってきた時に、日本人がそれを解釈するために、どのようなことがら問題となったであろうか。大坪併治氏（一九六一）が指摘されるように、初期の訓点資料において句切りの点のみが施された資料が存することから、無論、「文を句切る」ということがらも訓点の作業として重要なことであらうと思う。漢文が日本に入ってきた時には、中国の方でも句切りの点を施すことが行なわれていたようであるから（石塚晴通氏（一九九二））、それが伝わった可能性もあろう。

しかし、もともと句切りの点を付す習慣のなかった日本人が、その句切りの点をすぐさま「句読」を書き分けることに用いようと考えたであろうか。小林芳規氏（一九七七）によると、初期の句切りの点は、「句」（文末）と「読」（文中）とを書き分けるものではなく、時代が下って書き分けられるようになったということであるから、初期の段階においては、やはり、句切りの点は、単なる「句切る点」であったのだろうかと思う。

また、考えてみるに、そのように日本人に句切りの点を施す習慣がなかったとすれば、その「句切る点」は、日本人にとってそれほど重要なものではなかった可能性もあるのではないだろうか。

小稿の調査によると、『三蔵』（第四章 第一節）や『不動』（前部（同 第二節））では返点に比べ切点の使用例は少なく、特に文中においては、ほとんど切点が用いられていない。これらの資料において、実質上、最も句切りを示すことになっているのは、返点である。もしこのように切点の使用が少ないことが、その日本人の習慣によるものであったとすれば、その時、最も使用されているのが返点であることが注目される。

漢文は、日本人にとって外国語である。文法も異なっている。その点から考えてみると、その当時の日本人の関心が、句切りの点を詳細に示すことよりも、むしろ「返読のあること」を示すことに向いていたとしても自然な成り行きであるように思える。もともと句切りの点を用いる習慣のなかった日本人にとっては、句切りの点が「句読」を示すものであるという既成概念もなかったであろうし、その句切りの点を「返読のあること」を示すために用いようと考えたとしても不思議ではないのだろうか。もしそのような見方が成り立つものであるとすれば、小稿で調査を行なった資料を並べた時に、第二群点・第一群点・第三群点というような、比較的古くから用いられたとされる点図を用いる資料に、返点を多く用いる傾向が見られることは偶然ではないかと思う。

それら返点を多く用いる資料に続く、第五群点以降の資料は、先に述べたように、句点・読点を用いる資料である。考えてみるに、第五群点は、築島裕氏（一九八六）によると、十世紀初頭（厳密には九世紀極末に入るか）に用いられたとされているが、この後、中世以降には漢字仮名交じり文が広く行なわれるようになったとされる（『国語学大辞典』（一九八〇））。このように漢字

と仮名とを交えた形で用いるようになるのは、思うに、それまで外国語であった漢字が日本語の中に定着し、日本語の一部として用いられるようになってきたということではないかと思う。このように日本語の中に漢字が入り込んできたとすると、思うに、漢文で書かれた文章についても、これが外国語ではなく、読み下せば日本語として読むことができるものとの認識が生じたとしてもおかしくないのではないだろうか。

このように見てみると、第二群点・第一群点・第三群点のように比較的古くから用いられたとされる点図を用いた資料で返点が多く用いられるのに対して、第五群点のように比較的新しいとされる点図を用いた資料で句点・読点を用いられていることも偶然ではない可能性があるかもしれない。思うに、漢文が日本に入ってきた初期の段階では、その漢文は日本人にとって外国語であり、その文法的な相違を乗り越えるために、返点が多く用いられたとしても不思議ではあるまい。しかし、時代とともにその漢文が日本に浸透し、その漢文を日本語の一部として用いるようになると、「返読の有無」などよりも、その漢文を日本語として訓んだ時、どのような文章になるのか―即ち、終止の形に訓むのか、中止の形に訓むのか―というようにすることに意識が向かっていく可能性が考えられよう。

そのように見ると、ひとつの見方として、句切りの点が、外国語としての漢文を理解・解釈するためのもの（返点）から、漢文を日本語として訓んだ時どのようなようになるのかを示すためのもの（句点・読点）へと移行していったと見ることができかもしれない。

このような問題は、また、句点・読点などの句切りの点に「・」を用い、返点に「二点や雁点（レ点）」などを用いるという分担が行なわれるようになっていくという流れを念頭に置きながら見ていく必要もあろう。

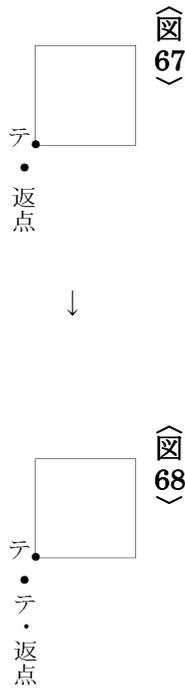
三、まとめと見直し―博士家点―

博士家点においては、博士家各家によって訓法の違いというものがあったということである（小林芳規氏（一九六七）、第六章 第四節 参照）。筆者は、この訓法の違いというのは、確かに外国語としての漢文を理解することに関わるものではあるけれども、むしろ、漢文を訓読した時に、どのような形の日本語に訓読するかということに意識が向いていることによって生じているのではないかと思う。このように見ると、この博士家点において、「返読の有無」に関わらない形で句点・読点・読点を用いられていることは、偶然ではないのではないかと思うのである。

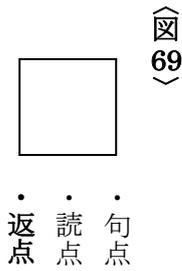
る。この博士家点においては、句切りの点によって「返読の有無」を示すことではなく、むしろ、それによって文末の訓み方（句点）をするか文中の訓み方をするか（読点）という訓法を示すことに関心があつたのではないだろうか。

この句点・読点の用いられ方から考えると、第五章で取り上げた「テ・切点」も、やはり、これを「テ・返点」と見てこの場合にのみ「返読の有無」を示しているとするのではなく、句点・読点と同様に「返読の有無」を示してはいないと見た方が一貫している。

宇都宮睦男氏（一九九〇）は、この博士家点の左下点をテ・返点とされ、その出自について、第一群点と第三群点において見られる「テ」と「返点」とを用いる形（左の図 67）から、後出の第五群点においてその「返点」に「テ」を表示する機能が加えられたもの（左の図 68）とされているが、筆者が思うに、そのように「返点」に「テ」を表示する機能を加えるその意図や、その利便性には疑問の余地があるのではないかと思う。



例えば、小稿で取り上げた『秘蔵』『北斗』（第四章 第四節）は、その返点の用いられ方を見る上で参考になるのではないかと思う。これら『秘蔵』『北斗』は、博士家点と同じように句点と読点とが用いられながら、その左下点が返点となっている資料である（左の図 69 参照）。



小稿で述べたように、これら『秘蔵』『北斗』においては、「返読の有無」を示さない形で句点と読点とが用いられている。この時、基本的にその句点・読点と、返点とは併記されていないので、自然、返点の使用は制限されることになる。つまり、句点・読点を中心に用いる資料において、その句点・読点の表記を徹底させていくと、返点の用いることのできる範囲はせばめられ、ほとんど用いることができなくなってしまうのである。

この点から考えるに、句点・読点を用いると見られる博士家点において、そのように使い勝手の悪い返点をテ・返点という形で残すことにごどれ程意味があったであろうか。「返読のあること」を示したのであれば、そのように使いにくい返点や、「て」と訓ずる箇所にか用いることのできないテ・返点を用いるよりも、句点・読点と併用が可能である一二点や雁点（レ点）などの方が便利である。

こうして見ると、宇都宮氏の言われるように、博士家点の左下点（テ・返点／テ・切点）の出自としては、「返点」に「て」を表示する機能が加えられたと見るのではなく、次のような可能性も考えておく必要があるのではないだろうか（左の図70、図71）。

〔図70〕



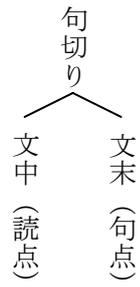
〔図71〕

〈博士家点〉



右の『秘蔵』『北斗』の返点の例から考えるに、右の図70のように句点・読点を用いた時に使い勝手の悪くなる返点を廃して、新たに「て」となる句切りの点（テ・切点）を作り出し、図71のような形にした可能性が考えられるのではないかということである。右の図70は、句点と読点とによって文末と文中とを示す形（左の図72）であり、図71は、その図70の読点の所を更に細分化し、「て」となるか否かによって書き分けられるようにしたもの（左の図73）である。

〈図 72〉



〈図 73〉



この句切りの点の用いられ方は、日本語の用言の活用を考えた時に、日本語の句切りに用いられる形として多く見られるであろう「終止形」「連用形中止」「助詞テがつく中止」という三つの形に対応したものとなっており、また、小林氏が指摘された博士家点の訓法において見られる「終止」「中止」「くて」に関わる訓法にも対応したものとなっている。もしこのように見ることが可能であるならば、博士家点の属する第五群点において、漢字の壺の左下が、テのヨコト点であることと考え合わせると、その左下点をテ・切点として用いるという発想が生ずる可能性も少ないものではあるまい。

筆者は、このテ・切点は、返点との関わりから生じたものではなく、「句」(文末)、「読」(文中)を書き分けそれを更に細分化する(前掲の図 72、図 73) というようなもので、つまり、「句読」の書き分けの延長上にあるものではないかと思うのである。考えてみるに、句点・読点というものは確かに句切りを示すものではあるが、視点を変えてみると、これらは、文が終止するのか或いは中止するのかということ、つまり漢文を日本語の形に訓読した時に、その日本語が活用形としてどのような形になるのかということを示しているとも言えるのではないだろうか。この点において、句点・読点を用いられる博士家点において、新たに「くて」という形の句切れ方を示す点(テ・切点)が用いられただとしても不自然ではないのではないだろうか。

以上、小稿で調査を行なった資料をもとに考察を行なってきたが、勿論、これらはわずかな資料にもとづく推測に過ぎず、今後の調査いかんによっては、全く異なった考察を行なわなければならない可能性もある。しかし、小稿のような調査を行なうことによって、訓点資料における句切りの点が、必ずしも「句読」という視点のみから施されるものではなく、その点において、小稿のような調査を行なうことが必要であることは示すことができたのではないかと思う。

いまだ不備な点も多く再考すべき点多々あるとは思いますが、小稿が、句切りの点研究において些少なりとも役立つものとなれば幸いである。

〈参考文献〉

- 足利衍述（一九三二）（復刻版）一九七〇）「返点」『鎌倉室町時代之儒教』有明書房
- 塩入亮忠・平等通昭訳（一九三二）『国訳一切経』論集部 四・大東出版社
- 古典保存会（一九三五）『呂后本紀 第九』
- 山田孝雄（一九三五）「公爵毛利元昭氏蔵 史記第九呂后本紀 解説」『呂后本紀 第九』古典保存会
- 土居光知（一九四三）「句読点に就いて」『日本語の姿』改造社
- 中田祝夫（一九五四）『古点本の国語学的研究 総論篇』勉誠社
- 国語学会（一九五五）『国語学辞典』東京堂
- 斎賀秀夫（一九五八）「句読法」『続 日本文法講座 2・表記編』明治書院
- 山内育男（一九五八）「表記法の変遷」『続 日本文法講座 2・表記編』明治書院
- 大坪併治（一九六二）「反点の發達」『訓点語の研究』風間書房・（一九九二）『改訂 訓点語の研究 上』大坪併治著作集 1・風間書房
- 中田祝夫（一九六二）「東大寺図書館本 釈摩訶衍論承元二年点」『訓点語と訓点資料』一六
- 小林芳規（一九六二）「陳述の助字「之」の訓読——特に、博士家点と仏家点との訓分け——」『文学論藻』二三・斎藤清衛先生古稀記念特集号
- 福田良輔（一九六四）「書紀に見えてゐる「之」字について」『古代語文ノート』南雲堂 桜楓社
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋（一九六五）『日本書紀 下』日本古典文学大系 六八・岩波書店
- 築島裕（一九六五）『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』東京大学出版会
- （一九六六）「句読点」からピリオド・コンマ」エ」『カナノヒカリ』五三四
- 小林芳規（一九六七）『平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会
- 杉本つとむ（一九六七）「句読法の史的考察——江戸時代の文学作品を中心にして——」『武蔵野女子大学紀要』二二
- 小島憲之（一九六八）「上代散文の訓読と文体とをめぐる問題——句読点の場合——」『文学』三六・七

- 白藤禮幸（一九六八）「日本書紀の文末助辞について」『五味智英先生還暦記念 上代文学論叢』桜楓社
- 林勉（一九六八）「岩崎本日本書紀の訓点」『五味智英先生還暦記念 上代文学論叢』桜楓社
- 曾田文雄・岸岡民子（一九七〇a）「西教寺本秘藏宝鑰朱点の調査報告」『訓点語と訓点資料』四一
- 曾田文雄・岸岡民子（一九七〇b）「西教寺本秘藏宝鑰併解読文（上）」『訓点語と訓点資料』四二
- 曾田文雄・岸岡民子（一九七二）「秘藏宝鑰 卷中 解読」『訓点語と訓点資料』四三
- 曾田文雄・岸岡民子（一九七二）「秘藏宝鑰 卷下 解読」『訓点語と訓点資料』四六
- 小学館（一九七二）『日本国語大辞典 第二版』
- 日本古典文学会（一九七二）『複製日本古典文学館 日本書紀 卷第二十二 推古』図書月販
- 林勉（一九七三）「岩崎本日本書紀訓点にみられる副詞・接続詞・助詞・助動詞の類の訓読について」『論集上代文学』第四冊・笠間書院
- 吉田賢抗（一九七三）『史記 二』新釈漢文大系 第三九卷・明治書院
- 小林芳規（一九七四）「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』五四・遠藤嘉基博士古稀記念特輯号
- 小林芳規（一九七七）「表記法の変遷」『現代作文講座6 文字と表記』明治書院
- 佐藤喜代治 編（一九七七）『国語学研究事典』明治書院
- 築島裕・石塚晴通（一九七八）『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』貴重本刊行会
- 石塚晴通（一九七八）「岩崎本日本書紀の訓の系統」『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』貴重本刊行会
- 築島裕（一九七八）「岩崎本日本書紀の点法について」『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』貴重本刊行会
- 国語学会（一九八〇）『国語学大辞典』東京堂出版
- 月本雅幸（一九八〇）「東寺蔵 不動儀軌万寿二年点」『訓点語と訓点資料』六五
- 宇野義方（一九八二）「句読法の歴史」『講座 日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院
- 太田次男・小林芳規（一九八二）『神田本白氏文集の研究』勉誠社
- 太田次男（一九八二）「神田本白氏文集の研究―本文を中心にして―」太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』勉誠社
- 築島裕（一九八六）『平安時代訓点本論考』ワコト点図
仮名字体系汲古書院
- 松本光隆（一九八七）「高山寺蔵 十二天法平安後期点」『訓点語と訓点資料』七七

- 宇都宮睦男（一九九〇）「返点法―返点・―を中心として―」『国語国文』五九・九
- 石塚晴通（一九九二）「Ⅲ 敦煌の加点本 一 加点」『講座敦煌5 敦煌漢文文献』大東出版社
- 石塚晴通（一九九三）「中国周辺諸民族に於ける漢文の訓読」『訓点語と訓点資料』九〇 遠藤嘉基博士追悼号
- 小林芳規（一九九五a）「敦煌の角筆文献―大英図書館蔵「観音経」(S.5556)の加点―」『訓点語と訓点資料』九六
- 小林芳規（一九九五b）「文字・表記(史的研究)」『国語学の五十年』武蔵野書院
- 西崎亨（一九九五）『高野山
西海院蔵 訓点資料の研究』臨川書店
- 越智裕二（一九九七）「訓点資料における「句切り」「返読」を示す星点をめぐって」修士論文
- 越智裕二（一九九八）『神田本白氏文集』における「て」のヲコト点について『山口国文』二一
- 笹岡祐子（二〇〇二）「史記第九呂后本紀にみるテのヲコト点の加点の意義について」『山口国文』二五
- 越智裕二（二〇〇七）『岩崎本 日本書紀 卷第二十二 推古紀』における「テのヲコト点」について―助字「之」に加点された「テのヲコト点」に着目して―『東アジア研究』五